

人 の 一 生

はじめに

この地域の伝統的な通達儀礼は既に消えようとしている。村の真中には、開拓道路工事が進められ、カルバートが一定の距離に構築され、やがてはその間に土が積み上げられ、舗装される運命にある。そしてこの高速道路を数多くの自動車がスピードをあげて疾走するであろう。その為に八幡原では各地に点在した墓地は円福寺に集められ、立派な靈園化されていた。それに伴なって、かつては路傍に在った庚申塔、如意輪觀音なども境内の築山に在る。従つてこれら信仰は急速に忘れられつつあるようである。生活様式の変化はこれに拍車をかけている。加えて時勢といえば時勢であろうが、戦後三十一年、教育とそれに基づく思想の変化の実効も、通達儀礼の場では如実にあらわれている。民俗調査の対象を老人に求めた場合、話者は世相の変化と、話者をとりまく家庭、なかでも子や孫との語らいの中から、いや適応しない強いられるさびしさを、この時だけは忘れて、生々と眼を輝かせて、懐しそうに次々と語り継げられるものが、こと通達儀礼と信仰となると、次第に声が落ちてきて、さびしさが思い起されるかの雰囲気となるのが、過去二〇回の調査の中で最も印象的であった。

こうしたなかで今回の調査も年齢者から、その若い頃の体験による伝承を聞いた。安産祈願は、女性が宿に集まつての祈りが、一人の女性の問題としてではなく、女衆としての共通の祈りであったもの過去のことと、トリアゲバサンから産婆に、そして今では病院での出産

となっている。語ってくれる七、八十歳のお婆さんの体験したお産が、一つの変り目であった。この点は昨年の大間々町の調査と比較して、十二十年の相違がみられたのも、山林と平坦地農村の相違であろう。「人間はフランの上に生れフランの上で死んでいく」とはよきつたもので、如何にも日本の農村らしさを物語る伝承であり、出産時夫が同様の苦労をしようとする習俗が、この地域一帯で聞かれたが、本県では数少ない実例であった。産婦の食事は農村も山林もほとんど同様で、油物を避けお粥に副食は極く粗末なもので、あれでよくも赤坊が育ち乳が出たと、現在の産婦人の食事と比較して、異口同音に驚きの言葉を述べている。

セツチン語りは、一般に七日目の地域が多く、儀式的なことはれども大小小異であるが、ここで利根郡水上町同様に三日目であった。県内で地域を離れて共通したもののがみられるのは興味深く、益々詳細な比較を要する一例であろう。また子育てに山名八幡宮無事成長を祈願するものも、地域性がうかがわれると共に、この八幡宮の信仰城の一端を知ることができる。戦前には国内のみならず遠く旧満州大連からも来るところ司が語っていた記憶があるが、最近再び盛になった神社である。そしてここでも、「七才までは神のうち」という意識も聞かれた。

現存する人々の若い頃には既に若衆組はなく、当時の若者は青年団、消防団更には兵隊になる予備的性格をもつものとなっていた時勢であった。ここにも農村と山村の相違をうかがうことができるようである。結婚については、トリムスピの席で男仲人がその土地の人（座敷仲

人)と交代する(正式の女仲人と共に、従つて夫婦でない男女でトリムスピを進める。それが便宜的であつたようになつていて、萩原では後見人と名乗つてゐるが、この場合正式の男仲人の立場はどうなるのか)。習俗は、果して眞の意味はどこにあるのであらうか。他地区との比較を進みたい点である。そしてこの地域の足入れ(デヨメ)婚は、やはり試験結婚的性格と労働力あるいは経済的性格に起因するもので、関東以北にみられるものと同様であった。また京モで調査された式当日嫁迎えに行つてももらい受けける儀式での仲人の仕草は、なかなか念が入つてゐるが、この地域一般にみられた嫁迎え、入家式には西毛的なもの(鳥居をくぐるなど)と東毛的なもの(舟をまたぐなど)が共存し、シヨイムコ、シヨイヨメ、待ち女房あるは北橘村、城南村などにみられた婚逃がし、代理婚など、他の地区にみられる習俗が、本県の略中央部に当るこの地域にみられる。トリムスピの座敷での嫁婿、仲人の位置もムラによって多少の相違がある。この問題も県下全般にわたつて調査、比較したならば、興味ある結果がでるのであらうか。

葬制は格別の特異性はみられない。死に対する穢れ、忌みも他と同様である。ただここではほとんどの地域に番太がいて穴掘り仕事をしていた。それが或時期に何れも隣組の分担となつてゐる。更に火葬となつて穴掘りも簡単になつた。そして埋葬後狼、犬が墓を荒すのを除くというメツバジキは、魔除けともいふが、その他弓を真直ぐにして弦を外し石をつるして立てる習俗がある。八幡原ではメツバジキの代りとするというが、これは西島でいうように、仏と人間とのつながりをもつという意識での「呼び石」がより眞実に近いであらう。死後四十九日死靈は屋根に居る。そしてこの日墓直しをして一先ず葬儀に繼續した供養を終え、この日に忌みが解けて餅をつくことが出来、その音で死者の魂は家を離れて仏になる。餅は寺や關係者に配つて一応の仕切りをつける。四十九日の餅については特に中毛、東毛で

聞かれた。こうしてこの日が塔婆のたて始めとなり、三十三年忌に他の地域での葉つき塔婆と同様に杉の葉を塔婆の先に結いつけて、塔婆の立てじまいとした。仏は神様になつたのである。(池田秀夫)

一、誕生

(一) 妊娠・出産

島) 腹帯 大のお産は軽いので五ヶ月目の戌の日から帶をまいた。(中

島) 安産願願 眼聖寺に表に「二十二夜塔」裏面に「文化六、己卯十一月吉日 当村 女人講」と銘のある「二十二夜塔」があり、永井コチ子では、十二月から四月頃まで毎月新暦二十二日に女衆が宿に集まり掛軸を吊して安産を祈つた。宿は順番でしたが、妊婦の家ならば申し出て宿をした。この日は、昔は宿で赤飯をふかし、米の粉でオテマルをつくり、夜おそくまで女衆が話し合つていた。いまは現金持ちよりで夕食をともにしている程度である。

この二夜様にあげたロウソクを、妊娠の出産時につけると、ローソクが燃えきるまでに子供が生まれるという。短いほど早く生まれるのではないかなどともいつた。

二十三夜様 お寺に塔があり、旧の十月二十三日に月の上るまでの寺の碑の前で女衆が遊んでいて、月の上の上のを持んだ。大沢にも二十三夜様があり、近郷の人人が行って露天商なども出でにぎわつた。(矢島) お産があると、若い子持ちの嫁さんが集つて、産婦人家で、二一夜様の掛け軸をかけて、その前で念仏をする。(宿横手)

高崎の寺尾のオボロシサマから帶を借りてきた。行く日はイヌの日でイヌはお産が軽いので、この日に行つた。願果しは布一丈四尺にして返した。約倍にしたものだつた。(中島)

水天宮に行つて安産を願つた。ロウソクを墓から持つてきて、お産が始まつたら火をつけ、短ければ短いほど早く鞋いお産だつた。(中島) (西島)

高崎市石原の小祝神社にお参りする。仏様に安産祈願する人もある。

産婆様に祈願した。お詣りには行かないで、口で祈るのみ。お札には別に行かない。(下齊田)

妊婦は産の神である蒂をまたいではいけない。また、馬の道具をまたいでもいけないといわれた。

妊娠している人がウサギの肉を食べると三口の子が生まれるといわれた。(中島)

出産 オクリの部屋にウスベリを敷き、その上に布団、その上にボロ、その上に油紙を敷く。近くのトリアゲバサンかとりあげてくれた。お産の姿勢は、母親の時代はふとんを重ねそれによりかかつて産んだという。トリアゲバサンにはその後一、二年お中元、お歳暮する程度だが葬式の時はとりあげてもらつた人は皆呼ばれた。(下齊田)

産婆やでお産する。アトンの上に油紙とボロ布を敷いて置く。初産の時は娘の実家で生み、母親が世話をしてくれる。「一番目の子からとつぎ先で生む。ヘソノオがどれまるまでトリアゲバサンは來てくれた。ヘソノオは屋敷神様かお墓にいる。またとつておいて嫁に行く時もたせた。(中島)

奥の部屋で生むが、そこをナンドとはいわない。疊はあげずに襷を敷いて生んだ。かつては貰い子をするのに「襷の上から子を貰つてきな」といつた。(一ツ谷)

疊を上げてワラを敷き、その上に捨てもいいボロを敷いて産んだ。緑の下から風が吹つこんでとても寒い。ふとんを丸めて枕にして、それにつぶせになつてお産をした。

人間はワラの上に生れてワラの上で死んで行く。ワラはどきれいな

ものはない、と言つた。子を貰う時は「ワラの上から貰つてこい」という。(大沢)

お産は、わらの上で行なつたので呉れ子をする場合は、わらの上から、もつたり、呉れたりするものだといわれた。(中島)

夫は産婆を呼びに行き、産湯をわかす。いよいよ産氣づいて来ると、夫は依をかついで、家のまわりを走りまわる。夫は産婆の部屋へ近づいてはならない。(宿横手)

男は産には手を出さない。姑が見てくれる。男は食わせる責任があるから、田で働く。(萩原)

出産のとき夫のいない方がよいともいうし、夫が白をかついで三回お産に苦しむという訳である。(西島)

お産が重い時に鉢巻をする。だから「女はふだん鉢巻するもんじやねえ」と言つた。(大沢)

産婆 下瀧の相原やえさん。(中島・下齊田)

取上げばあさんは杖をついて、てつてつ歩いてくる。「こんばんわちようちゃん」「アラちようちゃん」をつけてくる。

男は産の場所へ寄せない。だが「おつかあしつかりしろ」と言つて言いながら石臼をしょって家の回りをめぐつたり、立ち臼をしょつてあがりはなを上つたり下りたりした人もいるそうだ。(大沢)

初子 初子は実家へ帰つて生むのが普通であった。病院で生む場合でも形だけは一度実家へもどる。(京目)

後産 つぐ朝早く、お墓へ持つていける。土をかぶせておくだけ。(大沢)

墓場へ持つて埋めた。(萩原)

後産は共同墓地へ埋めた。エナ墓は特にない、昔はトボグチへ埋め、多くの人に踏ませることがよいともいった。うんと踏まれるほど出世するという。(矢島)

便所の裏、墓地などに埋める。(下齊田)
便所の裏、紙にくるんで保存しておき、腹痛のときせんじて飲ませるとよいともいった。(矢島)

墓地に埋めた。(下齊田)
産婦の食事

三週間位はニクタラカシ(温め直したお粥)にカンピヨウ、鶏の煮たもの、カツオブシミソがおかげで、天ぷらなど油物はいけない。イワシはクダンシという。この地域は米の産地なので、実家から持ってくることはしない。(下齊田)

かつおぶし味噌・いわしなどを食べる。甘いものは乳の出が悪くなる。カキの木の下はひえるからくぐってはいけない。もちを一升ついてやると一生乳が出る。うどんもよい。(中島)

油ものを食べると子供の目にきくから悪い。卵は乳があがる。ナスを食べるときス(子宮)がさがる。黒砂糖もよくない。

カツブシ味噌で食事をした。お汁にはフを入れた。産見舞にはフが普通であった。

鶏は乳がでるというので、実家から送ってくれた。ナマズも乳がでるという。(一ツ谷)

お産見舞に鶏と鶏節などがよくつかれ、里方からはそのほかに米を一升持参した。力になるという。(矢島)

里米 「里米もあって食べると肥立ちが早い」という。初子は実家で産むが、二番目、三番目の子を婚家で産んだ時は、里の親が米を持つてくる。

子どもが産れたらすぐ持つててやる。安心して食べられるから。(大沢)

禁忌 妊娠中に火事をみてはいけない。生まれた子供に黒いアザが

出る。(下齊田)

二十一の間は一日一時間でも寝るもんだ、と言った。しかし産まれてしまったあとは、そんなに寝ることはできない。何でもないのに、そんなに寝るのは仕事をするよりおおごとだ。おはあき前に大橋を渡ると乳があがる。罰が当たる、と言った。柿を食べてはいけない。柿の木の下をくぐつてもいけない、と言う。冷えるから。

豆腐を食べると乳ばれもんになる。

油もんを食べると赤ん坊の目が悪くなる。百日たつてからならない。しかも悪い。血がさわぐから。

三月のお節供までお産をするもんじやねえと言つた。お節供の

ご馳走を家の者が食べるのを見てるだけで張り合いが悪いから。(大沢)

流産 ほうずきの根を煎じて飲むと流産するそつだ。(大沢)

（二）生児儀札

おぼ湯 えんの下や、裏の方を掘つて捨てた。(大沢)

おぼ湯は屋敷のすみ、日の当らない所へ捨てた。(萩原)

下ごえの中へあけた。(萩原)

うぶゆはお産をしたところ(ナンド)の下にまけた。日向にだすものではないといふ。(島野)

初湯は二日間ウテ湯をつかいあとは、風呂に入れた。(中島)

産着 麻の葉の着物でウコソンという黄色うらをつけた。(中島)

生れた子供には水色、黄色、麻の葉の着物を着せた。(中島)

オボタテのゴゼン 出産の日に生立て飯をたいて神様にあげた。このときは米のめしをうんとたいて、将来子供がうんと食べられるよう

セツチン参り 生後三日目に、赤ん坊を便所につれていくて、オサゴを撒く。近所の便所参りはしなかつた。外便所で、自分の家のだけであった。(西島)

おばあさんが三軒くらいセツチンマイリに行く、おさごをあげおがんでくる。女の子なら額に紅、男の子なら額に墨をつけてくれる。下の排便がよくなるようにとの願いから。(中島)

センチン参りはミツメ(三日目)にやる。トリアゲバアサンが連れていってくれる。お七夜までお湯を浴びせにきてくれるので、その後、きれいな着物を着せて連れていくてくれる。

自宅を含めて三軒の便所を回る。その際、橋を渡ってはいけない。乳があがつてしまふといふ。

オサゴをおひねりで持つていて、便所の戸を少しあけて投げる。

訪問した家では、赤子の額にテンボシを二つ付けてくれる。男は墨、女は紅で付ける。(一ツ谷)

生れて三日目に近所の家に橋を渡らす三軒に行き、額に紅で二つ星をつけられた。姑がオサゴを持って連れて行った。

はやくに橋を渡ると乳があがつて、出なくなるので橋は渡らないようになっていた。(中島)

三日目をいう。隣り組三軒の便所をめぐり、頭に墨で星をつけても

らつて歩いた。このとき橋を渡らないようになると。豆を煎り、砂糖ころがしを作つて隣保

班を呼び、お茶菓子にしてたべた。この日赤坊を嫁の母親が抱いて、

近所三軒の便所を廻る。(下齊田)

お七夜に、近所の家の便所へ、赤ん坊を抱いて、おまいりする。赤ん坊の額に墨で大の字を書いてくれた。行つた家の人が。(宿横手) オヒチヤ 七日日のこと。この日は命名した。命名は本をみて三本位のクジをつくり、太神宮様にあげてからクジを引ききめる。この日は大豆をいり、近所の衆をお茶およびした。よばれた家では初着と書い

て、布などをおくつた。(矢島)

これ以上生まれないようには、七五三吉、末子、わぐり、とめ子、捨吉などという名をつけた。

男子が出生してもよく育たない家では、女の子のような名をつけた。安衛(やすえ)という例がある。また反対に女の子に作次とつけた例もある。(矢島)

二四画がよい。玉村の火雷神社へ行き三つ位のうちから名をえらんだ。(中島)

わぐりという名を女の子につけると、次には男が生まれるという。

また首にヘソの緒がかかるて生まれた子にはケサ(袈裟)という名をつけるとよい。(一ツ谷)

赤ん坊の頭 ひと七夜にきれいにする。いつ迄もすらない人もいる。

(大沢)

オボヤキ 二一日目のこと、赤飯をふかしてお茶よびをした。赤飯は初着をもらった人にお返しにくばる。この日のことをアカダキともいいう。取りあげてくれた人にはお祝を包んだ。お返しにはウツギ替りといって大豆か小豆を入れて返した。また、この日にお産參りもした。そのときは上等の初着を着せた。その上等の初着は里から贈る。この着物には絞を入れた重ねである。つぎに上等なものは、麻の葉に黄色の裏地のついたもので、子供が丈夫に育つようによくいう。オボヤキがすむと産の急みあけとし、産婦は神社などへお詣りしても差支えなかった。この日までは、産婦はオムツ洗いも帽子をかぶつて日にあたらないようにした。(矢島)

権名神社へ産着を着て行く。産見舞をもつてくれた人、トリアゲバアサンの所へ赤飯を配つた。(中島)

ウブヤキには二十一日目に神社にお参りする。男女とも同じ。(一ツ谷)

作ってくれる。それを赤ん坊にぶっかけておまいりする。

ブッカケギモンは広袖の重ねのきもの。これは外出などの時にかけただけのもの。（大沢）
オボヤケという。二日目。赤飯をふかし、これを持って、鎮守様におまいりする。娘が居ない家では、近所のお年寄をたのむ。（宿横手）

男女共に二日目をオヘヤアキといふ。それで産婦はヘヤに寝ていて、この日オヘヤをあける。それまで何もしない。娘の実家で作ってくれる一枚重ねの大柄の着物を着て、鎮守様にお詣りした。なお十月十五日、山名の八幡様にお詣りした。子供の神様である。（下齊田）
食べる。皿の上に石を乗せておく。（宿横手）
男の子は一〇日目、女は一〇〇日目に食い初めを行なった。茶碗と箸を買ってきて、歯が丈夫になるようにと膳の上に石をのせておき、おかずにさせて食べさせるとよい。（中島）

男女共に一〇日目、お膳をこしらえてこはんをたべさせた。（下齊田）
一〇〇日目にする。男も女も同じ。新しいお膳を買ってやり、御飯を食べさせるまねをする。（ツツ谷）

（三）育児

マクリ 母親の頃はマクリをのませたというが、自分の時代（七・八十才の人がお産をした頃）にはのませなかつた。生れて乳をやる前に、うすいお茶を飲ませた。（下齊田）
乳づけ 最初に飲ませるのは、ホウズキの汁だつた。それはカンノ虫がきれるといわれた。

最初の便をカニババと呼んだ。（中島）
母乳の出ない時、おも湯・米をひやかしてすつて砂糖を入れて飲ま

せた。（中島）

初生毛は、つば山の南天の木の下に埋めろといわれた。（中島）
初誕生 誕生日には箕の中に立たせて餅を背負わせたと聞いている。
あんを入れると人に甘く見られるというので塩あんだつた。（中島）
餅つき、お茶よびをして配つた。この日よばれてくる人は子供の腹裏などをお祝い贈つた。子供には一升分の餅を背負わせたりした。（矢島）

あんこの入つた餅を風呂敷につつ背負わせて歩かせた。産着をもらつた家にはもちを配つた。（中島）

誕生餅をついてお祝いをくれた家に配る。餅をたすきがけにして赤坊にしょわせて歩かせる。（下齊田）
初誕生には誕生餅をついて子供に背負わせ、尻にぶつける。ワセの子は誕生餅を背負つた。（ツツ谷）

初節供 近親者は雛、男ならノボリを贈つた。ノボリは贈り主の紋を下に入れ、子供の家の紋を上に入れて贈つた。
節供の贈りもの 女の子はひな人形・男の子はのはりがおくられた。（中島）

七五三 昔はしなかつた。ただ、七つになると男の子は袴をこしらえてもらつた。（矢島）

初節供には嫁の里からお祝いがある。親戚もお祝いをくれた。女には雛様。男にはノボリ。ノボリの上には家の紋が入つていて。（ツツ谷）
育児 子どもができると縄を入れた三角の布に、子どもの名前を書き、地蔵様に奉納する。この時、オサゴもいっしょに供える。こうすると、子どもが無事に育つという。（島野）

子どもが生まれてから一年位の間に山名の八幡様にお参りにつれていく。きれいなウサギを着せていく。そして、シシの面を店で買つて帰つてくる。子どもの虫封じになるという、この八幡様のお祭りは四月十五日と十月十五日。お参りの人がたくさんつめかけて山がけがれ

るので翌日の十六日にはそれを洗い流すために雨がふるという。この雨を「お山洗いの雨」といつてある。(島野)

山名八幡に三才頃までの子は祈願にいった。虫切りによいといふ。

八幡様では獅子の頭を買ってきて子供にかぶせ、できものによいといふ。お詣りは十月十五日であった。

山名の子育八幡にお参りに行つた。秋十月十五日だつた。カンの虫

を切るとか、おできが出来ないようになると獅子の顔をしたかぶりものを

買って来た。なお、守り札としては、虫切り鎌があつた。(中島)

チングを残しておくことも多かつた。鼻血が出たときチングを抜くと止まるという。(矢島)

イジメ 手のない家では、ワラ製のイジメに赤坊を入れ、座敷において烟を行つた。紐で赤坊をしばつて、柱に結いつけておく家もあつた。

(下齊田)

忙がしい時はイジメに入れておいた。(中島)

おしめ 昔はフトン皮の古だの、ゆかたの古だのを縫つておしめにした。使つたあと薄くなつたような布で縫つた。一枚合せて、さす

時に「針目を細かくする」と後が近い」と言つたからあらくさした。

野良へ行く時など、半日もおしめを取りかえてやれないことがあつた。おしめカバーもなかつたから、着物までぬれるようだつた。(大沢)

昔はおしめカバーなどなかつた。着物まで、ぶつとうして濡れてかわいそつだつた。おしめの形で、中に綿を入れたり、真綿を入れたりして工夫して作つた。(大沢)

赤ん坊にすえひろじゅばんを着せる。扇子一つ半の丈にする。早く扇子二つ分に、つまり二才になるようにならう。袖は並巾を三つさきにする。小さいじばんだからすぐ着られなくなる。(大沢)

三つの時に三つ身の着のものを作つて着せるもんだという。(大沢)

子守り 尋常三年生位の子供を、「一里位離れた他村から頼んだ。」

こちらからは倉賀野を行つた。住み込みで子守りや百姓仕事を、徴兵検査までやつた。お札奉公はない。給料は前借で親がもらつてゐる。年期奉公で、盆、暮に三尺、浴衣などくれた。(下齊田)

体の弱い子 三本辻に捨て、捨て親をきめておき捨ててもらう。

名前をかえるとよい。ナベと名前をかえた例がある。実際に鍋の下

をくぐらせるとよいといふ。

百軒ぐらいから、ハシギレを貰つて着物を作つて着せるとよいといふ。(一ツ谷)

三十三軒着物 弱い子には三十三軒から布の切れ端をもつて来て

着物を作つて着せるといふ。お盆に育つといわれた。(中島)

捨て子 弱い子は予め拾つてくれる人を頼んでおいて、タフラバッ

シを敷いて三本辻に捨てた。この日は赤飯をふかしてお祝いをした。

(下齊田)

弱い子は糞の中に入れて三本辻に捨てて置き拾つてもらつた。(中島)

香龍様 当地で太田の香龍様の方向を向いて願をかけておく。七才

の時にお札詣りに香龍様に連れて行つた。別に弱くなくとも、夜明け前に出発して、伊勢崎まで歩き、ここから電車に乗つて行く。香龍坊主とはいわぬが、かみそりで丸坊主にそる。チングを残したがそのわけは判らない。(下齊田)

香竈坊主 吞竈坊主といい、三つ坊主、四つ坊主、七つ坊主と頼をかけて坊主になつた。

(矢島)

太田の香龍様へいつて腹がけを買つてきた人もあつた。

神のおとしこ 七つまでは、神のおとしこといつて、神様の守護によつて育てられるといつた。このときまでは、いたずらをしても、大目にみられた。

子墓 小さい子ども(七つぐらいまで)が死んだときには、大人の墓からはなれて、その家の墓地のはじにいた。先代のそばにはいけ

ないことになっていた。(京目)

反町の薬師様 四才になると、反町の薬師様へおまいりに行く。(京目)

厄年子 親が厄年に生れた子は橋の下へ捨てて、前以つて打合せて

おいた人に拾つてもらう。拾つた人は近所の人を呼んでお茶を出す。

そうすると次の子が丈夫に育つという。

いい日を見て、また風も吹かない静かな日に捨てる。

厄年子は役に立つ。(大沢)

歳暮 最初の子供には、実家から産着が贈られる。三月の節供には雛人形、五月の節供には武者人形がそれぞれ贈られる。これは長男・長女のみで、次男次女以下には何も贈らない。(宿横手)

一、年 祝

(一) 年 祝

年祝 還暦、古稀の祝いはやらない。七十七の喜の字の祝いには、

息(生き)が長いようと吹き竹を配る。八十八の時は、配りものはしない。親の者だけで祝う。赤いものを贈る。(下海)

年祝いを七十七であると、吹き竹をお返しにした。八十八では、赤

い大黒頭巾、赤いチャンチャン、赤い緒の草履を身につけた。(一ツ谷)

七十七の祝 男は吹き竹、女はモモを配つた。(八幡原)

七十七才の時、吹き竹を作り一本しぱつて白紙を巻き、のしをかけた親戚へ配つた。別にご馳走はしない。(萩原)

七十七の祝には、吹き竹をおくる。(中島)

米寿の祝い 八十八才の時、親戚が寄り集まつて、老人に赤い頭巾やチャンチャンコなどを着せて、鎮守様へ参拝する。米寿のお祝いを

すると、早く死ぬから嫌だという人もいる。(萩原)

八十八の祝いとして、赤い着物に赤い頭巾を作つてやる。神社へお

参りする。(中島)

長生きの者は耳が遠くなるという。(萩原)

二、厄 年

厄年 男二十五、女十九才。厄払いには四里歩き通して世良田の天

王様に行つた。屋台が出て賑やかで、タグリアメのあめやなどかいた。

ここで夜通し拌んだものである。また正月十四日の道祖神様に、厄年

の人は酒・餅・菓子を供えた。(下齊田)

厄年には、川崎大師へおがみに行つた。

十九の時、うろこの帶を作つてもらつた。(大沢)

男二十五才・四十二才、女十九才・三十三才は厄年で、川崎大師や

成田山へお参りして厄落トシをする。(萩原)

男女共四才、反町の薬師へ厄落しに行つた。行けない時は着ものを

おがんでもらつた。七才の時に太田春竜様へつれて行つた。(中島)

三、青 年 集 団

(一) 若 者 組

若者組 昭和十年頃まで、西横手正志会というものがあり、十五歳になると入会した。「二十五歳停年制で、それ以前でも、嫁をもらうと会をぬけた。(西横手)

青年団 若衆組というのはなかつた。ハイバンともいい、消防団組織の前身のよくな性格をもつていた。指導員が入つてくれといったもので、一面兵隊教育の準備でもつた。(下齊田)

消防団 二十五歳以上四十五歳までの男子で構成された。滝川村に三部あり、各部の長を部頭、消防団全体の長を組頭と言った。(西横手)

(二) 夜遊び

夜遊び 横手の若えしは、島野、萩原へ遊びに行く。同じ村内ではすべて知りつくして、娘も若えしも互に学校が同じで知り合つてから遊びにくる。そこで、学区のちがう隣村へ行く。島野、萩原は裏に井戸があり、水汲みに娘が出来たところをつかまえて遊び。農家に娘ばかり追かけ廻す者を「奴はチヤボッ島だ」という。(西横手)

村の娘は夏が多かった。

夕食を食べてから、あるきで行った。

大体、よるの八時ごろから、十二時ごろまであいだあそんでいた。

四、五人の仲間がいて、一緒にでかけた。この仲間のことを、はうぐみといつた。

行く場所は、あつまたその場できめた。どことこに、いいことがいふから、さわがしてくべきやといつてでかけた。お勝手のすきを指の先をなめて穴をあけてうちの中をのぞいたりした。うちのうらには下水があつたので、こういう夜遊びのことを、下水まわりといった。わかいしゆは、夜遊びに行ってのぞきみをしたり、ちょっとしたいたずらをした。

ふだん、わかいしゆからあんまりよくいわれないいうちは、がたかけられたこともあった。がたというのは、がつたんとすることで、なわの先に石をつるして、つなを遠くまでひいて、雨戸をたたくやり方で、石が雨戸にぶつかって、がつたんというので、この名がついたようである。(京目)

萩原の人は、利根川を渡つて、利根東に遊びにいった。川を渡るとき、着物を頭にのせて渡つた。(西島)

目的があれば夜遊びに遠方まで歩いて行つたが、普通は玉村方面のお茶屋に行つた。一里も歩けば疲れるし、女のあとをついていくつよい女だと肩に手をかけ話かける程度で、気が合えばつき合いにまで進む。これは恋愛のきっかけになつた。また村の若衆相互のかかわりも、「三回いくと目をつけられ、泥をぶつけられる程度で、それでもサービス品を持っていけば黙っていた」(下齊田)

ヨバイ 古い時代はあつたらしが、矢島の村は娘がかたく、明治のころになつてからはなかつた。若衆の夜遊びもこの村にくる者は少なく、男は主に大類地区へ遊びにいった。大類の娘は元気がよかつた。また、利根東では「後閑朝倉女のよばい、男後生樂寝てまちる」といふほど娘が元気がよかつた。(矢島)

(三) 兵隊検査

兵隊検査 検査をもんを作つてもらつた。大新田の五十嵐の機屋に頼んでもらう。「こうきの羽織だつた。

その頃セルがはやり出した。セルの合着を着て、東京から検査に来た者がいて、しやれていた訳だつた。

三尺帯はちりめんの大巾、少ししばりのある黒。フエルトの草履をはいてつた。(大沢)

検査の時、第一乙になつて、その場で「しめた」と口に出して言つて、非国民党に憲兵にしょびしかれた人がいたそうだ。(大沢)

タバコ 兵隊検査前はタバコを吸つてはいけない。(下齊田)

四、婚 姻

(一) 緒婚の条件

婚姻 地域の場合は、三里四方位の地区からの人が多い。新高尾、滝川、大類、岩鼻、佐野等（京目）

玉村、滝川、上川渕方面との婚姻関係が多い。（島野）
今では恋愛結婚が多く、従つて遠方との婚姻が多いが、昔はこうした例は少なく、近在同志の結婚だった。玉村、滝川、大類、岩鼻との関わりが多く、川を越えた新町になると少なくなった。（下齊田）
旧群馬郡と多野郡との結婚が多い。旧群馬郡の東南部地区が特に多く、利根東村は橋がなかったので少ない。（西島）

嫁の条件 機織りができる。糸ひきができる。うどんが打てる。

（京目）

恋愛結婚 クツツキメーという。ナレアイともいう。（西横手）

見合い 昔は恋愛結婚はほとんどなく、みな見合結婚であった。親がよいというと返事したことになり、親のいうことを素直に聞いた。それで別に問題はなかった。結婚式まで一度も会わないもの、見合いの次に会ったのが結婚式というのが多かった。（下齊田）
この辺では、仲人がいて、見合いをするのが普通、必ず見合いだけはした。嫁の家に見にいくとか、両方仲人のところに来てもらうとかであった。（西島）

(二) 婚 約

仲人 仲人役を多くした人が気軽に引受けてくれた。「仲人のナナデンボウ」「仲人の草履きらし」などという言葉はあるが、信頼のおける人に頼んだものである。

仲人礼をトンビノハネとはいわないが、酒とお金（現金五万円位）で、婿、嫁の家から別々にやるが、一緒にこめてする場合もある。（下齊田）

仲人親といつて、親子と同様のつきあいをする。節供、歳暮、敬弔い、親戚づきあい。（西横手）

仲人親 三年間位は盆暮に行くとか、年始に嫁婿揃つて行った。また九月一日の節供にはショウガを持っていった。三月節供にもいった。仲人の葬儀には必ずいき、時には仲人孫が花籠を持って葬列に参加することもある。
仲人は、男女とも最初の子供が生まれたときはウブ着をおくつた。仲人をすると穴端（葬式のとき）がにぎやかになるなどともいつた。
仲人のぞうりきらし（たびきらし）

仲人の七でんばう。（矢島）

貢い方が三分の一、くれ方が三分の一の割合いで金を包み、一升下げて、男親が一人がいい日を見て仲人礼に行く。（萩原）

両家揃つて仲人の家の酒を持参し、相当の礼金をおくる。礼金は結納金の何割といったこともあるが、特に基準はない。（矢島）

仲人は式の時、両方に禮をする。仲人は御祝儀の引き物の外、式のあと仲人礼を貢う。結納金の十分の一が仲人礼で、異れ方、貢い方が四分、六分で負担するのが普通であった。菓子折や酒は別にした。（西島）

座敷仲人 正式の仲人は夫婦でつとめるが、もらい方へ嫁をおくるべきだと、とりむすびの席で、男仲人は、土地の人と交代する。その交代した人のことを座敷仲人という。

これは、仲人がその土地の風習をよく理解していない面もあるので、式のはこびをスマースにするために、男仲人に代つて土地の男の人が、座敷仲人は、正式の女仲人と組んで、式の進行をやる。隣組長とか、

近所のとしよりの人とか、懇意な人をたのんだ。この人の服装は、略式でもよかったです。おばれして来た仕度のままでよかったです。

なお、とりむすびは、奥座敷でおこなつた。嫁と婿、女仲人と座敷仲人は団のよう、相向いに坐つた。うたいは、むこの友人がうたつた。座敷仲人のさしずでうたいをうたつた。さかづきを五回とりかわすので、うたいも五回やつた。むこ側から近親者（父親、母親、兄、妹など）五名を出席させ、よめとのさかづきを五回とりかわしたのである。

結納品を並べ、つぎに受領証を書いて仲人に渡した。このとき仲人は床柱の前に座し、お供は下の座敷で各々ご馳走になる。酒と食事がすむと仲人は再び貰い方に帰ってきて、無事に納めたことを告げた。結納品には、結納金、嫁仕度、昆布（よろこぶ）、末広、麻（とも白髪）、長のしを必ず持つていった。（矢島）

（三）嫁入り

イチゲン　迎え一見は新客ともいう。もしい方よりくれ方が多い。

もしい方八人ならくれば十二人ぐらいにする。ちつたあ腹をへらして行く。

一見は玄関から入らず縁側から入る。

お茶と菓子が出る。親族の紹介があり酒肴が出る。座の取り持ちはうまい、弁のたつ人がお相伴をする。しのぎに手打ちソバなどを出ます。

お茶と菓子が出て来る。（萩原）

迎え一見は朝、仲人、親戚代表一人、隣組代表一人、婿、シヨイ婚（話し相手になるつきそい人で未成年者でもよく婿と仲のよい人か婿の弟がなる）、一人計五、六人が嫁方に行き、一杯御馳走になる。婿とシヨイ婿は先に入力車で帰った。（下齊田）

迎え一見は結婚式の午前中にいく。仲人、婿、近しい親戚（男が主で、男衆がいない家では女の場合もある）がいく。各自、手拭に名前を書いて持っていく。仲人が一見目録を出して紹介する。迎え一見にはオトモが一人ついていく。これは式の翌日（カネつけ祝い）の赤飯をとどける役目もするので、嫁の家を見ておくためである。

迎え一見は、午前十一時にはきりあげる。ツモリ肴（ネギぬた）が宴席にでるのでわかる。

一見の人数は普通五人とか七人である。（西島）送り一見は仲人、親戚、隣組、シヨイ婿と嫁が婿方にいく。婿の家

の近くの親戚或は信頼のできる人に仲人を頼めば仲人の家を中宿として先ずここに入る。三三九度が終り用意ができると迎えに来て、ここで出て婚の家に向う。（下齊田）

イチゲンは最初貰い方が行き、主に豊頃いって夕方は嫁と一見がいつしょによつてくる。送り一見といい、まず中宿に案内され、そこへ式が終つて貰いの方の用意ができると嫁家へ案内された。一見は縁側から上がり、婚家の近い目上の人が床柱に坐り、おしゃばん役が出て進行した。まずお茶が出され、つぎに親族の紹介があり、つぎに酒肴が出た。一見の人数は十人以下だった。（矢島）

仲人の挨拶　くれ方は嫁をもしい方の村の人口まで送り、もしい方はそれを出向える。この時、仲人は下駄をぬき足袋ハタシになつて、くれ方の人たちに「たしかに嫁をもらひ受けました。」という意味の挨拶をする。その挨拶の仕方や態度がわるいと、土を投げられたりして仲人はひどい目に合う。冬の寒い時に、ハケシになるのはつらかった。なお、この時「パンタ」というムラの雇用人が立ち合つた。「パンタ」はムラの人が手当てを出して雇つておく人で祝儀の時の庭掃除を頼んだり、「火の用心」などの村の警備をやつてもらう。京ヶ島地区で一名いた。（京目）

中宿　嫁さんを送り一見が送つてくる。中宿で一同休む。落ちつきが出る。嫁さんは中宿で化粧を直し、支度を整える。（萩原）

中宿ではオチツキといって、お茶と生菓子ができる。いい娘がお給仕に出た。その娘は、一見座敷の前にハカマをぬいだりするのを手伝う。ハカマがよくたためたというので、嫁の口があつたりした。（一ツ谷）中宿は嫁き先を通りすぎない家に頼むが、これはあくまでも原則である。（西島）

お仲人夫婦と嫁婿が中宿でオチツキをいただく。オチツキは餅（買つたもの）などの生菓子が普通で、仲人がつづんで帰る。（西島）嫁迎え　村の若い衆を中心にして嫁家によばれた人々が村境まで迎え

に出た。このときは嫁家の紋所の入ったちよちゃんを持って迎えに出、そこでの特別なしきたりはなく、御苦勞さんでしたと仲人はじめ送ってきた人々と話をかわす程度である。

やがて中宿に案内すると、そこでオチツキが出される。

生菓子の二つ位であった。(矢島)

村の入口で挨拶をする。額役の人(時の区長)が弓張り提灯をつけ迎えに出る。弓張り提灯は、今の名刺のようなもので、火事の場合なども、それで通用した。(一ツ谷)

入家式 嫁がとつき先の家の屋敷へ入るとき、かいどでかがり火をたく。

くわぜで鳥居をつくって(麻でしばつた)縁側から座敷へ入るとき、これをくわせる。このとき、菅笠をかぶせ、杵をまたがせる。(菅笠をかぶらせるのは、決して上を見るなということ、杵をまたがせるのは、大丈夫ということ)。火をもるのは、はながとけないようについて仲人が先頭にいく。青年が門口で迎え火(麦藁)をたく。

黒無垢で謹をうたう。謹でうたい込むという。謹は嫁が縁側にあがるところ。

縁側で姑が嫁に菅笠をかぶせる。そして姑と嫁とで盃ごとをする。

酒でなく、カラ水を徳利に入れたのである。その後嫁は杵をまたいで床柱を背負う。(西島)

嫁が家に入るとき、杵をまたがせ、菅笠をかぶせる。菅笠は決して上を見るなという意味である。上がるとき、姑が手をひっぱる。そこで、嫁と姑との盃ごとがある。酒を呑む真似をするだけである。嫁はその後床の間に坐る。

街道の方から進み謹を誦つて迎える。その時タイマツをたき、燃えきらいうちに嫁の家にトボグチから入る。そこにはキネがおいてあり白を嫁の前に転がす。これをまたいだまま姑と盃を交し、上を見る

なという意味をもつて菅笠をかぶせ、次でコザ(客間)に上る。或はコザに上つたあと嫁姑の盃を交す(下齊田)

嫁が門までくると庭で火を燃やして迎え、嫁が縁側から上がる際に、縁側の下に杵をおきまたがせ、頭の上にスゲ笠をのせるまねをした。杵は男根を意味し、婿の持物が大きくなまるげるなどという意味だとう。スゲ笠は嫁は上を見るなという意味だという。また、そこで上がらないうちに姑と親子の盃をかわした。姑は嫁の手をとつて縁側にあげて式をする座敷に迎え入れた。(矢島)

嫁は縁側から入る。(八幡原)

門うたいをうたい、かがり火をたく。嫁さんは笠をかぶせて、縁側に上る所にキネを置き、嫁さんはそれをまたいで上る。(こんなでつかくともたまげるな、という意味)姑さんは手を引いてあがらせる。縁側へ上つたら姑と嫁で水盃をする。三つ重ねの盃の一一番上の盃でのむ。

嫁は正面に向つて右へ坐る。次に女の仲人、その次お待ち女房二人が坐る。お待ち女房は嫁と同じ支度で、帯を前に結ぶ。ただ坐つてればいい。

ムコの方にはムコと同じ支度の友達三人が並ぶ。

両親揃つた男嬢女嫁のお給仕で三三九度の盃をする。近所の人で、土地の習慣をよく知る人が後見人となる。

「我々両名後見人となつてまかり出ました。よろしくお受け下さい

ますようお願ひします」といひさつして盃事をする。その間謹をする。

仲人と父親が三三九度のお流れを頂戴する。そして酒肴が出来る最後に「お笑い」が出る。男女の象徴を大根と、聖護院大根でそれぞれ作る。いつも見なれているが、でもやつぱりおかしい、と皆が笑いころげる。おひらきは夜中の一時、二時になる。(萩原)

結婚式 島台には大根・米・炭などで鬼などをつくり、松竹梅を飾る。その上にそろばんをおく。そろばんには、男女のものを大根でつ

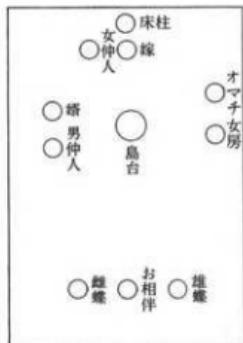
くる。村境までワカインシが迎えに行く。家の人は行かない。中宿に入れる。中宿で支度して出でくるのをワカインシが待つて、カイトの両側でクワゼを三三九度にした松明に火をつけ、通りきると両側から松明を合わせる。嫁はコザに入るが、その縁側の下には大きい米つき杵を置く。大きいものにたまげるな、という意味であるという。上には田植の時使った笠（音笠か）をワカインシが持っている。これは、上を見るな、とかづきがある。その縁側で、笠の下でしゅうとめと嫁の親子

取結びはコザで行なう。男女の子ども二人がお酌をする。途中に話が入る。三三九度の盃の最中、そろばん玉を島台のまわりをまわす。「千秋葉」の話の時稽をにがす。これをムコニガシといい、稽がいない、いないなど騒ぎ、しまいに代理婿が出て「いい婿がみつかつたら」となどといって、その場にあるだけの酒を代理婿にさす。

取り結びのあと、ワカインシサキがあり、ワカインシの労慰を慰む。（元島名）

式場では床柱を中心に向って右に嫁、仲人、ショヨイヨメの順、左に婿、仲人、親戚代表、隣組代表、ショヨイムコの順、下座中央にオシヨウバン（進行係で二人の場合もある）が坐り、真中に島台（蓬萊山）を山のよう上に上げ松・竹・高砂の翁をおく）を置く。話を説いてから三三九度を行なう。そのあと算盤の上に大根で作つた男女の道具をのせ、嫁の前に転がして出る。これも蓬萊山という。三三九度の盃がすむと、嫁は嫁を残して立ち、別の部屋に行つて休む。式が終るとコザへお膳が出て、仲人が箸を持って、嫁はオタカモリの夕食をとる。嫁は帯が強いのでたべられないが、たべたことにする。次で近所の手伝いに来ている人（男女共）が食事をするのに酒を出す。仲人がへやに連れていつて衣を着替え、今度は嫁もヨリツキで本当に食べる。これらがすむと一見は帰る。

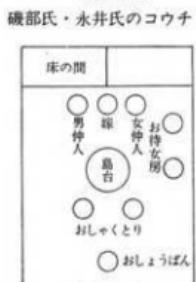
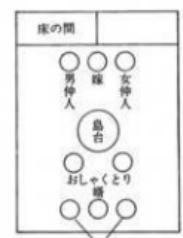
仲人がへやに布団を敷く。兄弟、仲人などと談話したあと、婿を先



トリムスピの座敷

にねかせ、嫁はもう一度着替えてそこに寝る。（下齊田）
取結びというのは結婚式のことと、三三九度の盃をかわす。そのときの配置は、矢島地区でも多少異なる。
お待女房といふのは、嫁にきたての中年以下の女性一人で、広帯をしめ、正装して坐つた。
おしゃくといふのは、男女の幼児で、三三九度の盃に酒を注ぐ役である。両親の揃っている家の子が選ばれた。

島台とは、お膳の上に松竹を束ね、まわりに白米をしき、そこえ高砂の老夫婦をネギなどでつくり、大根で亀をつくり、鶴を紙で折つて吊した。



反町氏のコウチ

花婿は、反町コウチでは最初に坐らないが、永井、磯部の両コウチでは式の途中で婿が逃げていなくなる。するとソロバンの裏に大根と塩鮭の頭で男根、女陰をつくり、それを嫁の前にころがしてやつたりした。(矢島)

雄蝶・雌蝶は、両親の揃っている男と女の子にたのむ。お酌とり三つ重ねで、お相伴の指団で三三九度の盃になる。

お相伴は、世間話の出来る長老に頼む。できれば内々の人がよい。三三九度の時、仲人は半紙四分の一を十二枚と酒の肴(イカとコア)を卷いたもの)をとってやる。酒の肴には手をつけない。

三三九度が済み、謡で「サアサツの声の松風」と一度振り返すとき、婿が逃げる。するとお相手が、「婿はどこへ行った。お仲人の責任だ」などといってお笑いになる。

その後、お相伴が「三三のシメをして下さい」といつて、全員でシメる。お相伴が「お世話になりました」といい、仲人も「ともどもにお世話になりました」といつて、トリムスピを終る。(西島)

トリムスピの座敷に、ソロバンの裏に乗せられた男根と女陰ができる。女陰は塩引き鮭の頭、男根は長大根で作られていた。毛はハタクサ、小便口は人參玉で丸くした太根などというように、手のこんだものであつた。(西島)

三三九度の折、長大根とショウゴインで作つた男根と女陰が、ソロバンに乗つて嫁の前に出る。蓋がすむと婿が逃げる。かわりの婿(よばれてくる人)が出てきます。嫁さんの腰部はすごく、大高盛りである。仲人が取つて食べさせる真似をする。(一ツ谷)

高砂の謡はトリムスピにやる。式の前三晩ぐらい練習をした。今は覚えていない。(西島)

嫁はイチケンザシキにはジンギにでるだけである。(西島)

オイロナオシとして女仲人が、タンスの中の着物を出して、着せかえくれる。(西島)

おまち女房とりむすびの席には、おまち女房が一人出席した。

この人は、近所の人で、だんなのある、中年の奥さん。手拭をあたまにかけて、手を前にくんでいる。おたいこの帯をしめる。(京目)

年輩者で嫁をひきたて見せるような二人をマチ女房といい座敷に坐わらせた。前席でうちかけだった。嫁は前席に手を入れておいて酒などは仲人に飲ませてもらった。取り結びは仲人、嫁、婿とマチ女房が合に向いに坐つた。(中島)

嫁方にだけいて女仲人の隣に嫁と並んで坐る。婿方にはつかない。嫁の連れになつて坐つてはいるだけで別に用事はない。仕度は嫁と同じで嫁帽子もかかる。既婚者である。(下青田)

若い衆座敷一見座敷が済むと一見の人達は帰つてしまつ。その後が若い衆座敷になる。嫁は出てお酌をする。(西島)

嫁は酒を一回りつくとひつこむ(一ツ谷)

ノソッコミ 招待されない家の若い衆はノゾッコミをした。(西島)
ご祝儀のご馳走 タコ、なます、カマボコ、かずの子、煮魚、キンピラ、コブダラの吸いもの。豆腐つかすのきらぎが出る。のつべが出るとおひらき。(西島)

嫁の土産 主に手拭と菓子と仲よし豆で、式後近所の手伝いの人のところへきてあいさつをするときに出した。また、嫁家に両親、兄弟がいれば、各々若手の品を持ってきた。(矢島)

嫁のお茶とモミ、近所の人に土産をだす。その他兄弟衆にも土産を出す。(西島)

産を持っていく。(一ツ谷)

嫁入道具 嫁のくるより前に嫁家に送りこむ。このときタンスヒキ

二人とミードケ一人ついてくる。この三人には若干の祝儀金を包み、

酒肴を出してもらつた。(矢島)

カネツケ 式の翌日か三日目でサトガエリをする。女親(姑)と嫁

と婿で赤飯とお土産を持って行く。日帰りで、嫁の父親が気に入つた

ものをお土産にもつて送つてくる。嫁にお返しに梅干を持たせる。梅

干のようになるまで仲よくするように祈つて。(下齊田)

二日目をカネツケといい、貰い方では朝早く赤飯ふかして嫁方へ届

けた。先方の朝食前がよいといふ。このときはお返しはなかつた。(矢

島)

翌日カネツケ祝いをする。朝ぶるまい。掛けぶとんを二つ折りにし

て、前帶にした嫁ごと女仲人が東向きに坐つてよばれていた人にあい

さつする。おこね、酒肴で駆遣を出す。

赤飯を炊いて、近所の若い衆が重箱へ入れて嫁の里へ持つて行く。

お返しは、豆、アズキ、梅干しなど重箱へ入れて返す。使いの若い

衆は粉菓子の折箱と金包みなど貰つてくる。(萩原)

結婚式の翌日には、姑が嫁を連れ村回りをする。手拭一本を持つ

て、「よろしく」と挨拶をする。まず区長さんとのところにいく。神社に

は必ず参拝する。

鉄漿付祝いということで、早期赤飯をふかして、嫁の家にとどける。天を入れ、白紙のオヒネリ(塩)をつけてやる。嫁の家では、お駄賀

をくれる。昔は二〇銭ぐらいであつた。(西島)

式の翌日をカネツケといって、嫁は支度をして村中を回つた。髪結

いもきた。嫁の手土産として、名前に入つた手拭をくばつた。(一ツ谷)

里帰り ゴトギブルマイが済んで、式後一週間位のうちに嫁は里帰

りをする。お土産を持って、姑と嫁娘と一緒にいく。姑と嫁は泊つて

婿は帰る。お土産は任意であるが、昔はミニンコが多かつた。七〇銭もかければ立派なものであった。(西島)

里帰りは三日目にする。男・姑・婿と嫁が嫁の里にいく。婿は手拭を持って近所回りをする。その時には嫁の父親が同伴する。

里帰りの時には、お供(結納の時のお供)が重箱に赤飯を二つ持つていくことになっている。

里帰りには泊るものではないといふ。(一ツ谷)

カネツケをした翌日、実家へ帰る。日帰りにする。(宿横手)

四日目は嫁は姑とともに里へ帰る。姑はその日に帰るが、嫁は二晩泊つてから帰る。(矢島)

ヒザナオシ 結婚式後五日位たつてから嫁は里に行く。この時、貢

いの方の母親が連れて行く。帰りには、くれ方の母親が送つてくる。(京

目)

式後一週間ほど経て里に帰り二~三泊して戻つてくる。(矢島)

ヒザナオシは、その家の都合で、適当にした。姑と嫁が実家にいき、

姑は嫁を残して帰つてくる。婿はいかない。(一ツ谷)

三日目にヒザナオシ。姑が送つて行き姑は泊らずに帰る。一晩か二

晩泊つて、嫁の女親が送つてくる。(萩原)

里がえりをしてから一週間後に実家へ帰り一泊する。(宿横手)

ゴトキブルマイ ゴトキブルマイは、三日目にやる。結婚式の前日か

らお世話をなつたというので、近所とか肉身を呼んで宴を開く。(西島)

祝儀の三日目で、この日は嫁が手伝いの人にお茶を入れた。これをゴ

タイギフルマイともいう。(矢島)

昔は一週間くらい結婚式がつづいた。(八幡原)

四 そ の 他

嫁が里へ帰れる日 年始は正月四日で六日年までに帰つてきた。

三月節供——菱餅を持参

五月節供——タラの干物

九月一日——八朔の節供

お盆——盆が終つて盆がらにやる

ず帰れるとはきまつていなかつた。

イキミタマ——夏作の終つたあとに婿がウドンや味噌など持参して

嫁の家に行き、近所や近しい人をよんで振舞いをした。これは里親の

生存の場合で、イキボンフルマイともいう。實際は嫁の家ではほとんど

用意し、若干のお金を持っていくのが多く、なかには粉まで持つてい

た話もたまにはある。

あきあげ——秋の取入れや麦播きがすんで、ネズミップサゲがすむ

と帰れた。

おこあげ——春蚕が上蔟し終えると祝いをしたので、祝の餅を持つ

て里帰りすることもあった。

出産——初児を出産するとき（矢島）

年始——正月四日、夫婦して行く。

三月節供——麥餅を持っていく。

五月節供——一晩泊り。タラの干物と金錢を少々。

オコアゲ祝い——六月中旬、祝いの餅をもつていく。

農休み——七月十五日、こちらの農休みにうでまんじゅうをもつて

いく。

お盆——実家のお盆に行く。

オクンチ——十月九日、ちょっとした手土産をもつていく。

アキアゲ——一年の仕事のきりがついたとき。オハギ、赤飯をもつ

ていく。

十二月十五日——油餅、夫婦餅といってアン入りの普通の餅だが、

二十一—二十五コ奇数もつていく。(下齊田)

歳暮——男衆が鮭をもつていく。

春と秋の祭りの日。三月節供には紅白の菱餅を持って行くことになつ

ていた。(宿横手)

嫁の里帰りは次のとおり。

三月の節供——紅白のひしもちをもつていく。

七夕の節供

八朔の節供。

お歳暮には、さけと大判の餅を二枚かさねで持つて行った。(京目)

ヨメゴ呼び——結婚式後、適当な日を選んで貰い方の親戚が新郎新婦

を呼び近親者との近づきをさせた。(京目)

新嫁の田植え着物——結婚したその年の田植えには嫁は新しい着物を

着て苗を植えた。だから田植え時期の田んぼへ行くと新嫁はすぐ

分つた。(京目)

ホカイ——嫁の実家が新築をした時に、はさみ箱に赤飯を入れて持つ

て行く。結婚式の日に嫁さんのお供をして、嫁入り道具を担いだ人に

持つて行ってもらう。(宿横手)

娘三人——娘が三人いれば、貧乏するといった。

嫁の仕度で大変経費がかかるということ。(京目)

あしいれ——あしいれできたためのことは、デヨメ、むこのことは、

デムコといふ。

親同士ではなしあつてきめた。

親が「しをとつて、手がない」というような場合、うちうちで、ちょ

うどしごろの娘がいるような場合、まだ披露をしないうちにうちへ

つれておく。披露はあととする。(京目)

式の前に嫁の家に来ている娘をデヨメという。嫁の家が手不足の場

合などで、一、三ヶ月後に式をあげるが普通だが、このとき子供が始まっている人もある。破談になった例もあった。これは試験しているという考え方の場合である。またオーサンのとき益をし、その夜近所を仲人が挨拶に廻るが、そのとき足入れしておくのだというのもあつた。(下吉田)

ニウバッ子 正式に結婚式をしないうちに生まれた子。ワラニウ(葉

荷生)に穴をあけて、そこで共寝をしてできた子供ということである。

(西横手)

テテナシ子 テテナシ子の赤ん坊が死ぬと、「三本辻に埋けろ」と言われた。(西横手)

五、葬 制

（一）死の予兆と死

死の予知 烏の鳴声が悪いという。

人魂が屋根の上を飛ぶと人が死ぬ。赤色の径一〇一五センチ位の青味がかったもの。

人がいないのにお寺の庫裡で音がすると、檀家に死人が出る。(八幡原)

鳥がおごとそうな鳴き方をする人と人が死ぬ。ふだんは首をふって軽るそうな鳴き方をしている。(島野)

普段とカラスの鳴き方が違うと人が死ぬという。また鳥の向いた方の人人が死ぬともいって、それを見分ける名人がいた。(西島)

鳥鳴きがわるいと人が死ぬ。一口鳴きといつて、カア、カアと声を区限つて鳴くと人が死ぬといわれている。またその声は死ぬ人の近親者には聞こえない。(京目)

人が死ぬ時、鳥の鳴き声がわるいが、当人の家には聞えないという。

人が死んだ場合、男なら寺の本堂へ、女なら寺の流し元へ知らせがくるといふ。

夢知らせがあることもある。(萩原)

寺の本堂でもの音がすると男の人が死に、お勝手で音がすると女の人が死ぬという。(京目・島野)

人魂

昼間はいい人魂がでる。昔、桑つみをしていたら鍛冶屋の破風から白いものがでてきた。十五センチ位の玉だった。「鍛冶屋のじいさんがまいるかもしれない」と思つて見ていたらやはり死んだ。

夜はオタマジヤクシミみたいなものが一間位の長い青火をひいて出る。やはり一五センチ位の大きさで「一分間位空をとんで消えた」。

二、三日前のこと、妻が「人魂が来たら出で見ろ」といったので、すぐ外を見たがもう消えていた。人魂は、私の家のパラックと倉の間の空をぬうようにとんで行つたという。誰れかが死んだかもしない。(島野)

昭和十三年のこと、人魂がお寺に降りるのを見た。そしたら知人が戦死した。(京目)

子供の時火の玉を見たことがある。豆腐屋のジイサンは早起きで、何時も纏ないをしていた。そのジイサンと話をした直後、カクさんの家のグシの上を六尺位の尾を引いてとんだ。東のグシから西のグシにとんでいった。屋敷祭りのオンベロをさげにいく時のことであった。

とてもわかつた。その後間もなく豆腐屋のクニさんが死んだ。(西島)

魂呼び 昔、脳溢血で倒れた人の家族の一人が井戸の水に向つて倒れた人の名を呼んでいるのを見たことがある。倒れた人は死んでしまつた。(島野)

人が急死すると、井戸に行つて大声で呼ぶ。大正の初め頃まであつた。(八幡原)

井戸に向つて大声で病人の名をよんだ。近所の人もきてよんだ。(矢島)

昔あつたかどうか聞いていないが、死にそうになると家の中に打つ
けである釘を全部ぬかせたという。（中島）

この辺では魂呼びはやつたことがない。（西島）

お百度み 村の鎮守様に行き、正面で拝んで、社の周囲を百回廻

る。（八幡原）

お百度には神社に木札があつた。社殿のまわりをまわるだけである。
塙離ととつた話はこの村ではない。（矢島）

千本ノボリ 大病の人があると、神社に千本ノボリの祈願をした。

千本ノボリは、半紙をえり切にした短冊で、病氣の治つたお札の調を
書いて神社のまわりに立てた。ノボリといっても小さな旗で、近所の
人をよんでみんなで書いて立てた。（矢島）

筆引き

死者が出ると神棚を筆でかくし、出棺が終ると筆を川に捨
てていった。昔は儀のチヨッパシにお祓いを立てたりして淨めたが、
窓淨めのことはしなかつた。（矢島）

不幸があつた場合に、近所の人が来て、筆（竹）の小枝をとつてきて
て、神棚（大神宮様のところ）へあげる。

これは、神様のお顔かくしといって、神様の前をかくすわけである。

（島野） 人が死ぬとお顔かくしといって神棚を筆の葉でかくした。また白紙
を張る場合もある。これは他人にやつてもらう。（島野）

人が死ぬとお顔かくしといって神棚を筆の葉でかくした。また白紙
を張る場合もある。これは他人にやつてもらう。（島野）

四十九日までそのままにしておく。さげる場合はその家の人をする。

死者の家では近所の人が筆の葉を神棚に上げる。同じ人が下げる時
にも取り去ることになつてゐる。（萩原）

枕ナオシ 病人が息を引きとると、北枕に寝かしながら。单衣ものを
を着せて、底を抜いた足袋をはかせ、その上にワラジをはかせた。仮
様の上には刃物を置く。魔除けである。（宿横手）

死者が死ると親戚の人が来て北枕におし、上に刀をあげた。北枕
にすると死者がらくになるという。刀は猫をよせつけないためで、猫
は化けるので、猫が死者の上をとぶと仏様が起きあがるといつて忌ん
だ。（矢島）

後生願うが北枕といつて、死んだ人は北枕にするが、西枕でもよい。

（西島） に魔除けとして刃物を乗せ、屏風の裏を表にして立てる。（八幡原）

刀・鎌・ナタなどを死人の布団の上に乗せておく。（西島・萩原）

死者への供物 玄米をひいて作った枕団子四つ、膳はタテ膳、高盛
御飯。（御飯、葬儀具を作るのに用いる糊を煮るナベなどは一七日まで

そのままにして使わない。（八幡原）

枕もとに枕だんご・枕飯・水などを供える。近所の人が寄つて、玄
米を渡して石臼でひいた粉で枕だんごを作れる。（萩原）

玄米をひいた粉で四個作る。これに使つた鍋は一週間外へ出してお

いて使わない。かまどはそのまま使う。（宿横手）

枕ダンゴは白米の粉で作る。四つとか六つなどからならず偶数箇作る
ことになつてゐる。（西島）

お高盛りにする。箸を真中にたてる。箸は白木か塗り箸か家によつ
て違う。枕元に供える場合、左膳になる。汁のかわりとして椀には醫
油を一たれ入れる。（西島）

ツゲ 死亡の通知は五人組の者が一人で行く。一番近い親戚の家へ
行き、そこから他の親戚に知らせてもらう。ツゲを受けた家では清め
の冷酒を出し、シノギ（飯）を食べてもらう。今は車で行くので、「こ

れで済めて下さい」と言って金を包んで出す。（宿横手）

二人でいく。告げには大概の家で何か出してくれる。

告げの人には、施主から弁当代、足代として何がしかの金をつづむ。

自転車の場合はパンク代である。（西島）

死者の家では近親者へ葬儀の日取りなどを知らせるために、二人一組の告げを出す。最近は電話ですませるようになつた。(萩原)

告げには二人で行った。告げを受けた家では清めを出した。また告げに出かける時施主は、飯代、自転車のパンク代を五十銭か一円持たせてやつた。使わなければ帰つて来て施主に返した。告げは身軽な服装をして行く。必ず二人で行くので、告げでなくても道を二人で歩いていると「まるで告げのようだ」などといわれた。(島野)

二人一組でいった。一人で事故があつたら大切な知らせが果せないからという。二人知らない男衆が並んでくると告げのようだともいう。告げを受けた家では、必ず酒を出し、飯時には一飯差上げた。(矢島)必ず一人で行く。出るとき渡しのある方向に行くには、渡し貢三銭位渡した。(当時井野川、下之宮、五料、川合、宇賀、倉賀野、佐野などに渡しがあつた。大曾井野川の渡しは八文、岩鼻の柳瀬橋が流れての渡しは、国道だから無料だった)一人連れで歩いていると「ツゲだ、どこかで御不幸があつた」という。オキヨメ、お母は行き先で出す。(八幡原)

お通夜 暇り組の人には帰つてもらう。近親だけでやる。(西島)



宝 優 印 塔 (萩原 德藏寺)
葬式の時に、この回りを回った
という。(土屋政江撮影)



輿 と 銚 (萩原 德藏寺)
葬式用、銚は文政8年銚。
(関口正巳撮影)

〔二〕 葬 送

葬儀の準備 葬儀については、隣組長あるいは本家の主人が中心になつて面倒を見る。そして寺、役場、医者に行く役は話合いで決める。寺へのお布施は施主が決める。(八幡原)

死亡すると市役所へ届けて、火葬許可書を貰う。告別式をしてから火葬場へ行くか、その逆の場合もある。(萩原)

葬具 葬具は前日に作る。これらを作る道具、鉄などは片付け、一週間は使わない。色紙でシカバナ、タイムツ、天蓋、弓矢、燈ろう、シハタ、花籠、オガラなどである。(八幡原)

花籠 竜頭、四旗、天蓋は寺から持つてくる。この他に家で作るものは、金剛杖、花籠、さかざ弓、六地蔵、シカ花、タイムツなどである。(宿横手)

年寄りが死ぬと、銭を入れて、葬列の時に散らした。孫が持つて多いほどよいといい、六本ぐらい用意する。葬列が回りながら、銭と色紙をまく。(萩原)

棺

棺 棺桶は近所の人が手作りした。棺道具は寺に用意してあり、輿もあるあまり使わず、靈柩車で運ぶ。

棺には下に着物、わら、サンザシ(依ばし)など、を敷いて、遺体を入れる。わらを紙に包んで回りに詰めて動かないようになつた。酒びんやタバコ、花

以前はほとんどない。最近はするようになつてきた。(矢島)

なども入れてやる。六道銭などの紙銭も入れ、三角形の頭宛も付けるが、髪はそらない。（萩原）

今は寝棺だが、前は立棺が多くた。大カメを使った。（萩原）
湯灌 湯灌の湯は庭に竹を三本、脚立みたいに立て、それにナベをつるして湧かせた。水の中にこの湯をそいで適当な熱さ加減にした。湯灌はナンドである。湯灌をする男の人はフンドシだけの素はだになり、腰に荒なわを巻きタテ結びにむすんだ。女は麻ひもでたすきをかける。

湯灌に使った湯は部屋の床に少し捨てるまねをして、その他捨てるものといっしょに、滝川に捨てに行った。この時は、素肌のままはだしで川までかけていった。（京目）
湯灌の湯は竹を三本、庭に組み、ナベをそれにつるして湧かせた。このナベはその後、一週間使用できない。

湯灌は身内の者が身軽な服装になり腰に荒ナワの帶をしめて行った。済んだ湯は他の捨て物といっしょに滝川へ持つて行って捨てた。醬油樽に入れて捨てたので、水車があつた頃は樽がひっかかり困ったという。（島野）
一斗樽の上蓋をぬいて桶の代りとし、水を入れた上に湯をたしてぬるま湯にする。外でクワデ（桑枝）三本を三脚に組んで鍋を吊るし、水を入れて蓋をしないで湯を沸かした。親族の男ははだか、女は纏だすきをして、湯で死体をふいた。使つたものはあとで棄てたので、昔は利根川を樽がよく流れてきた。（萩原）
湯灌は湯は、外でわかす。家のなかまどは使わない。使つた湯は利根川に流す。三本樽をぶつちがえにして立てて、これに鍋をつるして湯をわかす。この鍋は一週間に置いて使用しない。（宿横手）
湯灌用いる湯は庭で三本樽を立てて沸かす。実際はこれで少量沸かし、他にヘツイでも沸かし両者混ぜて使う。これを醤油樽に入れタスキに荒繩をかけて死者に身近い人が湯灌する。そのあと荒繩、湯

灌に用いた布などは樽に入れ、これをもつて裸で井野川（又は鳥川）に走つて行き、樽を流す。（八幡原）

湯灌の湯は、三本竹を組み、土なべをさげて沸かす。逆さ水にする。

男は麻繩でタスキをし、ノギリハチマキ、女衆はタスキがけでやる。ニッカンに使用したサラシなどは井野川に持つていつて燃すか、墓地で燃すかする。

湯かんという。死者の体をふく湯は庭に青竹で三本足をつくり、そこに鍋を吊してわかす。その道具は七日間は外に出しておく。（矢島）
納棺 棺は買つてくる。湯棺がすむと納棺で、親戚が寄つて前々から着ていた着物をこわし、着物を作り、襟をとつて左前に着せ、三角布、ズダ袋、向うすねに当る脚はん、底をぬきコハゼを外した足袋、ワラジをはかせる。その他生前の愛用品、麻でしばったカクシゼニ（三途の川原の渡し貢）を入れてやる。（八幡原）
納棺のとき、本人の好きだったもの（酒、煙草など）を入れてやる。手形といって、五銭、十銭位を入れる。（西島）

死者が肌につけていた着物を左前に着せ、その着物の襟を取つて帶にする。そしてキタビラを掛けてやる。裾には、かくしそ二といつて六文銭をぬい込んでやる。足は底ぬけ足袋にわらじをはかせる。
出棺前に棺のふたの釘を石を使って打ちつける。この石はなるべく細長いものを選び弓のつるにくくりつけ墓に立てておく。そして、四十九日までの参り毎に墓の六角塔婆をこの石で打ち込むことになっている。この石の名前は別に無い。（京目）
棺に入れるものは、死者の愛用品、六文銭、かくし金（着物の裾などに結えておく）、結婚前の若い人が死ぬと誰様を入れてやる。また相ついで死者の出たときは人形を身替りに入れる。盆や彼岸内に死んだときはシラジをかぶせてやつたこともある。（矢島）

穴掘り 戰争前頃までは萩原にいたパンタが引き受けた。青年会で

やつたこともある。その後は隣り組でやるようになった。掘り終ると、酒とつまりを墓地まで持つて行って、穴掘りの人たちに、お清めをしてもらう。(島野)

昔はバントが専門に穴掘りをした。その後、組から穴掘りが出て掘るようになつた。最近は火葬になり、カルウト(石組)に骨を納めるようになつたから穴は不用だが、必要な家では穴は身内の者が掘る。

現在は火葬に三十五日までお骨を置いておく。(萩原)

昔は番太の市兵衛という人がいて墓を掘ってくれた。この人は平素は墓掃除をし、毎月一回は米をもらいにやってきた。いまは隣組の人が墓穴を掘る。(矢島)

戦後火葬になるまで穴掘りは、死者の出た隣の隣組が順番でやつた。それは昭和三十年(三十五年頃)からである。この仕事をする人は、近親の客とは別に簡単なオキヨメをして先に帰った。隣組の人が穴掘りをする以前は下青田のいた番太が一人で掘った。その頃はお札はお包み、そして別の膳代があがりはないので御馳走をもらっていた。後に手間代を高く要求するようになつたのでやめたという。(八幡原)

この地区では隣り組でやる。清めは現場だす。(西島)

出棺 オモテのオクリから出棺する。棺(昔は豎棺が多く後に寝棺になつた)は死者の子供がかづく。昔は紋付袴で三尺を巻いてかついだ。庭に出て一廻りしたところで、死者的孫が東北(鬼門)に向けて矢を射る。庭で右手前で二廻り半廻る。これが左廻りで、そのあと墓地に行く。棺が出ると幕ではき出し、棺を置いたあとに石臼を置いた。

(この石臼は一週間使わない)石臼は埋葬してから動かす。木臼は玄関の前に北向きにおきその上に寺からの幣束、オキヨメをおき、傍のタライに片足を入れる。またオキヨメの酒を飲み始める前に塩を廻して自分を清める。幣束はオキヨメの時も室内を廻しきよめる。(八幡原)

棺は座敷から庭に出る時、オガラ三本で作った門をくぐる。(西島) 庭の広い家では、葬列は左回りに三回り半廻る。その時、仮の供養

にと撒き錢をする。女衆が撒く。これは年寄りの場合が多い。花籠とは別にやる。花籠は施主が出る。(西島)

ゼンの綱は繩とサラシで作る。棺の両側につけて、野辺送りの時近

葬列の順序 先頭に灯籠、四旗(遠い親戚の者が持つ)、シカ花(孫)、

ナイマツ、弓(誓)、膳(嫁)、位牌(相続人)、棺(甥)、天蓋(親戚の者)の順に進む。(宿横手)

この順序は大切で、これで騒ぎになることもある。燈籠(従兄弟)、四幡(従兄弟)、花籠、墓標、四花(花)(女いとこ)、弓、松明香箱、写

眞(膳(長男の嫁)、位牌(長男)、棺、天蓋の順である。(西島)

つゆはらしい、灯ろう、四本旗、花かご(孫のいる人が死んだ時)、シカ花、香箱、膳、位牌、棺及び天蓋と弓を持ち、会葬者の順。棺に近いほど近親者となる。(つゆはらしいは先に行つて寺の入口や、墓地の入口に六地蔵を立て、そのロウソクに火を灯す。)

また、八十才以上の人死去時のつゆはらしいは手に紅白の杖を持つ。

墓からの帰りは往った時と別な道を通つて来る。(京目) 天蓋を持つ人は仮に一番血の近い人が持つ。これは日がくしともいつて、太陽への遠慮だという。(京目)

あらかじめ、誰が何を持つかを紙に書いて張つておき、出棺の前に組長がそれを読み上げてたしかめる。葬列は隣組が主体となつて行

うので隣組長が葬儀委員長のような役目をする。

燈籠、四旗、松明、膳、位牌、棺・天蓋(棺にさしかける)の順が原則となる。花かごは孫のいる人が死んだ時に作り男孫が持つ。シカ花は女の人が持つ。(島野)

棺の座敷から外へ出すときは縁側から出し、麻がらで門をつくり、

その中を通って外へ出す。

葬例の順序は

行列よりさきに墓の入口に立てる。

1 六 地蔵 燈籠 緑の遠い親戚の人

2 地藏 従弟 男孫

3 燈籠 簾 女孫

4 旗 花 箋 娘婿

5 箧 かばな 娘婿

6 弓 娘婿

7 松 明 娘婿

8 榛 位 後繼

9 胜 胜 後繼の妻

10 桐 桐 村人

11 天 薫 死者の本家や目上の人

12 墓 標 村人

棺が墓につくとそこで三廻り半めぐり、台の上に棺をすえ、坊主が引導わたしをする。参列者は、女は頭に白布をかぶり、男は金剛杖をもつて参列する。また参列者には力板を一本箸で手の甲に何粒かあける。(矢島)

野辺送り 出棺前に坊主がお経をあげている際に、「おはちが回つて来る。各自は箸一本で、その中のめしを一、二粒食べる。どういうこ

とか聞いていない。なお、こんごう枝と称する青竹を割ったものにボ

ン字をかいた棒が一本ずつ渡されるので野に持つて行き仏と一緒に埋

める。野までは、首などに差して行つた。

棺は家を出ると庭に設けてある火伏せと書かれた紙を吊した四本竹

の回りを左回りで四回半回り、止めておき、持物などは全部たてかけ、

坊主が、オガラの先に赤い紙のついたものを棺に投げつけることがあつた。

普段よく「オガラをぶつけられた」というが見捨てられたという意

味があつた。

棺は青竹でかつて行き、墓場につくと、この竹を石などで割り、

メツバジキとし、山犬の害を防ぐのだといわれた。

穴掘りは、専門の人がいて壙してくれた。(榎町)

埋葬 墓穴に棺の四隅を掘つて降ろし、先ず近親者が土を入れ、土饅頭

れ(このときダンゴなども入れる)、次いで参列者が土を入れ、土饅頭

を作つて、真中に竹を割ったメツバジキをおく。あるいは弓の残り一本

を真直にして弦の一方を外し石をつるしてメツバジキの代りとす

る。埋めてから七本塔婆を立て、一週間毎に欠き、四十九日で終る。

また翌日あるいは翌々日墓直し(昔は三日目にした)をする。石を拾つ

てきて打ち堅め、メツバジキをとってきてきれいにする。なお一七日まで

毎日墓に行き、あと二七日……と四十九日となり、百かん日が塔婆の

タテハジメである(八幡原)

棺に繩をかけ竹の棒で担いで墓地へ行つて埋ける。土をかけ土まん

じゅうにする。

竹を八つに割つてメツバジキとして回りに立てる。オオカミ様を除

けるためだといふ。土まんじゅうの上に石を置いて膳をすえる。墓標

を立て、線香立てを供える。(萩原)

墓穴の中に北向きにして入れた。あとで背中を拌むことになる場合

もある。(萩原)

ラントウバ(この場合、長泉寺の墓地)で「の」の字に三回まわる。

(京目) 埋葬後、土饅頭の上に、花籠や四旗の竹を割つて適當な数を方形に

さす。メツバジキといふ、青竹の皮が表になるようになります。その竹が

はねて、ムジナやタヌキから死骸を守る。また、魔除けともいわれて

土饅頭の脇に一本の割り竹をさし、麻繩に適当な石をつけて、その竹につるす。呼び石といふ。墓参の折、その石と、膳桶をのせた白石と触れ合わせて音をたてる。仏と人間とのつながりを持つ石であるといふ。

メッバジキや呼び石は四十九日の墓なおりに取り除く。(西島)

メッバジキは土葬した土饅頭の上に作る。棺を担いでいた竹を、刃物を使用せず石で割り、メッバジキとする。魔物に据られないためといふ。四十九日の墓なおりの時にとる。ここにはモカリという言葉はない。(ツツ谷)

呼び石といって葬儀に使用した弓の弦に小石を吊るし、土饅頭にさしておく。お参りにきた時、下の石と合わせて鳴らす。死者に呼びかけるので呼び石という。(ツツ谷)

埋葬後は、弓は北に向けて射る(空から蛇がくるのを防ぐ)。墓の盛土のまわりに猿除けのメッバジキの竹を割ってさした。弓は使

用後はつるをはずし、その紐で石を結えて吊しておく。(矢島)

犬にほられないよう、土まんじゅうの上にメッバジキをさしておくる。(八幡原)

キヨメノベから帰つて家に入る時、たらい・塙・年中祓(御幣)ではらう。座敷で忌中ばいのため、清めの酒が出る。(萩原)

あと念仏 葬式の夜、村人が位牌の前で念仏を唱えた。念仏の種類は三種と五種で、何れも最後は融通念仏である。三種は反町姓の家、五種は永井姓の家がした。この念仏を唱える毎に位牌に水を供え、そ

の水を翌朝墓参りの時に墓へもつていった。(矢島)

寄せ鉢をたたいて近所の人を集め、女衆が中心になつてオタイヤ念佛を唱える。その念仏は「ナムアミダブツ」一三回を、五度繰返し、それが終ると「十王十体ナムアミダブツ」一三回を一度唱える。野辺送りから帰つたあと夜行なつ。(宿横手)



野辺送り

7枚1組になっていて7月7日の墓参の都度これを折ってくる。この写真は全部が折つてあるから49日の供養のすんだものである。

(矢島町にて) (都九十九一 撮影)

墓参り 葬式後一週間

週間は、親族や近所の人も来て墓参りをしてくれる。家で念佛をする家も、しな

い家もある。(萩原)

墓直し 一週間めに墓を直す。石は拾つて来ない。(萩原)

四十九日の餅 四十九日には餅をついた。餅をつく音で仏様は家を離れるとい

う。それまでは家のグシにいるという。だから今でも四十九

葬式のあと念仏を行なつた。十三仏、ゆうすう念仏、しゅう玉じつたいなむあみだ仏、おんわかべ(?)などの念仏があつた。葬式の終つた後、十六念仏を唱える。念仏玉として、昔はまんじゅうが出たが、最近は気持だけ何か出す。(萩原)

出棺するとすぐ念仏を唱える。これを「アト念仏」という。その地区の老人、二人位が唱えた。

また、簪で、出棺した後の部屋をすぐ掃き出した。これに対して「お祝儀のあとどの部屋は三日掃くな」といわれている。(京目)

妻が先立った場合 妻のほうが夫より先になくなつた場合には夫は野辺おくりのとき見送りしない、不幸ものだからという。(島野)

(三) 葬後の祭り

日が済むまでその家では家の普請をしない。餅はお寺様にも持つてい
く。別にわらのツトコにはいれない。（島野）

この日にはハカナオシをし、餅をつく。四十九個、ツトコに入れ
てお寺に持っていく。そのうち一個に梵字を書いてもらい、墓にい
る。この日まで餅をついてはいけないといわれている。この日まで、
佛様は屋根のグシにいる。（京目）

四十九日の日に、四十九の餅をついて、寺へ持つて行った。
三升の米をついて、四十九の餅をついて、寺へ持つて行った。

寺では、餅があつまる。それを近所の子どもたちにわけてやった。

（京目）

四十九日に、餅をついて、お寺へもって行つた。このとき、佛様の
着物をお寺へもって行つておさめた（一枚）。

四十九日までのあいだは、佛様をまつた。祭壇には、毎日あかり
をつけた。

佛様は、この間、床の間へかざつておく。そこには、十三仏の掛軸
をかけた。

近所の人は、四十九日のあいだは、佛様を毎日おがみに來てくれた。
そのあとは七日ごとにおまいりに來た。

なお、死人のあつた家では、四十九日がくるまで、餅をつくこと
ができなかつた。

また、四十九日までにお正月が來た場合には、餅を食べることがで
きなかつた。（島野）

坊さんをよんでお絆をあげてもらい、生前見舞などもらつた家に餅
をついてやつた。餅は寺へも届けた。四十九日の間は、死靈は家の屋
根の棟についているといふ。この日墓をおしをし整えた。また、この
日に形身別けをした。最近は三十五日で位牌あげをする家が多くなつ
た。（矢島）

四十九日経過しないと餅をつかない。四十九日の餅をつく音を聞い

て魂は昇天するという。俺がいなくもよくやつてはいるが死者は安心す
るのだという。餅はお寺に届ける。（ツツ谷）

死後四十九日たないと餅がつけない。四十九日の餅をついて、偶
数を親戚に配る。寺へは持つて行かない。（森原）

四十九日までは白の音をさせてはいけない。（西島）

死者の魂 死後四十九日間は家の棟の内に居る。死後一週間は毎日
墓まいりし、一週間に五人組の人が立ち会つて、墓をおしをする。

四十九日の間は、位牌は床の間に上げておき、その後祭壇に上げる。

（宿横手）

四十九日までは死後の魂は屋の棟にいるという。（西島、ツツ谷）

ユズリ 四十九日に死んだ人の遺品を身内の者が分け合う。カタミ
分けともいつてはいる。（島野）

仏の供養 一七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七
七日このうち三十五日と四十九日は特に注意して多くの人が墓参りに
きてくれ、そこで位牌あげをした。

百カ日、一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、三十三年忌とあり、
全部で十三回となる。三十三年忌には塔婆の上に杉の青葉を結びつけ、
この年忌が終ると佛は神になるのだという。（矢島）

四年 忌

年忌 一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、三十三年忌
で塔婆のタテジマイ。昔は杉の葉のついた枝、今は薄板の塔婆の頂に
杉の葉を結いつけて立てる。三十三年忌のお祝いといふ。（八幡原）

一回忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、三十三年忌とある。

三十三年忌が「塔婆ノタテジマイ」で、杉の葉を塔婆に付けて立てる。

三十三年忌を過ぎると、先祖の靈が神様になるのだといふ。（森原）

三十三年忌には杉塔婆といって、生杉の両面を削り、先端には葉を
つけたままの塔婆を立てる。現在では、ふつうの塔婆の先に杉の葉を

しばりつけたもので済ませる。これを「塔婆の立てじまい」とも「立て納め」という。これに対して、四十九日の塔婆を「塔婆の立てはじめ」という。(京目、島野)

塔婆のたてはじめは、四十九日。

塔婆は、「一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、三十三年忌」など。

三十三年忌のときは、坊さんにおがんでもらって、塔婆をたてた。

このときには、仏様の子どもたちがあつまつてお振舞をした。

三十三年忌の塔婆には、あたまに杉葉をしばりつけた。これがた

てじまいである。仏様は、これで神様になるといわれた。

親の三十三年の供養のできる人は長生きであるといふ。

(五) そ の 他

流れ灌頂 川の合流点に竹四本を四角に立て、その上に梵字を書いた赤い布を張り、四十九日の間、竹のひしゃくで水をかけてやる。お産で亡くなつた母の供養のためである。(京目)

流れ灌頂ということは話には聞いたことがある。(西島)

お産で死んだ時は、川っぽたへ、四本の柱をたて、緋木縄の布をつけて、通る人に川の水をかけてもらつ。

早く色が抜けると往生する、という。(大沢)

紙位牌 死産の時は、お寺で紙位牌をもらつてくる。そして仮壇の中に張つておく。位牌には「〇〇〇分娘死産児」と書かれる。(京目)

同齡者が死んだ時は悪いことを聞かぬようマグソでふたをしろといつた。(八幡原)

門牌 ジャンボンが出来ると門にモンベエを立てる。四十九日立ておく。その間に「もらいもん」がくると施しをする。(萩原)

(島野) 盆中の死人 盆月に死んだ場合には、しらじをかぶせて埋葬する。

鼻血 水死人は鼻血が出ることがある。身内の者がいる時に鼻血が出るという。(萩原)

不幸の年と神札 不幸のあった年には、大神宮様とか、神社のお札は出けない。(親、きょうだいなど、身近かなものがなくなつた場合)

三年忌の折りにたてるのは早いほう。七年忌ぐらいでたてるのがふつう。(島野)

石塔 石塔は年忌の折りにたてるのがふつう。

無縫仏 無縫仏といふのは、よそへ行つて死んだ人、様子のわからぬ人、そのうちの大むかしの仏様、位牌のない人など。

盆棚の下にまつった。(京目)

院号の安売り 戦後昭和二十四五年頃 農地改革の影響で寺の田が少くなつて、慈眼寺の財政が苦しかつたので院号をたくさん安売りするということがあった。現在では永代院号は百万円かかる。(下森)

生れ変り 死人の背中に字を書いておいたら、ある所に生れ変った。

生れた子の背中に、その字と同じアザがあるのでわかつた。そのアザは、死人のお墓の土を持ってきて、こすると落ちるという。(一ツ谷)

年中行事

はじめに

県中央部の平坦地にあるこの地域の年中行事は、すでに老人の記憶の中に残るだけのものが多く、改廃が著しい。東毛・西毛の中間に位置しているので、それそれに共通した面を見せながら、地域の特性が表われているように思われる。目だつところをいくつかあげてみよう。

正月棚の作り方について、西横手では山からクヌギを伐って来て板に割り、何枚か連らねて繩で編んで櫛とし、年神棚を初め、カマド、便所・藏などに棚を吊るして祭る家があった。元島名では豆木を編んで棚を作ったという珍しい例もある。年の始めに神を迎えて祭る棚は土地にある材料で新しく作るべきものであつたのだろう。

正月の供え物をする箸は川端のヤナギの枝を取つて來て作った。山間部がオツカドであるハラミ箸に代るもので、マナ箸までヤナギの枝で作っていた。元旦の食事は「米のご飯にシャケそえて、ヤナギの箸でサラサラ」などという。これも土地に生える植物を利用したことであろう。

正月用品や様起物は高崎が西方にあって上りだから、高崎の市から買つて来た。前橋とは利根川を挟んで東北に隣合ひ、同じ距離なのに西方を上りとする気風があるのは、京・大阪を上方とする明治以前の感覚の名残りであろう。

正月二日にトロロ汁を作るが、家の入口にトロロ汁を塗り付けて魔

除けとした西横手の例は、食物の中に潜む靈力を信じたもの。中島では厄年子供に、便所の神に膳部を供えて下げるものを食べさせて、厄をはらつたという。まじないの奥底に信心があつたから、成り立つた行事であろう。

正月三ガ日は餅を食べない家例があり、まず年神様に供えて、四日にお棚さがしをして下げた餅から初めて食べられたといふ。また、正月には菓を食べない家例があり、七日の七草で初めて菓を食べるといふ(中島)。最初は神に供えてから、ちにその食物を食べることがで

きるとするつしみ深い氣持が昔の人には強かつたのである。

正月六日は六日年といわれるが、ここでは六日が仕事始めで、クズカキやマキゴサエに山へ行つたり、六日ダメといって、下肥えを汲み出して煙の麦にくれたりしてから、遊ぶ日であった。また、六日爪といつて、初めて爪を切る日でもあった。六日の行事はこんなにはつきりしている例は珍しい。

小正月十四日をマルメ年といい、白米の飯でムスピ(握り飯)を作り、豆木やハギ、ニワトコなどの箸を、五本から一二本もさして神棚に供える家があった(元島名)。オミタマ様に供えたものだろうが、オミタマ様に名稱はすでに忘れられていた。米の粉をこねてマユ玉を作れる時、野菜の形や木綿の花の形も作った。(八幡原)。マユ玉に養蚕の祈願ばかりでなく、野菜や木綿作りの豊産も祈られていたことがわかる。なお、マユ玉飾りのボクに対し、十四日の晩にマブシカケ・キヌカケといつてうどんを掛けて、養蚕を祈願する風もあつた。

十四日の晩は「ワルサ晩」と呼ばれ、若衆の夜遊びがてらのワルサ

(いたずら)が黙認されていたのも興味深い(元島名)。

道祖神の七所参りをする所もあった。七カ所の道祖神小屋を回ると、カゼをひかないとか、中気にならないとかいう。群馬郡西部でも聞いたことがある。以前はむろごとに松小屋を作つたから、可能だったのであろう。

元島名では十五日か二十日に柿の木の所へ行つて成本貰めをした。関家では小正月の作り物の桶を持って「ナルカナンネエカ、ナンネエト、根カラブッキルゾ」と唱えた。昔話のサルカニ合戦のカニが、柿の木を育てるしぐさの原形は、このような民俗に根ざしたものである。東毛地方に比較的よく残つた民俗である。

二十日正月はワラ正月、ワラ仕事始めて、作物をしばるヨツラ繩や肩掛け繩、馬に引かせるハヨ繩などを作つて、小黒柱に飾り付けカユカギ棒を挿んで置くが(京目など)、二十日ガユといって、小豆ガユを作る家もあつた。

二十日に年神棚を下げて、供えた餅を焼いて食べたというが、正月ジマイの行事であろう。「十日はエビス講だが、一月は商光エビス(商人のエビス講)、十二月は百姓エビスと分けているのも興味深い。

二月一日を次郎の一日(ついたち)といい、元旦を太郎の一日というの方があつた(下畠田)。

節分のヤツカガシをトボグチにさして厄除けにするが、大沢では葬儀から帰つてトボグチに入る時、このヤツカガシを振つて身を清めるという。呪物として使われたのである。

ヒナの節供の次の日をセチマ、節供カラと呼んで遊び日にしていた。祭日の翌日を休日として、祭り行事と休みを分けているのである。ヒナ人形は八日節供にしまつが、しまつ時に古いヒナ人形は川に流した。四月八日には惡病除け(虫除け)として、短冊に「千早振る卯月八日は吉日よ、髪長虫のご成敗かな」と書いて、便所・物置・勝手などの柱に貼る家がある。藤岡市上日野でも聞いたが、祈禱者が伝えた呪

いであろうか。なお、三隣亡除けの猿田彦大神の碑を屋敷の隅に立てて流行が昭和初年にあつて、どこの家でも立ててあった(大沢)。

四月十五日にオコ餅をつくが、この餅を食うと農繁期に入るので、地獄餅と呼び、秋仕事が終つた十二月十五日に油餅を、極楽餅と呼ぶのに対応している。

麦の穂が出るころの寅の日を、出穂寅と呼んで祝つたのは、多野郡

山間部の寅祭りと共通する麦の民俗として興味深い。

盆前の七日間を屋敷のカドで、麦わらを燃やす行事を七晩焼き、七晩などというが、七月一日から七日間とか、土用の七日間とか、七夕から盆迎えの十三日までの七日間とか、ムラによつて日取りが違う。

燃した灰をたたいて門に広げ、悪い病気を入れないとする家もある。

盆棚の上や下の方にマコモで編んだ敷き物を敷くことは、東毛地方にかけて多い風習である。

盆迎えをして来て家へ入る時は、縁側から直接座敷に上るので、縁側に仏の足洗い用として空のたらいを置くという。遠来の大學生を迎える気持が表われた風習である。

盆の時、野回りの行事があり、「ジイサンニ田ンボヲ見セテクル」といって、先祖の位牌をふところに入れて田んぼを一回りした。帰りに豆や芋を取つて来て盆棚へ供える家もあり、農家らしい風習である。これも東毛地方に見られる。

旧十月は神無月で、神様が白馬に乗つて出雲へ集まるが、エビス、大黒が留守居をしているという。だから留守神に供えた物を若者のが食べる、嫁・娘に行けないという。

大沢では旧十月八日(十日夜の二日前)に薬師様(中世の石仏)を祭るが、この晩は「風の子が生まれる日」なので、必ず風が吹くといふ。効驗の著しい神仏が示現する時、天候に異変が起るという信仰によるものであろう。

冬至にはユズやトウナス（カボチャ）を風呂に入れて、トウナス湯に入ると中氣にならないという。一般にはユズ湯というのに対して、トウナスを入れるのは珍しい。

屋敷祭りの時、屋敷稻荷の祠へ供え物をして帰る時、「アトヲ振りカエルナ」と注意された。そこで、仕事をやり放して反省のないこと、「屋敷祭り（ヨウダ）」「稻荷様ノヨウダ」とたとえていうのは興味深い。

年の暮になると女衆は忙しかった。十二月二十五日の暮市で布を買って来て、家事の合間を見付けて正月までに、家族の新しい着物を仕立てたのだから、その忙しさは格別だった。ここでは「師走女二盆坊主」と呼んで、忙しさを形容している。

以上、年中行事の中から目についたものを拾いあげてみた。

なお、資料の配列は川の上流から下流へと並べて、重複しながらも

地域の変化が見られるように考慮した。（関口正巳）

一月

元旦

年男 年男が若水を汲んで茶をわかし、神様に進ぜる。実際は女が炊事の用意をやり、神仏に進せるだけ年男がする家が多い。（大沢）年男は正月中を通じて朝晩の供え等神に関する一切をする役で、一家の長男である若い男子があたる。若水を汲み、その水で焚いた朝湯に入つて供え物をする。また棚づくり、元旦の年賀も仕事で、諏訪社へ参つておさこを上げ、帰りに菩提寺へも寄る。（西横手）年男はその家の長男がなる。一日の午前二時頃風呂をわかして入り身を清めたり、神様に水・雑煮などを供える。風呂に家人、仲の良い人に入つてもらう。（中島）

年男は家の主人がなる。正月三ガ日は年男が一番先に起きて、雑煮

をこしらえる（下斎田）

若水 元旦に井戸の水を手桶に汲んで、カメに入れる。この水で茶をわかして、年男が神に進ぜる。（大沢）

家の井戸に注連を張り、新調した桶或いはバケツに注連を張つた若水桶で汲む。この水で正月様にお茶を進ぜたり、朝湯を沸かす。（西横手）

年男はかぎりのしてある桶で井戸から若水を汲み、お茶をわかして神様に供えたり、雑煮を作つたりした。（中島）

年男が井戸から手桶で汲んてきて、若水で御飯をたいたり、お茶を入れたりした。若水を神仏にあげる。（下斎田）

朝湯 元日の朝、五軒の組位になって、当番の家が風呂を湧かせた。午前三時頃には湧かせて「湯が湧いたよ」とふれ歩いた。（島野）

朝湯は西横手の小字東、中、西の三地区各々一二三、四四の範囲内で当番があり、いたい家で人を呼ぶ。入る順は年男を先にする以外は特別ない。元旦だけのものである。（西横手）

朝湯は三十一日に水をくんでもいて年男が一番先に入り、近所の人、家人、女衆の順で入つた。登場までかかつたし湯もきたくなつた。

（中島）

供え物 年神様の他、門松と屋敷神様に神の鉢に入れ供える。三が日は前日上げたものの上に次々重ねてゆき、四日のお棚さがしに初めてさげる。さげたものは七日までとつておいて、七草がぬに混ぜて食べる。四日以後の供え物はその度に器を改める（西横手）

柳の箸 川端からやナギの枝を取つて来て、幕に先の方の皮をむいて箸を作る。神様に進せる食物はこの箸を使う。正月中は家の者がヤナギの箸を使う。

でつかいマナ箸もヤナギで作つて使う。（大沢）

年男になると、柳の箸を作つた。柳の木をせいろでふかすと、皮がむける。作った箸は、正月様に進ぜる。昔は、年間使う箸を作つた。

(下流)

今井家では正月三が日、柳の木の箸を使う。柳の箸はドンドン焼きに

もす。(下斎田)

縁起 子どもも大人もお金を使わないで貯蓄した。三日間清掃しないで家中にはきこんだ。(中島)

初参り 元日に鎮守八坂神社へ男衆が初参りに寄る。その後、善勝寺へ歩いて参詣した。神社へはオサゴ(米)、寺へはお金(お年玉・ご年頭)を包んで行く。

その後、内々の親戚へご年始に回った。(大沢)

お参りは榛名神社・善勝寺へ出かけた。(中島)

元旦の朝晴いうちに鎮守様にお参りに行く。神主がノリトをあげてくれる。(下斎田)

年始 一月一日には京目の各戸の主人、或いは一人前の男が全部揃って、戸別に年始参りをした。また一月一日には各戸の奥さんが戸別に年始参りをした。(京目)

年始回りは朝参り後、元旦の午前中かけて戸主が西横手村の三七戸全てを回る。何も持たず、訪問の順番もないが、それそれが自分の家を起点に左廻りに歩いた。今は戸数も七五に増え、懇意の家だけしか回らない。(西横手)

年始回りは六〇軒から七〇軒くらいあつた町内を半日くらいかかって回った。各家では戸をはずして待っていた。(中島)

昔は村中を隣保班がまとまって廻って歩いた。大きな家ではオモテザスキでおとを出した。手ぶらで「オメデトウ」と仁義を行つた。(下斎田)

家例 餅家例・ソバ家例など、家によつて違うが、三ガ日はソバ(ウドン)家例の家が多い。(大沢)

元旦には朝ソバを作り、大根を松葉切りにしてゆでたコとともに、カド松などの松飾りに進せて回る。太陽が上らないうち、早い方がご

駆走で、「ツルハ千年、カメハ万年ノ祝イ」といつて松のシンにくつけて回る。

夕方も同様に松に進せるが、遅い方がいい。(大沢)

三ガ日の朝そばを食べるのをそば家例、餅を食べるのを餅家例と言ふ。昼食は指定されないが、夕食は元旦が「米の御飯」に鮭添えて、柳の箸でサラサラ』また二日の晩、或いは三ガ日の中のいつかの晩に中

氣にならぬようにとトロロを食べる。(西横手)

正月の食事はダイコンは大黒で縁起がよい。菜類は泣くで縁起悪いので七日過ぎなければ食べない。元旦から三日までの朝食は男衆が用意した。(中島)

木暮・関根イツケは元日から三日は朝食そば。田口イツケは元日から三日は朝食にぞうに。

四日以後は関根イツケでも雑煮は食べた。(中島)

正月三が日、田口家ではオコウコと菜は食べなかつた。菜は「泣く」といってきつた。(下斎田)

今井家では正月三が日は餅は食べず、うどんを食べるエンギだつた。

暮れには餅をついておき、一月四日から食べる。三ガ日のうちに餅を食べるところができるという。(下斎田)

初詣売り 美濃半紙大の紙に七福神や招き猫などといふ、桑をもち馬に乗った養蚕の女神等を画いたものを、元旦の暗いうちに売りに来た。一枚五銭から十銭。どこから来る人達かは解らない。(その他)飾り菓子といつて小正月に蘭玉といつしょに飾るものを作りに来る人もあつた。(万歳も、大正八年頃には一人連れて来ていた。(西横手)

二 日

トロロ汁 トロロ芋をすつて、家の入口に塗り付ける。(西横手)
百姓は普通この日を仕事初めにはしない。この日の午前中、主婦が一升枡大に切ったのし餅を一枚持つて善勝寺へ参る。夕食にはとろろ

飯を食べると中気にならないと言う。(或いはこれを吃るのは三ガ日の中のいつか、という家もある。)(西横手)

初市 高崎觀音様の市へ荷車(リヤカー)を引いて行き、一年中使えた物を買つて来た。店では手ぬぐいなどをくれた。(大沢)

一月二日に玉村町で初売りがあった。(下斎田)

職人の仕事はじめ(事はじめ) 錫治屋・大工が仕事をはじめた。

農具・倉にかぎりつけをした。(中島)

三 日

大師様 前橋電海院などへお参りした。(大沢)

厄落とし 厄年の他、前厄、後厄にも川崎大師などへお参りに行く人もあつた。女の子達の羽根つき歌に言う。「お正月は三日の日、大師様のお祭りで、おばさん所へ寄つたらば、芋の煮つころがしきをつんだして、も一つおくれとゆつたらば、横目でにらんだ」或いは「お正月は三日の日、大師様のお祭りで芋煮でつん出した、蒸煮でつん出した、も一つおくれとゆつたらば目口あいてにらんだ」中島では、子が厄年になると便所の神に膳部を供え、それを下げて来て子に食べさせると聞いた。(西横手)

門付 三河万歳や獅子が回ってきた。お金やもちをやつた。(中島)

四 日

オ棚サガシ 三ガ日には年棚へ供えた物はお寺様に見せるものではないので、下げるお雑煮にして食べる(大沢)

お棚探しは四日。この日お寺様の年始が来ないうちに供えものを下げてしまう。(島野)

四日に、寺からの年始が来る前に、三ガ日の供えものをさげる。(西横手)

四日の朝、お寺の年始が来る前に正月棚の供えものを下げた。(中島)

坊さんの年始

寺から坊さんが年始に家々を回つて来る。年頭のお返しにシャモジ・マッチなどを持つてくる。年頭に行つた金額によつてお返しに差をつける。(大沢)

「善勝寺年頭」といって、お寺から年始に来た。(中島)

寺の年始は、一月四日。寺から年始がくる前に神棚の供え餅などをおろしておく。慈眼寺から坊さんが人力車に乗つてやって来た。寺の近所から頼まれた子供たちが「ダイブ・ゴネットウ」と大声で言つて来た。檀家の人たちは道路に出て、おじぎした。お札とつけ木を持つてくる。「キタンチ」と「トウメンチ」だけは院号つきの家だったので、

この二軒には寄つたが、他の家は寄らなかつた。(下斎田)

縁・婿の年始 縁の実家へ嫁・婿が年始に行く。お茶と手ぬぐいや塩ガマなどを持つて行つた。ナベカリといつて大判の餅を持って行くことは、よそ村ではしたが、大沢ではしない。(大沢)

一月四日は、初嫁の里帰り、初婿の年始という。二年質は適当なものを持って行つた。(京目)

四日は寺から、元旦の年質の返札の意で坊さんが年質に来る。先に「善勝寺おめでとう」の土産を持った子どもが報らせ、その後から坊さんのがり、各家では縁側にこざを敷いてこれを迎える。また初めて正月を迎えた新婚夫婦は、そろつて嫁の実家へ年賀に行く。

(西横手)

正月は嫁の年始で、嫁の実家へ行って御馳走を作つてきた。(中島)

嫁は一月四日で年始に行く。新婚の夫婦も四日には結婚後何年か実家へ年始に行つた。(下斎田)

鍋借り 一月四日。嫁と婿が嫁の実家にいってよばれてくる。(八幡原)

反町薬師(旧一月四日) 四才の子を反町薬師へ連れて行き、六三除けをして来た。そのころは川(利根川)を舟で渡つた。(大沢)

五　日

た。(中島)

仕事はじめにまきごさえをするので山に行つた。農家では仕事を始めた。(中島)

年始日　五日が大沢地区の年始受けの日で、親戚から年始客が来た。草競馬をしてにぎわった。(大沢)

五カソ日　五日までを五カソニチといつて正月休みで六日から仕事をに出た。(中島)

六　日

山初めはクズカキと下刈りぐらいだった。
仕事はじめは、わら仕事が主で依頼み、なわない、いつら作りであつた。ここでは歌作りはなかつた。

儀には松儀、ぬか儀といい一石入りのものと米儀四斗五升入りのものを作つた。また、儀バシ(サンダワラ)も作つた。いつもは十二本で一駄とした。(樅村)

カゴ木伐り　マユ玉木をカゴ木といい、川端の柳を伐つて来る。伐つた木は稻荷様(ウジ神様)の所に束ねて置き、小正月にマユ玉をさす。

柳の枝は苦くないという。(大沢)

六日爪　一月六日は爪を切る日であった。(八幡原)

七　日

七草ガユ　五カソ日(元日から五日まで)に神様に供えた物を下げて、七草のオジヤに入れて食べる。(大沢)

セリタタキの歌　「七草ナズナノセリタタキ唐土ノ鳥ガ鳴カナイウチニセリタタケセリタタケ」(大沢)

お正月櫻に進したものを七草がゆの中に入れて食べる。また、この日は年始受けをした。(島野)

七草第のセリだけは四日に取つておく。後で取つたのは、家に入れてもいけないという。七日の早朝、マナイタの上にセリをおき、包丁で叩く。「七草ナズナ、唐土の鳥が渡らぬ先にセリ叩けトントン」といつて叩く。(一ツ谷)

この日、六日年といつて必ず肥溜を出した。(島野)
六日溜めといい、六日に下肥えを上げ、これを以つて仕事始めとする家がある。(西横手)
六日ダメ　下肥えのタメを出して、仕事始めに畠の麦にくれる。畠が凍つていても出でてから、その日は遊ぶ。(大沢)

仕事始め　一月六日は百姓の仕事始めなのでちよつと仕事の真似をする。(下森田)
一月六日に仕事初めを行なつた。クズかき、林の下刈りなどであつ

る。七草前に菜を食うと、その年一年中泣くと言われ元旦から菜を食べる。(下森田)

食べずに来るが、これ以後食べることになる。草を切る時、「七草ナズナ、唐土の鳥が日本の土地に渡らぬうちに、くちばしたたけ、はしたたけ（西横手）、或いは——渡らぬさきに、セリたたけ（宿横手）と唱えながらまないたを包丁でたたく。（西・宿横手）

五日以前にセリ・ナズナ・スズシロ・ダイコン・ニンジン・ゴボウを「スズナ・スズシロ・セリ・ナズナ……」などの鳥とわたらぬうちにストントン七草なすなのセリたたき」と唱えながらきさんで少し米を入れオジヤを作つた。七色になるようにした。（中島）

セリ、ナズナなどをとつて、粥をつくる。「七草ナズナ、唐土の鳥が渡らぬ先に」とまな板の上で刻んだ。（下畜田）

お松ひき 七日早朝（十一日の家もあり）、松を立てた杭と松の芯だけにして取り払う。取った松などは、子ども達が造祖神の準備のために集めて回る。（西横手）

爪切り セリを茶碗の水に浸しておいて、その水をつけて爪をはぎると、一年中生爪をはがさない、けがをしない、難がないといい、おばあさんが縁側で日向ぼっこをしながら、爪を切つた。（大沢）

靈神 少林山から靈の神様を買つてくる（中島）

十一日

クワ立テ 大将軍のいる方の麦畠（お松を一本持つて行つて立て、紙のオンヘロを下げ、オサゴ・ゴマメなどを進せる。麦のサクを少しきる。（大沢）

正月の藏開きの日に、大神宮の神棚に上げたお松と供え餅を持って田んぼへ行く。お松を立てて供え物を供え、クワでサクを三サク立てた。初めてクワを持つ日である。（萩原）

一月十一日に、主人が、その年の恵方にあたるはたけへ行つて、お松をたててくる。

このとき、オサゴと、まゆ玉（だんご）をくしにさしたものあげ

てくれる。（島野）

十一日に畑に鳥がとぶ前に行つてお松をたて、オサゴを供え、作を切つてくる。この日藏開きもあつた。（元島名）

クワタテ祭りを十一日にやる。藏開きともいう。

正月様の松にオンベロをつけて恵方の畑に持つて行き、その松に、白い紙を敷いてオサゴと魚を供える。その前でサクを三サク半きる。

この日は半日仕事を休む。（西島）

一月十一日に、ゴマメとオサゴを半紙に包み、お松につけたものを、畑の恵方に向けて立てる。（西横手）

「鳥の喰かないうち（早朝）」に田に行き、恵方に松を立てて、その前にゴマメ、オサゴ、お頭付きを供える。そして、松に向かって田を三サク切り、これをもつて仕事始めとする。（西横手）

クワを一本持つて、スルメ・ゴマメ・おさこをもつて畑に行きクワでサクをきり松の木をたてて半分をオンベロにし、半分を下に敷き、その中にもつてきただものを入れ感謝する。（中島）

鐵立ては一月十一日に行なつた。畑に三さくのさくを立て、中央にオサゴとイワシを紙に包んで供えた。松飾りの松も立てた。（福町）

糸を畑に持つて、地神様に米をあげて、松をたてる。地神様は土地の神様。（下畜田）

藏開キ 大沢の年始受けの日で、日を決めて親類中が年始に来る。

藏開きには竹の先に「メケエ」（箕竹で作った目の荒い籠。芋を洗つたりする時に使う）をつけ、藏の前に立てる。竹の長く高い程、福がころがり込む。（西横手）

雑煮を作り、藏を開け祝う。田口の家では新宅・坊さんをよび酒・御馳走を食べる。（中島）

藏のある家ではこの日に藏の戸を開けて、餅を一臼ついて、供える。

（下畜田）

十三日

飾り力工 大正月のお松飾りを十二日に下げる。道祖神の子供が集めに来て、リヤカートに積んでいくので、お金をやつて頼んだ。

お松飾りの代りにマユ玉を飾る。(大沢)

十三日に山にカゴギを伐りに行く。カゴギは蘭玉を飾る木のことと、

何木といふまりはなかつたが、橋や桑が多かつた。ハナはニワトコでつくり、オッカドは使わない。カユカキ棒もつくる。ニワトコのツチを一对つくる。ツチは成木實のに使う。(元島名)

ケズリ、ハナはニワトコの枝をけずつてハナをかいて飾る。(大沢)

ラミバシ ニワトコの木も十文字に切つて、一膳にして、神様に供えるものを専門にはさんだ。(中島)

ジユウロクといって、ニワトコの長い木を一本、花に削つて、半紙に包み、水引きをかけて、オモテサスキの鶴居の上に飾つた。(八幡原)

飾り替えは十三日。この日、門松をとり、まゆ玉をさりをした。山から木をとつて来て米の粉でまゆ玉を作り、その木に刺して、部屋にかざつた。木は柳、桺、桑の木など。まゆ玉に使う木は誰れの山のものを切つて来ても文句をいわれなかつた。

まゆ玉のうち、特に大きいものを十六個作つて木にかざつた。お蚕の足が十六本あるからだという。(島野)

マユ玉 十六日に米・クズ米を粉にひいてこね、マユ玉を作る。マ

ユ玉は丸形、マユ形、野菜の形(イモ、ナス、インゲン、トウナスなど)、モメン(花びらを付けて開く形)、鳥の形などを作り、ドウブカシの中に並べてふかし、柳の枝にさす。

元旦に初絵と一緒に先りに来た飾り菓子も吊るす。

マユ玉は「十六」といい、大きなマユ形に作り、特別太く長い枝にさして座敷の真中に飾つたり、天井から吊るしたりした。十六と一緒に餅をアン餅の形に作り、枝にさして神棚の前に飾る。

マユ玉は座敷の真中に大きいボクにさして飾るのも作る。小さい枝にさしたものをお松飾りの代わりに飾る。

マユ玉は米の粉の一斗も作り、春うち焼いて食べた。(大沢)

一月十三日にまゆ玉を作り柳の木に刺して部屋にかざる。そして、

一月十六日の朝飯前に「まゆ玉かき」といって取りはずし、まゆ玉は

雜煮にして食べた。(京目)

十四日にマユ玉を作り、正月のかざりとかえて、柳かクヌギの木につけかざる。(中島)

クワネッコにマユの形十六、もちの形十六を作つてさし、座敷のマユ玉のそばにつるす。(中島)

十四日には、大正月の飾りを全てはずし、小正月のまゆ玉を飾りかかる。

正月十三日に自分の山からナラの木を切つて来て、マユダマを飾りつけた。オモテサスキの真中に飾つた。ジユウロクといつて大きくなられた。オモテサスキも一緒にナラの木にさした。(八幡原)

木綿のボウズを米の粉でこしらえて、桺の木にさして大黒柱に飾りつけた。マユダマと一緒に日、木綿がよくできるようになつた。(八幡原)

マブシカケは一月十四日の晩、キヌカケともいう。うどんをぶつて蘭玉にかける。(八幡原)

十四日

小正月 新たに餅を揚げ、白い普通の餅の他に海苔、大豆、ミカンの皮、胡麻、塩などを入れたかき餅をつくる。お棚には蘭玉を飾り、

大正月と同じ鏡餅のお供えをする。蘭玉は蘭形とただの球形とあり、

桑か柳の木にさして以前は大きな枝を一斗枠に入れて座敷にも置いた。蘭玉の他には、ながき(ニワトコの木を削つたもの)や花菓子(飾り菓子)などを先にきたのを買って、共にその枝に下げた。(西横手)

この日嫁は実家に客に行く。四日と違つて日帰りする必要はなく、ゆっくり泊まって来られた。(宿横手)

マルメドシ
一月十四日をマルメドシという。

白米をにて、むすびをつくて、お正月様（正月棚）にあげた。（京

正月十四日の夜、ご飯を器にもつてそれに薪とか二ワトコの木などとの十二センの箸をさして、神棚に供えた。これを十六センサマなどと言つていたようにも思う。家によつては、むすびを七つか八つ作つて、豆木の箸をさして供える家もあつた。オミタマサマの語はあつたが、よくわからぬ。(元島名)

正月には、道祖の御戲を重箱に入れ、クリヤ（桑の枝）を十二枚す。
特に年には、下流（下流）
道祖神焼火　昔はしたらしいが、ずっとしない。まねして小屋を作つ
でした。（大沢）
よそ村では、道祖神の七所参りをしていた。公会堂の前に道祖神像
が立っている。（大沢）

道祖神の石像は鎮守様の裏や、中宿の屋敷の隅や、カシグネ（カシの木の生け垣）の角などに、双体神像が祭られている。

子供が中心になり、正月のお飾りを集めたり、わら・竹・松の枝などをもらい集めたりして、広場に飾り立てる。半紙三枚つないで「道祖神大笑」と筆で書いて納めたりした。帳面を二冊作って家々を回り、思し召しの金をもらつた。(萩原)

十四日の夜明けに子供が「道祖神に火がつきますよ。早く起きなつせ」と呼んで回り、集めたお飾りに火をつけて燃す。家々からは餅やマユ玉、イカなど持つて行つて、その火で焼いて食う。戦後しなくなつた。(萩原)

元島名に小屋は五つできた。三ツ谷、将軍塚、中内出、西内出、新堀である。



「□祖神 元文三申年二月吉日
矢島村 反町清右衛門 反町弥
七郎」と刻銘
(都九十九一 撮影)

円錐形の小屋をつくった。小屋の中に炉をきり、甘酒をつくったり、豆腐汁を煮て食べた。そうした費用は、門松を買ひ歩いたときに家々でくれるオボシメシをあてた。子どもだけでやつたが、大人や青年も手伝つた。高二（小学校等科二年）の者が親方になり、他は子分だつた。小屋はほな一日ごろにはでき上つた。こわされたり、燃されたりはあるものもあるので、余程夜遅くまで小屋で遊んでいたが、小屋に泊ることはなかつた。

「この夜の長いにさんざべツチヨ（またはべべ、またボボ）こきやあがておきねえかよ？」などとも言つた。家で「奉納道祖神大笑」と書いて持つて行つて燃す。餅なども持つてゆく。西方では、最初の火で、道祖神様の顔を洗つてやり、その火で小屋を燃す。次のような俗信がある。

その火で餅を焼いて食べる風邪をひかない。
七トコマリ 老人が七ヵ所の小屋を廻る。中気にならないとか、か
ぜをひかないとかいった。

松の燃えくじを屋敷の上に投げあげておくと火災にあわない。(元島名)

ドンドン焼きともいう。この地区では終戦前にやめている。小屋を作るための竹や藁や繩は寄付をしてもらった。無い家では金を寄付する。正月の飾り松を子供達がリヤカーで集めて小屋を作った。

十三日の晩は道祖神宿に泊り、リヤカーで太鼓をたたいて回る。道祖神宿は村中の家で回り番でやっていた。宿ではその年には、白菜など余計に作つておいたものである。

道祖神の組は、親方(小学校高等科一年)、中頭(高等科一年)、小頭(小学校六年)の順になつている。道祖神子をいじめると災難がくるといわれて、大概のことは大目にみられた。白菜やネギをとつたり、桑の根つ子をかいなり、划分など分なことをしたものがたつた。寄付を貢う場合もキフチヨウといって、帳面に金額を書くのだが、帳面を二つ作つておいて、余計にもらうよにした。

普通「ハイガミをくれ」といって、通行人から金を貢う所が多いが、ここではそれはしなかつた。(西島)

道祖神には大将とそれ以下にわたらる男の子ばかりの子どもの組織ができる。道祖神小屋をつくる。西横手には二つ(東一、中西で一)でき、道祖神には大将とそれ以下にわたらる男の子ばかりの子どもの組織ができる。道祖神小屋をつくる。まずは材料の竹、藁、繩、松、木を集め、ビルミッド型の小屋にし、中にいろいろを掘る。中の広さは八帖一間位で子どもが一五、六人入れる。十三日の晩は子どもばかり、このいろいろで野菜の醤油汁をつくつて食べる。

十四日早朝、大将が他の子をひき連れて「どうそうじんが燃えますよ。はや夜が明けますよ」と呼ばわりながら、村を三回まわる。そして人が集まつた頃道祖神小屋に火をかける。

オミゴクといって、集まつた人達に、「子どもからみかんや駄菓子を配つた。この費用は前に子ども達が村の「毎戸」まわりをして、おはしめし。という寄付金を集めておいた中から出す。

道祖神を焼く時の煙にあたると風邪をひかないといつて、お正月様に進ぜたスルメや蘭玉、また餅などを持ち寄つて、いっしょに焼きながら食べた。松の枝の燃え残りを持ち帰つて家の屋根に上げると火災にあわないとも言ひ、繩を持って帰れば養蚕があたるとも言つた。大将が威勢のよい年は道祖神同志の喧嘩で「つなぎり」(他の道祖神小屋に行つて支えている綱を切つてしまつ)や甚しい時は火をつけてしまうこともあり、小屋の前で通行人を止めておぼしめしをせびることもあつた。そうしたことや大将制度が非難され、火事の危険もあって戦後は禁止された。(西横手)

子どもたちがタルマ・おふだ・書きそめ・わら・松などを集め土手下の広場に十三日の朝小屋を作り、十四日の夕方燃した。人を集めのに「道祖神がよく燃えますように、じいばあもみんないいで」といつ回つて歩いた。道祖神の火にあたれば厄がおちる、書きそめが燃えて高くあがれば字がうまくなる。子どものできた人や嫁さんをもらつた人は、少し多く寄附した。(中島)

人々から竹、わらを貢う集めて田の中に積み上げて、内には炉を設け回りに坐われるようになつた。親方が毎戸から寄付集めをした。その金でコンニャクのひばたき、大根と豆腐漬などを世話人の家で作つてもらい食べた。主に子供の行事であった。世話人は大人が何人かで行なつた。一月十四日の朝になると大声で「道祖神がえますよ。はや夜があけますよ」と知らせて歩くと、各家々からは「道祖神大笑」という旗を立て来て燃した。

厄落しのことはなかつた。ただ、御祝儀のあつた家ではお金を余計に取られた。

燃えるところでスルメを焼いたり、お酒を飲んだ。燃え残りの炭は拾つて壇屋根に上げて火防とした。(横町)

十四日の朝早く、田の中で火をつける。道祖神の風にあたると良い。書き初めの習字の紙が煙にのつて高くあがると字が上手になるとい

う。子供たちは前の晩からヤドをする。先立つ子供の家がヤドになつた。ヤドで寝とまりする。(下畠田)

道祖神焼きに中心になる子供たちを道祖神子どもといい、小学校二年くらいから高等科までの子で、高等科のオヤカタが指揮をとつて、松飾りを集めめた。家々を廻つて竹、お飾りの松、籠、ワラなどをもらひに行く。家々では米やお金てくれた。(八幡原)

オヤカタの家の蚕室などをヤドにした。特別に道祖神小屋をつくることはなかつた。ヤドではコンニャクのひっぱたき(味噌おでんのこと)、豆腐け、おしるこをつくつて食べた。道祖神子どもに入れないような小さい子をよんごでこちそしてやつた。コンニャクのひっぱたきは各家々に少しづつわけた。ヤドに泊る。(八幡原)

八幡原地区ではゴブチ、アラヤシ、ナカウチ、ニシグチ、クボの五カ所でやつた。たいへんは田の中であつた。十四日の朝暗いうち道祖神子どもが「道祖神をもしますよう」と村中を二回よばつて廻る。三回目は「早く起きねえと燃しちやうよう」と言う。家々では餅やスルメを持って集まる。集まつた人には神酒、お菓子などをふるまつた。(八幡原)

道祖神の風にあたれば風邪をひかない。書き初めをもつて、上までのはれば字が上手になるという。松の枝の焼けのこりを持ってかえり、それを屋根の上にほりあげておくと火難よけになる。(八幡原) 薩玉を十四日の朝、一枝とつて道祖神の時に焼いて食べると風邪をひかない。(八幡原)

七小屋まわり 一月十四日の早朝、どんどんやきをするが、その前の十三日の晩に、七小屋まいりをした。これは、その年の悪事災難をのがれるといった。自分のむらの近くの道祖神小屋を、オサゴをもつてワカイシユがまわつた。

コウチの当番の家が宿となつて、そこで豆腐汁をつくつた。それを、

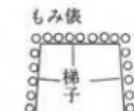
う。子供たちは前の晩からヤドをする。先立つ子供の家がヤドになつた。ヤドで寝とまりする。(下畠田)

道祖神焼きに中心になる子供たちを道祖神子どもといい、小学校二年くらいから高等科までの子で、高等科のオヤカタが指揮をとつて、松飾りを集めめた。家々を廻つて竹、お飾りの松、籠、ワラなどをもらひに行く。家々では米やお金てくれた。(八幡原)

オヤカタの家の蚕室などをヤドにした。特別に道祖神小屋をつくることはなかつた。ヤドではコンニャクのひっぱたき(味噌おでんのこと)、豆腐け、おしるこをつくつて食べた。道祖神子どもに入れないような小さい子をよんごでこちそしてやつた。コンニャクのひっぱたきは各家々に少しづつわけた。ヤドに泊る。(八幡原)

八幡原地区ではゴブチ、アラヤシ、ナカウチ、ニシグチ、クボの五カ所でやつた。たいへんは田の中であつた。十四日の朝暗いうち道祖神子どもが「道祖神をもしますよう」と村中を二回よばつて廻る。三回目は「早く起きねえと燃しちやうよう」と言う。家々では餅やスルメを持って集まる。集まつた人には神酒、お菓子などをふるまつた。(八幡原)

右のようなつくり物は、道祖神のあるところの広場につくつた。翌朝になると、村中の人がこれを見に来て楽しんだ。
ある家に掲げ立てて小屋の便所があつた。それを大正十三年までこれは統けられたが、この年の十四日の夜大地震があつて、つくり物が崩れて三間梯子が三本も折れたので、これを機会にやめてしまつたのである。(元島名)
ワカイシユはいろいろないすらをした。その中で、ガツタンというものは、長い繩の中に竹や木のかぎをつけておく。それを遠くの方からひっぱると、両戸にガターンと当つて音がする。その家の人がいやがるのを面白がつてやることだ。ある、このガツタンの仕掛けをみつけてなわの途中をはさみで切つておいた。ワカイシユはひっぱつても音がしないので行ってみると、なわははさみで切られていたのであわてて逃げ



がいせん門は、梯子をくんで、その側面及び上部でもみ俵をくりつけた。
ある家に掲げ立てて小屋の便所があつた。それを道ばたに出して商い屋にした。この時は团子屋であった。

右のようなつくり物は、道祖神のあるところの広場につくつた。翌朝になると、村中の人がこれを見に来て楽しんだ。
ある家に掲げ立てて小屋の便所があつた。それを大正十三年までこれは統けられたが、この年の十四日の夜大地震があつて、つくり物が崩れて三間梯子が三本も折れたので、これを機会にやめてしまつたのである。(元島名)
ワカイシユはいろいろないすらをした。その中で、ガツタンというものは、長い繩の中に竹や木のかぎをつけておく。それを遠くの方からひっぱると、両戸にガターンと当つて音がする。その家の人がいやがるのを面白がつてやることだ。ある、このガツタンの仕掛けをみつけてなわの途中をはさみで切つておいた。ワカイシユはひっぱつても音がしないので行ってみると、なわははさみで切られていたのであわてて逃げ

だした。そのおやじさんはワカインに「逃げねえったつていいや」といった。ワルサを承知していたからである。またミズヒキというのもあった。寒い夜、戸溝にやかんで水を注いでおくのである。するとその水が氷ってしまって、戸があかなくなる。○○さんと××さんなどは、西口中の家々の戸をあかなくしてしまった。(元島名)

十五日

小豆ガユ 小豆ガユを蓋で煮て、ケエカキ棒でかき回した。ケエカキ棒は二本を一組として水引でゆわえて神棚に供えて置く。あとで田の水口へ持つて行って立てて置く。

小豆ガユは柳の蓋で食べるが、吹いて食べるのではない。吹くと田植えに風が吹くという。小豆ガユを庭にまいり、成り木につけたりしたことは知らない。(大沢)

小豆ガユは十五日。この日のカユは吹いて食べると、田植えに風が吹くといわれている。(島野)

頭部を四つ割りにしてそこに蘭玉をはさんで正月十五日の小豆粥をかきまわし、それに紅白の水引をかけて小黒柱のところにある馬頭觀音様(これをオスティンサマという)のところに置いておく。(元島名)ニワトコの根もとを四つ割りにしてマユタマをさし、十五日ガユをかきまわす。二本作る。棒は水引き(祝い紙)をつけて、年神棚にあげておく。苗間の水口にさす。虫がつかないという。

ニワトコの木の皮をむいたのをコヤナにさしたのを覚えている。(西島)

十五日の朝食。ニワトコの木の枝に蘭玉をはさんだ棒でかゆをかき回しながら煮て、熱くても吹かずに食べる。このカユを吹くと田植えの時北風が吹く(そうすると棒の先が二寸程白くなり駄目になる)と言われた。(西横手)
カエカキ棒はアズキガユをつくる時に使う。アズキガユは吹いて食

べない。吹いて食べると田植えに風が吹く。ゆつらでカユカキ棒を柱にしばって置く。苗代の水口にたてる。(中島)

一月十五日の朝、小豆粥を粥かき棒でかき混ぜる。たくさん米粒がつけば、その年は豊作だという。粥かき棒は小黒柱に飾つておいて、苗間をつくる時、水口にさす。(八幡原)

成本責め 関氏方では、一月十五日にかざりかえにつくつたツチを持つてナリクダモノのところに行つて

「なるかなねえか、なんねえと恨からぶつきるぞ」と唱えた。佐藤家では二十日に、柿の木のところに行つて、なたをふりあげて

「なるべいか、なるべいか、なるべいといい申せ。ならぬとなたでぶつきるぞ」と唱えて傷をつけ、そこへ煮ゴワメシをぬつてきた。(元島名)

一月十五日の朝、主人が鉈を持って出で、栗、柿、桃などの木に少しひりつけ、「成るか成らぬか、成らねとぶつた伐るぞ」と言う。すると、成りものの木の向う側で、子供が「成ります成ります」と言う。成りもの

木の豊作を願つてする。(西横手)

「なるかなぬか、ならぬきやぶつたぎるぞ。はい、なりますなります」と言いながら庭などの実のなる木を打つた。(西横手)

マルメドシ 一月十五日の晩、御飯をもつた桶を五つ。それぞれに豆木をさす。(八幡原)

十六日

マユカキ 木の枝に付けたマユ玉を十六日にかいて(もいで)煮て食べることをマユネリという。マユ玉を煮て、二端ずつ神棚などに進せてから、下げるべくして食べる。みそ汁の中に入れて、雑煮のようにして食べたり、砂糖じょうゆを付けて食べたりする。色がつくのは別にかまわない。(大沢)

まゆかきは十六日。まゆ玉飾りをかたづける。まゆ玉はあとで焼いて食べる。(島野)

十六日に蘭玉を木からぬいて食べる。(西横手)

この日は、鬼の首も許される日という。(萩原)

十八日

観音様 馬を飼っていたころは、旧大類村柳谷の観音様へ馬を引いてお参りした。絵馬を受けてきて、馬屋の前へ掛けて置いた。

以前は台所の土間にウチウマヤがある農家が多くた。また、トボグチの上には鶏小屋があり、放し飼いのカシワノ鶏(色羽根)が、夕方になると「トリのはしご(繩を巻いた丸太棒)」を登って休んだ。鶏が早くあがるとあしたも天気がいいと占つた。(大沢)

馬の観音様、交代で宿ごとに大きいおわんで食べた。馬を祝う。(中島)

十八がゆ 十五日のかゆを少し余して置いたのを薄くのばし、土瓶等に入れて少しづつこはしながら家の周りを一周する。いわれは不明。(宿横手)

アズキガユは十八日までとつておいて、家の回りにかゆをまくと蓋難よけになる。ヘビが家に入つてこない。(中島)

十五日第は、十五日に母屋のまわりをまき歩く。三友氏方では、理由はわからないが、今でもやっている。唱えとなし。(元島名)

二十日

二十日正月 わら仕事始めで、ヨツラやハヨ繩を作つて台所の小黒柱に飾り付けて置く。ヨツラは稻を束ねる繩。ハヨ繩は牛馬に馬糞(マング)を引かせる繩で、水に入るの普通の繩ではすぐ切れるから、

三本よりの太繩を作る。近所から手伝いに来て、三人で調子を合わせてヨイサヨイサとなる。一年間使うので余裕を取つて作る。(使用中に切れれば伸ばして使う。(大沢)

この日は小黒柱に小さな棚を作り、おそなえ餅や灯明を上げ農業の神様をおまつりする。(この神は馬頭観世音だという話者もあつた)

また馬の「ハヨなわ」(引きびな)や「ヨツラ」を作つて小黒柱にかざる。ハヨなわは後に馬の「シログラ」にまきつけてしまつておき、田植え時に出して使つた。(京目)

一月二十日は二十日正月

この日なわをなつて、下大黒のところにしんぜた。桑をしばるなわ(ヨツラ)という。この一部分を、「下大黒にしばりつけた」を下大黒にゆわえつけ、そこへかゆかき棒をはさんだ。つかうまでそのままにしておいた。

この日が、なわ仕事のはじめという。(京目)

この日にはワラ仕事をする。桑をしばるヨツラ、肩掛けなわ、馬に馬糞をひかせるハヨなわを作つた。そして、小黒柱に飾つた。(島野)

二十日正月にはハヨナワ(マンガを引つぱる太い繩)をぶつた。三本よりなので、固定して手ぐりでやつた。ぶたない年はクワナワをなつた。繩ができるあがると、豆の餅(カキ餅)を供えた。(ツツ谷)

一名葉正月とも言い、牛馬につける繩など収穫の農具を作る。台所の小黒柱に葉の注連を張り、飾りつけをしてまつる。二十日かゆといつて、十五日と同様に豆かゆをつくる家もあつた。(西横手)

繩始めは一月二十日。馬にひかせる太い繩を三人でなつた。(八幡原)しまい正月 雑煮を作り食べ、正月道具をしまつ。(中島)

オタナサガシ 一月二十日 年神様の棚をおろした。供えた餅を焼いて食べる。(下斎田)

エビス講 一月は商人のエビス講で、農家は秋の方をおもに祝つた。座敷にメンバ板(うどんをうつ台)を出して台とする。(秋は米俵を台

とする)エビス・大黒のお宮を棚から下げる台にのせ、膳を作つて食

物を供える。赤飯や米の飯をお高盛りにする。エビス様にだけイワシ

を供える(イワシは正月に年神棚の前に下げる魚を皿に盛つて供え
る)。このイワシは節分の時に半分に切つてヤカガシにするので、三回
使えるから大きな魚を用意しておく。大黒様は魚は嫌いなので、ショ
ウガを切つて供える。「巻きアゲル」といつてのり巻きのすしや、「ソ
メコメ」といつて油揚げをつけて供える家もある。小銭も供える。

(大沢)

一月と十二月の二十日にえびす講をする。

エビス講のときには、身上をまきあげるというので、すしをつくる。
また、あせをかいて身上をあげるというので、てんぶらをあげる。こ
のほかに、カシラツキ(二匹)をあげる。お金もしんぜる。

おせんを二つにしらえてしんぜる。(萩原)

平林一家では、エビス講の時に地震があるとやりなおす。早くさげ
ろといった。(西島)

エビス様は一月二十日と十二月二十日。タネモミの入った小さな俵
を二つ作つてならべ、その上に板をのせてエビス様をまつる。また、
本もの米俵を二つならべ、その上にメンバ板を敷き、その上にエビ
ス様をまつる家もある。お高盛りに、お頭つきを供える。(島野)

一月と十二月の二十日がエビス講。エビス講のときには、棚からおろして、お勝手(茶の間)に束むき
(南むきのままの家もある)にかざる。さしきにかざるうちもある。

一月のエビス講は、商売エビスという。

十二月のエビス講は、百姓エビスという。

家によつてまつり方がちがう。

メンバ板をだして、たね俵二俵の上にのせて、その上にエビス様を

かざるうちもある。たね俵は、一年くらいの俵の入る俵で、ふつうの
米俵と同じかたちのものを小さくしたものである。毎年同じ俵をつか

つた。

供えものは、大福帳、そろばん、筆、お金、米のごはん、おかしら
つき(サンマとかイワシ、二匹)、おみきなどであった。お膳は二膳つ
くつてあげた。

くつてあげた。この日働いては、めしのもり方をすくな
く家によつては、働きに行くとき(一月)は、めしのもり方をすくな
くし、働きに行って来たとき(十二月)には、おたかもりにしたとい
う。(島野)

二十日の晩になると、お頭付き野菜の煮つけ等を塗りものの椀に入
れて進ぜる。財布にお金を入れて供えるのは、(この日働きに出る)エ
ビス大黒に金を預け、暮のエビス講の時何倍にもして帰つて来てもら
うため。(西横手)

たわらの上にめんば板や茶ぶ台をあげエビス様をかざり、お膳を用
意し、おつばやおひらに料理を入れた。てんぶらをあげ身上がさかん
になるように。子ども、ひとりものには料理を食べさせない。食べる
と縁遠くなる。(中島)

二十八日

シメエ正月 一月二十八日。円福寺の裏にノツキリ馬場があり、草

競馬をやつた。この日にはコワメシをこしらえた。(八幡原)

寒餅 二十日正月以後に餅をつき、繩につけて、外につるす。無理
に凍らせる。あとで雑煮にして食べる。(西島)

二 月

次郎の朔日

次郎の朔日 次郎の一日といつてある。(中島)
次郎の朔日は二月一日。元旦が太郎の朔日。(下斎田)

春駒 新潟からやつてきた。米・金などをやつた。(中島)

節 分(三日)

年取り 年とりと言つて、この日本當に年をとるという意識があつた。毎年曆で日をみて豆まきをする。(西横手)

豆いり 豆のいり方は一升の豆を三回に分けてよくする。半分ずつ三回めに一緒にしている。豆を一合でもやはり三回に分けている。(大沢)

豆まき いつた豆は七ツ鉢に入れて神棚に供えて置き、神棚から先に豆をまく。家中をまいてから外に出て星敷神・井戸・土藏など、棟のある所にまいて、鎮守にまいてきて終る。唱え言をいいながらまくが、三声でまく家と、五声でまく家とある。

「福ハ内・鬼ハ外、福ハ内」
「福ハ内、福ハ内・鬼ハ外、鬼ハ外」(大沢)

豆は大豆殻を燃して焰火で炒る。以前は一升程も炒た。全量を三度に分けて炒り、最後に全部一緒に再び炒る。その後までは神棚にあげておく。日が暮れたと年男が「福は内、福は内(一回)鬼は外(二回)」と言ひながら、ます正月の棚を飾った所、次に神棚、そして家の窓といふ順に豆を撒いてゆく。豆は、自分の年の数だけ井戸に入れるとまめ息災でいられると言うもあり、撒いて残ったのを年の数だけ食べる家もある。また取つておいて初雷の時にも食べる。福茶にもする。(西横手)

家中・物置・井戸・鎮守へ行つて豆をまいてくる。「福は内、福は内、鬼は外」と年男が唱えながら豆をまく。豆は年の数だけ食べるときぜにかかる。(中島)
鬼の豆 取つて置いて初雷が鳴る時に食べると、雪様の難を受けないから、鬼の豆を食べた方がよいという。
鬼の豆は自分の年の数だけ食べろという。(大沢)

節分の豆は初雷の時食べる雷が落ちないしこわくない。豆とみかんの皮をお茶の中に入れ福茶として飲む。一升マスの中に豆を入れて、神棚に供えた。(中島)

豆まきをした後、豆をおひねりにて、中に一銭入れ、身体中をなでて、三本辻に送り出す。家族が病気にかかりない。(西横手)

ヤツカガシ 豆をいる時に年取りイワシの頭と尾を切つて、ヒイラギの枝や豆木(豆の枝)の二股にさして、ツバをかけながら三回ぐらいくよく焼く。イワシの真中の部分は年男が食べることになつてゐる。(古いので済いか。)

「ナスニタカル虫ノロヲ焼ク」

「四十二色ノ耕作ニタカル虫ノロヲ焼ク」などと唱える。(大沢)

ヤツカガシはトボグチにして厄除けに置く。葬儀の時、ノベの帰リにトボグチ(入口)で塩をわりかけてお祓いをして家に入るが、ヤツカガシや一年歳を振つて厄除けをする。(大沢)

ヤツカガシはヤツコガシともいう。正月のお飾りにしたイワシの頭を二つ、ヒイラギや豆の木にさして、豆なげの豆をいる時の火でやく。キユウリの虫の口を、イネの虫の口をやくなどといって、ツバをかける。これをトボロにさしておいて、魔除けとする。(一ツ谷)

ヤツカガシはヒイラギの木の枝、または大豆の茎にイワシの頭二つを指し、節分の豆を煎りながらやく。そのとき、「シジユウハチ、ニイロク(4896)」の虫の口やき、油虫の口やき」と三回となつて、ツバを引きかける。これは後でトボロに指しておく。魔除けになる。(西島)
節分のときは、お正月様の棚の前にさげたイワシをとつておいたものを、あたまとしつばだけをきつて、ヒイラギの二又の枝にさしてやいて、とほ口にさしておくる。おはらいのお札と一緒にさした。なお、イワシは、豆の枝にさすうちもある。

豆をやくときには、虫の口をやくといながらやいた。

これをヤカガシといった。(島野)

節分の日、柊(ヒイラギ)の枝に、イワシの頭を刺し、焼いたものをトボグ子にかざる。焼く時の唱えことはおぼえていない。夜、豆をまいて年取りをし、福茶を飲み、豆を年の数だけ食べた。(島野)
お正月様の飾りとして吊してあった蝋を二つに切り、頭と尾を、先が二股に分かれた豆の木にさして、豆を炒る時共に焼く。その時、「豊作四十二色の虫の口を焼き申す、とつとつぱきひかけろ」と唱えつつ、睡をかけかけして焼く。後は家のとぶ口(入り口)の右手に差して魔よけとする。(西横手)

「豊作、四十二いろの虫の口を焼き申す」と唱えながら、二股の豆木に刺した蝋の頭には吐きかけて火にあるぶる。この日の豆を残しておいて、神棚に上げておき、初雷の時に食べる。(西横手)

イワシの頭とシッポを別々に切って、ヒイラギの枝にさし豆をいりながら、虫の名まえをいい、「つばをひっかけて四十八色の虫の口を燃く。」といつた。ヤカガシは虫がつかない。トボロヘ出る。(中島)
豆をホウロクでいって、家中マメになるようとに豆ガラでもした。イロリのふちにイワシの頭を豆の木にさして、「…の虫の口を焼き申す」とつぱきをかけながら唱える。ヤカガシはトボロにさしておく。豆は神棚を最初に、家中まく。「福は内、鬼は外、鬼は外」といながらまく。まくと戸をぐにしめる。年令の数だけ拾つて食べる。福茶を飲む。豆は少しどとておいて初雷の時に食べる。雷がこわくない。(下斎田)

初 午(午の日)

糞荷

糞田糞荷へお参りに行く人もいる。女衆が近所の村の庚申様を回つて歩き、おサゴ(散米)を供えて拝んだ。自由に回り信心したもので、新田へよく行った。(大沢)

初午は節分がすんで、初めての午の日、蘭玉を作つて、藁を逆さに



してさし、それをオハチに入れて床の間にあげた。お蚕の神様にあげるといった。(西島)

初午の日、お蚕が当るよう、「ソクジン」を作つて床の間にかざった。ソクジンはおヒツの中にワラを立て、その上に、米の粉で作つたまゆ玉を一、三個のせる。(島野)

マユ玉、米の粉でマユ玉だんごを作り、すぐつたわらをしばつて立てたメンバニ、マユ玉をもつてお蚕神様に供える。わらは蚕のマブシに見たてたもの。糊笠様は俗にその家のオカミサンのことをいう。

屋敷稻荷(ウジ神)にマユ玉とご飯を少し紙にのせて進ぜてくる。(大沢)

マユ玉のアンコヨコシを作つて食べる。アンコロ飯のよう、回りにアココをつける。(大沢)

初午の日には、わらのツツコの中にお蘭玉を入れ、それを途中でしばつて、上部のわらをおりまして蘭玉をさす。これを一升ますに入れて供えた。この日稻荷様をとくべつに祭らない。(元島名)

初午にマユ玉を作つた。榛名神社へおさこをもつておまいりに行つた。(中島)

お団子を、十二コ丸い鉢に入れ、豆木を挿して進せる。(下瀧)

初午は下斎田では現在二月十日と決めている。屋敷稻荷をまわつてからムラの稻荷様をおかんだ。赤飯と油揚げの入つたツツコをあげている。蘭玉もあげる。農仕事は休む。(下斎田)

コト八日(八日)

オコト始メ メケエを竿の先に吊るして庭に立た。メケエは上に

向けて立て入って来るのを待つ。(大沢)

コト八日にヒイラギをかごの中に入れたり、かまも用意したりして、

竹にかごをつけて庭の植木にたてておく。九日の朝早く起きると金が

ひろえる。(中島)

針供養 豆腐をさいの目に切って、針を豆腐にさし、この日は針を

休めたり使つたりしない。お菓子などを神様に供えた。(中島)

二月八日には、お針をする子供たちが、豆腐に針をさして供養した。

(下畠田)

出力ワリ日 二月八日は奉公人がゆっくり休める日。もとは百姓番

頭や作男が多くいた。(大沢)

子守と作番頭は二月八日がきりかえの時、「守つ子はらくのよつでつらいもの、西風吹いても宿はない。早く二月八日が来ればよい」という歌があった。再契約の場合、四日間暇が出る。その間は仕事を休んでいられるのである。子守の賃金は年間契約で三円、一人前の作番頭が十五円であった。明治末から大正の始めころまでの話。(西横手)

デガワリは二日で奉公人が実家に帰つた。(中島)

機 神(十日過ぎ)

二月中に機神という休み日がある。大体十五日前で、十日から十五

日の間。伍長が集まって日をきめる。女衆の慰安である。昔は相撲を織つて、五、十の高崎の市に持つていったのでその慰安である。どんなことをするかといふと、青年団が主催して寄付を募り、大きな家を借りてそこで余興をやる。落語とか浪波節などの演芸を中心であった。(元島名)

天神講(二十四日)

天神様 勉強の神様、子供が回り番の宿に夜集まつて、すし・ぱた餅などの馳走を食べた。習字はしないが、余興をして遊んだ。祥む

掛軸などなかつた。筆や石筆を納めた。天神様の石宮は八坂神社の裏

にある。(大沢)

神社に天神様があつて、字がうまくなるようにと筆を子どもたちが

納めてくる。書く字は「天満天神宮」である。(中島)

三 月

ヒナの節供(三日)

雑市 玉村、高崎に市が立ち、そこへ雑を賣いにゆく。すわりびな

という、お河童頭に袴を着てすわつてゐる二十・三十センチ程の高さ

の人形を、女の子の初節供の贈り物用に、また養蚕祈願用に毎年買つ。

(西横手)

ヒナ祭 子供が生まれて初節供には親戚からヒナ人形をもらう。二月二十八日にはヒナ人形を出して座敷に飾る。(しまうのは三月八日)

白・赤・青(草)の餅をついて、アンビン餅にしたり、ヒシ餅にして供える。ヒシ餅は赤・白で重ね、初嫁が持つて里帰りをする。

人形を貰つたお返しにはヒシ餅やアラレをやつたが、最近は折り葉

子になつた。(大沢)

二月二十八日に雑を出して飾りつける。雑壇の上方には立ち雑(上

等のもの)を、下方にすわり雑をある限り全て並べる。汚損していくても雑様を飾つてやらぬと泣くと言われ、古いものは雑をしまう日に川に流した。供え物には紅白草色の三色の菱餅をし、そのもの上にはころびかけた梅のつぼみを挿す。他に海苔巻、いなりすしを作る。この日は嫁に行つた子も帰つてくる。また初節供の娘がいる場合は親戚中から誰をもらい、お返しには紅白のあんころ餅を十五、或いは二十という奇数個ずつ配る。雑は八日節供といって八日はしまう。(西横

ヒナの節供の御馳走は白酒・桃の花・すし・ひしもち・あられを供えた。子どもたちは人形をもちゃつたり、食べものをもって集まつた。二月下旬にヒナ人形を出し、八日節供にしまつ。初節供の家は、もつと早くかざる。嫁の実家がくる。節供返しは、白酒・さくらもちであつ

た。(中島)
ヒナ節供は三月三日。玉村町にヒナ市が出るので、そこでヒナ人形を購入する。菱餅とおしをつくる。古いヒナ人形は川に流した。節

供がえしには桜餅をした。(下原田)
セチマ せつくがらと同じ。節供の次の日の休日。盆がらは、十七

日。「がらがらやるべえじやねえか」雨つぶり正月やるべえじやねえか」といつて、呼びかけて休みにした。(下池)

五節供 一月四日——嫁、婿は嫁の里へ年始に行く。この日は婿の年始で、五節供のはじまりという。年頭もんをして行く。

三月三日の節供——菱餅（紅白二枚）をつくって持つて行く。
五月の節供——こわめしと、たらのひらき（二枚）を持って行く。

八朔の節供——九月一日 シミウカの節供といってシミウカと
つつみがね（「御祝」と書いていく。嫁の親にやる）をもつていく。
つつみがねは、嫁の親へ贈る物で、うどん、うどん餅など。

八朔のときのおかえしはみけえ 八朔の時以外は おかえしなし
お歳暮：さけをもっていく。親の生きているうちはもって行くもの
だという。

五節供のときには、親のところへはちゃんとつけとどけをするもん
だといわれた。（萩原）

春 祭（十五日）

鎮守様 祭りが各地で始まる。(大沢)

鎮守様 祭りが各地で始まる。
八幡宮の春祭りは三月十五日、秋祭りは十月十五日、年二回祭る。
もとは神主が来て十一月二十三日の新嘗祭・屋敷祭りと重複して祭
り、年三回も祭った。田地七反もあって年貢米が手に入った。(萩原)

中日 中日が春祭りだったので、餅をついて祝った。「彼岸の七所奉り」は聞かない。「道祖神の七所参り」とは言われたが。(大沢)
天道念仏 この村に寮が二つある。東の寮はもと三友寮といい、西の寮は関の寮だった。春は西の寮で、秋は東の寮で天道念仏を行つた。日の出から日入りまで、ただ南無阿弥陀仏を唱え、鐘を叩いていた。けである。村の人は供えものをおもお賽銭をあげる。供えものは子どもが貰っていく。(元島鳥)
天道念仏と云つて彼岸の中日に寮(今の公民館のところにあった)で念仏を申しした。村の女の年寄りが、各自食物を持ち寄りで「一日過」た。(一ツ谷)
入りの前(十五、六日)に墓掃除し、はたもちら、彼岸団子を半紙に入れた。(一ツ谷)

網笠様(二十三日)

字符軍隊だけで行なう行事。二月一十三日。村の女衆が煮しめを持ち寄せて綱笠様の石宮の前で行う。農事実行組合からの寄付もあり、非農家の人も加わって盛大である。その時「綱笠様」の和讃を唱える。

中日 中日が春祭りだったので、餅をついて祝った。「彼岸の七所参詣」

彼岸(二十一日—十七日)

中日 中日が春祭りだったので、餅をついて祝った。「彼岸の七所参り」は聞かない。「道祖神の七所参り」とは言われたが。(大沢)
天道念仏 この村に寮が二つある。東の寮はもと三友寮といい、西の寮は関の寮だった。春は西の寮で、秋は東の寮で天道念仏を行つた。日の出から日の入りまで、たゞ南無阿彌陀仏を唱え、鐘を叩いているだけである。村人は供えものをもちお賽銭をあげる。供えものは子どもが黄色いくる。なお西の寮の観音様は、高崎の清水観音の姉さんだといつてゐる。(元島名)
天道念仏 といって彼岸の中日に寮(今の公民館のところにあった)で念仏を申しした。村の女の年寄りが、各自食物を持ち寄りで一日過した。(一ツ谷)
入りの前(十五、六日)に墓掃除し、はたもち、彼岸団子を半紙に

十五日は諏訪神社の春祭である。祭當番（六軒位）が神主との連絡を取り、十四日の宵待ちは村中出てのぼりを立てた。十五日には太鼓太鼓で「ばかっばやし」があつた。（西横手）
太鼓（方張りの太鼓）を三回打つ。（西横手）

包んで行って二つずつ位墓石の前に供えた。

中日には仕事を休んで高崎などへ遊びに出かけた。

はしり口は、彼岸の最後の日で、墓まで先祖を送つてゆく。(西横手)

春彼岸は墓参りに行く。寺で麦湯を作つてくれた。だんごを作つて食べたり墓に供えた。(中島)

彼岸に米の粉でつくった団子と水を墓にもつていく。墓に持つてい

く団子はゆでる前に、少し指で押す。彼岸の頃は天候が不順なので「くされ彼岸」という。彼岸中日にはオハギをつくつて仏壇にあげた。(下斎田)

施餓鬼(三十日)

善勝寺の施餓鬼は三月三十日に坊さん一〇人ほど集まって開催される。檀家は二八〇戸ほどあり、護持会費一五〇〇円を集金、塔婆を作り、すし折を付けて参会者に配る。家の先祖を供養するためである。

二年には戦没者慰霊祭をする。

萩原から井田家ら八戸が檀家である。(萩原)

四月

花祭(八日)

お祝達様 四月八日に家で餅をついて、食い祭りをする。甘茶は作らない。

前橋市上新田の雷電神社の神楽を見に子供を連れて行つた。(大沢)

花祭に慈眼寺へお参りに行くと甘茶をくれた。(中島)

四月八日にはオシャカサマをビシャモソ様の前にかざる。(西島)

オシャカサマの誕生日は四月八日。餅をついて農休みにした。慈眼寺のオシャカサマに甘酒をかけてくる。(下斎田)

卯月八日 新暦で四月八日には、短冊に千早振る卯月八日は吉日よ

髪長虫のご成敗かな

と書いて、便所、物置、勝手の柱、馬屋などにはる。悪(厄)病よけになる。右は虫のわくところ全部にはるともいう。草餅をついて食べる。(元島名)

地獄餅(十五日)

お蚕餅 十五日に餅をつくが、この餅を食うと忙しくなるので、地獄餅と呼んだ。(大沢)

地獄餅は四月十五日、油が光れる十二月十五日の油餅(極楽餅)に対してこれから仕事だという意味でこう言う。餅を親類に配つた。(西横手)

一名「おこもち」とも言つた。大事餅の意。(宿横手)

地獄餅は四月十五日に揚ぐ餅。これを食うと蚕が始まる。普通の餅で、極楽餅というはない。(下池)

権名山(十五日)

七人一組で代参が出て、権名山にお参りする。一度よしたら電書になつたので、再び続行している。(大沢)

社久司様(十六日)

上宿でまつる。耳の神様で底ぬけの杓を上げる。「神体は白竜」白蛇の七、八cmもあるのが居た。ネズミがうんといつて困る時「社久司様を頼め」と言い、おがみに行つた。これは合併しない。(萩原)

五 月

八十八夜（二日）

八十八夜ノ別レ霜 餅をついて家だけで祝う。

女衆があちこちのお蚕神様（網笠様）参りをして来る。上川瀬佐鳥（前橋市）の荒神様には蚕具の市が立つ。上新田の雷電神社からワラジを借りて来たり、多野郡新町於菊荷から白狐を借りて来たりして、次ぐ

年二つにしてなす。女衆がオシカで（公然と）出かけられる。（大沢）

八十八夜にはしょくしん（蘭玉やつみっこをこしあんの鍋に入れて煮椀などによそつて食す）を食べた。（西横手）

八十八夜には餅をついた。八十八夜の別れ霜といい、八十八夜をすがれは霜はおりない。春づがでる頃でもある。（下畜田）

五日の節供（五日）

ショウブ 四日にショウブやヨモギを軒にさして、蛇が入らないようになした。厄病除けにショウブ湯に入ったり、徳利に酒を入れてショウブをさしたショウブ酒を飲んだ。（大沢）

初婚はタラの干物を持って、嫁の実家へお客に行く。（大沢）

ショウブを軒下にさげたり、風呂の中に入れたり。ショウブを盆の中にきざんで入れて「ショウブ酒」を飲んだ。こうすると虫にさされないという。（島野）

五月四日の夕方、ヨモギと菖蒲で家の軒をふいた。こうすると虫除けになり、ムカデや蛇が家に入って来ない。（宿横手）

こいのぼり こいのぼりや雑巾様、武者絵をかいた幟を前庭に立てた。初節供の年は贈答があるが、幟は嫁の実家が最も立派なもの贈つた。

五日の節供（五日）

端午の節供に吹き流しのこいは嫁の実家からもった。ほかに親戚からもいのぼりをもらつた。赤飯を食べた。お返しに柏餅・タラをやつた。初節供の家は五月下旬からさり八日節供にしまつた。（中島）のを、門柱の右側の方に貼ることもある。（西横手）

端午の節供に吹き流しのこいは嫁の実家からもつた。ほかに親戚からもいのぼりをもらつた。赤飯を食べた。お返しに柏餅・タラをやつた。初節供の家は五月下旬からさり八日節供にしまつた。（中島）

四日の晩ヨモギ・ショウブを神棚に供えたり、家ののき先に三本ずつぐしにさした。（ヘビやムカデが家に入つてこないよう）。ショウブを入れた風呂をたたると中気にならない。（中島）

五月節供は五月五日。男の節供、菖蒲の節供という。嫁の実家ではのぼりを贈る。上の紋が嫁家、下の紋が実家。ヨモギと菖蒲を軒先にさした。菖蒲は劍のよつた形なので魔除けになるという。菖蒲湯に入ると中気にならない。菖蒲を頭にまくと、頭痛がしない。菖蒲酒を飲むと、蛇やムカデにかじられない。（下畜田）

五月節供にタラの干物を持っていく。（下畜田）

長虫よけにヨモギと菖蒲を軒先にさした。菖蒲湯に入ると虫にさされない。頭に菖蒲をまくと頭痛がなくなる。（八幡原）

八日節供（八日）

八日節供 五月八日に節供道具をしまう。（中島）

六月

出穂寅（寅の日）

出穂寅 麦の穂の出る寅の日を出穂寅といった。この日は遊んだり、ゆでまんじゅうを作った。（権町）
出穂寅とは穂の出る頃の寅の日の意で、区長が触れて歩いて農を休んだ。（宿横手）

田植え（下旬）

田植え 六月三十日前後の頃から七月十日前後の間に田植えをする。七月四、五日頃がさかんである。（中島）
オサナブリ 赤飯をたく。御馳走を作つて食べる。（中島）
田植え休み 二日間休んだ。第一日はヨイマチといい、半日休み、八丁ジメともいつた。二日目は、新小麦の粉でウデマンジュウを作り、娘は、これを持つて実家にお客に行つた。小遣いは一円か五〇銭ぐらいもらえた。（中島）

七月

半夏（二日ごろ）

半夏 「半夏に田植えをするな」という。それまでに田植えは終る。（大沢）
昔、半夏様が野まわりをしていて、片足を田に、片足をオカにしてたおれ死んだのを供養するために、半夏には田植えをしない。もし

天王様（十四、五日）

天王様 天王様は、七月十四日、お産の神様である藤井の浅間神社にお参りする。（西横手）
七月十五日は八坂神社に神主が来て拝む。以前は轍もたくさん立て、山海の幸なども供えたが、今は廃れた。（宿横手）
七月十五日は西横手の浅間様の祭り。安産の神様で、ロウソクをあげておがみ、それを下げて来て、お産の時までとつておく。産氣づくと、このロウソクをともし、これがともし終るまでに必ず産まれると

忘れてしまつて半夏に田植えをしてしまつたら、一年続けて半夏の日に田植えをし、三年目に餅をついてあげるものだという。（八幡原）
半夏は忙しい人であるという。半夏の日に田植えをしてはいけないとどうしてもやらねばならぬ場合、前日に何本でも植えておけばよいともいう。また、半夏の田植えは、寺のをやる。（西島）

農休み（十四、十五日）

以前は盆が七月十四、五日で農休みが八月十四、五日だったが、今は反対になつた。

農休みにはうでまんじゅうを作る。（大沢）

農休みは七月八日、八丁注連の日半日と、続く九、十日一日間を仕事の休みとし、うで饅頭など作つた。娘達は浴衣を新調してもらって高崎などへ遊びに出掛けた。（西横手）
日どりは西横手、宿横手、中島村の区長が話し合つて決めたが、田植え後の七月七、八日頃になる事が多かつた。以前は、ならい芝居（素人芝居）などもあった。（宿横手）昔は区長が、村の田植えが終つたところで告げを出して農休みを行なつた。
現在はいろいろの都合で東京盆に合せて行なつてゐる。休みに働く人のことを「のめし者の節供働き」という。（中島）

いう。(西横手)

十五日に天王様を神主が拝み、花を供える。(中島)

八丁ジメ（上旬）

八丁ジメ 農休みの前に、長尾神主から八丁ジメの札をもらって来て、村境の道ばたに立てる。

けんかをするとき、八丁ジメの中に入れるといわれた。(萩原)

八丁じめといつて、田植え後の農休みに竹の先に幣束を下げたもの

を村境に立てた。(京目)

八丁じめは七月十日にやることにきまっていた。お札を村の出口に立てた。四ヵ所ぐらいたてた。区長さんの仕事であるが、お札は不動寺の留守番をしている人が作ってくれた。この人は素人であつたが、村の人々に字を教えた。この札をみると農休みがくると感じたものである。

この日の朝、地蔵様の子どもたちが百万遍をやつた。サルマタ一つで、ハチマキをして、「ナムアミダブツ」を唱えて、数珠を三回り回して出ていく。学校に行く前だから、さあと来て、さあと帰った。百万遍は昔からやっていたが、終戦後やめた。数珠は、桐の木の珠に

ハリガネを通したものであったが、今は無い。(ツツ谷)

八丁じめは一米ぐらいの、枝のついた細い竹の竿に、お札をつけて村境に立てる。七月二十四日にやる。お札はオントケサンが書いてくれる。(西島)

農休みに、八丁じめをした。八丁じめの中にばかりいて、よそのことを知らねえと、八丁じめの外に出られねえぞといわれた。(下流)

神主からオンベロをもらい竹にさげ村はそれに八丁じめをたてた。魔除け。(中島)

七月二十四日に神主におがんでもらつた、へいそくを村の境に立てた。村の病気の進入を防ぐためだった。八丁じめという。

「そんなことでは八丁ジメをくぐつて行けないぞ」といわれ、一人前になれといわれた。(根町)

農休み前に村境へ一本の竹をさして注連をはつた。「八丁注連を越えて来るたら氣をつけて口を開け」といった。厄病神が村に入つて来ないように八丁注連をはつた。柴崎の進雄神社から神主が来ててくれる。(下畜田)

地蔵様（七月二十四日—八月二十四日）

地蔵様子供 京目では七月二十四日から八月二十四日まで、地蔵様子供

イキミタマ（七月不定日）

土用干し（上旬）

土用干し 女衆が衣類の土用干しをする。(萩原)

土用念仏 八幡原のアラヤシキコウチでは一二軒の一軒ごとにまわって、土用念仏をした。昔は土用の入から十二日やつたが、現在は一軒に集まって一晩ですませている。(八幡原)

る、新しい嫁・婿に着物を買って里の親の所へお客様にやる。お金がかかるので悩んだ。(大沢)

生きばん(イキミタマ) 農休みのころ、盆の前、初嫁が夫婦そろつて、嫁の里へ行く。むかしは、うどんとか米など、「馳走の材料をもって行って、里で道具などを借りてご馳走をつくつて、近親者とか隣組の人を招待した。ご馳走は、それぞれの家によつてちがつた。うどんとかすしなど、今はお金をもつていて、ご馳走をだしている。

もらい方では、嫁に、新しい着物(夏物の上等のもの、絹とか紗)、いっそうようといって、一見用とか、よそいきのもの、長じゅばんとか、着物、帯など、その家の财力に応じてつくつてやつた)をつくつてやつた。

このとき招待する人は、隣組の人、きょうだいとか、おじ、おば本家新宅の人などの近親者。

この行事は、嫁が実家とのおわかれの盆といふ。それをすませてから、とつぎ先の人間になるのだという。(京目)

イキミタマといつて盆中、婿と嫁とがうどんなどを持って嫁の実家に参る。そして酒盛りをし会食をする。また、「これは婿のみやげ、これは嫁のみやげ」といつて両人が用意してきたみやげ物を差し出す。嫁の実家ではこの時、婿には背広服、嫁には黒無垢の着物を贈る。(島野)

生き盆は盆の十四日、嫁の実家にソウメンと酒をもつて嫁婿の二人が行く。嫁の実家では親戚の人も集まつて御馳走をした。昭和の初め頃までやつていた。(八幡原)

七晩焼き(七日—十三日)

七晩焼き 七夕の晩から十三日にお盆を迎えるまで七日間、屋敷の入口のカドで麦わらの束を立ててたき火をする。燃した灰をわるい病気が入らぬように、何か唱えながら広げて置く。その火で何か焼いて

かるので悩んだ。(大沢)

生きばん(イキミタマ) 農休みのころ、盆の前、初嫁が夫婦そろつて、嫁の里へ行く。むかしは、うどんとか米など、「馳走の材料をもって行って、里で道具などを借りてご馳走をつくつて、近親者とか隣組の人を招待した。ご馳走は、それぞれの家によつてちがつた。うどんとかすしなど、今はお金をもつていて、ご馳走をだしている。

もらい方では、嫁に、新しい着物(夏物の上等のもの、絹とか紗)、いっそうようといって、一見用とか、よそいきのもの、長じゅばんとか、着物、帯など、その家の财力に応じてつくつてやつた)をつくつてやつた。

このとき招待する人は、隣組の人、きょうだいとか、おじ、おば本家新宅の人などの近親者。

この行事は、嫁が実家とのおわかれの盆といふ。それをすませてから、とつぎ先の人間になるのだという。(京目)

イキミタマといつて盆中、婿と嫁とがうどんなどを持って嫁の実家に参る。そして酒盛りをし会食をする。また、「これは婿のみやげ、これは嫁のみやげ」といつて両人が用意してきたみやげ物を差し出す。嫁の実家ではこの時、婿には背広服、嫁には黒無垢の着物を贈る。(島野)

生き盆は盆の十四日、嫁の実家にソウメンと酒をもつて嫁婿の二人が行く。嫁の実家では親戚の人も集まつて御馳走をした。昭和の初め頃までやつていた。(八幡原)

食べることはしない。(大沢)

その火で桑の葉を焼いて食べたこともあるが、唱え言は知らない。

(萩原)

七パンゲは土用に入つて七日間、家の入口で小麦わらを燃やす。唱え言とは別はない。この時、桑の葉を焼いて食べたことがある。(島野)

七晩焼きは土用にやつた。ムギわらの束を、かど口で燃した。やつたのは子どもたち。夏の土用の入り口から七晩やいた。

七晩やきをするときの唱え言とはとくにない。(島野)

七晩焼きはケエドで小麦葉を焼く。七夕から盆につなげた。迎え盆以外はいかなかつた。(一ツ谷)

かつては七夕から、迎え盆まで、カイドウで迎え火(七晩焼き)をたいた。(西島)

七晩焼きは土用入りから七日間、夕方葉をケードで燃やした。この火で葱を焼いて食つて疫病にかからぬ。七晩焼きは、厄病除けのために行なう。(西横手)

七晩焼きは土用入りの晩を初日として以後七日間、小麦葉を束ねたものを家の門口で焚き、灰を道いっぱいに広げて、疫病よけとする。

子どもはその時、葱や桑を焼いてもんで食べる。(西横手)

村の入り口におうめ(八丁じめ)を張つた。(宿横手)

土用に門で麦わらを焼く、これを七晩焼きといつた。その時桑の葉をその火で焼いて食べた。なお、灰で家の門にうせんぼうといつてまいておいた。(複町)

土用の入りから七日、かどで火をたいて、その灰を、かいどうにまく。七晩焼きは、幾日やるんだい」と、聞いた人がある。(下滝)

ろーか所でもやす。夕方、子供たちがやる。灰は煙に片づける。大正末までやつていた。(下滝)

七晩焼きは七月一日から七日間、麦ガラをもやす。（八幡原）

八月

カマノクチアキ（一日）

まんじゅう　ふかしまんじゅう・うでまんじゅうを作つて、おいしく食べる。

焼き餅は余計に食つてしまつので、あまり作らない。「一升シリヤキ」といつてシリヤキは一人で一升の粉を食べるという。

昔は何かの時に、食べる物によつて働く張り合いがあつた。（大沢）
地獄の釜　八月一日は地獄の釜のふたあけといつて、ゆでまんじゅうをこしらえる。

この日からお盆までの間に亡くなつた人には、その頭に摺鉢をかぶせて葬つてやる。

七年位前に亡くなつた人にかぶせてやつた。また、昭和三十四年八月十三日に亡くなつた人（話者の家族）にもかぶせてやつた。盆に家に帰つて行くほかの仏たちに「おれたちは帰るのに、お前はなぜ行く」といて頭を叩かれても痛くないようになつた。（京目）

地獄の釜のふたの口あけといつてまんじゅうを作つた。（西島）

八朔を釜の口あきといつた。ネブタ（合歛木）の木の下で釜を洗う。ネブタの葉を川の水に漂らして、眼を洗うと、眼病にからならない。（西横手）

お盆月（八月）の一日。地獄の釜の口が開いて、先祖がこの世へ帰つてくる旅にのほる。この日まんじゅうなど作つて供えるが、遊びはない。（宿横手）

カマの口あけは七月一日。地獄のカマのフタがあいて仏様が来る。

仕事を休んで遊んだ。ウデマンジュウをこしらえた。（下斎田）
盆は七月だが、釜の口あけは八月一日。棺のふたがあく日だといい、仏様がくる日。（八幡原）

七夕　夕（七日）

七夕飾り　色紙で短冊を作り新竹に下げる庭先に立てる。特別には何も供えない。（大沢）



七夕かざり（元島名）
(都丸十九一撮影)

七夕飾りを作つて、縁側へ出し、七夕様に供えた。

七夕飾りは夕方川へ流した。
ネブタの葉を取つて眼をこすると、眼病にならないといつた。
七夕にメズラ 煙へ入るなどか、川で水を浴びろとかいわぬ。（萩原）

七夕の飾りは、利根川、井野川などに流した。特に水浴びをすることはなかつた。（西島）

六日の午後、その年の竹を取つて来て、願を書いた短冊などをさげる。

茄子、胡瓜、炭酸鏡頭などを供え、七日の夕方にはその竹を利根川に流す。（宿横手）

田口イツケでは七夕をかざつたり、かざらなかつたり、関根イツケ

粉をこねて竹に付けて飾つた。（最近は竹が枯れてないので飾らない）
い）。うどん粉をこねてあんこを入れてうで飾らな

はかかる。朝は赤飯・まんじゅうを作つて食べる。トウモロコシ・カボチャ・ナス・キユウリなどをとつてくる。川に行つて水を七回あびる。七日の晩七夕竹は淹川・利根川に流す。(中島)

水あび　七夕の日には雨が降つた方がよい。また、この日は一日、ササゲ烟に入つてはいけない。また、七回水あびをした。天狗岩用水や淹川、また利根川などでおよいだ。利根川でおよけるようになれば一人前であった。また、ネムの葉を水に浸して、それで顔を洗うと眠くなくなるといわれている。(京目)

七夕の日は、七回水あびをすることになつてゐた。淹川や利根川で泳いだ。また、朝、ネムの葉で顔をこするとなむけがさめるといわれていた。また、短冊に近所の川の名を書いて笹竹にさげた。また、この日に雨が降ると「七夕だから雨がふる」といったのを昔、聞いたことがある。(島野)

七夕には七回水浴びをしろという。ネブタで顔を洗うと早起きになる。この日に女人が髪を洗うと、よく落ちるという。(一ツ谷)

七月六日夕方　新竹を切つてきて、短冊を飾りつける。七夕には水浴びにいて七回あびる七日の朝顔を洗う時にネムの木の葉で洗つた。ネムの木は竹の根元に繩でしばりつける。新しい着物をつくつたりした家では竹にユカタをひっかけたりする家もあつた。御馳走はウデマンジュウ。子供たちが川に流す。(下斎田)

墓掃除　盆前にする。水立てを新竹でこしらえる。(下斎田)

盆

七月十三日—十六日
八月二十三日—二十六日

盆の日取り　以前はこの辺は七月にお盆をした。初秋収穫との関係であつた。一時、八月の十日遅れでやつたが、今では普通八月十三日—十六日になつた。蚕を飼う家がなくなつたからである。昭和四十八年から普通にやるようになった。(西島)

盆の日取りは八月二十三日から二十六日までです。(中島)
昭和初期は八月十三日からだつたが秋ゴガがかたづかないので十日遅れにした。そして一時七月二十三日になつたが、伝染病が流行したので、今の七月十三日になつた。(八幡原)

盆棚　組立式の棚を組んで、四本の柱に新竹を付け、盆花(生花)を飾る。チガヤの繩を張り回し杉の葉やホウズキ・オンベロなどを下げる。盆様が竹やブと杉森の中へ家を作つた所へ来るから竹や杉の葉を飾るのだといいう。

台には新しい盆ござを敷く。以前はマコモを手ガヤの繩で編んで敷き物を作り、盆ござの上に棚いっぱいに敷いた。

盆棚には一段上に仏壇から出した位牌を並べ、後の繩に仏画の掛軸を掛けれる。盆様が竹やブと杉森の中へ家を作つた所へ来るから竹や杉の葉を飾るのだといいう。

前に野菜・果物・盆花(造花)・ほた餅・水や線香・行燈などを供える。

ナスの馬を作り、生うどんを馬のハヅナとして背に付けて供えて置く。

水はコップに入れて供える。

食物は朝・昼・夕飯とも三度二度新しい物を作つて、そのつど供える。

盆の回りはしない。(大沢)

盆棚は新竹四本で作る。マコモの繩をなつてそれに杉の葉をさげる。盆ゴザの上にマコモで網をつくつてのせる。この網や杉の葉は送り盆の時に持つていて燃す。ウドンを三本位、生のものを供えるが、これも送り盆に持つていく。

盆棚は、竹がなくなつてから簡単になつた。数年前竹の花が咲いてから、竹がなくなつた。(西島)

盆棚にはマコモのゴザ、マコモの繩を使用する。杉の葉とうどんの生のものを下げる。うどんは送り盆の時の土産のショイ繩になるとい

う。送り盆には、ナス、インゲンを里芋の葉に乗せて送る。

島では新盆の場合、棚を別に作る。(一ツ谷)

盆棚には新しい竹を使用する。(一ツ谷)

盆棚は「若竹の四本柱に一本の注連を張った棚を」十三日前中につくつて、家の中央の座敷の隅(家は普通南向きなので東の隅)に据える。注連は茅を干して繩にない。一本は棚の高さ、一本は上方。目通りのところに張る。上下とも、一間に四本ずつ杉の葉を垂らす。これに家で取れた野菜や、茄子胡瓜に桑の枝の足、玉蜀黍の毛の尾をつけた馬を供える。仏壇からは位牌を出して来るだけで、それ自体は何もしない。(宿横敷)

チガヤのなわでマコモの小さい三尺×四尺ぐらいのござを作り盆棚のしききにする。その棚の下には、それよりも小さいマコモのござをしいた。これは無縁仏のものだといわれていた。(中島)

盆棚は新しい竹の葉のついている竹を四本四角に立てて、マクモをござのようあみ、その回りをチガヤにしつけた。チガヤにうどんをかけ馬をナスで作り、うどんが繩の代りをした。(中島)

盆棚のチガヤは左よりによってつくる。新盆の場合は棚の真中にしきりを入れて飾る。(八幡原)

盆棚の柱の竹にマコモを編んで敷き物を作り、盆棚の上に敷いて、その上に位牌を乗せたが、今は作る家が少ない。(萩原)

以前はマコモを探ってきて、盆ゴザを編んで作った。盆棚の広さいっぽいに作つたが、最近では前の部分の供えものをする所だけゴザを敷くようになつた。また、盆棚を作らないで仏壇で盆を済ます家が多くなつた。(島野)

新盆の場合、以前は盆棚を別に作つたが、次第に一つの盆棚を半々に分けて使うようになった。(島野)

盆ゴザをマコモでつくる。(下原田)

盆花は農協で、造花を斡旋してくれる。また自分の家でつくる。(西島)

盆花は家にあるものを使用する。特にとりにいくことはない。(一ツ谷)

同じように新盆の棚もつくり、大きなチヨウチンを吊し、棚には新しいマコモのゴザを敷いた。お盆様は寺に迎えに行き、特別の納金もした。(矢島)

新盆手にはしないが、近親者が寄つて野菜を供え、家ではばたもちなどで接待した。盆提灯はその家で調べ、血筋の近い者が墓まで持つて行って納める。(宿横手)

新盆に善勝寺へぞうりをもつて行くと、寺で来て拝む。盆棚は寄りつきの室にかかる。盆おりはナスで馬をつくり墓の三本辻の所において来る。水・生き花・トウモロコシ・ナス・ナシ・ブドウ・スイカ・メロン・線香などを盆棚に供えた。(中島)

盆迎え 十三日に先に寺へ行って来てから、墓地へ行き墓参りして線香を立て、その火を提灯の明かりに入れて家に帰り、盆棚の明かりに火を移す。

地元に寺のある所は、直接寺から提灯の火をつけてきて、家の盆棚の明かりに移す。

盆迎えに寺へ行くことを盆ブチとはいわない。(大沢)

盆迎えした日の夕食は、家族が盆棚の前に坐つて食べる。(大沢) 盆迎えは一、三年前から八月十三日となつた。以前は七月十三日。まず家の門口に迎え火用の麦わらを立てておく。提灯を持って自分の墓地に行き、灯をともす。そしてお寺に参り用意してきた金を納める。寺では仏様に上げるお茶をくれる。家に入る時は、門口に用意してある麦わらに火をともし、そこを通つて縁側から座敷に上り、盆棚に火をともす。縁側には仏の足洗い用として空のタライを置いておく。

迎え火、送り火の灰を入口にまいておくと病気除けになるといふ。

新盆の場合は寺に金と草履を納める。また新盆提灯は盆棚にさげて置く。(島野)

盆前に川原から真蔵を取つて來たり、盆花(出来合い)を買つてき

たりの準備をする。

十三日(蚕豆の盛んな間は長いこと二十三日にすれていたが、先頭に復した)の夕方、先祖が釜の口あけ以来かかつて寺まで来ているので、火をつけた麦藁と線香を持って寺へ迎えに行く。その時は夏羽織に、名入れ定紋つきの弓張提灯という正装をし、帰つて家に入らぬうちに門先で麦藁(七晩焼きの時と同様、上から三割程の長さのところを結え、根を広げて立てた藁束)を焚く。(宿横手)

盆迎えを盆ぶちともいう。寺に迎えに行き、門松のところで麦わらを燃して、線香に火をつけて家中に入つた。盆迎えは墓場には行かなかつた。

寺の本堂の三界万雷塔から提灯に火を移して來た。(中島)

盆迎えは二十三日午後善勝寺へお布施をもつて行き、お寺では粉茶をくれるのでコップに水を入れ供える。お寺の帰りに道で麦わらを燃してかがり火をたき、弓張りちようぢんに火をつける。だんごを供える。(中島)

盆ぶち 盆迎えのこと。かどあかりといい、かどで麦わらを燃し、湯に入り綺麗になつてから、夕方提灯を持って慈眼寺へ行く。盆供をあげて黄い、提灯に火を着けて、道案内をして来る。家に来て、盆棚に火を看ける。(下瀧)

盆迎えは七月十三日。円福寺で火をいただいてくる。ヒキ茶もいただいてくる。家に入る時は門口で麦わらを燃やす。盆様を迎えて行つた人はエンガワから入る。(八幡原)

仏の野まわり 「じいさんに田んぼを見せてくらいい」といつて位牌をふところに入れ田んぼをひと廻りした。(島野)

野まわりは田圃まわりとも言い、十五日、先祖に現在の様子を見せる意味で田畠をまわつて豆と芋を取つて帰つて盆棚へあげる。(宿横手)

手)

十五日朝、主人が自分の家の田畠回つて先祖様に作柄を見てもらい、

そのときナス・イモ・里いもの葉・トウモロコシ・ササゲを取つて来る。このナスで馬を作り盆棚に飾る。(中島)

盆の十四、十五日の朝、お客様に来たんだからと、畠を廻り、里芋を一株取つて来て進ぜる。十六日送つて行く時は、芋がらで進ぜたものを包む。(下瀧)

盆送り、ふつう十六日の朝食を供えてから、盆送りをするが、何かことがないうちに早く送る方がいいといって、十五日夕方に送る家もある。

盆棚をこわして明かりを提灯に移し、水(蓋をしないやかんに入れ)・線香・麦わら・送りだんご・ナスの馬等を持って、家族が縁側から出て盆送りに行く。屋敷のカドで麦わらに提灯をつけてタイマツとして送り火をたく。この煙に乗つて盆様が帰るという。カドで盆送りをする家では、カドにマコモのござを敷き、ナスの馬を置き、ナスをオショウロ切り(さいの目に切る)にして芋の葉にのせたものを馬のえさとして供える。盆花を供えて送り出す。

墓地へ盆送りをする家々では、カド火をたいてから、さらに墓地まで行き、墓地の入口で麦わらの送り火をたき線香に火をつける。墓に水・線香・送りだんご・花などを供えて回る。だんごは平たく押しくはめて重箱に入れて来たものを、どの墓にも供える。供えただんごを食べると夏負けしないといふ。供えただんごは犬・猫・鳥などに食べられてなくなるが、粉はあとまで残るように、だんごをまぶした粉まで供えて来る。(大沢)

盆送りはマコモ(さくらんぼ)に盆棚のスギの葉・大豆・里芋の葉・ナスの馬・盆花(造花)等をカドに出して送り火を焚く。ナスの馬にはハヅナ(しよい網)をかけるといって、生うどんを背にかけて置く。里芋の葉にナス馬を乗せて出す家もある。(西横手)送り火はカドグチで麦わらを焚くが、その灰をカドグチ一杯に散らかして悪病除けとする。(萩原)

十五日の夕方か十六日の朝送る。墓に団子と水を供える。また去年の盆花を持って行き納める。家によつてはこの時、ナスで作った馬を墓地の入口まで持つて行く。馬にはタズナといってうどんの湯でないのを掛けている。(島野)

里芋の葉の上に、ナスの馬にウドンをかぶせ、馬の脚のキユウリとナスを小さくさみにして供え、麦藁で燃す。その煙に乗つて先祖様は帰るという。馬の毛はトウモロコシの毛である。(西島)

十六日朝、家から墓地へ先祖を送つて行く。茄子や胡瓜の馬は仏が帰るためのものだから、真蔵の裏面を敷いて家の門口に置いた。今は墓まで持つて行つてしまつ。(宿横手)

十五日の朝野回りをしてナス・トウモロコシ・ササゲを取つて来て、ナスで馬を作り、十六日朝、門で麦わらをもやし、ナスの馬を持つて墓地に行く。(中島)

盆おくりは二十六日におくつて行く。その間に盆棚はかたづける。粉茶は庭に捨てる。(中島)

十五日の晩に麦わらをもつて盆様を送る。ナスで馬をつくる。足と尾は桑の棒。(八幡原)

盆の挨拶 「結構なお盆でござります」「結構な新盆でござります」

(島野)

盆見舞の挨拶は「結構なお盆でござります」という。新盆のときは「もう新盆になりましたね」と挨拶をする。(島野)

盆の挨拶には結構なお盆様ですといふ。樺東村では新盆でも同じよ

うにいう。(一ツ谷)

普通は「結構なお盆でおめでとうございます」という。新盆の時は

「今年は新盆ですね」という。(西島)

線香を立てて親戚が往来するが、特別な贈答はない。客の接待日十四、十五、十六日の朝その日食べ切る程度のばたもちを作り、それに昼はうどんを馳走する。(宿横手)

盆のあいさつは「結構なあら盆でござります」といい、昔はそうめん、今は金を持って行く。(下瀧)

盆中の食事 二十四日から二十六日の間、朝食はぼたもち、昼食はうどん、夕食はごはん。(中島)

「朝はボタモチ、昼はうどん、夜は御飯にトウナスがつく」「盆は三日でくされ彼岸が七日ある」という。(八幡原)

盆カラ 七月十六日。農休みにした。(八幡原)

盆踊り 盆のあとにしたが、最近は出かせきをして苦しまぎれに働いてゆとりがないので、盆踊りが少なくなった。(大沢)

盆おどりは昔、観音様の境内で踊った。はやしは酒樽を横にして叩いた。皆んな思いの恰好をして輪になつて踊つた人もいた。(島野)

盆踊りは櫻名神社でした。(中島)

愛宕様の石宮は、彦島神社に合併されている。七月二十日が精進であった。疫病除けである。麦藁を巻いて、竹をさし、それに幣束を立てて、村の小川の真中に置き、水をかけた。

村人が毎戸一人ずつ出てやつた。「一杯呑んで、いつてオンベロ(幣束)に水かけ、帰ってきてまた酒を呑んだ」。(西島)

愛宕精進は八月二十四日。昭和初期までやっていた。天ぶらをあげて、精進料理を食べた。男衆が井野川で水を浴びた。悪い病気がはやらなを天ぶらにあげた。ウデマンジユもつくった。悪い病気がはやらないよう精進した。(八幡原)

愛宕精進といって、墓地の草けすりをやつたあと、はた餅のでかいのを作つた。若い者だから、食いくらべや、力くらべをやつた。(下瀧)

九 月

二百十日(一日)

二百十日 荒れ日といつて、以前は仕事を休んだ。(宿横手)

二百十日に区長がほらを吹き定使い二人が北と南に分れ、区長からの用事を村中にふれて歩く。(中島)

八 朔(旧八月一日)

ショウガ ショウガを持った初婚が、初嫁の実家へお客様に行く日で、お込み(金)やビールなども持つて行く。(大沢)

八朔の節供は、五節供の一つで、ショウガの節供という。

里方からのおかえしは適當なもの。(京目)

八朔には新しい嫁が、ショウガとアジの干物を持って、仲人と実家にいく。(西島)

嫁がショウガとタラのひらきを持って実家に行く。実家の返えし物は別にない。(島野)

八朔の節供にはおこわをふかす。初めての嫁は生姜を持って実家へ客に行く。(宿横手)

八朔の節供に嫁が実家へ帰る。その時ショウガをもつて行く。(ショウガない嫁)、すると実家から笄をもらつてくる。(見直してくれ)の意味。(中島)

八朔は九月一日。新らしい嫁をもらうと、「しょうがねえ嫁だが、嫁をみてくんろ」といって実家から笄を贈る。(八幡原)

十五夜（旧八月十五日）

十五夜 緑側に机を出して、果物（カキなど）、野菜（サツマイモ、里芋など）、月見だんご（ふかしまんじゅうが多いが、お手丸も作る）などを供える。ススキ五本を花びん（以前は糸わく）にさして飾り、灯明を上げる。

以前は子どもが集まつて、あつちへ行け、こっちへ行けと分かれ、シノ棒に針を付けたもので、供えた物を下げて回つた。それを集めて食べ合つた。子どものことだから持たしてやれと、供えた物をくれる家と、追い払い家とあつたが、下げるのがおもしろくて、やつていた。今はしない。（大沢）

緑側の机にススキ、マンジュウ、カキ、ナシなどの果物・野菜やオーテマルを供えて祝う。オーテマルは米の粉のだんごで大きい。あとで切つて焼いて食べる。以前は子供が供えた物を下げて回つた。（大沢）ゆでまんじゅうを作り、ススキ五本と果物などを十五夜夜さまに供える。ゆでまんじゅうは十五個供える時もあるし、ススキの数なども入れて全体で十五の数になればよいとする家もある。この夜、ゆでまんじゅうなどの供えものや、家敷内の成り果物は盃まれた方がよいといつて、わざと表の入口の戸を開いておく。子どもたちが盃みにきた。（島野）ススキ、野菜、みかん、柿、栗などを自分で饅頭を供える。お手丸（団子）を作る人もあるが、饅頭を作る家が多いので十五個あげず五個あげる方が普通だった。その夜は子どもが集まつて悪戯して歩いたが、家々では盗り易いようには開け放つた緑側の端に供え物を置き、盃られた方がよいとされた。盃られずそつくりしている家は不幸があるのでないかと心配した。（宿横手）

ススキ・くだもの・やさい・まるめものがよいのでおはぎ・まんじゅうを供えた。子どもがヤスで供えものを盃んで行った。盃まれた方がよい。（中島）

十五夜は十月十五日。夫婦揃つて月見をするものだという。ススキを十五本飾り、アンの入ったマンジュウを十五個供え、栗、柿、梨、りんご、サトイモ、サツマイモ、大根なども供える。晩に子供達が竹の先に釘をつけて、マンジュウをつった。この日は何を取つてもよかつた。しんせたサトイモをオロシでおろして手がはれた時につけると治る。（八幡原）

秋の彼岸（二十一—二十六日）

秋の彼岸 彼岸の蚊帳は吊るものでない。もし吊るようなら、折り鶴を紙で折つて蚊帳の上に上げて置けといふ。蚊帳は田植えのころから吊り始めて、秋の彼岸ごろまで吊つてある。最近は家の造りがよくなり網戸をして蚊が入らなくなつたから、蚊帳を吊らない家がふえてきた。（大沢）

彼岸にはばなちらを作り、幕参した。（宿横手）

秋 祭（九日・十五日）

天神様（九月二十五日）

天神様 公会堂の裏の石宮が天神様で、以前はヨイマチの二十四日に組の者が祭（いまの公会堂）に寄つて、花ゴシラエをした。割つた竹に桜紙を巻き付けた花飾りで、天神様の前に飾つた。家々では灯籠を付けて灯りをともした。赤飯をふかして、天神様に供える。最近は秋葉が上臈する時期なのでほとんど忘れている。（大沢）

ハナゴシラエは、竹を削つて削り桜紙を巻いてハナびらとする。茶椀に紅を付けて型押して丸を描き、はさみで丸く切り抜いた花びらを、竹に二〇くらい巻き付ける。先端に金ノ玉を付ける。五〇本ほど作りまとめて天神様に供える。その後、取つて置き、天王様にも供える。

（大沢）

十三夜（旧九月十三日）

十三夜 供え物は十五夜と同じように縁側に供え物をするが、ススキの数が三本となる。（大沢）

十三夜と十五夜との相違はない。あげる饅頭が三個になるだけ。（宿横手）
ススキ、くだものを供え、月が出て晴れると小麦がよくそれ、曇つていると小麦がとれない。（中島）

二十三夜（旧九月二十三日夜）

二十三夜 三夜様の社が公会堂の所にあり、野菊を供えて祭る。昔は大変にぎやかだった。（大沢）

十月

天王様（十月一日）

天王祭 八坂神社（鎮守）の祭りが、神主を呼んで祈禱してもらう。前日九月三十日に花コセエをするため、大沢の人々が毎戸一人ずつ出で半日ほどかかる。暴れる神様である。

大灯籠を両端に立て、各戸でも灯籠を出して、絵や文字を書いて、豆石油ランプをつけて飾った。祭話人は二人ずつ当り、鎮守の灯籠を立てる。御輿はない。ノボリワク（二個所）にノボリを立てた。ノボリの文字は、石垣大尽の家の六疊の座敷にひろげて書家が書いた。祭りには太鼓をたたいて遊び、家々から赤飯を供えて参拝した。（大沢）

オクンチ

オクンチ オクンチというのは、決まつた神社の祭りではない。いろいろの神様の総まとめの祭りで、赤飯をふかして祝う。お客様が来た。（大沢）

オクンチの名称が残るくらいで、別に変わりはない。赤飯たく家がある。中ノクンチ、終リノクンチなどということは聞かない。（萩原）
オクンチは十月九日だが、行事は不明である。（一ツ谷）

十月九日に、宵待ち（前晩）に作った灯籠や紙花を諏訪神社にあげ、神主に来て拝んでもらう。祭りの世話は、以前は「若い衆」（一家の懇領だけで成る村の青年の組織）がしたが、今は神社総代が行なう。この日はおこわを炊き、諏訪神社にも供えたが、お供えするには朝早い程よいと言われた。帰りに他のお宮にも、幾許かずつおこわをあげて来た。（宿横手）

オクンチに椿名神社へ赤飯を持って行く。早く来た人は、多く置いて行く。すると蚕があたる。あとから来た人は赤飯は少なく置く。若者が食べる。（中島）
十月九日をハツグンチ、十九日をナカノクンチ、二十九日をシメエクンチという。オクンチには赤飯やサトイモ、ふ、コンニヤク、油揚げの煮つけなどの御馳走をつくった。ナカノクンチ（田口姓）で祀っているオクマンサマ（熊野神社）に餅と赤飯を供える。（下森田）

十月九日をハツグンチ、十九日をナカノクンチ、二十九日をシメイクンチ。赤飯をこしらえた。（八幡原）
秋まつりは今は十月九日、むかしは九月二十八、九日。まつりの前の晩のことを、ヨイマチといいう。（京目）

八幡宮秋祭（十月十五日）

八幡様の祭り 十四日のヨイマチに屋台を上宿から迎えて新屋敷の

星台と一緒にして、八幡様の境内に引き込んで置く。

十五日の夕方三時ごろ、星台を八幡宮から送り出して村内を引き回し、夜あかしをして十二時ぎわに解散する。這路は八幡宮へ内出一下宿天王様（夕食）—中宿—上宿—新屋敷—八幡宮と回る。

十六日には星台を崩して、「笠タギ」といって飲み食いして慰労する。（萩原）

山名の八幡様 十月十五日の秋祭りに、葉のついた大根を、二本ぐらいうわらでしばって「大根はどうです」といって売っていた。（下瀧）

十六念仏

萩原町下宿では年寄りが回り番の宿に集まって、十日から三日までの十六日晚、念仏をあげる練習をした。皆が寄つて世間話をする機会でもあつたが、戦後絶えた。

念仏は六通りある（南無阿弥陀仏（一三回唱える）、融通念仏、十王十体南無阿弥陀仏、オナンボキヤー、十三仏、六字ヅメ）の六種あり、葬式の晩には関係者が集まって掛軸をかけて念仏を申す。（萩原）

一夜様（二十二日）

二夜様 十月二十一日は二夜様の晩、月が出てない。暗闇の中で、村の二十二夜様のお宮におまいりに行き、団子を供えてくる。それから、個人の家を宿にして二十二夜念仏をした。（宿横手）

神無月（旧十月）

神送り 旧十月一日には、日本中の神様は出雲へあつまるという。

旧十一月一日に神様は帰ってくるという。ここでは、おかみおくり、おかみむかえという行事はとくにない。神様が留守のときに、エビスまつりをする。大黒様は神様であるが、エビス様は両部であるので、神様の留守のあいだにエビス講をやるの

だという。エビス様は、道楽者で、おもやに入れず、下屋にいるのだという（お宮の軒下にまつられているのだという）。（萩原）

留守神 旧十月には、神様は出雲大社へあつまる。

その留守に仏のまつりをするという。

この間、留守居をしているのは、エビス大黒。（萩原）神無月にはかの神は出雲へ出かけ、稻荷様だけ残るので、屋敷祭りをする。（下瀧）

十月は神無月で神様たちが白馬に乗つて出雲に出かけるという。留守神はエビス大黒。留守神に供えてあるものをおべると嫁にも婿にも嬉しいといふ。（八幡原）

かま神 できた稻の一株をあげた。飢饉の時これが種になると言わされた。（宿横手）

初穂の一株を家のカマドの神に供える。カマドのそばに毎年新しい株をつる下げておく。（島野）

神迎え 個々に總社の明神様まで行く。（宿横手）

薬師様（旧十月八日）

薬師様 中世の石仏と見られる座像が公会堂（もとの寮）の庭にあつたのを、山を崩して少し東に動かしたら、崇りがあつて赤痢がはやり三人も死んだ。とくに動かすことに力を入れていじくつた人の子が死んだ。（明治十一年とも、大正三年ともいひ）。

薬師様は旧十月八日（十日夜の二日前）に祭るが、その晩は「風ノ子ガ生マレル」日で、必ず風が吹く。（大沢）

十日夜（旧十月十日）

トオカンヤ 新わらを束ねて縄を巻いて「トウカンヤ」を作る。里芋のズイキを入れて巻くといい音がする。子供が村中の家々を回つて、モグラがもぐらないよう、トウカンヤで地面をたたいて回る。たた

いてもらうと、お金をくれる家もあった。

その後、分かれて対抗試合のように地面を打ち合って音をたてたり、よそ村まで対抗に行く所もあった。(大沢)

唱え言「十日夜イモンダ 夕飯食フチヤ腹太鼓」

固い家では朝ゲにソバ、昼にだんご、夕飯に餅を食う家もある。餅はつくが、特別に供え物をする事はない。大根のこともいわない。(大沢)

トウカンヤは、旧の十月十日にした。餅をつく。朝ソバキリに登団子、ヨウメシ食つて腹太鼓といつて、薦鉄砲で地面を叩く。家の回りを、モグラが掘らないためである。(一ツ谷)

子供がワラを繩で巻いて、トカントカンと地面をたたいて回った。「モグラ、ネズミ、絶エロ」と唱えた。餅をついて食べた。

高崎清水の観音様へ歩いて行って参拝し、オコモリして帰るころには薄明るくなっていた。清水観音は參詣者で足が地につかないくらいにぎわった。(萩原)

十日夜は、わらでつぼうで、モグラたきをするという。そのときの唱えどとは、「十日夜はいいもんだ、あさそばきりにひるだんご、夕めしくつちやはらだいこ」(京目)

旧十月十日の晩、わらを束ねて、(中にイモガラのしんをいた)道路などをたたいてあるいた、となえことは、「十日夜はいいもんだ、あきそばきりに、昼だんご、夕飯くってはらだいこ」

こうして、モグラ追いだすといった。むらの上と下に分れて、わらでつぼうのたたきっこをした。音のでつかいはうが勝といった。しまいにはけんかになった。

十日夜には餅をついた。もちは神棚にあげた。

十日夜は、大根のとしとりといった、十日夜をすぎると、大根とり

をした。(島野)

十日夜にはワラの中にイモガラをいたワラ鉄砲を作り「十日夜はいいもんだ。夕飯食フちやあ腹太鼓」といながら土を叩いた。地が

ため、モグラを追い出すためともいわれている。また、この日は大根

の年取りともいう。また、ワラニユウにも餅を供えた。(島野)

十日夜に子どもがオオツツをつくった。わらの中にイモガラを入れてなわを巻いた。これで地面を叩き歩いた。

「十日夜いいもんだ。朝そばきりに登団子夕飯食フちやあ腹でいこ。」(元島名)

十日夜は旧の十月十日にやる。里芋を中心とした薦鉄砲で地面を叩く。モグラを追うためであるといわれている。屋敷の回りを叩くとモグラが入つてこない。「十日夜はいいもんだ。朝ソバキリに登ダンゴ、夕飯食フちやあつぱたけ」と唱えながら叩く。(西島)

十日夜は旧暦十月十日に餅を揚げ、芋がらを中心とした薦づとて庭をたたいた。その時、次のような唱え言をしながらたたくとモグラが来ないと言われた。「十日夜はいいもんだ、夕飯食フちやあ腹太鼓(或いは、ぶつちやあぶつぱたけ)」または「十日夜はいいもんだ、朝そばきりに昼だんご夜飯(或いは餅)食フちやあぶつたけ、イモガラもネズミもホウイホイ」。この朝のそばきりを作るとき、養蚕が当たった家の大根を盛んできて千切りにし、コにすると養蚕が当たると言われた。たたいた薦は後でほぐして繩になら。かかしもつくったが、これを神とは言わなかつた。(宿横手)

十日夜はお月様の祭りでもちをつきトオカソ棒で地面をたたきモグラ退治をする。トオカソ棒の中にイモガラを入れるとよい音がした。「十日夜、十日夜いいもんだ。朝そばきりに昼だんご夕めし食ちやあぶつたけ。」と言つた。高崎の清水の観音様へおこもりといつておまいりに行つて泊つてきた。(中島)

十日夜には「十日夜はいいもんだ。朝そばきりに登団子。夕めし食つ

てぶつただけ」といって、叩いた。わら鉄砲はイモガラの赤いのをしんで入れて、わらをまいて作る。男女そろって、モグラを追う。叩いて柔かくなつたわら變成になって、ガッタンをかけた。ガッタンをかけられる。彼らは決まつてゐる。大沢雅體の小説に、「十日夜」というのがある。十日夜は大根の年とりといつて大根をあげた。(下瀧)

トウカニヤは旧十月十日。稻葉の中にイモガラを入れて、子供たちが「朝そばきり、昼だんご、夕飯くつちやぶつただけ」と唱えながら村中をなたいて歩つた。この日は大根の年取りで大根を藁たばにのせてエンガワにおいておく。(八幡原)

清水觀音 十日夜は仏事、旧十月九日の晩に、清水の觀音様へ行つておこもりをした。

九日の晩にちらをついて、十日の朝、寺へもつて行つた(横手の善勝寺)。(萩原)

九日の夜、以前は女衆が高崎の清水觀音に参つておこもりをした。道具を入れた風呂敷包みを持った女衆が萩原の渡しをわたつて、統々と高崎方面へ歩いて行つたのを覚えている。この夜は、清水觀音の近くの家々も臨時のおこもり堂になつた。戦争がはじまる前まで続いていたと思つ。(鳥野)

大根の年取り 旧十月十日。トウカニヤをすぎれば大根をとつてもよい。高崎市山名町の八幡様に十月十五日、「二股大根をあげると子供のカンの虫がきれる」という。小さな虫切り鍊も売つてゐる。赤いオシシも売つていて、それを買ってくるとできものができないといふ。(八幡原)

十月なか十日 「死んでも十月なか十日」といつて、十月は暇な月のわけだが、遊び用がかなりある。

米の端境期だった。昔の人は田の回りの稲が早くでききたので、二株ぐらいたつ回り刈りをして食べた。これを「アグワセ」とい、あごで食べることが急がしいので、全部熟するまで待たずにワセの所から

早く刈つて食べる家のことといったものである。(大沢)

エビス講 (二十日)

エビス講 秋に取れた新しい米俵を飾つて、その上にエビス・大黒を祭つた。(大沢)

エビス講には大国主命をまつり、鯛やさんまの頭つきを供え、米の飯を炊き、けんちん汁、かき揚げなどを作った。座敷にはもみ種を入れた小さい俵を作つて、上にエビス大黒を飾つた。

エビス様の唄

おえびす様という人は
一に俵をふんまえて

二にはにっこり笑つて
三には酒をつくつて四つは世の中よいよう

五には泉をにえたつて
六つ無病息災に

七つは何事ないよう

八つは屋敷を広めて
九つは穀蔵うつ建つて

十でところが治まつた(宿横手)

エベス講は 旧十月二十日。机に錢を入れてあげる。サンマを供え

る。(八幡原)

十一月

アナツブサゲ (十一月)

ネズミ除け 麦蒔きが終わると、モグラの掘つた穴を伝つてネズミが出ないよう、畠の穴をふさぐ。その時はたもちなどこしらえる。(宿

横手)

穴ツブサゲはネズミが土から出たり入ったりするので麦を食べるのを防ぐ。御馳走を作る。(中島)

秋アゲ(日不定)

秋アゲ 稲刈りが終ると祝うが、家によつて違う。適当に何か作つて食べる。昔の人は何か食べることで祝つた。(大沢)

(中島)

刈り上げ祝い(十一月)

刈り上げ祝い 家々でアズキガユをして御馳走する。(宿横手)

十二月

コト八日(八日)

十二月八日についてはとくに聞いたことがない。(大沢)

油餅(十二日・十五日)

極楽餅 秋の仕事が一段落して、油餅をつく。これを極楽餅といい。

四月十五日の地獄餅に相対して呼んだ。(大沢)

ゴクラク餅は十二月十日頃つく。これから農閑期に入り、極楽のように乗な日がつづくという意味。神棚や仏様にも供える。また、嫁はこの餅を持って夫家へ行くのが楽しみだった。

これに対し、四月十五日につくオコモチは、ジゴク餅といった。これから農繁期になり地獄のような毎日がつづくという意味で、ジゴク餅と称するという。(島野)

夏まきが終つた祝いで、夏の農休みみたいに区長がフレを出して休んだ。いい着物きて一日遊ぶ、高崎などへも出る。この日の餅をゴクラク餅という。また夫婦餅ともいつた。後家の家では前日についた。(矢島)

油餅は四月の地獄餅に対して極楽餅ともいう。油は、これから一年の仕事も終えて油野郎になれるという意の呼び名で、十一月十五日に餅を揚いて神棚にあげる。(宿横手)

十五日に神様・仏様に夫婦樂になるように餅をフタウスつき極楽モチ(夫婦モチ)として供えた。遊んでもよい日であった。(中島)

極楽餅は油餅ともい、十一月十五日に餅を三「臼ついた。夫婦餅ともい。夫婦でないとつけないともいった。

極楽餅に対して、四月十五日に餅を「オコモチ」「地獄餅」と呼んだ。この日で遊びじまいとなり一生懸命働かなければならぬといつた。これに対して「油もちを食うと極楽だ」と正月の来るのを待つた。(複町)

油餅は十二月十五日。夫婦餅ともい。夫婦そろっている家では餅をついた。あんの入った餅を油であける家もあつた。後家はつかなかつた。(下斎田)

油餅は十一月十五日。夫婦餅ともい。二臼ついた。後家の家ではつけない。(八幡原)

カニアビタリ(十一月十五日)

カニアビタリ 十一月十五日、夫婦そろつているうちで、米ぞつきの油餅をついた。末濃いくよくようにといふわれがある。(下滝)

ツジユウダンゴ

ツジユウ 麦まきが終つた日にツジユウダンゴをこさえ、二個ずつシノにさして、ワラニユウにさして折る。子どもが来て、ニユウバ

の回りを回って探して下へて行つた。チジュウダンゴは神棚・星敷稻荷・ツキ山等にもさした。

以前はよくチジユウゴセエをした。稻の穗をマンガでこいた時に地面にこぼれたものは砂ツメになる。ふるいでふるつても小石まじりなので、鍋ぶたに木綿布をかぶせて、のみの上にかぶせて張り付け、付いたもみを脇へ落として小石とえり分ける仕事を、年より婆さんがした。この米をチジユウ（土穂）といい、粉にひいてだんごをこしらえて焼いて食べたものである。（大沢）

庭の掃き溜めることを「チジユウ」と言うが、転じて脱穀時に庭にこぼれた米のことも言う。それを拾つて食べる意味で、冬至の前の晩、米をひいて団子を作る。（宿横手）

ツジユウダンゴは秋の干し物をした時にこぼれたモミを集めてダンゴにし、ハギの木に二二コづつさして神様に供えた。（中島）

星敷神祭（一日・十日・十五日）

星敷神 その星敷の氏神様で、稻荷様・コンコン様だというが、両者の関係は不明。

家の仏様が三十三年忌になると、塔婆の立てじまいといって、スギの葉を塔婆の先に付けて墓へ立てる。以後は神様になるというが、星敷神になるとはいわない。

星敷神祭りは一日・十日・十五日など所によって日が違う。

星敷神は家の西北の隅に祭る。以前はわらのお仮屋を作つたが、現在は石宮や木造の宮造りで、瓦でふいた大きい祠もある。母屋の床上

りも高く祭れといわれて、石積みや土盛りの上に祭られているものが多い。

祭りの前にシメ繩を張つて、オンペロを下げる。神主が作ったご幣束や自分で作つたオシメを飾る。年男が赤飯を重箱に入れて、油揚や頭付きのイワシ・塩・オサゴ

（米）などとともに持つて行き、星敷神に供える。家じゅうの者がついて行き、星敷神の前にむじろを敷いて坐り、赤飯をオテノクボにもらって食べる。年男が赤飯をシヤモジで星敷神に進せてから、一人前に三回ずつオテノクボ（掌）に盛つてくれるのを食べる。

帰る時は後をふり向かずに入れる。とくに弓張り提灯を持つた人は後をふり向くなとい。それはオトウカ（稻荷）様が供えられた赤飯や魚などを食べるからだという。

近所の子が隠れて待つていて、供え物を下げる。（大沢）

十一月二十三日新嘗祭の日か、十二月一日に星敷神を村中の家がそれぞれ一齊に祭つた。

星敷神のお仮屋を作り替え、オンペロやシメ繩を新しくする。夜、赤飯やイワシを供えに行く。星敷祭りの帰りには後をふり向くなとい。子どもがよその家へオコワ（赤飯）を下げに行く。

星敷神は稻荷様を祭る。家の西北の隅に祭るが、落ちぶれて日向に出さないようにする。（萩原）

星敷稻荷 十一月二十三日が稻荷まつり、この日、新わらでオカリヤをつくりかえた。

供えるものは、赤飯、さかな（イワシ二匹）豆腐。供えるのはその家の主人。

供えたものは他人様にさしあげるということで、うちのものはさげなかつた。よその子どもがさげに来た。さげてもらえない、縁起がわるいといった。赤飯は供えたあとすこしのこしてきて、うちのものがわけて食べた。（京目）

星敷祭りは、現在では新の十二月一日にやつてあるが、むかしさは、旧の十一月一日の、おかみのおかえりの日にやつた。（京目）

星敷祭りは十二月一日にやる。かつては、オカリヤは毎年作るものだといつて、石宮や木のお宮があつても、その脇に作つた新薬と新竹で作つた。この村の風習として、赤飯と尾頭付き（イワシ）の外、

稻荷様の屋根に豆腐を四角に切って、半紙にのせて供えた。豆腐のことをグシモチといつてゐる。

赤飯をお供えして、その場所で、オテノコボにして食べる。家に入つてから、お参りしなかつた人も、重箱の赤飯をオテノコボにしてたべる。

お供え物をして帰る時には、後をみてはいけない。みるとオトウカ（狼）がきてさげないという。さげないとまたオコワ（赤飯）をふかしてやりなおす。

実際には、子供たちが、供えたものをさげに回つたもので、それが楽しみでもあつた。

稻荷様の両側に石がある家もある。女の神様かともいうが、よくわからない。そこにもオンベロをする。

矢島の反町一家では、屋敷祭りを朝やつている。

屋敷祭りには、稻荷様の外、ツボ山、井戸、カマド、神棚に、オンベロをあげ、赤飯を供える。オンベロは新しい様で作り、二本ずつあげた。糧のところにも同じようにした。（ツツ谷）

屋敷祭りは十二月一日にやる。最近の稻荷様は石宮（コンクリート）が多く、木の宮は少ない。お宮のない家ではお仮屋を作る。また石宮があつてもお仮屋を作る家もあるし、本宮が石宮で末社がお仮屋の家もある。家々によつて違う。お宮には、シメナワの外に三角のオンベロと三つ切りの簡単なオンベロをあける。オンベロは家の中の神にもあげる。赤飯に尾頭つき（イワシ一匹）を供える。供えたあと、後をふり返つてはいけない。供え物をさげないとまたやりなおす家もある。主人が供えたあと、女が子供がさげにいく家もある。子供には楽しみであった。

稻荷様は百姓の神であるといわれている。

屋敷稻荷の外に屋敷内に猿田彦を祭つてゐる家があるが、少ない。

稻荷様の御眷属はキツネである。（西島）

屋敷祭りは十二月一日。屋敷稻荷はもとほんどうオカリヤをわらで作つた。新米、赤飯、いわし二匹、豆腐などを供えた。その供え物が下がれられないと稻荷祭りをやり直した。しかしそれも面倒だから子どもを頼んででも下げるもつた。関氏方では、オンベロをオカリヤのグシにさし、これをグシワイといい、神主から御幣を切つてもらつたものは「ご神体」といつてオカリヤの中に置いた。そして塩も供えたが、これはグシの上に置いた。清めだと説明している。

真下イツケでは稻荷のお宮があつたので、屋敷ごとに祭らなかつた。めいめいそこへ行つて供え物をしてきた。

供え物のをしたあと、後をふりかえらずに帰つてくるのが普通で、「後見すだで」とか「後を見るな」と注意をうけていた。そのことから、何か事を行なつて、しっぱなしで反省のないのを「稻荷様のようだ」とか、「屋敷祭りのようだ」とこの土地ではいつてゐる。（元島名）

屋敷神としては稻荷様をまつる。十二月の冬至以降、正月までは神様がいないので、屋敷神のお仮屋殿も冬至以降に、以前は毎年新しく作り替えた。

お参りは夜暗くなつてから提灯を持って行く。この時、イワシを供える。帰る時は、うしろをふりむいてはいけない。また、イワシは無くなつた方がよい。つまり稻荷様に食べてもらわなくてはいけない。

それで供えたイワシを取る役の人を決めて暗がりにひそんでいてもらつた。場合もあつた。

このお参りの日にはオンベロを家の井戸神や、かまどの神などに、あらかじめ配つて歩いた。（島野）

屋敷祭りは姓によつて祭り方や日が違つてゐる。

田口姓では屋敷祭りをしないで、虚空藏祭りをする。昔、オトウカが屋敷稻荷の前で死んでいたので、それから屋敷祭りをしなくなつた。関根姓は十一月二十五日、木暮姓は十二月一日に祭る。祭り方は同

じ。お仮屋を朝飯前に作り、近親者をよんで祭りをした。

供えるものは、赤飯、尾頭つきで、供えたら後を見ないで帰つくる。供え物を早く下げるほどよいといわれていた。

尾頭つきは、昔は高山の菴屋が持ってきたので、黒茶色した巾広いものだった。(中島)

十一月の初午の日に屋敷神様(お白狐が一対まつてある)のお祭りをした。藁で御仮屋をつくり、頭つき(餠)、オコワ、ぐし餅(米の粉でつくった餅)などを上げた。進めて焼る時に後を見るとオトウカが来るから振り向くなと言われた。供えた物は、十五夜の時と同様子ども達がさげて歩いた。これもまたなくなっていた方が喜ばれ、朝餉までそつくりしているとも一度あげねばならないと言われた。子ども達は神社に集まってそれらを焼いて食べた。(宿横手)

稻荷祭は閏根十一月二十五日、木暮十二月一日、田口ではない。毎年わらで窓を作り、しめなわをはり、屋敷の上角にたてた。主人が赤飯・イワシ・サンマをもつて供え、後ろを見ないで帰つてくる。その後木暮の家では外に出ない。供えものはなくなつた方がよい。(中島)

星敷神は十一月一日に祭る。オコワにサンマを供える。星敷祭りで、あとを見るなどいう。近所の子どもが待つていて下げる。下げるももらわないと、神様がおもしろくないといって、下げてないとやりなおす。うしろを見るんじやねえと、おやじにいわれた。(下森)

十二月十日は屋敷神様の祭りで、この日を屋敷まつりという。家で赤飯をつくり、お頭つきのイワシ二匹と一緒に供える。屋敷神様は昔は稻穀でオカリヤをこしらえた。供え物は夕方しんぜる。後ろを見るなどいう。イワシの供物は大などにきれいに食べられてると、家が豊かになるという。(下森田)

稻荷様に供えるもの、稻荷には塙を少々、イワシの頭つき、赤飯、豆腐を細かくきつたものなど、あげたあとは後ろをふりむかってはいけない。(下森田)

十一月には出雲に行つた神様が帰つてくるので昔は午の日に屋敷祭りをした。今は十二月一日に統一した。藁でお仮屋をつくり、豆腐、油揚、イワシ、赤飯を供える。供えにいつて後ろをむいてはいけない。

(八幡原)

すすはき

竹ぼうき 大掃除は冬至にする。竹ぼうきを作つて、天井のすすはきをする。最近の家は天井がきれいに張つてあるので、やたらにすすはきができる。(大沢)

二十日過ぎに、家財道具一切を出して煤拂きした。はうきは竹を切つてきて新しいものを作つて使う。(宿横手)

スヌはらいは十一月二十日前にやつた。竹をホウキにして煤をはいた。煤はらいに使った竹は家の竹藪か屋敷神様のところに置いておき、

一月十四日のドンドン焼きの時に一緒にもやす。(下森田)

冬 至 (二十二日)

大掃除 冬至は神様がないから、いろいろのあたりがないので、大掃除などもこの日にやる。冬至にやれば、見るも聞くもない(日の吉凶を調べる必要がない)といふ。(大沢)

冬至には神がいないから、日(暦)を見なくとも大掃除ができるといふ。

この日は、なにをやってもよいという。

引越しなども、この日にしてよいという。(島野)

冬至にはトウナスを食べ、ユズ湯に入る。中気にならないといふ。

また「借金なすから」という訳で、保存しておいたナスの茎をもす。

トウナス、コンニャクを食べたり、風呂に入れたりする。これを入れた冬至湯に入ると中気にならないと言う。家によつては埼玉の不

動様の星祭りに行つて、ユズを拌んでもらつて来て、息災であるよう

にと床の下に入れたりする。(宿横手)

冬至にトウナス湯に入るとあつたまゝで中気にならない。コンニヤ

クはからだの掃除をする。ユズはみそづけにして節分の日に食べた。

(中島)

朝、カボチャを煮て食べる。晩にはユズとかカボチャを生のまま切つて風呂に入れてトウナス湯につかる。中気によいという。現在でもやつている。(八幡原)

暮 市(二十五日)

松市 正月用の松やマキをお松市場へ買ひに行つた。(萩原)

門松や、お正月用品は、以前、十二月二十五日に高崎の暮市に買ひに行つた。高崎の元町三丁目から駅までの通りに市が立つた。前橋からは買わなかつた。京目からは方向が下りになるので「下り松」といつて忘んだ。これに対して、高崎の松を「上り松」といつた。(京目)十二月二十八日に玉村町の玉村八幡宮境内でお松市があつた。お飾り、注連縄などを先つて、下斎田は平地で山がないので松は昔からお松市で買つてきた。(下斎田)

正月飾り

一夜飾り 「一夜飾りはするものでない」というので、三十日までに正月飾りをしておく。(大沢)

一夜飾りはしない。三十日は普通はやる。餅をつくのも三十日が多い。(西島)

松の飾りつけは十二月二十八日にした。餅つきと一緒に飾りつけをするものだという。一夜飾りはよくなといつて三十一日には飾りつけをしない。(下斎田)

カド松 高崎の市からラマキを一わ買つて来て枕として門に立

て、カド松を結び付ける。庭の真中に三〜五本の杭を立て、松飾りを結び付けておく。繩のイボ(結びめ)は外側に出して結べという。余つたマキは燃し木にした。(大沢)

門松は十二月二十五日頃、高崎に買ひに行く。昔、高崎に、五・十の市が立つた。買つて来た門松は一度、家のツボ山に納めておく。そして、一夜かざりはするものではないといつて暮の三十日までにはかかる。(島野)

暮の二十五日に、高崎の松市に行つて買う。松の掛け値を負かして買う。一本二銭を三本二銭にさせた。買つてきた松は、三十日まで屋敷稻荷様にあすけておく。

松市では、その他の正月用品も買つた。門松は屋敷外に立てる。三ガ日は、年男が御飯を門松に進ぜる。箸で三粒か四粒進せる。(西島)

お松市は十二月二十五日。高崎に松を買ひにいった。前橋へは下り松というのでいいかない。稻荷新田からも高崎にいた。(一ツ谷)

二十八日玉村の八幡様の歳の市、松市で買つてきて、三十日までに、大抵は餅揚きの日にいっしょに済ませる。門松は門口(庭)へ普通は三本、丁寧な者は五本も並べて立てる。(宿横手)

正月かざりは三十日にかぎる。松は二十八日に玉村で市が立つのでそこから買つてきた。(中島)

年内に不幸のあった家はアケを着てるので門松をたてない。正月が過ぎてから、簡単に松などを飾つて正月をした。(下斎田)

しめ縄 七五三に垂らした注連縄を部屋の四方に張りめぐらす。(宿横手)

お松 暮れになると島野神社からお札が各戸にとどいた。伊勢の皇太神宮の札は神棚に、荒神様は炊事場に、歲徳神は家の入口に張る。五村八幡様から歲徳神、大祓い、庚申様、皇太神宮のお札が区長を

通じて配られる。いつ来るとも言わないが最初の卯の日、卯の刻に帰る。年神の早く帰る年程、人間のアラを見られないで吉とされる。

(西横手)

年神棚 回転式に組立ててある棚を天井から吊るし、暦を見てアキの方へ向ける。年徳神を祭り、棚の前に飾り物を吊るす。(大沢)

オタナの上には年神様と太神宮様。恵方の方へ年神棚を飾り、その相向いに太神宮様の棚を飾った。真下家では、豆木を編んで正月棚にした。(元島名)

四方にシメ縄を張りめぐらした、飾り用の一部屋があつて、そこに恵方に向けてお棚をつくる家もあり、竈から便所、蔵等に到るまで家中の所々につくる家もある。後者の場合、お棚用に山から樺を切り出して来て板に作り、その板を何枚か連ねて棚とする。そうして祭ったお正月様の前に藁のシメ縄を張る。シメは七筋、五筋、三筋の縄を垂らしたものと、「御顔見」といって只バラバラと垂らしたものとあって、このような様式の相違は「家例」に依る。シメ用の藁はその年の収穫時によいものを選んでとつておき、暮の二十九日から三十日までに自家でシメに作る。「一夜飾りはするものではない」と言われば、供え物の餅も二十九日に揚ぐ。他の供え物は「おかみの鉢」と呼ぶ破子に入れて供える(西横手)。

正月棚の「カオカクシ」をわらで作る。ミカン・スルメ・マス(ますさかん)・イワシ・コンブ(よろこぶ)お金・ホシガキを供えます。正月様の来る恵方(年によつて違う)暦に出ている。に向つて作る。(中島)

年神 歳徳神・天照大神・荒神・カマ神である。(中島)

年神様の棚は玉村町のお松市で松板を買ってきていたのを使い、オモテザスキの天井に暦で恵方を調べて恵方にむけてつるした。年神様の札は神社から配られる。(下前田)

飾り物 正月の飾り物は下から上へのぼるよう(右から左へ、東

から西へ)吊るす。竹は本が上(向かって左)になるように横に渡す。吊るす物は麻・炭・ミカン・ダイダイ・小銭・頭付のイワシ(二匹)、末広・フキノトウ・イカ・コブ・干シ柿・羽子板・羽根などで榜題になつてある。「朝起キハツキノタネ」「住ミヨクマワル」などと縁起をかつく。

縁起物は高崎田町・末広町に十二月二十五日にお松市が立つので買って来る。前橋と同じ距離だが、高崎の方が「ノボリアゲル」といつて、縁起がいい。西の方がノボリだから縁起がいい。(大沢)

カマ神 ハツツイの所の柱に正月のシメ飾りを付け、お札を貼る。

シメ縄にオンペロを付けて張り、一年交代に取り替えた。(萩原)

益神は正月が近づくと松・おしめでかざつた。(中島)

川神様 集落の中を流れている川の洗い場に段があつて、川棚といふ。自分の家の川棚には正月の松飾りを立て供え餅を供えて祭る。

大沢の村の一番前に共同水車があつて、明治二十八年から昭和十七年まで使用していた。四本杵でつくもので、そのころは春秋二回堀さらいをした。現在も魚はナマズやドジョウがいるが、廻油で汚れて石油くさくて食えない。(大沢)

歳暮

歳暮 世話になつた人や本家・嫁にやつた家などに塩引き鮭を届けた。嫁の場合はこの使いが実家帰りを兼ねた。(宿横手)

師走女 十二月二十五日に女衆は布を買って来て、正月までに新しい着物を仕立てた。だから暮の女衆はいそがしかつた。「師走女に盆坊

主」といった。(京目)

餅つき

暮れの餅つき 十二月二十九日は、餅つきをするのを避けた。九餅

(苦餅) といってこの日に餅をつくと苦労をするといわれている。(島

野)

二十八日から三十日の間に餅を揚ぐ。一本杵の時も三本杵の時もある。神様用は、三日目に決まっているという家もあり、白がぬくとまつた頃のきめの濃やかなものを当てる家もある。作る餅の種類は、鏡餅、のし餅、あんころ餅。(宿横手) 餅つきは二十八日から三十日までにつく。三本ぎねも使つた。(中島) 餅は十一月二十八日か三十日についた。二十九日は苦餅といつて忌んだ。(下斎田)

大晦日(三十一日)

年越し お正月の準備ができる、ほとんどすることがない。ひつそりして静かに年越しをする。

大晦日には早く寝るものではない。早く寝ると白髪が出るといふ。男衆は讃をなつて夜ナベをして起きていて、除夜の鐘を聞いてから初参りに行く。

大晦日はすでにお正月である。(大沢)

晦日そば 十二月三十一日は晦日そばを食べる。(下斎田)

昔はこの辺でもソバを作つたから、年越しソバはあたり前であった。(西島)

本家や慈意の家を往来する。夕食は決まっていないが、そば家例がある。年越そばなどは食べない。(宿横手)

キクガラ 大晦日の夜、一年のおしまいをするということで、菊がらと茄子がらを焼く。焼く時、「よいこと聞く(菊)がら、借金済す(茄子)がら」と唱える。(下瀧)

口頭伝承

はじめに

このところ数年の調査において、口頭伝承の収穫は、そう豊かであるとはいえない。市街に近い今年度の調査地には、おそらくいくらも残っていないだろうと、最初は懸念されたが、これは取り越し苦労だった。多くの昔話も聞かれたし、とりわけ諺は、俚諺続まくりとまではいえぬとしても、数多く集つた。特に興味があつたのは、下流の「食べてすぐ寝ると牛になるいわれ」である。この話と、同巧異曲のものがあるので次にあげる。

牛と牛（うしとうま）昔、源九郎義経、摂津の国難波の里を通り給ふ時、百姓の家に厩より、牛首を出していれば、義経、弁慶を召して、「この牛を見るにや」と仰せければ、弁慶よくよく見れども、さらに牛にはなかりしかば、「これは牛にてこそ候へ」といへば、義経聞召され、「さればこそ、牛の首を出したるは、牛にあらずや」とのたまへば、弁慶「げにも」と感じけるとなり。まことに文字の上にて仰せられしを、弁慶さとらざりしとなり。（和漢りくつ物語卷二・寛文七・牛牛の差別の事）（江戸小咄辞典 東京堂出版）

孔子・顔回・子路の登場するこの話は、下流産の、はえぬきの話とは考えにくい。伝播者は、はたして誰だろうか。手がかりのいとぐちは得たいものである。（上野 勇）

一、伝

説

木部姫 木部の名主の娘は子なしであつた。
権名さんに祈つて（たのんで）子どもが生まれた。

子どもが泣くと、権名さんは祈つたらしい。

その娘が成人したころ、娘の両脇腹にヘビのこけがでたという。

あるとき、娘が権名さんへつれていくて、腰元が七人ついで権名へ行つた。権名湖の濱まで行つたところ、娘がからおろせといふ。髪と帯をといて、娘は権名の沼へはいつてしまつた。腰元たちはおつただけで見ていた。

すこしたつたら、娘が沼の真中にうかんだ。ヘビの姿であつた。お

れはこういうふうになつて、ここへ止まるから帰れと、腰元たちにいつた。腰元たちは、帰ることができず、沼へはりこんで、カニになつてしまつた。それで、湖畔には、腰元の七人の石塔があるという。

こういう関係があるので、木部村から行くと、雨が早く降るという。木部村のまわりでは、木部の人たのんで、雨乞いをしてもらつたこともあった。

木部の人たちは、カニが食べられないといった。（京目）

木部姫 中島には権名神社が祭つてあつて氏子になっている。御春属はカニで、利根川に行つてもカニは取つて来ないし、カニは食べない。現在も固く守られている。



弘法の七井戸の一（矢島鈴宮）
神社前、コンクリートの闇の中
がそれで、かつては良泉が湧出し
ていた。（都九十九一撮影）

箕輪の本部姫が棲名湖に入水して竜になり、その時の體元がカニになり、姫を探したと伝えられ、棲名湖の美しく、きれいなのは、カニが探すためだといわれている。

棲名湖 棲名湖は夕方、落葉があつても、朝になるとなくなるといふ。ガニが湖に落ち葉を片づけるという。本部では四月一日に餅をついて、ホケエを入れて、棲名湖へ行き、何か唱えて、ホケエを供えると、ホケエが湖の真中まで行ってブーケーンと沈む。餅は空になつてホケエだけが岸まで戻つてくるという。（下高田）

七つ井戸 普通は「矢島の七つ井戸」という。矢島に五つ、西島に二つあった。昭和三十七年に絶えてしまった。工業団地ができるからだめになつた。

弘法大師が矢島を通りかかって水一杯欲しいといった。水が不足で時間がかかりますといつたら、杖を突いてくれた。

この辺では井戸を作るか、倉を作るかという位金がかかる了。旧家以外には井戸がなかつた。七十尺掘ると第一地下水にあたり、どんどん出る。

普通の家では井戸は浅いのを掘りっぱなしにして、庭の水が入つた



矢島コンクリートの井戸がそれであるが、今は枯れています。(都九十九一撮影)

鐵鬼坂 下淹の慧眼寺の近くにある。情深い人が、夜此處を通ると、子どもが泣いていた。おぶつて行つたら、それがかねだまだつたので、それから調子がよくなつて、大ら調子がよくなつた。（上淹）尽になつた。（上淹）
ゲエロ坂 これも慧眼寺の近くで、下が田圃で水が道まで出ていて、ゲ

がつてつれて來た。その旅人は小判を沢山もつてい
た。

り、ゲエロ（蛙）が入つたりであつた。皆、白い水を飲んで育つた。
(西島)
弘法の七ツ井戸　昔この矢島村に弘法様が巡廻してきたら、この付
近は水が白汚しているので、弘法様が杖をついてきれいな水を出して
くれた。人々は冬あたたかく、夏つめたいよい水でよろこんでいた。
七ツ井戸とは七ヵ所あつたのだが、製糸会社が深井戸を掘つてから井
戸水が枯れてしまった。(矢島)
阪東太郎　利根川に小豆色をした大きな岩があつた。「赤岩」「阪東
岩」「トネアズキ」「阪東太郎」などと言つた。(萩原)
家の先祖のはなし　滝の慈眼寺のそばの道はさみしいところであつ

エロ(蛙)が鳴いていた。人が行くと鳴きやむ。筆つ葉がさわっても、おつかなかつた。(上池)

でら測 赤城神社のそばのでら測には、赤城に腰かけて、利根川で足を洗つた、デラボッヂの跡があつた。(下池)

備前堀 昔は、三友備前守が馬を先頭にして、ここを掘れと、とんで通つたといふ。この用水を備前堀といい、お茶にわかしてもらまつた。

矢島の反町の酒屋さんは造り酒屋で、この水で芳正寺を作つた。(一ツ谷)

鈴宮様由来 ヒコサシマ王は僧形となつて信州に行つて死んだ。その埋け方がいいかけんなのでそれでは可愛想だといふので、この村の人たちが信州まで行つて、一晩のうちに掘り起してこちらに持つてきて埋めた。それが将軍塚であるが、その帰途、ヒコサシマ王の持つていた鉢を矢島で一休みしたときに忘れてきてしまつた。その鉢を祀つたのが鈴宮様である。(元島名村西方中)

道祖神

寛政十二年二月吉日

元鳥名村西方中 (都九十九一 摄影)

と銘文あり
原 道祖神のはなし
道祖神はきょうだいで夫婦になつたといふ。
一人の年令は十七才ち



がつたといふ。

男のほうが道祖神で、道の神様であつた。

道祖神は一生懸命に仕事をして、その人が修業にでるときに、母親が妊娠していた。道祖神が十七年たつて来てみたら、その子がきれいな娘になつていた。

道祖神はそれまでに、これだけの娘にはめぐりあわなかつた。

二人は、夫婦になるはなしを以て、夫婦になつた。二人がきよだいであることは、のちになつてわかつた。

そのあと、二人は、力をあわせて、道を守る仕事に専念した。

お正月になると、道祖神は松や、なわ、竹をむらんの人にもらつて、かりにやをつくつて、二人は、その年の正月をむかえる。一月十四日に小屋を焼いて、またつぎの土地へ行く。そして、その土地の道を改修するのだといふ。

道祖神のことは、きょうだい夫婦といふ。

そのため、手からんでいる。(むかし、手をくんであるくと、道祖神夫婦といわれた。)(京目)

眼聖寺の不動様 いまから三百年ほど前のこと。永井姓の本家の前

につれて、いつ捨てたらそこでからウジがわいたので、拾つて来て育ててみに一人の旅僧が通つたが、馬に乗つたまま通つたので斬つてしまつた。にまつり、赤飯をあげている。(矢島)

妻沼のショウテンサンマ お札をうけてきて、テンブラを油であげて

すると本家に不魔が統くので、調べてもらつたら旅僧のたたりといふので、不動様を祀つてからなくなつた。不動様は毎年十二月二十八日

話のオチである。(下斎田)

死んだもん機 墓場の近くに小さい土橋があり、そう呼んだ。お葬式の時の材料を使用したといふ。今はコンクリートになつてある。(一ツ谷)

オサキヤ オサキ使いの家で、村はそれの家である。村ハチのよう
うにされている家で、つき合いはなかった。オサキ家のオサキは他人
の家のものを引いて行く。オサキ家の前を通る時は、唐辛子を持つて
行く。(宿横手)

二、昔話

うはすて山
むかしは、六十才になると、親をおばすて山にぶちやつ
た。あるとき、むすこが親をかこに入れてしょって行つたところ、山
へ行く途中、親は木の枝を折りながら行つたという。
聞いたところ、「おれはぶちやられるからいいけど、おまえはうちへ帰
ることができないだろう」といわれた。
むすこが「おやじさん、どうして木の枝をおしよるのだい」と親に
おくり（奥座敷）へしまいこんでしまつて、部屋を釘づけにしてださ
なかつた。
すると、あるとき、殿様から、「え（灰）で繩をなつて出せ」という
おふれがでたわけだ。
むすこは、自分ではわからないで、しまつておいた親にそのことを
聞いてみた。そしたら、親のいうことに、わらを塩水に一週間つけて
おいて、よくたたいでなつて、よくかわかしてもせばできると教えて
くれた。
むすこは、親に教えられたとおりに、なわをしつかりなつて、よく
かわかとしても、その灰の繩を、殿様のところへもつて行つた。
殿様は喜んで、「どうしてお前はそれをなつたのかと聞いた。むすこ
は、ぶちやるべき親を、山へつれて行つたが、つれもどして、うちの
おりへかくしておいた。そしたら、お上からおふれがでたので、親に
聞いて、親の教えたとおりになつてだしたのだといつた。

そしたら、殿様から、おほめのことばをいただいた。
それから、親を大切にするようになり、おばすて山にてるのを
やめにしたという。(京目)
ヨモギとシヨウブ。むかし、嫁がお節供なので、里へ帰るとき、
えらい山道にさしかかって、もう夕方になつてしまつたということで、
なんか悪者(鬼だという)に追われたと。

しゃがんでいたらば、その悪者が、たしかこの辺まで足がついていたんだけど、いつこうわからない。どうしたんだかななどいうようなこと、ひとりごとをいながら、どっかへ行ってしまった。

卷之三

そのために、五月四日に、ヨモギ、ショウブを、すみかの入口にさして、悪者だの魔物かなんかにねらわれないように、その年の安全金を祈つた。

また、ショウブ湯をたてて入ると、今の話の魔物に一年間つけねらわれないですむということです。(京目)和尚さんと小僧さんある寺の和尚さんが、用事があつて出かけることになった。おれはこういう訳で行つてくるから、よく留守番をしていろつていうことで、小僧さんは留守居をいいつけた。

そして、檀家からもらつたばなもちを本尊様にしんせておいたのを、小僧さんが食べないようにと、あれは毒だから食べるなよといった。小僧さんはわかつたといった。

それで和尚さんは檀家へでかけたと

残った小僧さん連中は、あれは毒のはすがないんだから、食べてしまおうというので、そのばたもち

おうじやないかということで、小僧さんの中の兄弟弟子が先たちになつて、そいじや、おれが責任をとるから食べようじやないかということ

で、そのばたもちを食べたということだ。ところが、食べちゃつてから、後が困つちゃつて、どうしたらいいかということで、小僧たちはいろいろと考えた。

そのお小僧が考えたことには、和尚さんが常々大事にしていた大変立派な焼物があつたんですって、湯のみが。で、その湯のみを割つちやつて、それで、和尚さんが帰つて来た。

和尚さんは、ばたもちをくつちやつたと話した。和尚さんは、どうして食べたんだといった。水が飲みなくなつたんで、和尚さんの湯のみを大切なものは知らずして、それを井戸端へもつて行って飲んだ。ところがそれをおとして、おつかいちやつた。その湯のみは、和尚さんが大切にしていたものだというから、それをかいただから、和尚さんに大変叱られるということだが、和尚さんにわびようもないから毒を食べた。

和尚さんが毒だから食へんなつていつたばたもちを食べて、それで死のうと思つた。死んじやえべいからというので食べた。

ところが、湯のみは割つちやつた、ばたもちは食べちゃつたけど、死ねねえで、みんなこういうことで、困つてゐるんだといった。小僧さんの知恵でいいのがれをしたんだが、和尚さんも、まあ、そういう事じや仕方がない、毒だから食べちゃならないよといったことがわるかつたということで、和尚さんもだいぶ後で、反省をしたつて。(京目)

(これとはべつのはなし)

和尚さんが機家からばたもちをもらつて、それを毒だといって、小僧さんに食べさせないようにした。ところが、小僧さんは、毒だといわれたがちよつとなめてみたら、

甘くておいしいものだから、食べてしまおうというので、そのばたもちを食べちゃつた。

そいじや、このいいわけができるから、あのお地蔵様の口に、あんこをぬつてしまはれていた。

そしたら、和尚さんが帰つて来て、これはどうしたんだといったので、わかりませんといった。ところが、ばたもちがきれいになくなつて、和尚さんはびっくりしてしまつた。お地蔵さんが、みんな食べちゃつたんみたいですよ。あんまりおいしそうだからつて、小僧さんがいつたんだつて。

それじや、食べたか、食べないか調べてみると、ためしに、お地蔵さんをたたいてみたんです。そしたら、「くわん、くわん」とつていつたんだつた。それで、そんな馬鹿なことはないつていうんで、寺の池へ捨てたんですつて。そしたら、「くつた、くつた、くつた」と沈んでいったんで、なるほどお地蔵さんがくつたということになつたそうです。

(これはなしをして、親たちは、くつた、くつたじやいけないですよ。ほしければ、ほしいっていいなさいつて、言われました)(京目)

スズメとツバメ むかし、お釈迦様がこの世を去るときに、動物たちが集つた。

そのとき、スズメはふだん着のままでかけつけたので、お釈迦様の二臨終にまにあつたという。ツバメは、粗末な仕度では失礼だというので、紅おろいでかけつたので間にあわなかつた。

そのため、スズメは、食べ物として穀物(米)を与えられているが、ツバメは、米が与えられずに、虫やヨウコウなどしか与えられないでいるという。(京目)

へつこきよめご むかし、あるところで、嫁さんをもつた訳です。ところが十日ばかりたつと、体の調子がわるくなつて、めしも食

べられなくなつたつて、姑さんがある日嫁さんに尋ねた。おまえさん

は、嫁に来たときと様子がちがうが、どうしたんだ。

嫁さんがいうには、わたしにはくせはあるが、許してもらえないの

で、体の調子がわるいんです。姑さんは、なんのくせかっていつたら、

実は、わたしは、へをしなくちゃいらぬいくせてすつていつたんで

す。じやしてみろと姑さんがいったところが、嫁さんは、へをひりだ

した。いくつだが、數かぎりなく、ブツ、ブツ、ブツ、ブツとやる

ので、それで、姑さんがそばへ寄つたところが、その姑さんを天井う

らへふきあげちやつた。

これじやもらつてみたところでどうしようもないというので、うち

へ行つてよく親達と相談して来いといつて、嫁におさとがえりさせら

れたと。(京目)

ところが、その嫁さんは、あんまりよく働く嫁だからといふので、

そんなことでおいだすのももつたないといふんで、いろいろとへの

利用法を研究したんだつて。

柿もぎだとか、栗もぎだとか、そういうときにためしてみたんですつ

て、そうしたところが、へが命中して、手も、柿もいらすにおとした

んですつて、それで大変助かつた。

こんなに役立つとは思わなかつた。いい嫁二だということになつた。

しかし、みんな吹つとばされるんじやしょうがないといふんで、部

屋をつくつてやつた。

その部屋で、自分のすることだけはして、一生懸命働いておくれつ

ていうことで、おさまつたといふ。(京目)

馬鹿むこ むかし、あるところに、利口でないむこさんがいた。そ

こへ嫁二さんが来た。

むこさんは、お彼岸のはたもちをもたせて嫁さんの里へやつた。む

こさんの親が、むこさん、「こりやばたもちだよ、行きながら、ばた

もち、ばたもちつていながら行けば忘れないから、そうゆつていき

なさい」といつてやつた。

むこさんは、「ばたもち、ばたもち」つていいながらいつたが、途中

に壊つこがあつたので、「どつこいしよ」つていつてまたいた。そした

ら、うつかりしぢやつて、ばたもち忘れて、どつこいしよになつちやつた。

嫁さんの里へ行つたら、「なんたね、今日は」つていわれた。「どつ

こいしよ持つて来たがね」つてゆつて、ばたもちを渡した。

(親は子どもに、だから、そういうふうに、馬鹿むこになつちやつたから、勉強しなければならないよ。勉強しないと、どつこいしよになつちやうよつていわれた。)(京目)

食べてすぐ寝ると牛になる。いわれ 孔子さまがね、子路と顔回を連れ散歩したつていうんです。そしたら馬小屋から、馬が首を出して

いたつてね。そしたら、孔子さまが、それを見て、ああ牛がいらっしゃつてね。そしたら、顔回が、ああなるほど、牛がいますねつていつたんだね。そしたら、子路にはそれが判らねえで、どう

にも判らねえで、うちへ帰つて来て、ありや馬だにな、どうして牛になつたつてね。御飯食べちゃ、こう寝て考えたんだつてね。それで牛つていう字を、いういうに書いちや、こうやつて考えたんだつて、そろ

したら、牛つていう字の頭が、ちょっと上にぬけたら牛になつたつていうんだね。そしたら、ははあ馬小屋から牛が首つん出していたんだね。

牛になつたんだつて、子路つて人が考えたんだつてね。それで食べちゃつて寝てるといふと牛になるつて話は、ここから出たんだつてね。おふくろから聞いた。(下淹)

火の玉に追いかけられた話 わしが二十才位のときのこと。ぶつ

ちゃんと横手の盆オドリに行こうといふで離子の音をたよりに出かけた。横手に着いたら盆オドリはねえ。中島だんべと中島へ行つたら、

ねえ。じやア板井の方だんべといつて歩き出した。中島から板井へい

くところの堤防の雨あたりに来たら、いつしよに来たぶつちゃんが「お

めえ、うしろ見ろ」といったから、うしろを見たら、おれのうしろに火の玉がくついていた。ふたりは夢中になつて板井の方へ逃げだした。約二町位走つてやつと火の玉からのがれた。はあ帰るべといふことになつたが、もと来た道を帰るわけにはいかねえ。そこで倉賀野に出て汽車に乗り、高崎まで逃げ帰つて來た。(島野)

死の予兆 堀さらい(野堀)をしていて、皆がセリをみつしりとつた。その人は何となく気が沈んでいた。友人が「遊葉山に行くべえ」とさそつたが、返事をする気にもならない。すると友人は腹を立てて、「明日おだぶつの用意だんべや」と皮肉つた。やはり氣が重くて反撥する気にもならない。家の近くになると、従兄が待つていて、弟の戦死を伝えた。弟は昭和十七年四月十一日に戦死した。弟はお袋のお宝であつた。不思議なことなので今でも忘れられない。(西島)

空氣枕の話 従兄弟と二人で元日の伊勢参りをしたことがある。長旅には空氣枕が良いというので、叔父御から借りていった。帰りに奈良、京都を見物し、京都から汽車に乗つたが、生憎の静岡どまりであつた。夜中の十二時頃だったので廻廊見物に出かけた。土産や荷物を持つたまま歩いて、コーヒー店で気がついたら、空氣枕だけなくなつてた。高崎駅に着いたら、靴式ができぬといふので、親戚の者が待つていた。叔父御が死んでいた。空氣枕の無くなつたと同時刻頃で、今でも不思議である。(西島)

めしが仕事をすること 旦那が、日よとりに、米のめしが仕事をするといった。

そしたら、日よとりは、むすびをつくつてもらつて、はたけへ行つて、えんがの柄に、むすびをしばりつけておいて、自分は遊んでいた。うちへ帰つて来て、旦那に、めしが仕事をするといふので、むすびをえんがの柄にしばりつけておいたけど、むすびは、ちつとも仕事をしなかつたと、いつたという。(島野)

いたさんはなし いたさんという人がいた。この人は、世間中の

ことを、よく冗談にはなす人であった。

そのため、この人ははなしのことを、いたさんの話しじやといつて、信用しなかつたという。(島野)

コトコトとキユウ 西島の一番地に反町久藏さんが田園にいくと、ゲエロ(蛙)が「コトコト」とないでいた。「畜生、おつかあを呼びつけにする」と怒つて、ゲエロを踏みつぶした。そうしたら「キユウ」とないな。

道の尋ね方と教え どこの人だか、帽子をかぶり、ほっこばかりをしたまま、ある人に道をたずねた。

道をきかれた人は、まつてくれ、わつしもうちへ帰つて、帽子をかぶり、ほっこばかりをしてくるからといった。(京目)

長いはなし (子どもが、長いはなしをしてくれといふと)

天上から、古ふんどしがさかって来て、たぐつても、たぐつても、

ひっぱつても、ひっぱつても、たぐりきれない、といふ。

(子どもは、そんなに長いはなしかいといふ。いつもひっぱつてもきれねえから、ながかんべえといふ。子どもは、おしまいといわないうちにねむつてしまつた。)(京目)

長いはなしのことは、乞食の道中といつた。

ふだん、長話をしていると、「そんな長っぽなしで、ぐれだることをいつてない。乞食の道中じやあるめえ」といわれた。(京目)

長いはなしをしてくれといふると、天上から古ふんどしがさかつて来て、いくらひっぱつても、するするするするするするするするするする……さがつて来たたといふ。

聞いているほうでは、もうそのくらいでたくさんだといった。 (島野)

短いはなし むかし、おじいさんとおばあさんがいて、歯がなくて、いたさんはなし いたさんという人がいた。この人は、世間中の

むかしばなしの結語 はなしが一段落つくと、「市がさけ申した」という。きりがつてよかつたとか、ほつとしたというときには。(京目)

二、命名

姓 村の姓は、南に田口、木暮の姓があり、北に關根、中央部に大体加藤がある。一番多いのは田口姓である。

田口の先祖は箕輪の戦で負けて落人になった。その時背負って来た虚空蔵様を旧九月十三日にまつっている。このイッケは、ウナギは食べない。地名にも現在、コクウゾウウラといつてある。

中島は株名神社の氏子になつていて、神社の御眷属がカニであるので食べない。(中島)

田口姓 キュウリは作らない。七夕はしない。赤飯は作るが竹は立てない。農休みには、うでまんじゅをする。(中島)

西島の姓氏 反町、永井、平林、内田、大谷、小板橋、北田がある。反町姓が一番多い。永井は矢島に多く、古い家柄である。平林は西上州ではここだけにある。(西島)

あだなたいこつきつあん 太閤のように賢こかった。ちやらんばらんいつもそんなことは雜作もない、わけやないといつていた。伊勢参りに行つて、宿屋で雪の降る晩に死んだ。(下流)

のつびよくりん カツとすると何のわきまえもなくやつてしまつような人のことをいう。いすか野郎ともいつた。(八幡原)

ものわすれする人 かけすという。カケスは、ものわすれする鳥だという。(島野)

笠松 大きな笠のよつ形をしているのでいう。

県の天然記念物。森原の八木さんの所有。枝が伸びるので、家を三回引いたという。水が切れるというので、草をむしらない。松の占め

る地面は、百五十坪もある。松はかつて、前橋様におさめたが、管理が大変なので返されたといふ。森原は幕府の直轄領であった。(西島)

白髪大夫 梨の木につく毛虫のことをいう。これがズウになつた頃をみて、つぶして、その糸をテグス(釣り糸)にした。(一ツ谷)

四、諺・慣用句・謎

(一) 謺

○年寄育ちは三文安

○早起きは三文の得

○惣領十五は貧乏世ざかり

○大苗に豊年なし

○親の意見となすびの花は千に一つのむだがない

○雪は豊年のしるし(きざし)

○木もと竹うら(木を割るときはもとのほうから、竹はうらのほうから割ると割りやすい)

○米は山から(稻の種子のとりかた)。この辺では、むかしは、穀種は室田へとりに行つた。冷えていた田の穀を種にしろといつた。うちの田の穀を種にする場合には水口からといった。

○米は出穗のころに暑いのがいいということ。お

そ秋まで照ると米はとれるといい、秋が早くくると、米はとれないといふ。

○小麦を干す庭を貰すものではない(小麦は乾燥するとがさが減る、盗まれたように思われる)こと。

○布子田植は米がとれる(寒いときに植えて、そのあとが照れば米がとれること)。

○苗半作（稲作りは、苗が大事であるということ）。

○秋茄子は嫁に食わすな（秋茄子は美味であるといふ）。

○名主のあとはいもばたけ（名主をやつてると、出費が多く没落してしまうということ）。

○八十八夜のわかれ霜（大体、八十八夜の頃になると霜の心配もなくなるといふ）。

○二月のからっぽたけ（旧二月の麦畑はあまり青々としていないほう）。

○麦はとれるということ。（ねぎは日影だととけてしまふ。日影は育たないといふ）。

○馬鹿の深植（稲は深植はわるい、分けつしない）。

○彼岸すぎての麦の肥、土用すぎての稲の肥（これは追肥のこと、このころに追肥をやると、あおさのおそれがある）。

○まがり八石、くねつて九石（田植のときにまがつて植えても、余計とれるといふ）。

○まかぬ種ははえぬ。

○朝雨には笠をぬけ（朝雨はすぐ晴れるということ）。

○朝雨と女のうでまくりにはたまげるな（両方すくやむということ）。

○麦を十七を刈れ（麦は若刈りがいいといふ）。

○桃栗三年柿八年、ゆずの馬鹿めが十八年（それぞれの果物の植えてからなりはじめの年のこと）。

○物臭者の節供働き（モノビのよくなきに仕事をするところのようにいわれる）。

○夕焼けに鎌をとげ（夕焼けは天気になるしるし）。

○夫婦げんかは火もくわない。

○秋風と夫婦げんかは、日が入りややむ。

○秋妻は六十年の不作。

○朝寝坊のようつぱり

○朝酒はかかる質においてものめ（朝酒は早くまわる。安あがりであるということ）。

○風とお客様は日暮にやまとまる。

○あさひやはその日の洪水（朝焼けのときには、晚方雨が降る）。

○後家とすぐじは誰がしてもよい。

○米の飯と女の肌は白いほどよい。

○酒飲みは半人足。

○居候置いてあわす、居てあわす。

○里ばら七日（嫁が里へ帰つて、沢山食べてくること。嫁は嫁ぎ先では、釜ざらいばかり食べていて、さんざくえないといふ）。

○三人寄れば文殊の知恵。

○地獄の沙汰も金次第。

○地震雷火事おやじ（おそろしいことのたとえ）。

○自分のほんのくどは見えない（うしろには目がないともいう。自分ほんのくどは見えないやつというが、それは、自分のわからないこと、自分を見る目的のないことのたとえ）。

○姑のあとは嫁がつぐ（嫁はその家庭にそまつていくこと）。

○似たもの夫婦。

○重箱の隅を揚子でほじる（こまかい人のたとえ）。

○正直な者が馬鹿をみる。

○正直の頭に神やどる。

○正直は一生の宝。

○上手の手から水がもれる。

○能あるたかは爪をかくす。

○純りや貧する。

○陽気八月子三人（この場合の八月は旧暦のこと。）

（二）いう状態がい

- 嫁は吉所からもえ
○ぬか三升もつたらむこにでるな
○大類へ嫁に行くか、はだかでばらしう
○後朝倉女によい、男後生糞ねてまわろ
○上州名物、かか天下にからつ風
○イモはかけの依（イモは、米のかわりになるといふこと、むかし、米見の役人が米たときに、イモは依にしになるといふこと、むかし、米見の役人が米たときに、イモは依に数えられなかつたといふ）
○十日夜は大根のとしとり
○入梅は梅のとしとり
○十五夜にくもりあれども、十三夜にくもりなし（十三夜にくもれば、ムギはとれないといふ）
○師走女に盆坊主（これは、忙しいことのたとえである。とくに十二月は、正月の準備で、女の方は忙しいといつた。）
○死なば十月なか十日（この頃は陽氣がいいし、農作業も一息つくし、いい時期だといふ。この時期になくなつた人のことは、ごせいにんだという）
○親のわかれはしても、（のう）のわかれはする（田植のときは、親が死んでも、仕事は休むなといふこと。）
○見葬礼火事見舞、そのほかよい・ふだんぎ（着物をあまりもつてない人のことをいふ）（京目）
○秋なすは嫁にくわせるな（秋なすは味がよいからだといふ。）
○うだつがあがらない（身上などあまりぱつとしない人のことをいふ。）
○なえ半作（稲のよしあしは、苗できまるといふこと。）
○土用布子に寒帷子（なんでもほしがる人のこと、欲の深い人のこと）
○もうもんなら正月のともらいでもいい（欲の深い人のこと）（島野）

〔二〕慣用句

- 「ほんのばたもち、しから米だ」
○「ほんのばたもち、嫁としゆうとの仲なおり」：この頃は、あついのでばたもちがすえやすい。そのため姑が嫁にばたもちをくえくえといふので、ふだん仲のわるいよめとしゆうとも、このときばかりは、仲よくなるといふこと。（島野・「ツ谷」）
○わからないことをいふと、「おつけで顔を洗つてこい」といわれた。（島野）
○「長話はお庚申様の晩にしろ」といふ。
庚申様の晩には、一晩中、しゃべったり、食べたりして、夜をあかした。（京目）
○いそがしいときに長話をしていると、あの方は、益も正月も知らなといわれた。（島野）
○あつといったのが、命のしまい。
○ばちは、太鼓の真中ばっかりに当らない。
○川に、ふたはねえぞ。
○話にもりかえなし。
○あいはこうや（紹屋）の使いもの。
○うんとまたいで、くそをひれ。
○だまつてだんすけ。（下池）

○畠で鼻たらしているものなーに 線(下淹)

五、方 言

かがやく あつちこつちさがすようなことをいう。これは、きまつた仕事でないときには。

あてもなくさまようような場合にいつた。

なにか、さがすときに、たしかここにあるはずだと思つてさがすときには。かがやくといふ。

おやけしい 「おやけしいようだ」とか、「おやけしかつたのう」といつたりする。

これは、せいせいしたとか、きまりがついたということ。
うばすて山 六十才になると、「うばすて山だ。そんなにがつがつしなくともいいや」という。(京目)

ひめこ かたのないかいのこと。

あとしやりする わこのかんぶくろという。

ねこに袋をかぶせると、あとしやりをするのでこういった。身上がさがる人のことをいつたもの。(島野)

ベンケイ・ヨシツネ・クマガイ かぶと虫のよび名。

シラジムシ・ヘッコバッコ ありじこく。

ギス きりぎりす。竿に味噌をつけつる。井野川向うにはギスがいる。堀込の方にはいたが、こつちは天領だからない。

ヤンブン 大きい源氏はたる。

コウロギ 「かたさせ、そさせ、まんじゅやのけつさせ」と鳴いた。

オテラノサラバ 真黒い大きな蝶。柑橘類に卵を産みつける。

オーグマン すすめばち。
ハギムシ 体全體がとげで、青い。刺されると蜂より痛い。萩に一番いる。後までしびれる。

ツチグモ 木の根のところに巣を作つてゐる。とつてひばりの糞にする。「ツチグモツチグモ、下が火事だから上あがれ」という。(下淹)

カマギツチヨ トカゲは全身があざやかで美しいが、土色をしたトカゲをカマギツチヨといい、トカゲとカマギツチヨと分けている。

ハトリババア カマキリのこと。(八幡原)
カマキリのこと。蠅取り婆あさんという意味。(宿横手)

ハチツビラキ ものもらいのこと。(八幡原)
アグガヒアガル 金が一錢もなく、めしが食えなくなったことを「アグガヒヤがつた」という。(八幡原)

グがひやがつた いう。(八幡原)
アグガヒヤがつた」という。(八幡原)

郷土芸能

一、獅子舞

(一) 下滝の獅子舞（旧滝川村）

系統

一人立。稻荷流

由来 藤岡市大塚の獅子組から伝えられた。毎年春三月十五日と秋の九月九日の祭礼に奉納してきた。終戦後田代七さんの努力で再興され盛んに行われたが、昭和五十年に舞つたあとやつてない。

カシラ 雄獅子のカシラに当る二個を「ホウガン」といい、雌獅子に当るものを「中獅子」と称している。いずれもウルシ塗りである。ホウガンは角を一本立て黒ウルシ塗、中獅子は朱塗りである。いずれも頭上にニワトリの羽をさし、トブサは紅い布を用いている。ホウガンは高さ一六・六センチ、奥行き二五・三センチ、中獅子は一五・三センチと二四・五センチである。

構成 カンカンチ（おかめの面）一人、ホラ貝一人、棒使い四人、太刀一人、花笠二人。

曲目 ばかり、まり掛り、道ゆき、大門掛り、沢入り、太刀掛け、花吸い、綱切り、橋掛り、雄獅子隠し。

実演 道ゆきで天田莊氏の家にゆきその庭で舞い、つぎに区長の家へゆき、あと希望した家へゆき舞う。赤城神社の境内と、寺の境内でやる。

持物

腰太鼓は桶胴で、直径二七・一センチ、高さ二四・五センチ。

撥は二三・五センチ、カンカンチは朱房がついており、二三・七センチある。棒使いの棒は一八三・七センチ一本、一二七・七センチ一本、本太刀一〇一・五センチ一本である。裏め唄は下滝の井田政男さんが伝承している。

(二) 萩原の獅子舞（旧京ヶ島村）

系統

一人立。

由来 川端林次郎氏所蔵の「文化十四年丑八月吉日、獅子舞仕立奉加寄帳」によると、萩原村鎮守の両八幡宮、牛頭天王宮祭のため、獅子舞を奉納したいと、村中協議の上高崎藩役所御知行所へ伺ったところ許可になり、文化十四年八月十五日に獅子一切が完成した。そこではじめて獅子舞を実施した。そして両八幡宮、天王の宮、別当所徳藏寺、御料、私領の村役人のところ残らず舞い納めた。但し、村役人でも退役した家は除き、その後任の家で舞つた。祭礼当日に限らず、目立つ服装は決してしない。また大酒、口論など互いに慎んでやることを申合せた。以上議定証文一札を定めたものを藩と大名領の役所に呈出した。いまその原文を掲げる。

儀（議）定証文一札之事

一、当村鎮守両八幡宮、牛頭天王宮為祭礼獅子舞二て祭度旨村中一同相談之上高崎御役所御知所御役所御窓之上御聞済被下置、当子十月十五日出来致候事相違無御座候、然ル上ハ祭礼当日獅子舞納候場所両八幡、天王宮並別当所徳藏寺、御料、私領村役人不残舞納可申候。且（但）し村役人之内致退役方ハ是又相除可申事。勿論後役勤候方ニ而舞納可申候。尚亦祭礼當日何ニ不限見立候衣服迄決て着用致間



下流の獅子舞の棒使い
(萩原 進 撮影)



萩原の獅子舞組の人々
(萩原 進 撮影)



萩原の獅子舞、創始の古記録
(萩原 進 撮影)



下流の獅子頭
(萩原 進 撮影)



下流の獅子頭と腰太鼓
(萩原 進 撮影)



萩原の獅子頭（前獅子）
(萩原 進 撮影)



萩原の獅子舞記録の一部
(萩原 進 撮影)



萩原の獅子頭（後獅子）
(萩原 進 撮影)



萩原の獅子頭（ホウガン）
(萩原 進 撮影)

數事ニ候。都て大酒口論等相
互ニ嗜可申候。如斯相極申上
は相背申間敷候。為取極一札
依て如件。

文化十四丑八月日
歲行司

勇 多
吉 藏
十兵衛
惣若者中

私 御知所
御役人様

このほか獅子舞についての申
合せ事項を議定書として遺して
いる。

儀（議）一札之事

一、祭礼当日獅子舞初之義は別
当所より舞初體当年此之通り
候ハ、翌歲は南之相週り、次
第不同、口論無之様可致候。
八月十五日之義は検段（断）
の御方御出役有之候ハ、其時
之宜敷ニ可致候。其後ニ当り
たり不足之義申間敷候。為後
日如此ニ御座候。以上

勇 吉

一、時々取締りヶ条出来候ハ、帳面二写置、祭札帳面不残行司急度渡
へく候。以上この次に、「獅子仕立奉加写の帳」がある。毎戸から獅子舞一式を整
えるため醸出した費用明細書がある。ある者は米や麦で、ある者は現
金で出している。その支出の部をみると

武 兵 衛

一、金武両壹分

獅子頭
ほかん

一、金武分文朱六百文

太鼓三つ

下瀧村御若衆様六人月札

一、銀拾三匁

志論布式反

一、九百文

たちつけ仕立貢

一、四百文

同、染代

一、金式朱也

福寿院延紙八百枚札

一、銀三匁三分

花笠水引三尺

以下酒代、肴代、ろうそく、白米、草履、足袋一足、醤油、そうめ
ん、針、麻、赤ね黒、祭入用で合計で六兩武分と七百武拾文となつて
いる。この資料は、獅子舞関係の文書としては他にあまり遺されてい
ない点で貴重である。

一、獅子舞納候節別当所にて獅子受取之事、獅子道具御輿番の若者翌

申事
年御輿番組合若居者罷出、別当所にて急度受取波シ仕置候。若ふん
ち(し)つのしな有之候ハ、直又改出し、品々極^{きわ}通預り置へく者
也右之通ヶ条を以取究候上ハ、何ケ様之六ヶ敷義出来候得共、祭札目出
度相すむ様可仕候事。若ケ条之義相背候もの有之候ハ、村中一同相談
之上宜敷様ニ仕へく者也

文化十四丑八月吉日

年行事

カシラ 桐材で作る。ホウガンの前獅子と後獅子は巾一一・五セン
チ、奥行一八・一センチ、高さ一九・二センチで黒ウルシ塗りで頭上
に鳥の羽をさす。頭に二本の角があり、前獅子は平滑であるが後獅子
はねじり棒型である。雌獅子は巾一〇・八センチ、奥行一八・三セン
チ、朱塗りである。双方とも塗は古いままで最近特に彩色していない。
雌獅子は角の代りに宝珠を載せている。曲目 大門があり、新切（上の切、中の切、下の切と分かれる）、花
吸い（上・中・下の切）、三拍子（同前）、まり（同前）、梵天（同前）、

勇 多 藏

橋渡り、沢入り、剣の舞、一重、網切り、雌獅子隠し、社前切、道下りとなつてゐる。

腰太鼓は桶胴で直径二六センチ、高さ二二センチあり、雌獅子の腰太鼓の帶は赤色を用いる。太鼓の皮は左三つ巴が描かれている。上演月日毎年三月十五日と十月十五日の八幡神社の祭礼にやつたが現在は休んでゐる。

獅子唄　沢入りの剣の舞と雌獅子隠しに獅子歌があるので、つぎにそれを掲げておく。

獅子共よいかに女雄獅子が恋しくとも、よられわれらに剣かそよ、剣かそよ。

獅子共よいかに剣が恋しくも、よられて返して遊ばせ獅子共、遊ばせ獅子共（以上沢入りの剣の舞）

朝霧に女獅子を隠されたよ、かくされたよ。

霧に女獅子を隠されて、心ならずして来る獅子かな、来る獅子かな男獅子こそ恋路の道に憧れて、沢を登る恋の唄よみ、恋の唄よみ笛吹きの匂い袋の繩が切れて、しやこがこぼれて匂いらむしや、匂いらむしや。

真事に宿世の神なれば、女獅子男獅子を結び合わせろ、結び合わせろ

天竺天のあい染め川原の端にこそ、宿世の結びの神のたりか、神のたりか、南無楽師思いし妻に合わせてたもれ、錦のみと帳かけてまいらしよ、かけまいらしよ。

薬師の御夢想はやめて候、あら花がくれに見ゆる嬉しや、見ゆる嬉しや。

奥山の松にからまる葛草は、縁が切れればほろりほぐれる、ほろりほぐれる。

太鼓の胴をきりりと締めて、ささらをさらりとすりがおさめた、

すりがおさめた

天神林の梅の木に、蓄さかりのきよく葉そはしよ、きよく葉そはしよ

われわれは大山育ちの者なれば、お山ではやる天狗拍子やろ、天狗拍子やろ

われわれは大山育ちの者なればあや拍子やろ、あや拍子やろ

ささらの神は文殊にござる、文殊のお好きの獅子拍子やろ、獅子拍子やろ

ささらの神は文殊にござる、文殊のお好きの三拍子やろ、三拍子やろ

京から下りの唐絵の屏風、ひとえにさらりと引きやおうせた、引きやおうせた

曲目にはいわゆる興舞のものが多く、一つ一つが剣風になつていて、

神事舞は一重振り込み、新切り、道下り、仕舞切りで、他は物語をテーマとした興舞に属している。

現在の座員

渡辺 善作 (83)	田口 太治 (81)	土田 寛吉 (75)
江黒 実太郎 (70)	江黒 精一 (70)	八木 竹雄 (68)
八木 精寿 (67)	松本 太郎 (64)	井田 三郎 (63)

一、神 樂

八幡原の神樂

系統　里神樂。

由來　藤岡市立石の神樂から伝授された。大正十三年頃という。それまでは八幡神社の祭日に他所からきて神樂をやつた。現在公民館に

櫃に収めて保存されている。全部青年団の手で上演されてきたことが記録でわかる。大正十五年二月二日には二十四名でやっている。昭和九年四月十五日に玉村八幡宮祭典の際の舞子連名簿もある。そのほか、昭和六年十月九日、同十一月三日（陸軍岩鼻火薬製造所）、十一月六日と連続してやっている。昭和七年四月十五日、同八年三月十五日六十名でやった記録もある。

面の種類と數 狐（二面）、天狗、天手力雄命（二面）、天綱女命（三面）、おかめ、ひょっこり、エビス、白髪面、八幡大神面、思兼命、大山祇命、白式尉、黒式尉など一九面ある。材質は桐材を用いている。特に翁の面は高さ一九・九センチ、巾一五・二センチ、厚さ一・七センチのキリ材を用いたものであるが、これは「さこまい」（撒米）



八幡原神楽面
(萩原進撮影)



神楽殿（若宮八幡境内）（八幡原）
(板橋春夫撮影)



八幡神楽の翁の面
(萩原進撮影)

の舞のときに用いるという。また五人舞のときに用いることもあるといふ。撒米の舞は儀式舞であるから、それに式三番が形を変えて混入したと思われ、貴重である。

道具の包み紙に「御冠、鳥帽子、翠簾、錦旗、神楽面、樂器、神祭具、式調進所、東京神田区淡路町武丁目二番地、御装束來師増田英治」とあり、神田で購入したことわかる。衣装は地元の婦人会が縫ったそうである。

座の構成と曲目 一二三座あり、昔は全部やれたが今は七・八座となり、現在はほとんどやれなくなつた。神楽組合長は鈴木勝雄氏、笛松本武夫（60）、鈴木勝雄（55）、太鼓萩原徳治、太鼓は原田青弥の皆さんがやれる。



(萩原進撮影)

神楽殿の天井には、しめ縄を四角に張り、さらに対角線二本張つたものに、それぞれ四垂をつけるが、周囲は白の四垂を、対角線には赤、青、黒、黄の色紙の四垂をかざる。舞の場を神聖にするためのものである。なおこの神楽の装束で特長的なことは、舞人がそれぞれ頭に長い毛でできたかぶり物のカツラをつけることである。これは能などに見られるもので、シャクマと似たものとみればよい。色は黒と赤とある。この長い毛のカツラを垂らし、面をつけて舞うが、この装束は他にあまり例を見ないものである。なお道具目録をみると、面一九面のほかに、衣裳と道具としてつぎのものが記されている。

天狗衣裳	一枚五行人衣裳	八
姫衣裳	二枚	ツ
白下着	白衣裳	カ
大鼓小鼓	五枚	ラ
鉦	一組	カ
太刀	二丁	ス
五組	一振	（萩原進撮影）
張幕と中綿	一枚大太鼓	（弓一矢四）
大鼓小鼓	各一	一丁
張幕と中綿	一枚	一一



天田ミトさん
(萩原進撮影)

下瀧の天田ミトさん(九十四歳)を訪ねて田植え唄を採集した。明治十七年十一月十七日に旧京ヶ島村の柴田家に生れ、下瀧に嫁いだ人であって、特にこのヤアハノ系統が好きで今でも覚えているという。この地区でヤアハノ系統の田植え唄が採集できることは、利根川を越して対岸にもあってきたことを知ることができた。

夕暮れに、浜辺をぬけばや

アハノ千鳥鳴

千鳥鳴くまた
千鳥鳴くまた
アハノ千鳥鳴

ハノ声くらべ
玉村の、女郎

御鏡	一	五行人の台机
大長持	二	冠箱
杵	二	扇
冠箱	二	横笛
小長持	一	樹
田植え唄	一	一
三、民謡	一	一
(一)	一	一



桜井寿雄さん

(荻原 進撮影)

と寝てハアハノ

なにもろた

さなぶり(田植えの終ったあの宴會)のときに覚えたという。(京目)

かさとひぜんと

ヤアハノ恋の文

十七が、向かい

で招くヤアハノ

陽が長い

わが身を橋にし

てヤアハノ渡ら

しょうの

十七が、柳の下

でヤアハノ糸をよる

糸をよれば柳が色でヤアハノよれかかる
哀れさよ、八百屋お七がヤアハノ火のとがで

火のとがで、こがねの原でヤアハノ身を焼かれ
このほかにも多くの歌をうたつたらしいが、この日はこれだけ採集
できた。(下池)

また京目で桜井寿雄さん(七十八歳)からも田植え唄が聴けた。
朝露は、むすめの裾にヤアハノ恋やどる
恋宿る、朝陽照らされてヤアハノ泣別れ

今日の日の、時打つ鐘はヤアハノ幾つ打つ
幾つ打つ、七つも八つとヤアハノ九つも
夕暮れに、かもめはどこへゆくヤアハノどこへゆく

ねぐらをさしてヤアハノ暮六つよ
また「おさなぶりの唄」として

今日の田の、ことなくすんでヤアハノ
万作よ、万作よ

ことなくすんでヤアハノおさなぶり

をうたってくれた。二十歳頃までうたつたという。高崎市の佐野でお

さなぶり(田植えの終ったあの宴會)のときに覚えたという。(京目)
上島名の開敏次郎さん(80)三友寛十さん(75)からも田植え唄が
きかれた。

十七が、今年はじめて田を植えて、しかもその田の出来のよさ、
丈が七尺穂が五尺

夕暮れに、浜辺をゆけば千鳥鳴く、千鳥鳴け鳴け声くらべ(合の
手を略す)

いずれも、人のうたうのをきいて覚えている程度で実際には田植え
に歌つたことはないということであったが、その存在は確認するこ
とができる。(下島名)

「十七が向かいで招くヤアノ、橋がない。橋がない。わが身を橋に
して渡らせよう。」

歌う人も植えているが、歌の調子が早いので、一人分ぐらい能率が
あがる。
「夕べ浜辺を行けばヤアノ、千鳥鳴く。鳴け鳴け千鳥、声くらべ。」
女衆は十人も並んでいすれもゆかたに五尺帯を締め、お太鼓帶を
しょいあげてたすきをかけた。たすきと腰巻は同じ色にして、桃色が
多かった。(大沢)

〔二〕 麦打ち唄

桜井寿雄さんがうたつてくれた。赤城山麓系の麦打ち唄である。

浅間山から鬼がけつだして
なたでぶつきるような屁をたれた

ブツコメ ブツコメ

おばばどこ行く ヤレ 三升樽さげて

嫁の在所へ ヤレ 孫抱きに

ハイ ハイ ドッコイショ

巡査だまして免職させて、車ひかせてわしが乗る（京目）

(三) 桑もぎ歌

董上れば沼田の城下 連れて行くからしんばしな（京目）

(四) いなりとう節

八木節になる前の俗に「三段落し」といわれた盆踊唄で、前橋の増田の稲荷藤という師匠が来て教えて大いに流行った。これも桜井寿雄さんの十七歳から二十歳頃のことであった。その中に堀込源太節が入ってきてやめになってしまった。櫛を使わず太鼓を用いた。声自慢で萩原の八木国藏という音頭取りがいたが川向こうの竜門でうたつてこちらで聞えたそうである。「鈴木主水」「八百屋お七」などがうたわれた。

富士の白雪や朝日でとける、トントントン、とけて流れて三島の宿へヨウ、三島女郎衆はやれ水化粧

巡査だまして免職させてね、車引かせて、ちよいとわしが乗る
ちよいみたときや、させそでさせない、ひろげてさせないやぶれ
傘よ

上京目の前記の関教次郎、三友寛十の二人も、八木節以前の三段落しを歌ってくれた。

土地の屋根屋さんで石原四十七という人がいて三段落しが上手だったそうである。越後から来た人とのことである。その一つに
ハイ、猫が鼠とりや、鷺やドジョウをねらう、とんびがカエル
をねらう……
といったものもあつたそうである。八百屋お七、鈴木主水がよく歌われた。（京目）

四、山 車

(一) 京目の山車と囃子

京目には上京目北小路、上組、大河原組、中小路、下小路にそれぞれ一台ずつあり、平素は個人の家を借りた屋古藏に分解して格納しておく。中小路のものは昭和六年に前橋の彫刻家村山琴泉に八〇円で彫物をしてもらつた。もちろん一部改修したものである。最も新らしいのは大河原組のものである。終戦後高崎市の宮元町に貯したとき組み立てたままでその後は解体したままである。こんど調査で十月九日に久しぶりに一台だけ組立てて町民に披露した。一部は戦時中シンガボール陥落のときに組立て写真に写して戦地に送つて喜ばれた。



下京目（下小路）の山車
(萩原 進撮影)

(二) 萩原の山車

二台あり、解体して収納したままになつている。紀元二千六百年祭の祝のときに前橋市石倉に行つて引いたのが写真である。囃子は主としてサンテコである。

このように、現在は文

字通りお倉に入りにされてしまつてゐるが、かつて地域の総力によつて莫大な費用を投じてやつた祭りを今再現することはむずかしいであらうが、貧しい中にも村あげての行事として、こうした山車を出しての祭礼についてはあらためて現時点から再検討をしてみる価値はある。

なお、昭和三十六年に刊行されたところの『京ヶ島村誌』によると、京目の山車について次のように記している。
京目の山車の由来は極めて古く、今から凡そ二百年前に出来たものにて、初めは担ぎ屋台といい、数人にて担ぎ歩いたものであったが、明治の世代に入り三度び改造修理されたとい。その第一回は明治十二、三年頃であつて、改造の是非を提案したところ内賀否一派に分れ大変な騒ぎであつたが、結局（局）は改造することに決定さ

れたので、相談の結果

總拂造りとした。わけても彫刻には念を入れ、當時埼玉県龍原の名彫刻師玉の井源太郎氏と高崎の堀金両氏によつて刻まれ、見るからに立派のものである。特にウルシ塗りの合（格）天井の如きは

三拾五円という多額の金円を投じたとか。總改造費当時の金子にて百八拾円余という莫大な経費を要したとい。その後五京目にあ

る各台全体の改造は明治四十年頃であつたが、それ以来というものはどうしたことが一度も祭りに引き出しがないとい。かくの如き由來を有つこの山車も、戦捷祝とか豊年の時とかに一たび引き出す祭りとなると容易のことではなく、それには先ず道路を修理するという段取りで、村民総出でこれに当つたのだといわれる。それ

で毎々山車を出すことになると鉦、笛、太鼓等のそれぞれの流儀による練習が並大抵のことではない。何でもかまわぬ御祝儀祭り氣分を出す所謂「ばかばやし」で、當時「オティイコ」といい、四ツの太鼓を鉦と笛に合せてたくさんのである。又芸能的（玄人向き）な趣味を目的とする「サンタイコ」（萩原注 サンテイコのこと）といのがあつた（これは太鼓一つ）。かくてその優劣を競うということに最大の祭氣分があつたのである。そして亦祭りの前後兩日は、重量ある山車なる故京目の人々だけではこれ引き廻すことができず萩原、大沢、元島名、島野等各字から助労（応援）といふ大勢の人々が来たのであるから仲々の腰いがあつたわけである。因に萩原にも当時三台の屋台があつたが、京目の方より良く出来てあつたとか、その上祭の時には御輿、猿田彦等まで出る本格的のもので、大変な賑かさであったといふことだ。なお山車改造の時とかその管理等につき関係の深かつた責任者は次の通りである。

桜井仙太郎

政平

清水 藏作

三郎

五、地蔵和讚

和讚 以前、毎年七月二十四日から八月二十四日まで、主として夜間、子どもたちが地蔵尊を納めた輿をかついで村を巡回したときのもの。（昭和三十六年刊・京ヶ島村誌より・同書には「念佛」となつてゐるので、そのまま筆写した）



萩原の山車（萩原撮影）

お茶念仏

きみようちよらい、此のお茶は新茶か古茶か旅の疲れで呑み知らず、これもお地蔵の縁の茶とよなむあみだ仏。

立ち念仏

きみようちよらい、地蔵尊提灯茶拿さしかけて、笛や太鼓に鐘を入れ、三にお地蔵のお立ちあいとよなむあみだ仏。

村念仏

きみようちよらい、此の村は松の松とて三本ある松は何松姫小松、もとにつけたの葉からませて、中にうぐいす巣をかけて、お村繁昌といつも鳴くとよなむあみだ仏。

辻念仏

きみようちよらい、地蔵尊何がしよがんで辻につ、何もしよがんじやないけれど、あまり世間がじやけんさに、念仏す、めに辻に立つとよなむあみだ仏。

富念仏

きみようちよらい、此の宮は伊勢か熊野かお三島か、やしきやしろにはらよいほらよい、九十九社とよなむあみだ仏。

寺念仏

きみようちよらい、此の寺は一にだいもん仁王門三に山門四おう堂五せのわきには立地藏七堂がらんのほりものは奈良の都の八重桜とよなむあみだ仏。

七ツ子念仏

きみようちよらい、七ツ子が今年初めて田を植えて、しかもその田の出来のよき、たけが六尺穂が五尺、あたらこまにやはいちでいやほで、一石あるならば是のおせとに倉七ツ、倉の番使は誰がする、一にこすすめ二つばき、三つうぐいすほととぎす、となむあみだ仏。

十七念仏

きみようちよらい、十七が晩小屋で西に向いおがもとすれば、雲から雲霧じやけんな者はない、雲はじやけんでないけれど、心がじやけんであがまれぬ、とよなむあみだ仏。

通り念仏

きみようちよらい、我々は笛や太鼓を吹くならず、いつも同じ五世の道、只念仏で通るべし、とよなむあみだ仏。

泊り念仏

きみようちよらい、地蔵尊足をとゞめてありがたひ、一夜の宿をもうけせしは、此の家の悪事さいなんを、おのがせえとよなむあみだ仏。

水念仏

きみようちよらい、此の水は井水かしみずか山水か、野の水かさねて水清しとよ、なむあみだ仏。

注 右の歌詞のうち村念仏のみ、調査の折、調査会場に集まつた島野の方たちに、実際に唱えてもらつた。その時私たちは昔、このように歌つた」という歌詞の訂正意見が出たので、右の村念仏の歌詞はそれにしたがつた。●印は訂正部分(村誌の原文では○となつていた)○印は加筆部分。その他は、区読点、かなづかい等、村誌に印刷されているままを筆写した。(島野)

地蔵様の和讃について

辻和讃——十字路のところで唱える。

村和讃——むらをまわるときに唱える。

寺和讃——寺へ行つたとき唱える。

水和讃——水をもらつて飲むときに唱える。

茶和讃——お茶をもらつて飲むときに唱える。

となり和讃——地蔵様が出発するときに唱える。

とおり和讃——地蔵様どうしがいきあつたときに唱える。

かけ和讃——地蔵様同士がけんかをするときに唱える。（島野）

○吉野山一重桜があるときく 岩船地蔵に進ぜませとよ 南無阿弥陀
仏。

○七つ子が柳の下で糸を取る 糸をとりては何なさる 岩船地蔵の善
の綱とよ。ナムアミダ仏

○このお茶は新茶か古茶か宇治の茶か 旅の疲れに呑みしれん 岩船
地蔵に進ぜませとよ。ナンマイダ

○この橋は渡りてみれば有難や 中は白金詰め小金 念仏唱へて渡る
ませとよ。

吉野山・榛名山・コノ茶・橋和讃・地蔵尊等、七種の地蔵和讃があ
る。

「コノオ茶ハ新茶カ古茶カ宇治ノ茶カ、岩船地蔵ニ進ゼマストヨ。
(または、旅ノ疲レニ飲ミ知レン)」(大沢)

二夜様

きみようちようらい西の空

三里の二夜様ありありと
おがむとすれば雲かかる

雲にじやけんはなけれども
わが身がじやけんで拌まれぬ

なむあみだぶつなむあみだ。

二十二夜様和讃

きみようちようらい有難や

二十二夜待ち待つ人は

ひみず改めしよう進し

信心堅固に身を持ちて
はきつを拌して給うべし

女人はさつの二顎には

あまた女人の身代りに
血の池じごくに落ちんとて
すぐに落ちんとし給えば
あら有難やな不思議やな
池より運華があらわれて
紫雲たなびく御仏に
そのまま蓮座に座し給いて
左右の御手にみどり児を
抱き上げさせ給いけり

右の御手は顔に當て
女人を救わん方便と
かんせ給いて有難や
左の御手で招きつづ

我を急するともがらは
現世未來を折すべし

さてまた現世のごがんには
女人の身上残りなく

長血白血の病には
薬かんをましませば

たちまち快氣を得さすべし

子なき女人に子を授け

産前産後の大難を

安産にしてとらずべし

さてまた未來のごがんには
しての病いやさんず川

血の池地獄に至るまで
如意輪はさつが手をとりて

せいしばさつもろ共に

あみだ如来のご来光

いこうくんじゅの花ふりて

極楽淨土へえんじよして

助け給いてありがたや

なむあみだぶつなむあみだ

二十三夜様

きみようちようらい三夜様

せいしのお姿ありがたや

月に一度は三夜待ち

精神正しく身を清め

中にもとりわけ正月や

五月や九月や十二月

右のしせつ尚更に

い待ち立ち待ち向い待ち

川の瀬に立ち望の棟に

げに一心のささげ水

西の刻より成の刻

いの刻げんもすぎ去れば

はや子の刻になりねれば

とうのれんげを押し分けて

ただ一心に押すれば

この世の願い成就して

来世は主従の苦をのがれ

いつしかくほんの蓮台に

乗せられ給うぞ有難や

なむあみだぶつなむあみだ

産泰様

きみようちようらいありがたや

産泰様と申せしは

女一代守り神

分けて信神する人に

福と自命を授くべし

懷胎したる女人には

産に向いしその時に

一心こめて拝すれば

五色の姿現れて

早速安泰えさせべし

生れきたりしその子には

日々好き氏を授くべし

安産守護の御かみは

千代よろず代に至るまで

祭らせ給いてありがたや

なむあみだぶつなむあみだ

お茶和讃

一、きみようちようらい有難や

お茶の馳走にあすかりて

上げますものは何もない

子玉性でも上げましよう

なむあみだぶつなむあみだ

いざたまいて帰るべし

なむあみだぶつなむあみだ

天神様

きみようちようらい此の村の

天神様の御社に
梅と桜を植えさせて

上にはうぐいす巣をかけて
下にはつたの葉からませて

此の村繁昌とゆつてなく
なむあみだぶつなもあみだ

栗島様
きみようちようらい伊勢の国

大神宮様の妹子に
春姫様と申せしは

十三才のその時に
女子の厄を初に見て

十六才でかねをつけ



和讃を歌う婦人たち（大沢）
(土屋政江 撮影)

六、そ の 他

祭文 祭文ヨミが門付けに回り歩いて、物置へ泊った。新潟の方の者で、こここの養子になつた。ゴゼもよく来た。（大沢）

タコアゲ 戰前はタコアゲが盛んで、春先の一月、二月ごろ、空つ風の吹く時に、大人が障子一枚ぐらいから、大きいタコは六八疊もあるのを作つて紐も荷綱あげた。

タコアゲ大会で優勝争いをした。うなりを付けたタコや飛行機タコなどもあり、武将の絵などを描いた。ミツヤ新道の広い所であげた。タコをあげるとお菓子があるといった。逆に、タコがはやると不景気になるぞ、ともいわれた。（大沢）

花火 「大沢の花火」と言われ、名代だった。戸一人ずつ出て作った。花火は桐の灰で作り、日なたで干すと熱を持って爆発するから日陰で干す。

大成流の花火で柴田勘十郎家に文書があり、旗・ヤゲンなども長持に残つており、村中の人が花火師だった。（特別の花火師はいない）

大正二年（四、五年か）ころ、萩原、大沢で一緒に祭をした時が最後だった。（大沢）

映画会 むかし、学校の庭で映画会をした。

これは、入場無料であった。（島野）

屋台田 屋台田という田が、大河原組にあった。面積は二反歩ぐらいで、一軒のうちから借りていた。これを、大河原組全体で耕作した。米を六俵か五俵売ることができた。その代金で、屋台の維持費をまかなければならなかった。（京目）

京目と稻荷の太鼓 京目と稻荷は、イヌが死んでも太鼓をたたくとすくいとのご贅願 いわれた。それほど、太鼓が好きだったという。（京目）

盆おどり 近所のムラとはなしあって、日時をきめてやつた。大体、

盆のころにやつた。

星台の上を舞台にして盆おどりをやつたこともあつた。

盆おどりの内容は、石投げ、一段おとし、十二段おとしなど。

音頭をとる人が櫛をたたいた。なるを櫛にして、ふちをたたいた。

笛があるだけで、かねはなかつた。

音頭とりは、八百屋お七、国定忠治、鈴木主人、平井権八などをやつた。

おどりは手拭をもつて、手おどりであった。

八木節がはやつてきたころには、八木節のためのおはやしの道具がそろわなくて、レコードをかけて八木節おどりをやつたという。(京目)

盆踊りは、三だんおとし、二だんおとし、八木節が行なわれていた。

(中島)

旅芸人 ゴゼはよく来て田口久治郎氏宅に泊つた。手引きがついて二、三人で来た。

セイモンは山口県から來た。金を包んでやつた。

アワシマサマは物もらいで赤い布などが吊してあるものを背負つていた。

キヌガササマは蚕の神様を売りに來た。その人の言葉をよく聞いていたら次のように言つた、「ありがとうございます。ありがとうございます。親の恩は忘れても、物を貰つた恩は忘れません、忘れた頃には又来ます」といった。

猿回しは座敷で踊つた。金をくれると逃げるよにして出て行つた。獅子頭も座敷で踊つた。米の餅を出してやると喜んだが、くれないとおこつた。(中島)

有形民俗資料

はじめに

今回の調査は、嵩村真也氏（群馬県立博物館）の協力を得て行われたものである。

当初、ばらばらに所在する民俗資料をまとめる従来の方法に変えて、当地域の平均的農家が農業経営を行つてゆくのに必要な農具その他の資材について、その種類と数量とを書き上げることができればと考えたが、紹介された数戸を訪問して、都市化の進行している現状では無理なことが明らかなのでそれをあきらめ、生産、生業に関係した用具、農具に焦点をしぼつて調査した。しかしそれも不十分のまま終つてしまふ。別稿の関係項目も参照せられた。

調査にあたっては、関根豊（中島町）、滝川小学校、井田秀雄（下滝町）、井田富治（同）、井田嘉市（同）の各氏に大変お世話になつたことを付記したい。（阪本英一）

（一）竹かご類

桑ブルイ　ほうちょううで刻んだ桑をこれに入れ、ふるうようにして稚蚕に給桑する道具。（中島町）

マユザル　マユを入れるためのザルで、これに入れて扱い、くずまゆも処理した。（中島町）
メツブシ　編んだ間へ竹をさしこんでメをつぶしている。所有者はマユを運んだらしいというがそうではないらしい。（中島町）

ザマ　桑などを入れて背負うかごで、他にいろいろのものを背負うのにべんりである。力竹が入り、口縁近くに背負いひも用の竹たががつけられている。（下滝町）

サマカゴ　桑を入れて背負うもの。二重に編まれて丈夫で、刻んだ桑を入れても使い易い。背負いひもには古タイヤを使用している。（中島町）

メカイ　秋蚕、晚秋蚕などに桑を摘んで背負つて来るかご。力竹を二本入れて四方を強化している。小さいものはいろいろに使われる。（中島町）

さる　蚕糞で給桑に使つたりするざる。深さが浅いがそれだけに使ひ方がやさしかった。（中島町）

桑つみざる　桑摘みに使用するざるで給桑用のざるよりも深く、つるすひもをつけて使用する。力竹を入れて強化してある。（中島町）

かご台と蚕かご　蚕糞中の給桑や除沙作業のときのかごをのせる台がかご台で、かごで飼育したりする時の必需品となる。蚕かごにはたてに二本の力竹が入れてある。（下滝町）

オオザル　ザル形式のもので力竹を入れ、そのうち四本は口縁までぬけておさえている。桑を背負つたりするのに使用する。背負いひもは古チユウブを利用している（下滝町）

かご　底部は方形で力竹はいっぱい入れて補強してあり、口縁部近くに六本の竹たがをつけ、把手をつけている。何に利用したか不明といふ。（下滝町）



マユザル
径 51.5cm
高さ 14 cm



桑ブルイ
径 27cm
高さ 10cm



ザマカゴ
径 52.5cm
高さ 60.0cm



ザマ
口径 63cm
高さ 68cm



メツブシ
径 57cm
高さ 78cm



ざる
径 45 cm
高さ 23.5cm



メカイ
径 53×55cm
高さ 61cm



かご
横 84cm
高さ 84cm
蓋 かご
たて 175cm
よこ 97cm



桑つみざる
径 41cm
高さ 36cm



かご
口径 59cm
高さ 57cm



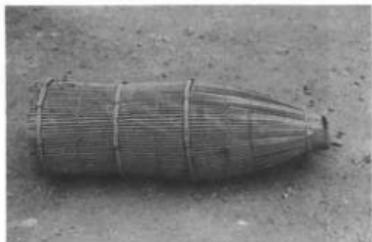
オオザル
口径 61cm
高さ 64cm



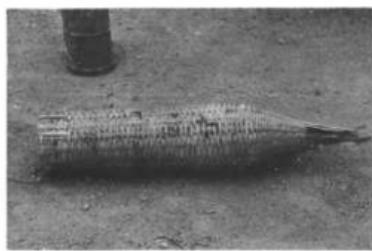
苗とり台
径 29cm
高さ 26cm



かご
口径 50cm
高さ 35cm



ウ
全長 74.5cm
口径 24.5cm



ド
全長 128cm

町・滝川小学校)

カブタタキ 麦のまきつけをした直後、まいた上をたたいて土塊を小さくし生え口がよくなるようにした。刀は若干細くしてはあるが四角の鉄のままで板にとめてある。(中島町)

よつご レエキともいい、草をかきよせたり、稻株や麦株を集めて外に出したりする作業を主とし、土塊をつぶるにも使う。(下滝町)

かなくまで 堆肥の扱いや、用水などのごみをさらつたりするに使

用する。刃が一本のものもある。(下滝町)

いもほり イモ類を掘るのにべんりな道具でいもほりまんのうともいわれている。刃が三本のものはやや広目の刃で、これは細いもので

ある。(下滝町)

テンガ(三本鎌) 比較的新しいテンガで、泥がたまらず、扱い易いので広く使われているとい。(下滝町)

古い型の標準的なもので、柄のところにつけてある竹べらは、刃につけた泥をおとすためのものである。(下滝町)

エンガ 桑煙をうなつたり、馬のいない家では苗代づくりのときに田をうなつたりした。一日一反の桑煙をうなうと一人前とみられた。

(中島町・滝川小学校)

オンガ 水田の馬耕用のもの、刃は鋸物で一方すきだが能率はよ

いませ、竹の簀を立てた間にふせて(のはりにふせる)魚をとった。カエシは一個。(中島町)

ふつうザッコ(稚魚) ドウといわれるもので、カエシは二個ごついて魚が出られないようにしてある。全体をかご編みにしている。(中島町)

かがたのもの。(中島町)

マンガ 麦作用のマンガとして馬にひかせた道具。刃はカナゴキ(千歯こき)の刃をそのまま利用している。(中島町)

代かきに使われたもので馬にひかせたもの。(中島町)

ヒトリマンガ フリマンガともいわれるもので、明治には使われて

いたとい。ひとりで持つて左右にふって麦作に使用する。(中島町)

フリマンガ フウフ(夫婦)マンガともいわれ、二人が向き合つてひもをもつて操作し、麦まきの整地や苗代づくりの整地などをする。

(二) 農耕用具

ジヨリン(ジョレン) 麦作のとき、春、麦の分けつを助け、根をしつかりするために土入れ作業をするとき使用する道具の一つ。(中島町)



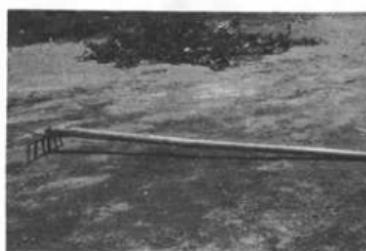
かなくまで
全長 124cm
刃 14cm



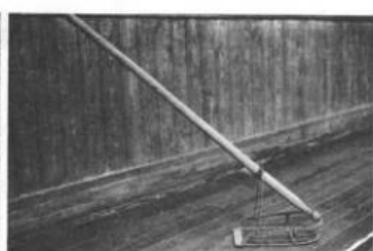
カブタタキ
柄 126.5cm
柄幅 11.5cm
柄長 31.0cm



ジヨリン
柄 121cm
刃長 33cm



よつご
全長 126cm
刃巾 25cm



ジヨリン
長さ 113cm
刃 30.5cm



トベモリ
柄長 126cm
刃長 29cm



トベモリ
柄長 81cm
刃巾 30cm



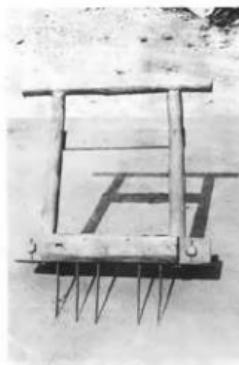
エ　ン　ガ

柄長 189cm
刃長 100cm
幅 21cm



て　ん　ガ

全長 124cm
刃長 43cm
刃巾 14.5cm



マ　ン　ガ

最大幅 61cm
高さ 77cm
刃 18cm



オ　ン　ガ

全長 160cm



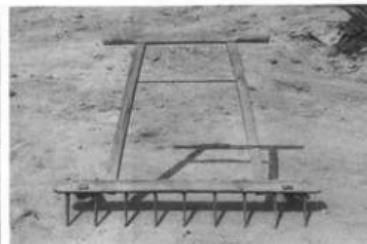
エ　ン　ガ

柄長 183cm
刃長 99cm



マ　ン　ガ

最大幅 90cm
高さ 75cm
刃長 12.5cm



マ　ン　ガ

最大幅 99cm
高さ 73cm



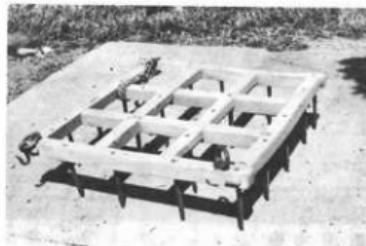
サクナワ
全長 44cm
円 15cm



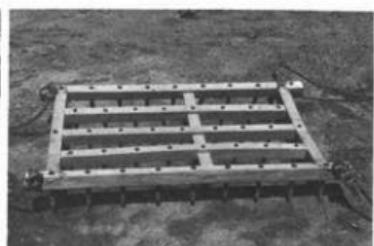
田の草取り
全長 155cm



ヒトリマンガ
最大幅 54.5cm
高さ 70.0cm



ズリマンガ
たて 93cm
よこ 91cm
高さ 24.5cm



フリマンガ
たて 58.5cm
よこ 137.5cm



田の草取り
全長 149cm



がんづめ



キ
ヒ
ネ
マ
キ
ヒ
ネ
マ
187cm
92cm
長
横
長
横
長
横



キ
ヒ
ネ
マ
キ
ヒ
ネ
マ
183cm
95cm
長
横
長
横
長
横

二人の呼吸が合わないとうまくぬかない。(下流町)
ズリマンガ
麦まき時に水田を整地する作業に使用する。馬にひかせて土塊をこわすので全体に重量があり、刃も丈夫につくられている。(下流町)
がんづめ 水の少ない水田には大きな雑草が育ちやすい。除草のときはがんづめ振りとるようつに作業しなければならない。(流川小学校)

田の草取り 齧車は一連のもので、水田の除草を中心に行なう。水田の除草と一種の中耕をかねてこれを押して作業する。先端にすべりがついて水田の中を押しよくしている。(流川小学校)

サクナワ 田植えのサクナワや、畑のサク立てに使うなわで、尺棒

一人の呼吸が合わないとうまくぬかない。(下流町)
ズリマンガ
麦まき時に水田を整地する作業に使用する。馬にひかせて土塊をこわすので全体に重量があり、刃も丈夫につくられている。(下流町)
がんづめ 水の少ない水田には大きな雑草が育ちやすい。除草のときはがんづめ振りとるようつに作業しなければならない。(流川小学校)

クルリ(棒) 竹のコキ五本を鉄環でとめたものに竹の柄をつけたもので、コキ(千齒)でおとしたものを乾燥させながらたいて脱穀した。大麦用のもの、柄は自分でつけた。(中島町)
こき 千齒こきの刃の部分だけ、左方は三枚ほど刃を外したとみられる。刃は偏平なもので先端を尖らせてある。(中島町)
千齒こき 稲と大麦の脱穀用に使用したもので、使用時の台がそのままにしてある。(中島町)
わらすぐり わら加工のときわらすぐりに使うもので、千齒こきの刃を再利用して手づくりで仕上げている。
万石 もみすりをした玄米を選別する作業が万石どうじで、万石は所によつては千石ともよばれる。(下流町)
ものほし 稲もみや麦をむしろの上で天日乾燥するとき、ひろげたり、かきまわしたりするため使うもの。(下流町)
儀縄み 自然木のY字型のものを二つにひきわって台とし、買った金具を横木につけて仕上げたもの。(中島町)
儀口 穀物などを儀に入れるとき、これをさしこんでロウトとして使用する。下端が欠損している。(中島町)

(三) 脱穀具等



ものほし
全長 143cm
よこ 44cm



クルリ
長さ 181cm
コキ竹 100cm



千歯こき
幅 59cm
刀幅 27cm
刀長 23cm
台長 76cm



こき
幅 60.5cm
刀幅 23 cm
刀長 16 cm



万石
たて 157cm
よこ 54cm
高さ 108cm



わらすぐり
横巾 70cm



繩とうし
長さ 20cm



俵編み
長さ 131 cm
足幅 28.5cm
高さ 33.0cm



手かぎ
全長 18cm
かぎ 5cm



俵口
最大径 67cm
下部径 21cm
高さ 40cm



石臼
上 38cm
下 10cm
溝高 10cm

もの。木製のものが古い型でそのあとこれがくふうされた。

(中島町)

手かぎ 俵づくりのときにひねったなわをひき出すのに使つたり、俵を引いで運ぶときに使用。背中の部分に開閉式の刃をつけたものもある。(中島町)

石臼 粉ひき用に使用したもので、一人では重いので二人がかりで使用したという。(中島町)

四 養蚕具

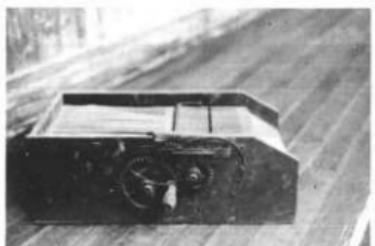
桑切りがま 条桑用の桑を切るための鎌。刃が短く扱いやすくふうされている。(中島町)
押切り 桑を短く切つたり、牛馬のかいばを切つたりする道具で、刃をおおうように金具がついている。近年の



押切り
全長 77cm
刃の長 30cm



桑切りがま
全長 27cm
刃長 9cm



毛羽とり
たてよこ 52.5cm
高さ 29.5cm
18.5cm



木鉢
直径 28.5cm
~32.5cm
高さ 4.5cm
~6.0cm

ものである。(下流町)
木鉢 熟蚕を一匹ずつ拾って入れる容器。トチの木製で、素朴なつくりだが手の上にのりがよく、軽くてべんりなものだった。(中島町)

毛羽とり まぶしからとり出したまゆの毛羽をとる道具は近年になって急速に発達したものである。これは大正十五年十月製造印のある大株式というもの。(滝川小学校
まぶしおり 関東大震災後に入って来たもので、それ以前は、わらを火箸で折り曲げてつくった。わらを水をうつてしまめらかしておいてつくるので、折るとよく乾燥した。
(中島町)

(五) 運搬具

代鞍 牛耕、馬耕のときつけられる鞍で、荷物をのせることはない。(下流町)
(代) 搾きやオンガかけをするとき牛馬の背にのせる鞍で、荷物はつけないから荷鞍ほどりっぽではない、長いハヨウナワをつける。(中島町)



まぶしとり
たてよこ 42.5cm
60.0cm
高さ



代 車

最大幅 85 cm
後幅 62 cm
最高 44.5cm



代 車

ひろがり 58cm
高さ 47cm



び く

長 143cm
幅 62cm
袋の長さ 70cm



荷 車 台

前幅 57cm
後幅 52cm
前高 41cm
後高 33cm



肥 桶

最大径 37 cm
全高 73.5cm

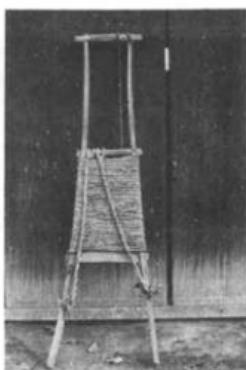


苗 運びかご

径 55cm
高さ 72cm



タ 197.5cm
全長 ツ



コ 171cm
シ 51cm
ヨ 全長 下部

い出せるように下部が長くつく
られている。木は三つ割りにし
たのを使う。(中島町)

(六) 機織用具

綿くり 栽培した木綿から種
と綿とを分けるために使用した
もの。回転部分に油をくれば
綿を汚すので白ネギをはさみこ
んでその水気で回転を樂にし

た。(中島町)

座織り 自家用の生糸を織糸したもので、巻きとろうとする糸を合
せてよりをつけるためのつづみ車や、首振りが完全に残っている。(中
島町)

糸とりをして販売したという話はあまり聞かないといふ。(下流町)
糸車 車の糸がかかる部分はなくなっているが、古い一般的なもの。
木綿糸を紡いだり機織りのときに織糸を巻いたり(クダ巻き)した。

(中島町)

中島町のものより新しく、鉄輪がつき、歯車を使用してある。斜め
の板はおさえのための板で本来のものではない。(下流町)
揚げ返し台 座織りでとった生糸を揚げ返す道具、まわすためのハ
ンドルがついている。台上に相応して揚げ返し棒も大きいものがつけら
れる。(中島町)

糸車をつけて糸棒の回転を樂にするくふうがしてあるものだが、使
用するのは見たことがないといふ。(中島町)

いざり機 使用しているところを見たことがないといふほど久しい
間放置されていたもの。(中島町)

一部欠損しているが古い型のもので、腰をのせる部分が竹の籠でつ
を背負って運び出すもので、何でも背負う。平地で台をしなくも背負

荷鞍台 荷鞍をのせておく台で、荷鞍のこわれたものの木を利用し
ている。荷鞍の木はこうする外は馬頭觀音などに上げたりする。(中島
町)

びく 田畑に堆肥を馬で運ぶとき使用するもので、木のハシゴの部
分と、なわあみの袋の部分とから出来ている。袋は竹を四角にして、
これになわで編みこんでつくり、下部は開いたまましぶるようすにす
(中島町)

苗運びかご 田植専用で、苗運び以外には使わないもの。てんびん
に竹を割つて強化し、田の中でひもが落ちないように竹でつく
つてある。(中島町)

肥桶 やや中太の桶でねり肥を入れてふたをし、荷鞍でつけて馬で
運んだもの。したがつて荷鞍につけるための専用の桶もあつた。(中島
町)

セツタ(背負い子) 同じ木を一本に割つてつくり、下部を長くつ
くつてある。背負いひもは下から一〇三センチにもなつてゐる。稻、
麦を背負う。(滝川小学校)

ショイコ 田の中まで車が入らないので、道路のところまで稻や麦
を背負つて運び出すもので、何でも背負う。平地で台をしなくも背負

くつてある。（中島町）
 繩杼（ひもすのり）いぎり機用の大きいもので、先端に骨角器をさして
 すがりをよくしたり強化している。クダをさすところには
 竹ひごをつけてある。（中島町）



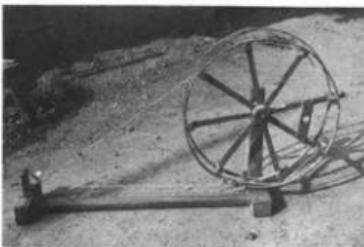
座繩り

最大幅	54cm
たて	15cm
高さ	42cm



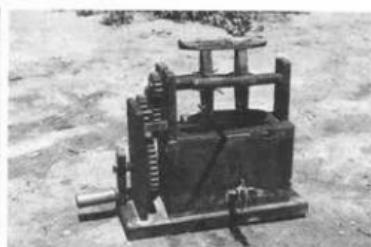
綿くり

最大幅	41 cm
幅	22 cm
長さ	46.5cm
高さ	30 cm



糸車

台長	91 cm
台幅	22.5cm
高さ	62 cm



座繩り

最大幅	53 cm
横	14.5cm
高さ	42 cm



揚げ返し台

幅	132cm
ハンドル	18cm
高さ	122cm
糸枠をつけた高さ	141.5cm



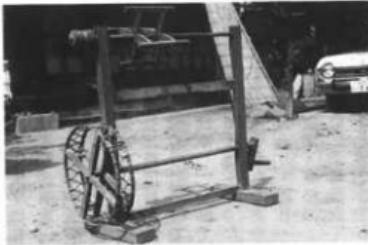
糸車

全長	107cm
最大幅	38cm
車の径	54cm



いざり機

最大幅 93cm
長さ 109cm
高さ 87cm



揚げ返し

全長 129.5cm
最大幅 46.5cm
高さ 107 cm



杼 全長 39cm



いざり機

全長 110cm
最大幅 90cm
高さ 90cm

民 家

は じ め に

民家の調査対象になった地域は、東は利根川、西は井野川にはさまれ、北は大沢町・上京目・一ツ谷・西島町から南は八幡原町に至るまでの、ほぼ南北に細長くなつた地域である。

民家の調査は予備調査と本調査の二回に分けておこなつた。予備調査は七月二十三日と七月三十一日の二日間にわたつて実施し、前者は主として京ヶ島公民館の管轄区域内を三友市郎京ヶ島公民館長の御案内により巡視し、旧大字に相当する各地区で建築年代が古いと伝えられる家一一二棟を選定した。後者は郷土史研究家の田口輝美氏と群南公民館長田口栄一氏の両氏の御案内により、主として群南公民館管轄区域内を巡視し、それぞれ旧大字に相当する地区で建立年代が古いと伝えられる民家を一一二棟選定し、本調査の対象民家とした。

この度の調査地域は群馬県の中心都市である前橋市と高崎市街地にはさまれた平場の農村地帯であるが、調査地域のはま中央を南北に開き自動車道が維持し、一部では工事がすでに始まっている。開通自動車道用地として土地を売った農家は巨額の金を投じて母屋を新築し、目を見張るような豪邸もあちこちに散見した。

本調査は八月三日・四日・六日・七日・九日・二十日の計六日間実施し、現状平面図・痕跡図・復原平面図・復原断面図・写真撮影等の記録を採取した。予備調査で選定した調査対象民家のうち、連結不十分のため本調査を断念せざるを得なかつた家も數棟あつたが、本調査

を実施した民家は表一のようない合計一九棟となつた。このうち草葺民家は六棟（約三一%）を占めたが、六棟のうち四棟がすでに廢屋となつていた。

本調査に入つてからの六日・七日の両日は藤岡工業高校教諭村田敬一氏の御協力をいただき、さらに九日は御多忙中にもかかわらず田口輝美氏の御協力をいたいたため、予想以上にスムーズに調査を進めることができた。ここに記して厚く御礼申し上げます。なお、農耕多忙中にもかかわらず、家の隅々まで早く見せていただいた表一に掲げる調査民家の各所有者に心から感謝の意を表します。（桑原 稔）

表一 地区別による調査民家の棟数

地名	本調査を実施した民家の所有者氏名	調査棟数
大沢町	桜井吉五郎	—
一ツ谷	塙越 久雄	—
西島町	平林 太郎	—
萩原町	栗田修一郎	—
下京目	桜井喜兵衛	—
島野町	須藤 忠雄	—
矢島町	反町 一郎	—
西横手町	山田 章	—
中島町	田口 和恵・田口 四郎・田口 孝	三

上	上 滝町	久保田 惣一	江原 武一
下	下 滝町	井田 英男・井田 秀男・天田	壯
八	八 幡原町	田中 一三・松本 徳次・原田 寿録	
合			
計			
			二
一	一 九	三	

一、調査遺構の平面形式と編年

十九棟の調査民家は復原平面により区分すると次のような五つの

- ①四間取(田字)平面の民家
②五間取平面の民家
③六間平面の民家
④八間平面の民家
⑤特殊な間取の民家

これらの平面・構造および細部形式を詰めし、さかに聞き取る。建築年代を考察して平面形式別に編年表を作成すると表-2のようになる。

二、四間取（田字）平面の民家

この平面を示す民家は一九棟の調査遺構中「一棟を数え五八ハーベントを占めた」。郷土の人達は一般に「田字の間取」の家とよんでゐるが、他の民家を五間取・六間取・八間取などとよぶところから、表2と当表題については四間取と記したが、以後は極力郷土の人達のよび方にしたがうことにする。なお各遺構のそれぞれの室名もその家のよび名を尊重して記してあるので、各復原図にみられるように同じ位置の室名で遺構が異なれば室名も異なる場合があるのは当然の結果である。

となつており、正に消滅寸前に記録を採取した感があつた。
以上のように当地方の民家は一九世紀以降の造構が多かつたため、
聞き取りあるいは記録等により建立年代を確定または推定できた造構
は一九棟中一六棟になり八四パーセントに達した。このためかなり精
度の高い編年表が作成できたものといえよう。
次に各平面形式の民家について、それらの特質を考察しながら各戸
について順次解説を述べることにする。

当地方は先にも述べたように県中央部に位置する平場の農村地帯であるため、最近における村内の近代化は目を見張るものがあり、工業団地も開け、大工場もいくつか誘致されており、農家の生活程度は山村地帯とはくらべものにならない程向上している。このようなところから調査民家一九棟のうち、一九世紀以降のものが一五棟を数え、の中には二〇世紀に入る道構も一棟含まれている。したがつて当地方においては建立年代が一九世紀初期にまで遡る民家は古い方に入り、一八世紀にまで遡る民家が四棟も発見されたのは奇跡的なことといつても過言でない程の状態であった。この四棟も調査時にはすでに廃屋

表2 高崎市東部地区民家遺構の間取の種類と編年表

番号	所有者	所在地	間 取		柱間装置		構 造		設 備・仕 上・そ の 他		建 築 に 関 す る 記 録 等								
			四	五	六	八	特 殊	床 の 表 装 置	コ ン ド と ナ の 境	大 黒 柱	土 台	軒 裏	ト 書	大 の 黒 仕 上	小 の 黒 仕 上	コ ザ の 幅	推 定 建 立 年 代	確 定 建 立 年 代	家 業・役職等
1	田中一三	八幡原	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.05	18末	名主	当主(76才)が14.5才の時150年前に建ったものと聞く
2	井田英男	下流	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.00	18末	農	生きていれば80才になる人が8才の時買ってここに来たものが建立年代は不明
3	田口和恵	中島	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.10	18末	名主	屋号をウチデノオホンケという
4	井田秀男	下流	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.00	19初	〃	タルキは丸竹である。当初板葺、当地における井田の越本家、屋号「ナカンチ」
5	坂越久雄	一ツ谷	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.00	19中	農	S・11年に76才で亡くなった人が子供の頃建った
6	山田章	西櫛手	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.00	1875	〃	M・8年の建立
7	松本徳次	八幡原	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.05	19末	〃	生きていると95.6才の人が生まれた時移築した
8	田口四郎	中島	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		1888	〃	M・21年建立の建立
9	栗田修一郎	萩原	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.04	20初	〃	80才の人が子供の頃建った
10	久保田稔	上流	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.00	1896	〃	生きていれば85才になるおじいさんが4才の時古家を買って建立したもの
11	平林太郎	西島	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		1908	〃	M・41年建立、ザシキの幅は12.02尺当初板葺
12	桜井吉五郎	大沢	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.00	1893	〃	M・26年建立、当初板葺
13	須藤忠雄	島野	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.00	19中	名主	永代名主、M・初期頃か?
14	原田寿録	八幡原	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.00	1889	〃	永代名主、M・22年建立
15	反町一郎	矢島	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.00	1894	農	M・22年建立
16	桜井喜兵衛	下京目	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11.95	1906	〃	M・39年建立、屋号を「とんや」という、塩問屋をしていたといふ
17	江原武二	上流	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11.95	1926	名主	T・15年建立、屋敷に2重の漆をめぐらす
18	田口考	中島	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		1883	〃	M・16年建立、2間の内法は11.95尺
19	天田壯	下流		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.05	18中	〃	昭和年以前の古文書は多数あるが、火災にあったためそれ以前のものはないといふ

にはサマを残し、コザ・ナンド境は土壁とした。しかし当主の話によると、当遺構は「円福寺西の窪（土地の名）の松本」という家を買ってきて建ったもの」と伝え、その時期は当主（七十六才）が十四、五才の時、一五〇年前に移築したと先祖より聞いたというので、この話から逆算すると西暦一七六六年頃移築されたことになる。そこで厳密に考えた場合コザ・ナンド境は土壁の痕跡があつても、移築時に図-1にみるよう土壁としたかどうかは疑問の残るところである。またナンドの出入口の帳台構えは移築時には設けられなかつたものとみてよいであろう。そして当遺構は總二階造になつていて、ウマヤの前面にイトヒキバを設けていて、チヤノマの裏側を總べて開放していることなどの新しい要素も持つていて、これらと当家の名主の家柄であるという農村における階層差を考慮した上で、表2の編年表では一八世紀末期頃の移築建立と推定した。

井田英男家（図1、No.2）は一般百姓の遺構と思われるものである。床上表側は田中一三家と同様に中柱を建て、コザ・ナンド境にも中柱を建てて、この中柱より上手を土壁にしている。コザの上手には奥行二、〇七尺のトコとクロトダナ（注1）を設け、チヤノマの裏側には造りつけのトコを備え、トナの中には上手側の半分を仏壇とし、この上を神棚にしている。桁行のはば半分を土間としダイドコとよび、下手の表側隅部にウマヤを設けている。当家は二階造になつておらず屋根裏利用を考えていなない。当家の言い伝えによれば「生きていれば百參才になる人が二〇才の時、居抜で買つてここに出たが建築年代は不明である」とのことである。しかし復原的調査の結果、平面・構造・細部の特徴より、表2に示した如く一八世紀末期の遺構と推定する。

田口和恵家（図1、No.3）は名主を勤めた家柄で、屋号を「ウチヂノオオホンケ」と呼んでいる。床上の表側は中柱を省略して差鶴居を使用しているのが新しい特徴である。差鶴居・敷居とも三本溝とし、外

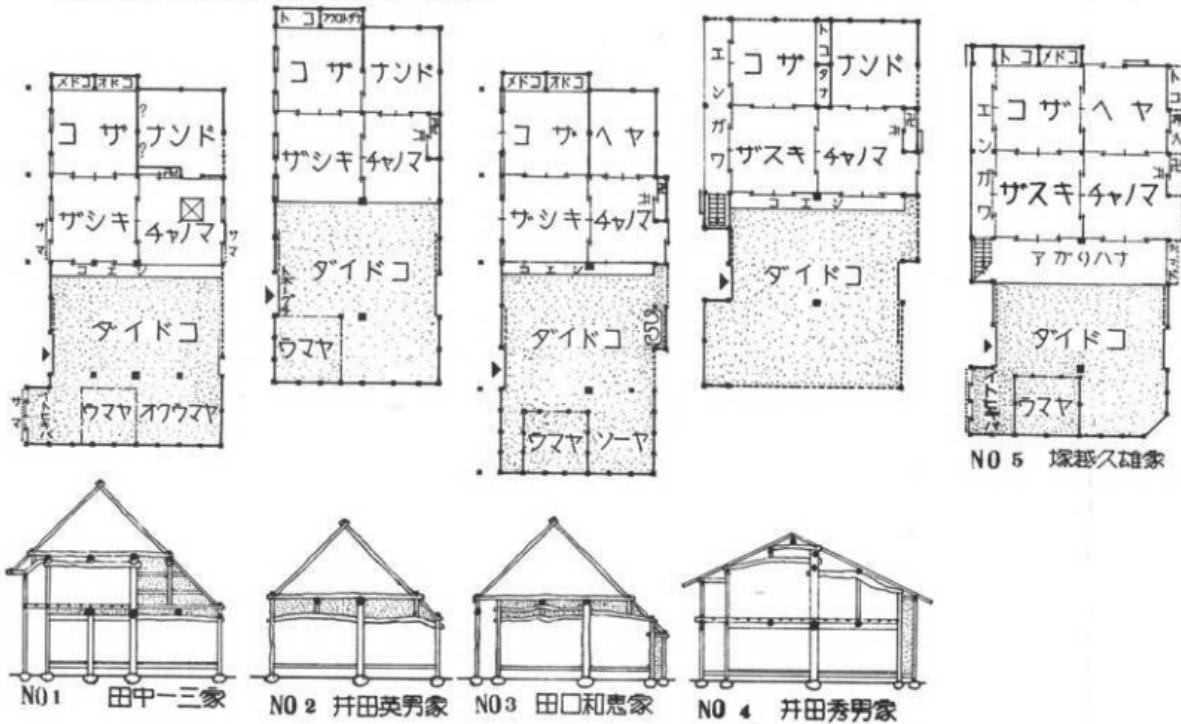
側の一本に板戸四枚を嵌め、内側の一本に障子一枚を建て込む方法をとっている（図8①参照）。この方法は田中一三家・井田英男家の床上表にみられた柱間一間三本溝（注2）に次ぐ古い開口方式である。

当家は井田英男家と同様に現在ザシキ上部の屋根を突き上げてこより屋根裏に採光し、小屋梁上に丸竹を敷き結めて又首組内部を利用するよう考へていて、これは中古に改造されたもので、建立当初は屋根裏利用を考えていなかつた。コザの上手には奥行二、五三尺のオドコ・メドコを付けていて、コザとヘヤ境は土壁で閉鎖し古い手法を残している。ダイドコの下手には表側外壁より半間程離してウマヤを設け、ウマヤの裏を「ソウヤ」と呼んでいる。当家も建立に関する伝承および記録等を残していないが、建築の原形の示す平面・構造・細部等の特徴から総合的に考察し、なお名主の家柄であるという階層差を考慮に入れて、表2に示す如く一八世紀末期の遺構と推定した。なお、田中一三家・井田英男家・田口和恵家とも家族は同一敷地内に新築した家で生活しており、ここに掲げた三遺構（旧母屋）は現在空家となつておらず、近い将来消滅する運命にある。

井田秀男家（図1、No.4）は現在コザとナンドの上手に一室ずつ室を付け、六間取としているが、復原すると図1のようない字平面の民家となる。当家は草葺でなく現在鉄板葺にされているが、当初は板葺である。屋根のタルキに丸竹を使用し、この地方ではめずらしいといふことであるが、県西南部の富岡・甘樂・下仁田方面の古民家によくみられるところから、この方面からの影響とも考えられよう。

当家の床上表側は田口和恵家と同様に中柱を省略して差鶴居を使用しているが、田口和恵家と違つて差鶴居と敷居の溝は二本溝にされエンガワの表側に戸袋を設けて引通しの雨戸を建て込むよう考へられており。この場合コザとエンガワ境やズスキとエンガワ境の柱間装置は二本の溝に障子をそれぞれ四枚建て込むもので、昼間はエンガワの引き通し雨戸を開ければコザあるいはズスキは開口幅一間の採光面積

図1 四間取（田字）平面の民家（復原平面・断面図）



を取ることができるわけで、田口和恵家の二間開口三本溝（注3）より当家のような二間開口二本溝の開口方式（図8（參照））の方がさらには進んだ形式であるとされている。

当家も名主役を勤めた家柄と伝えるが、床上表側の開口が二間開口二本溝であること、總二階造りであること、エンガワが設けられていること等から田口和恵家より新しい造構と考えてよいであろう。当主（六十四才）の言い伝えによれば親から三十年前に「一七〇年たつてある」と聞かされたということから逆算すると一七七七年の建立といふことになる。しかし遺構の示す原形の特徴から推察すると、とてもそんなに遅らない。当家の建立年代は名主の家柄ということを考慮して幾分遅らせたとしても、一九世紀初期頃の建立と推定するのが妥当であろう。そしてコザとナンドの上手に前後の二室（前面の室をジュウジョウ、裏側の室をショウダンと呼んでいる）を増設したのは一九世紀中期頃のことではないかと思われる。

塙越久雄家（図1、No.5）はヘヤ（注4）にもトコを設け、さらにヘヤの上手一間を開放し、ヘヤへ直接採光し、土間に幅一間の張り出し床を設け（アガリハナと呼ぶ）ている点が新しい特徴であろう。当家は本百姓層の農家であろうが、田中一家にみられたようにウマヤの前面にイトヒキバを設けている。チャノマの裏側上手寄りには造り付のトダナを配し、内部は上手側の半分を仏壇にし、トダナの上部を神棚にしている点は井田英男家・田口和恵家・井田秀男家と同様である。

当家は昭和十一年（一九三六）に七十六才で亡くなった人が子供の頃建つたものと伝えるところから、一九世紀中期頃の建立と推定する。

山田章家（図2、No.6）は塙越久雄家と同様の特徴を多く示す遺構

であるが、ナンドの上手を秘めて開放しニシエンを設けていること、ナンド裏のトコ・トダナの奥行を心々三、一八尺に広げていること、出桁造りにしていることなどが異なるところであり、かつ新しい特徴である。当家は当初より瓦葺で明治八年の建立と伝え、建築の特徴からみても言い伝えは間違いないものと思われる。なお屋号を「イシバシ」というが、その理由は昔当家の屋敷の前の小川に石の橋がかかっていたことから、そのように呼ばれるようになつたとのことである。

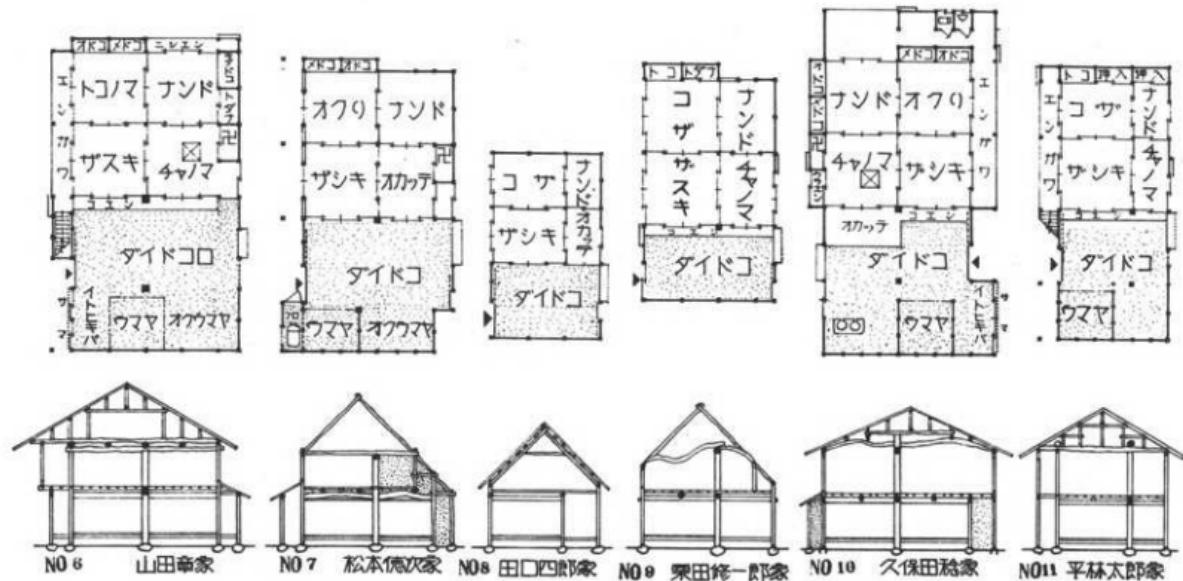
松本徳次家（図2、No.7）は生きていると九十五、六才になる人が生まれた年に移築したものと伝えるところから、移築年代は一八八一、二年の頃ということになる。オクリとザンキ表が三本溝になっているのも、前身建物の古い材料を転用したためであろう。当家は草葺二階造であるが、現在は草葺の上に波形鉄板をかぶせている。

田口四郎家（図2、No.8）は平家建草葺入母屋造であるが、現在はすぐ東側に造つた別棟の母屋で生活しているため、旧母屋である当造構は廃屋になつていている。桁行、梁間とも一般農家の半分程度の規模であるため、土間にはウマヤを設けず、ナンド・オカッテの奥行も一間しかとられていない。建立は明治二十一年と伝承する。

栗田修一郎家（図2、No.9）は草葺入母屋造の二階屋であるが、二階桁は極めて低く抑えられている。ダイコの桁行長さは一間しかとらわれていないため、ウマヤを設ける余裕はなく、土間での農作業もあり期待できない。現在草葺民家で実際に生活がなされている例は松本徳次家と当家だけであり、この二遺構だけはさるに長く実用の草葺民家として生き残けてほしいと願わざにはいられない。

当家はすぐ裏に住んでいるおじいさん（八十才）が子供の頃建てられたものと伝えるところから、二十世紀初頭の遺構と推定される。久保田稔家（図2、No.10）は二階建切妻造鉄板葺であるが、当初は板葺であった。エンガワを表側から上手へと廻し、オクリの上手に内便所を設け、下手の土間にはウマヤとその前面にイトヒキバも設けら

図2 四間取（田字）平面の民家（復原平面・断面図）



れている。当家は生きていれば八十五才になるおじいさんが四才の時古家を買ってきて建ったものと伝えるところから逆算すると一八九六年（明治二十九年）の建立ということになる。

平林太郎家（図2、No.11）は二階切妻造鉄板瓦棒葺であるが、当初は板葺であった。ナンドとチヤノマは奥行一間の狭小な空間であるが、それを裏側にも開口部を設け、通風、採光の考慮が払われている。ダイドコでは小黒柱より下手を下屋造にし、ここにウマヤを設けている。土間部分のこのような造りは、明治以降における当地方の民家に普遍的にみられるところである。当遺構は明治四十一年（一九〇八年）の建立と伝える。

二、五間取平面の民家

一九棟の調査民家のうち五間取平面を示す民家は唯一棟だけで、それは桜井吉五郎家であった。

桜井吉五郎家（図3）は四間取平面の民家におけるチヤノマの裏側に小室を設けてこれを「カツチ」と呼び、カツチに附隨してその下手も一坪程度の土間を裏側に突き出したもので、この部分の架構は下屋

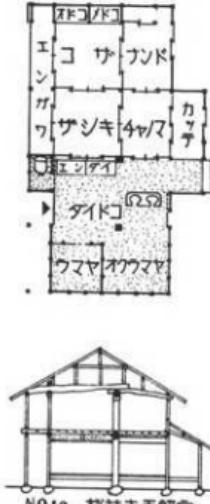


図3 五間平面の民家
(復原平面・断面図)

としている。サシキの下手には板張りの縁を設けず、代わりに縁台を二つ並べており、この表側は小空間を壁で閉めて風呂場としている。コザの上手にはオドコとメドコを設けているが、当家の場合はこのトコの奥行を人々で三、一五尺とかなり広くとっている。

当家の屋根は現在瓦葺にされているが、これは当初からのものではなく、建立当初は板葺であった。建立年代は言い伝えによれば明治二十六年（一八九三年）である。

四、六間取平面の民家

一九棟の調査民家のうち六間取平面を示す調査遺構は五棟で、その比率は調査民家の約二十六%余りであった。

六間取平面の民家は四間取平面の民家の床上裏側に一室ずつ増設せば実現するところから、間取の進化は四間取平面から発展したものであろうと推察する。そしてこの平面を示す民家は桁行、梁間とも一般にみられる民家より一巡り大きな規模を有している。

須藤忠雄家（図4、No.13）は桁行九間、梁間五間の規模を有し床上の上手一列目の室を表側から、オクリ・ナカノマ・ナンドと呼び、ナカノマでは上手に幅三尺の簡略化された書院を付け、さらにナンドとの境にはトコ・タナ（奥行一、六尺）を設け、一応格子化した室の体裁を整えているところから、当家のナカノマは来客をもてなす際の主室に使われた室であろう。オクリはナカノマに附隨した接客室であり、ここにも上手にトコ・トダナ（奥行一尺）を設けている。ナンドは家族の寝室に使われた室である。

床上の上手より二列目の室は表側からサシキ・チヤノマ・オカツチと呼び、サシキの下手にはコエン（幅約一尺）を付けている。サシキの機能はナカノマ・オクリの両室に対する控えの間であり、チヤノマ

は家族の居間である。このためチャノマにはコタツが切られ、チャノマとオカツ境のチャノマ側には鴨居上部に幅約一、五尺程の板を張つて神棚とし、その下部の上手側にはチャノマに面して仏壇を置いている。オカツは家族の食事室である。

当家は江戸時代に代々名主を勤めた由緒ある家柄であり、遺構の建立についての記録・伝承等を残していないが、建築の示す各種の特徴からおよそ一九世紀中期頃に建立されたものと推定する。

原田春録家(図4、No.14)は桁行十間梁間六、五間余りで、前述の須藤家より一廻り大きく、また調査した六間取民家のうちでも最大の規模を示すものであった。当家における各室の機能は須藤忠雄家の場合と全く同様であるが、エンガワを前面ばかりでなく上手側までぐらし、オクリノマの上手には手洗及び便所を当初より付設している。ダイドコでは表側外壁よりウマヤを一間後退させ、ウマヤの前面にできた空間をイトヒキバとよんでいる。イトヒキバは採光のため前面にショウジをたて、擬に細かく格子格子を嵌めてこれを「サマ」とよんでいる。二階建であるが屋根裏も利用できるように考えられており、棟の中央には換気のための「ソウヤグ」(注5)を設けている。当家は養蚕民家の姿を示している例とみてよいであろう。

当家は江戸時代に代々名主を勤めた家柄で屋号を「お八輔」といっている。当家には普請帳が残されており、これによれば明治十九年(一八八六)十月二十四日に仕事を始めて明治二十二年(一八八九)に完成したものである。大きな材木はイカダに組み沼田から利根川を流し板井で揚げ、さらに大八車に積んで当地まで運んだという。普請の費用は造作迄に穀物に見積って百俵、金で武百五拾円であった。なお当家の屋敷は元二重の漆をめぐらしていたというが、現在は内漆を残しているだけである。当家には明治四十年に描かれた絵図があり、これには屋敷の様子と母屋をはじめ長屋門、土蔵、蚕室等の各建物がり

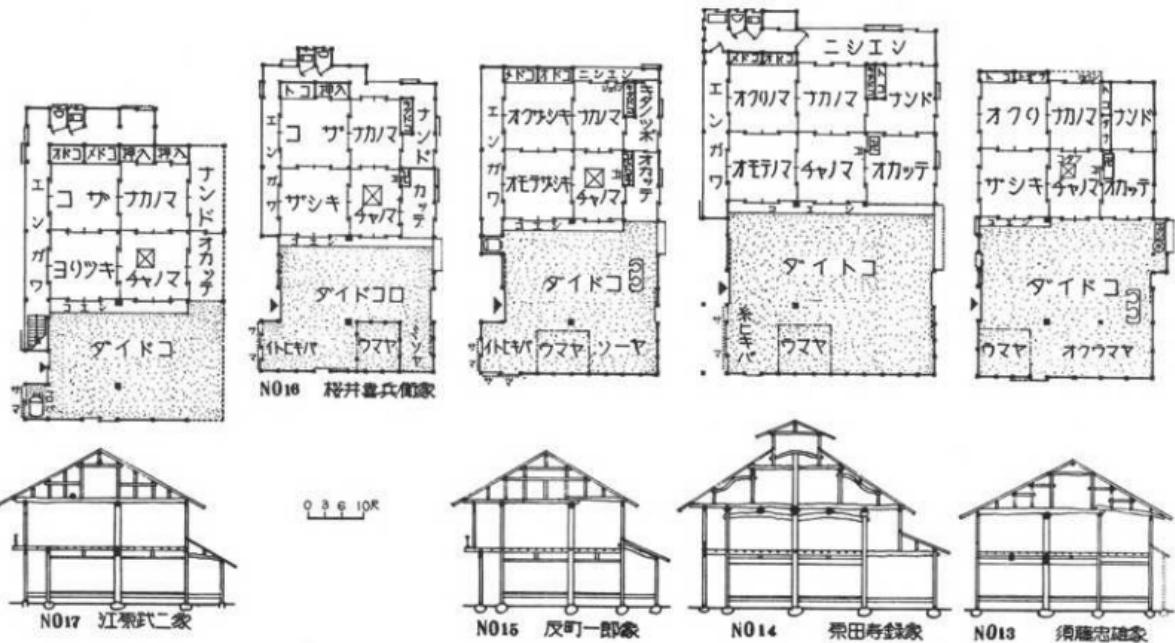
アルに描かれており、現在の母屋もその中にみられる。

反町一郎家(図4、No.15)は須藤忠雄家と同程度の規模で各室の機能も同様である。土間の下手表側隅部をイトヒキバとし、ここに採光窓の丈は内法二、八五尺で、この窓下一、六五尺を土壁としているところから、窓台の高さは丁度系引機(ザグリ)の高さと合うよう考えられていることが判る。当家の特徴は表側を「出し梁造り」にしていること、差鴨居を使用しないで全部釣束で普通鴨居を釣っていることなどである。棟の上には養蚕時の換気のため小星根は窓を三つ上げ、当家ではこれを「氣抜き」とよんでいる。遺構は明治二十七年(一八九四)の建立と伝える。

桜井喜兵衛家(図4、No.16)は反町一郎家と同程度の規模を有する遺構で、屋号を「トンヤ」といい塩垣屋をしていた家柄である。やはり「出し梁造り」で棟に「氣抜き」を二つ上げている。当家は開口部に差鴨居を多用している。明治三十九年(一九〇六)に建立された遺構である。

江原武二家(図4、No.17)は桁行八間、梁間五間半余りの規模で、コザの上手に便所・手洗等を付設している。当家は戦国時代には甲州武田の代官を勤め、江戸時代には名主を勤めた家柄である。屋敷は現在でも二重の漆をめぐらし、その幅は外漆が約二間、内漆は約一間半である。当家には明治三十六年(一九〇三)十一月の屋敷絵図が残されており、これにも二重の漆がはっきりと描かれている。この漆内に屋敷面積は七段もあるという広大なものである。現在の母屋は大正十五年(一九二六)に建立されたもので、調査遺構中最も新しいものであった。

図4 六間取平面の民家（復原平面・断面図）



五、八間取平面の民家

六間取より間取の多い民家は二棟を調査することができた。一棟は田口孝家で、これは六間取を基本にし、さらに上手側に一列を付加したもので「八間取の民家」と呼んでいる。他の一棟は天田壯家で、これは超大形で複雑な平面をしているところから田口孝家と区別して「特殊な間取の民家」とした。

田口孝家は桁行十間、梁間五間半余りでその復元平面・断面図は図五に示すようである。この平面は六間取平面を基礎に、それから進化したものとみてよいであろう。

六間取平面は上手二列に前面から裏側へ三室を並べたが、上手を三列にしたもののが田口孝家である。当家における各室の機能はショインノマ・トコノマが来客接待の主室で、ナカノマ・ザシキはこれに附隨した接客室である。コタツノマ・サンジヨは寝室であるが、特にお産をする時はサンジヨに籠るのだと伝える。チャノマは家族の居間で、オカツテは食事室である。土間ではウマヤの前面をイトヒキバとせず、フロバにしている。



No. 18 田口孝家
図5 八間取平面の民家

当家は江戸時代に名主役を勤めた家柄で、明治になってからは村長も何度も輩出している。元の屋敷は現在の屋敷のすぐ前方にあったといふが、火災にあい現在地に屋敷を求めて明治十六年（一八八三）に建立したのが図五に示す現在の母屋である。

六、特殊な間取の民家

これに属する民家は天田壯家一例であった。

天田壯家は調査遺構中最大の規模を示すもので、本屋の上手に田字平の四室を当初より付加しており、室数は全部で十一個となる。ゲンカンの間の前面には「式古」（注6）を付け、土間には三つのウマヤを配している。

天田家は江戸時代、当地の大名主で、屋敷は二重の濠で囲われ、外濠より内の広さが三町七段もあったという。そして今でも裏側の外濠と内濠の間を「武具屋敷」と呼んでいる。

当家には先祖の系図があり、これによれば天田家の出身地は丹波国で、天田郷に住んでいたところから天田姓を名乗ったということである。また当地に落着くいわれは、「元弘の変」以後足利尊氏將軍と共に関東に下向（注7）するが、当家の先祖重郎為利は觀応年間に新田義宗と戦って碓氷の難で討死してしまう。為利の息子利重は当地に居住した初代で、滝村の郷士となり応永三十二年（一四五六）没している。このようないことから推察すると、二重の濠をめぐらしたという当家の屋敷構えは、一四世紀末期頃まで満る有力郷士の屋敷構えであると考えてよいであろう。

当家はその役柄上多くの古文書を残しているが、明和年間に火災にあつたため、明和年間以降の古文書が大多数を占め、それ以前の古文書はあまりないという。このようない伝えから現在みられる当家の旧母屋（注8）および長屋門は明和年間に建立された遺構と推定する。



図6 特殊な間取りの民家

そして当初から瓦葺と推察されるところから、瓦葺の民家としては逆算して二百年を超える古いものとなる点で、貴重な民家遺構と考えることができる。

七、柱の名称および床上柱間にについて

調査遺構中でよび名を聞き取ることができた柱は図7にみる①・②・③の柱である。①の柱は「ミヤコ柱」とよび、床上の中心に据えられるのが原則である。しかし六間取平面になると図7における平面のナンドとチャノマの裏側にそれぞれ室を増設するため「ミヤコ柱」は床上の中より表側に片寄った位置に据えられるようになる。六間取の場合でも当初の古い造構では、四間取に付設されたと考えられる裏側の室の部分を下屋造りにしているため、構造上はやはり床上の中心にあつたと考えてよいであろう。では「ミヤコ柱」の名称はどのようにあるところに由来するのであろうか。いろいろないわれがあると思われながら、筆者は次のように考える。すなわち「ミヤコ」は「都」のこと

であろうと思う。「都」は上方の中心地であるところから、図7における上手の中心にたつ柱①を「ミヤコ柱」とよんだのではないか。ここでは「上方の中心」と「上手の中心」が同じ意味にあつかわれていると考えられるのである。

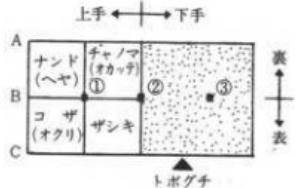
②の柱は「ダイコク柱」とよび、家のほぼ中心に建てられ、構造上からも一番力を背負っている柱である「ダイコク柱」

の名称の由来は「ダイコク」を「大黒」と書くことから仏語の「大黒天」(注9)から来た名称であろう。

図7における③の柱は小黒柱とよび、土間の下手寄りにたてられる。③の柱を小黒柱とよぶのは、②の大黒柱に対応してたつところから付けられた名称であろう。また柱の径も大黒柱より幾分小さいのが普通である。この柱の仕上げは大黒柱よりも遅れ、当地方では一八世紀末期頃を境にチヨウナからカナンサ仕上げへと移行していくことが表-2より判明する。

床上の柱間、特にコザとザシキ表の柱間は造構の編年を考察する際に、その指標としてとりあげることができ。表-2によれば一八世紀末期の造構に図8(d)にみるような中柱(注10)を有するもの(田中一家、井田英男家)と、図8(d)のような中柱を有しないもの(田口和恵家)とがあるところから、当地方におけるコザとザシキ表の柱間はおよそ一八世紀末期頃を境に、差鶴居(注11)を使用するようになら、中柱の省略が可能になつて時には図8(d)のような柱間一間のものもみられるようになる。

しかし、この頃はまだいすれの場合も敷居・鶴居の溝を二本溝にしているのである。これが一九世紀に入るとほとんどの造構で図8(d)の



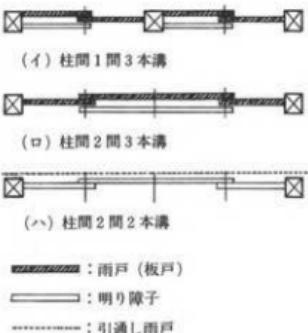


図8 開口方式の編年
〔(イ)が古く(ハ)は新しい〕

よくな差鶴居を使用した柱間「一間一本溝」の形式をとり入れるようになる。すなわち調査遺構にみられるこの地方の開口方式を編年的に図示すれば図8のようになります。(イ)が最も古い方で(ハ)は最も新しく(ロ)は(イ)と(ハ)の中間に位置する開口方式である。

(一三五二) 将軍尊氏の傘下にあった重郎為利は、新田義宗と戦つて利政始入農村中推而為長焉」とあるところから利政の代に農民となり村中より推されてその長となつことが知られ、中世武将の畠農過程をわずかに窺うことができる。

当家に伝わる系図による以上のような記録から推察すると、当地に定住するようになった初代の利重が天田家の環濠屋敷を構築したとみるのが妥当であろう。そしてその時の利重の身分は廩士の郷士であつた。すなわち天田家の環濠屋敷は利重の没年である応永三十二年(一四六五年)以前に構築されたものであることは間違いないであろう。そこで利重は父為利が親王に死の時稚児であったと記されていることから、稚児を一、二才と解釈すると応永三十二年に亡くなつた時の年令はおよそ七十四、五才であったことになる。利重が屋敷を構築した年令を二十代、三十代と考へると西暦一二七一年(一三九一年)頃には環濠屋敷が構築されていたことになる。まあ、大ざっぱにみても一四世紀末頃に構築されたものと推定してよいであろう。

県内でも当地おより利根川をはさんで対岸に位置する前橋市下川淵内に限つて数多くみられる環濠屋敷は、天田家に伝わる系図をたよりに推察する限り、その構築年代は一四世紀末頃まで遡り、さらにはさむ対岸の前橋市下川淵一帯にも散在するので、井野川東部の当地から前橋市下川淵一帯にかけて特徴的にみられる有力農民の屋敷構えであると考えてよいであろう。

ではこのような有力農民の屋敷構えである環濠屋敷の成立はいったいいつ頃まで遡るのであろうか。これに答えるにはあまりにも史料不足であるが、ここでは天田壮家所蔵の系図より推察すると、親王二年

利重——天田氏 本国丹波 称天田 其□□上北面称□之爲流云

修理亮利隆住于天田郷 子孫

足であるが、ここでは天田壮家所蔵の系図より推察すると、親王二年

于足利將軍而移閑東。每在于將軍之麾下。親応年間將軍与新田義宗戰。碓礪櫛地之留軍於上野國群馬郡淹村慈眼寺刻千体石仏招千僧以祭戰亡之靈。且後世為供養附以三百頃田焉。碓礪之役也。為利戰死矣。其妻抱稚兒始詣淹村遂卜居其地。以育嬰兒生長之後称善兵衛利重。応永卅二年乙巳五月以壽卒。終身不在世々以處士住淹村焉。

註

1...当地ではトコのわきに付く、トコより背が低くて一般に天袋のついた小空間を普通メドコというが、当家のようすに単にフクロトナと呼ぶこともあり、タナあるいはメドコと呼ぶこともある。なおトコはオドコとも呼ぶ。

2...の場合は外側の一本の溝に板戸一枚を嵌め、内側の一本の溝に障子一枚を嵌める（図8(イ)参照）。

3...一間開口三本溝の場合は戸間は中央の二枚の板戸を左右に引込んでおり、その代わりとして中央に二枚の障子を引いておくもので、事实上の採光面積は障子一枚分だけになってしまふ（図8(ロ)参照）。

4...ナンドとも呼ぶ本来の機能は寝室である。

5...高山社の養蚕法によれば棟上に設けられた換気のための窓を「氣眼」

とよんでいるが、当家では「ソーヤグラ」とよんでいる。

6...玄関の敷居前に設けられた低い板敷の部分をいい、客を送迎して札をする所である。江戸時代は一般農家では式台を設けることができず、主に名主階級以上の家に限って設けることを許された。

7...元弘の変の後建武二年（一三三五）足利尊氏は征東將軍となり関東に下り、北条時行を破り鎌倉に入る。

8...現在では屋敷の東側に立派な母屋を新築し、日常の生活は新母屋の方で行なっており、旧母屋は空室となっている。

9...「大黒天」は三宝を守護し、五衆を守り飲食を満たす神をいう。

10...民家では一般に間仕切部分の中央にたつ柱を中柱という。

11...鴨居のうち、特に断面のせいを大きくして構造材（梁）としての機能をかね備え、両端を柱に納差大人としたものをいう。



〔写真4〕井田英男旧母家

中央の突き上げ屋根は後の改造によるもの。



〔写真1〕田中一三家旧母屋（田字平面）



〔写真5〕田口和恵家旧母屋

中央の突き上げ屋根は後の改造によるもの



〔写真2〕田中一三家大黒柱（逃げのないもの）
大黒柱は土間側に逃げていないため、柱の角が室内に突き出ている。そのため畳の角を欠いて畳を納めている。このような方法は古い民家にみられるもので、新しい民家になると大黒柱が室内に突き出ないように、大黒柱の内面をシキイの内面と一致させるように大黒柱を土間側にずらして据えるようになる。これを逃げのある大黒柱という。



〔写真6〕田口和恵家チャノマの裏側

左側にみえるトダナの上段左端を仏壇にしている。上部に釣った棚は神棚。



〔写真3〕田中一三家、コザのオドコ・メドコを見る。



〔写真10〕塚越久雄家母屋
棟上についている小屋根を「氣抜」という。



〔写真7〕井田秀男家母屋



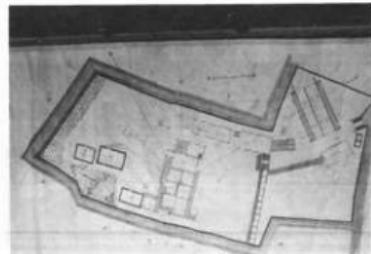
〔写真11〕塚越久雄家2階



〔写真8〕井田秀男家神棚
神棚の上部は人が乗れないように他より高くつくって、種木を配して家の軒先のようにみせている。



〔写真12〕山田章家母屋



〔写真9〕井田秀男家の屋敷絵図
昭和11年2月28日吉辰の墨書きがある。環濠屋敷のようすがよくわかる。



〔写真16〕松本徳次家の炊事場



〔写真13〕山田章家の表側出桁造りをみる。



〔写真17〕松本徳次家トボウグチの大戸
19棟の調査遺構中トボウグチに大戸を使用して
いたのは当家だけであった。昔は全戸のトボウ
グチが大戸であったという。



〔写真14〕山田章家の大黒柱
当家の大黒柱は土間側に逃げているため畳の隣
を欠かなくとも畳が入るようになっている。



〔写真18〕田口四郎家旧母屋



〔写真15〕松本徳次家母家



〔写真22〕平林太郎家2階



〔写真19〕栗田修一郎家母屋



〔写真23〕桜井吉五郎家母屋



〔写真20〕久保田稔家旧母屋



〔写真24〕桜井吉五郎家
コザのオドコ、メドコを見る。



〔写真21〕平林太郎家母屋



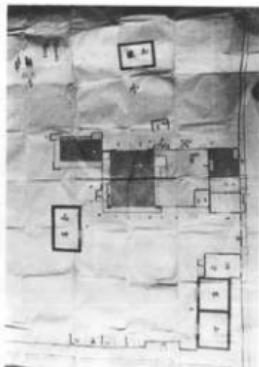
〔写真28〕原田寿録家屋敷鳥瞰図



〔写真25〕須藤忠雄家母屋



〔写真29〕原田寿録家
現在も残る内塀（石垣は最近積んだもの）



〔写真26〕須藤忠雄家屋敷絵図
昭和6年3月の墨書きがある。



〔写真30〕反町一郎家母屋



〔写真27〕原田寿録家母屋



〔写真34〕 桜井喜兵衛家
トボウグチよりダイドコの裏側を見る。右に
たつ柱が小黒柱である。



〔写真31〕 反町一郎家
ダイドコの天井に釘られた養蚕の暖房用のが
たつ柱が小黒柱である。



〔写真36〕 江原武二家前面の出桁造り



〔写真32〕 反町一郎家
チャノマに面して設けられた仏壇とその上の神
棚



〔写真35〕 江原武二家母屋



〔写真33〕 桜井喜兵衛家母屋



〔写真40〕田口孝家
チャノマ表よりチャノマの裏側を見る。



〔写真37〕江原武二家
外濠の土手に茂る樹木



〔写真41〕天田壯家長屋門



〔写真38〕江原武二家の内濠



〔写真42〕天田壯家旧母屋



〔写真39〕田口孝家母屋



〔写真46〕天田壯家の式台



〔写真43〕天田壯家のザシキ



〔写真44〕天田壯家の長屋門窓



〔写真45〕天田壯家の2階梁組

高崎市元島名地区念仏和讚集

般若心経
香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

般若心経

香 儀 悔 文

塔宝の念仏

おんあきやべいろしやの

はんどまじんばら

はらぱりたやん

十三べん

四、十三仏

阿弥陀

大日

虚空藏

弥勒

藥師

觀音

勢至

三世の諸菩薩

南無阿彌陀

十三べん

五、不動様

のうまさんまんだあ

ばあさだあせんだあ

まあからしやだあ

十三べん

六、薬師様

おんころ（せんだりまとうぎそわか

十三べん

七、觀音様

（延命十句觀音経）

そかやんたらかんまん

十三べん

觀世音

南無仏

与仏有因

仏法僧縁

常樂我淨

朝念

光明遍照十方世界念佛行
一べん

一、大日様

なむあみだあ

なむあみだぶ

なむあみだ

十三べん

二、十王様

十一、おがみあげ

野辺の送り

二十二夜様

組笠様

善光寺和讃

光明遍照十方世界念佛行
一べん

三、大師様

なむあみだあ

なむあみだぶ

なむあみだ

十三べん

四、十三仏

南無十三仏

南無阿彌陀

十三べん

五、不動様

おんあきやべいろしやの

願我身淨如香炉願我心如智慧火念梵燒戒定香供養十萬二世仏
我昔所造諸惡業皆由無始貪瞋癡從身語意之所生一切我今皆懺悔
我今身淨如香爐願我心如智慧火念梵燒戒定香供養十萬二世仏
我昔所造諸惡業皆由無始貪瞋癡從身語意之所生一切我今皆懺悔

觀世音 蓦念觀世音 念念從心起 念念不離心
八、地藏様

まいにちじんじょう にゆうしゅうじょう

にゆうしゅうじょく もをおききょう

むうぶつせかい にゆうしゅうじょう

こんじこうせの にゆうゑんどう 六べん

南無御地藏大菩薩 南無阿彌陀仏南無阿彌陀

佐位の川原の御地藏様 南無阿彌陀仏南無阿彌陀

十万德土の御陀様よ 南無阿彌陀仏南無阿彌陀

一べん

九、六字づめ

なむーあーみーだーんぶー

なあーむーあーみーだーあーんぶーうつう

なーあむーあーみーだーあんぶー 六べん

十、ゆうづう念佛

ゆうづう念佛 南無阿彌陀 一べん

十一、おがみあげ

いさ、がんちつくどくりよとうせ

いつさい りょうほつごだいしん
おうじょう あんらく

野辺の送り

煙命長来 高野山 弘法大師の仰せには 何故に後生を願はない 願
へば叶う 安樂にとかくこの世は 僮の宿 疾死ねば一夜も置かれぬ
死して冥土へ行くときは 一死みやく一つに 瑞數一つ これを冥土の
みやげとしのべよくと にぎやかに送りの人は 多けれど 野辺より
先は 一人旅助け給ひよ 地藏尊 死出の山路や 三途川 それを越え
ての 極楽よ 極樂淨土に 行く道に 開かずの門が 三つござる 押
せども引けれども開かばこそ 念仏六字で さと聞く 念仏申す 後生

には 天から 五色の花が降る その花 取りて見給へば 花じや ござ
らみな六字 極樂淨土へ納めます 南無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏

二十二夜様

爆命長来 有難や 一二十二夜様 待つ人は 水火新め 精進し 心に

恶心 持たずして 心身堅固に身を浄め 苦難を信じ給うべし 如意輪苦

薩の お願には 数多の女人の 身代りに 血の池地獄へ 落ちんとて
既に入らんとし給へば あら有難や 不思議なや 池より蓮華が 現れて

紫雲拂引き み仏の そのまゝ蓮華に坐し給う 左右の御手にみどり児を
抱き上げさせ 給うべし 右の御手を顔にあて 女人を救はん 方便と

感じ給 有難や 左の御手に 招きつ 我を念する 朋がらは 現世未
來を 助くべし さて又 現世のお顔には ちしゃくけつかい 血の道や

永ち白朮の病には 薬のかんのう ましまして 急ち 気力を得さすべ
し 子無き 女人に子を受け 来長久に 守まもるべし 懐胎したる

女人には 産前産後の 大難を 安産にして 得さすべし さて又 未来未
來の お顔には 死出の山路や 三途川 血の池地獄に 至るまで 如意輪苦

薩が手を執り 阿彌陀勢至も 諸共に 回向くんじの 花ぶりて 極樂

淨土へ 導いて 助け給うぞ 有難や

二十三夜様

爆命長来 三夜様 勢至のみ安 有難や 月に一度の 三夜まち 中で

もとりわけ 正月や 五月や九月 十二月 もとの四節は 尚更に 居侍

ち立ち待ち 遊え待ち 川の瀬に立つ 屋の棟に げに一心の 排げ水

西の刻より 成の刻 東の刻限も 過ぎぬれば とうの蓮華を押し開き

いしがくほんの 蓮台に乗せられ給う 有難や 尚も信心 なさるべし

おんさん／＼さんさんそわか 爆命長来 三夜様 居侍立ち待ち遊え

時 三ツの刻まで 待ちましよう 拝む御機の有難や

細笠 様

爆命長来 有難や 国は筑波に 名も高き 天竺一帝の 御娘 五代の

姫と申せしは、七つの時より母親に後れて祖母の手に掛りしくま山に捨てられて、きじんも姫をいたわりて、きじんが岳に捨てられた。父・大王の慈悲深き桑のうつろの舟に乗せ、銚子が浜へ流されて、ふはうほうの國あらばなお広めよと過ぎ出たし荒波路にうち揺られ流れ流れて筑波へのとよらが港(豊浦港)に着き、給う村人・姫を憐みて育て介抱、奏育し十六歳の中の春初の午の日には、姫君が無情の風に誘はれてついに空くなりにけり。二親諸共慨伏し、これより運の虫となりせじようかんを教はんと、虫の虫となり給う。糸とり緒とり子種とり伝へ給へや世人の人には、二親諸共夢させて姫の墓所へ急ぎ行く数万の虫の居ら故に桑の葉採りて与うれば皆一散にうち渡りしきの休みがしく山きじんが岳がたけ休みうつろの舟がふな休み埋められたがにわ休み四度の休みもはや過ぎてくがいあがりて上り蚕の一日一夜にみなかれ黄金白銀うち混せてお家に繭がまんと積りた如くなり奥の辺に立ち給う十六ぜんじのおしら様毎日西の日祈願せばよのものもつかずひにまけず蚕はわんくここくじょう

善光寺和讃

誓命長来。善光寺如來のもとは天竺よがつかい長者の御建立とう日本に伝来えんぶだごんの弥陀如來もりやの大恩悪心で難波が池に沈ませてこのとき本多善光が仏の御幹を教はんと川中島に安置して護り奉る善光寺信濃で川中善光寺甲斐で甲府の善光寺武藏で川口善光寺三ヶ所合はせて弥陀如來弥陀の光明ありくと拝む御縁の有難や南無阿弥陀仏南無阿弥陀身は心心は信濃の善光寺導き始へ弥陀の淨土へりありの鐘つく人は多けれども一生を知る人は無し

普光寺和讚

爆命長來 善光寺 如來のものは天竺よいか長い長者の御建立とう／＼日本に伝来えんぶんだこのん 弥陀如來 もりやの大恩 憲心で 難波が池に沈ませて このとき本多善光か 仏の御御を教はんと川中島に安置して 謹り奉る善光寺 信濃で川中善光寺 甲斐で甲府の善光寺 武藏で川口善光寺 三ヶ所合はせて弥陀如來 弥陀の光明あらり／＼と 拝む御御の有難や 南無阿彌陀仏 南無阿彌陀身は心 心は信濃の善光寺 深き給へ弥陀の淨土へ いりあいの鐘つく人は多くれど我一生を知る人は無し

一、地
藏
尊

帰命長札地藏尊、提灯花笠さしかけて笛や太鼓に鐘を入れ、勇んで今
ホラヨイ／＼申しいるとよ、南無阿弥陀仏。南無

此の地蔵様和讃帳は民俗行事であつた地蔵様が終戦後、廃止になつて和讃も続で地元から忘れ去られようとして居るのを憂い、後世に残そうと思ひ古い和讃帳から書写したものである。

一、立和讚尊
二、一夜の宿
三、田植船
四、岩吉
五、野谷
六、森名
七、船山
八、谷山
九、屋山
十、赤月
十一、旅
十二、福神
十三、十七が柳の下
一、地藏尊
十五、辻和讚音
十六、梅若丸
十七、照手姫
十八、十万億土
十九、西方十億土
二十、お寺様
二十一、寺和讚
二十二、佐位の川原
二十三、お庭和讚
二十四、年中吉凶
二十五、とき和康
二十六、絹笠様
二十四、觀世音
十五、南無阿彌陀佛
十六、南無

二、立和讃

帰命長礼この家のに名残の種は時かねども名残惜しさは富士の山、花にもつ
れて立ちかねるホラヨイ／＼立ちにけるとよ、南無阿弥陀仏 南無
三、一夜の宿 塚命長礼、この家に一夜のお宿を申せしは、この家の惡事と災難を除かせ
給へや ホラヨイ／＼

四、田植

十七が、今年始めて田植して、しかもその田の出来の良さ、丈が七尺穂が
五尺、なんなら、駒にも八穗一駒、八穗で一石となるならば、これをお瀬戸
に倉七つ、倉の番守は、誰と誰、一に小雀、二に燕、三に鶯ホラヨイ／＼

五、岩舟

吉野には岩舟お地蔵の方便で、念仏始めにホラヨイ／＼立ち出づるとよ
南無阿弥陀仏

六、吉野

吉野には一重桜が有りと聞く、岩舟お地蔵よホラヨイ／＼なむあみだん
ぶつ／＼らむ

七、榛名山

榛名山、三国一のお山なり、一夜に出来たる富士の山、野の水笠に清くし
て、スルスミ峰にさしかかる、鞍掛岩やつゝら岩筆に及ばぬ硯岩、其他
名勝は多けれど、峰にお地蔵のホラヨイ／＼お立ちありとよ 南無阿弥陀
仏 南無

八、一の谷

津の国の、須磨の郡の片辺り、一つの塚を尊ねば教盛公の墓とやら、寿
永四年如月の始めの七日に一の谷、轄越の坂落し、義経公に攻められて平
家の一門、舟に乗り、因国屋島に落ちる、後に残るは、之ぞ誰無冠の
太夫教盛公、二才の駒に鞭あてて、舞子ヶ浜に乗り出せば、陸に熊谷日の丸
の扇をあげて招き寄せ、遂にその場で撃ち殺す、これを伝えて聞く人の哀

れと袖をホラヨイ／＼しほりけるとよ なむあみだぶつ（二回）

九、酒屋様

酒屋様、倉が七つに名酒あり酒屋・小桜・大らん酒・諸白・正宗・男山・

其他名酒は多けれどこれも地蔵のホラヨイ／＼縁の酒とよ 南無阿弥陀仏

十、赤月（晩）小屋

十七が赤月小屋にて西向ければ、弥陀の三尊お立ちあり、拝むとすれば雲か、
る、余り邪魔の雲じややら、雲に邪魔は無いけれど心が邪魔で、ホラヨ
イ／＼拝まれぬとよ 南無阿弥陀仏 南無

十一、旅

十七が、今年始めて、旅に出て、是のしょがんに腰をかけ、色々御馳走申
し受け、長たばこにつきませる、一吹き吹いては富士の山一吹き吹いては
筑波山、三吹き吹いては、止まりて十五夜お月のホラヨイ／＼乱れ星
とよ 南無阿弥陀仏

十二、七福神

帰命長礼有難や、七福神の舟遊びきさらぎ山の橋を、舟にうたせて今在す
金の帆柱うち立て、金欄殿子の幕を張りさては神々乗り揚フ、一に大黒、
二に布袋、三に毘沙門、四に次（寿）郎、五の泉の若恵比須、六つ北
陸、中に乗り、七つ浪花の弁財天琴を彈いて在します。北陸神が橋を持ち
て毘沙門天が舵の役、此の舟何处へと航むれば宝来山を通り過ぎ、これの
お庭につく舟はお家繁昌舟、さても日出度きお家かな子孫繁昌 ホラヨ
イ／＼守るべしとよ 南無阿弥陀仏 南無

十三、十七が柳の下

十七が柳の下で糸をとる、糸は白銀、杵黄金糸は何糸、蓮の糸、これも御
地蔵のホラヨイ／＼ 製造になるとよ 南無阿弥陀仏 南無

十四、觀世音

帰命頂礼觀世音、大慈大悲の力にて西も東も知らぬ子が軒場々々に立ち寄

りて声も哀れに父母の恩も深き小川寺、唱うる声もひそやかに、お弓は報

謝をさし立だし見れば優しき娘の子、背にかけたる笈^{スカサハ}るに、二親ありと申せしは、定めてくれし親御達、國は何處で名は何と問はれて、おつるは泪ぐみ、父は家有士の、其の名は阿波の十郎平、母はお弓と申します、どういふ訳か知らねども、二親達は三つ年行方不知となり給う、残り要の介抱でようやく今年が九つで（以下原本に不明）

十五、辻 和 講

帰命頂礼、地藏尊、何が所願で辻に立つ何も所願は無けれども、余り世間が邪慳^{ヤクセン}に念仏す、めにホラヨイ／＼辻に立つとよ、南無阿弥陀仏南無

十六、八 百 屋

帰命頂礼、初桜、八百屋の娘にお七とてつぱみし花の咲きやうは、時美しや江戸桜、寺の小姓に吉花とて、年は十八、白梅の匂いは小梅の木の下にされて結まる恋桜匂い桜に身をやつし、花の盛りをおい桜逐にお七は十六で彼岸桜となり給う、散りて傍なき稚兒桜、諸国浮世に名を残し、無情の桜とホラヨイ／＼なり給うとよ南無阿弥陀仏 南無

十六、梅 若 丸

梅若は、知らぬ東の土となり、印に柳をさし置いて、今は三月十三日大念仏で ホラヨイ／＼申しけるとよ 南無阿弥陀仏 南無

十七、照 手 姫

照手姫ガキアミ車に取りついて えいほう、えいぞと引く網は

これも御地藏の ホラヨイ／＼えんの綱とよ 南無阿弥陀仏 南無

帰命頂礼有難や、十万億土の弥陀様が天の羽衣 ホラヨイ／＼法の糸とよ、南無阿弥陀仏

十九、西方十万億土

西方の十万億土を聞きぬれば古語も古人も弥陀の国貢賤君子の称^{レーリ}名を声を使りに極樂へ、導き給へや ホラヨイ／＼地藏尊とよ 南無阿弥陀

仏 · ·

二十、御 寺 標

帰命頂礼此の寺は何時來ても有難や蓮の花が八重に咲き、一に小雀、二に翼、三に鶯 ホラヨイ／＼不如帰とよ 南無阿弥陀仏、南無

二十一、寺 和 講

寺様七里が大門七巡り、松を七重に植え置いてこれへ来らん旅の人極楽淨土へ ホラヨイ／＼導けるとよ、南無阿弥陀仏 南無

二十二、佐 位 の 河 原

帰命頂礼地藏尊、こは此の世の事ならずしての山路の権なれば佐位の川原の、物語り父よ恋しい、母恋し、恋しくと泣く声は衣の袖を覆ひかけ、

抱かせ給ういで ホラヨイ／＼有難いとよ 南無阿弥陀仏 南無

二十三、御 庭 和 講

帰命頂礼、地藏様、お庭を通じて下されば此の家の悪事と災難をおのがせ給へや ホラヨイ／＼地藏尊とよ 南無阿弥陀仏 南無

二十四、年 中 吉 因

帰命頂礼、お目出度や、今年の暮も金銀が山に喰へば富士の山、藏に入れ、ば、高知れず藏の番守は、鶴と亀、中の恋には福の神御酒をひかえて笑い顔、松と竹とを飾り立てはや節分の豆を投げ、梅より桃に桜花夏はあやめに、きりぎりす、秋は小菊にもみじ狩り、冬は眺めに陸奥の花、目出度く年月送りけり

二十五、と き 和 講

帰命頂礼有難や、めぐり／＼し御対面尊き仏のホラヨイ／＼身ぶりなりせよ南無阿弥陀仏・南無

二十六、組 笠 様

帰命頂礼、有難や、國は筑波に名も高き、天笠帝^{アマツカヒ}のん娘王より姫と申しますは、七つの年より母親に おくれて母の手にかゝりし、くま山に捨てられた（備考）之の帳面「以下忘れた」とあり

地藏和讃

明治二十〇〇〇

【地藏和讃】帳

都丸十九一筆写校訂

一番 『爆命頂札有難ヤ、十万奥（億）土之弥陀様ハ、天ノ羽衣ノ相ノ糸トヨ。

（利字船筆にて「リ」と振假名あり）

二番 『悔若ハ知又東ノ土ト成ル。印柳ヲ拂於（置）テ、今ハ三月十五日、大念

仏ヲ申ケルトヨ。

三番 『照手媛ガキワミ車ニ取りツイテ、エイサト引綱ハ、是モ御地藏ノゼン

（アマ）綱トヨ。

四番 『サヒホウノ十万奥土ト聞ク（キ）ヌレバ、此モ御シンノ弥陀ノ國、キセ

ンクンジユノセウミヤウニ、声ヲ便リニ極樂工、道引玉ニヤ地藏尊ト

ヨ。

五番 『高野山、無命（明）ノ橋トテ橋一ツ、善有ル人ニハ橋抜ク、只念佛テ渡

ル可シトヨ。

六番 『極樂ノグゼイノ舟ハ浮ミクル。舟ハ白金、橋ハ小金、觀音セイシハ棹ノ

役、地藏菩薩ハ楫ノ役、南無ノ六字ヲ帆ニ揚テ歌念仏デ渡ル可シトヨ。

七番 『憐レサヨ 中丈懶ト申セシハ、五歳デ母ニ捨ラレ、離母ノサシニ遭玉

（ヘ）世ノ中ハラウシャフジヤ（老少不定）ノ世ノナラヒ、乗ムマキヤ若キトテ、昨日生レテ今日ハヤ、無情ノ風ニ誘ハレテ、キユル命ヲ念仏テ、援ケ玉ヒヤ地藏尊トヨ。

八番 『十七が柳ノ下デ糸取、釜ハ白金、杵小金、糸ハ何糸蓮ノ糸、是モ御地藏ノケサニ成ルトヨ。

九番 『岩舟ノ地藏菩薩ノホウベンテ、念仏進メニ立出ル。同ジハチスノ蓮古ニ、救ハセ玉ヒヤ地藏尊トヨ。

十番 『世ノ中ニ独モ止マル者ハナン。来世大師ノオボシメシ、只念佛ヲ唱ヘ可シトヨ。

十一番 『地藏尊、シャバニテ成シタル罪ニ依利、タン（ナラクニ沈ム事、世ノ事ニテハ免カレヌ。只念佛テ極樂ノ、淨土ノ内ニゾ道引ケルトヨ。

十二番 『地藏尊、タマシヒ中ニ入ヌレバ、此時誰ヲ頼ム可シ。其苦ヲ誰カ免カレヌ。只願クハ地藏尊、遂ヒテ道引玉ヲ可シトヨ。

十三番 『地藏尊、カキノ思ヒゾ真也。脳ヲクダヒテ血ヲスヘト、心ニ惡事更二十シ。思ヤルベシ、其時ノ苦ケン之程コソ悲シサヨトヨ。

十四番 『岩舟ノ地藏菩薩建立、伐木ナトヲ引集メ、エイサラエイト引綱ハ、是モ御地藏ノ諸ノ綱トヨ。

十五番 『地藏尊、イハシヤ地獄ノ有様ハ、心モ言葉モ及バレス。無ゲンシヤウメツオソロシヤ。猶キク度ニ畏し有リ。マサシ魂ヒ獨行キ、ホノウニイラシヤ悲シサヨトヨ。

十六番 『憐レサヨ 中丈懶ト申セシハ、五歳デ母ニ捨ラレ、離母ノサシニ遭玉

フ。御年十四ノ事成ルニ、鳥モ通ハヌヒワノ山、捨ラレ玉フゾイタマシキトヨ。

十七番

「メイ士ニテサイノ河原ヲ詠ムレ(観カ)、一ツヤニツヤ三ツヤ四ツ、十ヨリ

下ノ幼子ガ、小石ヲ集メテ塔ヲ組(ミ)、一ジユン組テハ父之為、二ジユ

ン組テ母之為、三ジユン組テハ我ガ為トヨ。

十八番

「岩舟ニ水ハナケレド船浮ム、舟ハ白銀、中小金、南無ノ六字ヲ帆ニ掲テ、(音)

觀音セイシハ棹ノ役、鐘打シモクテ舵ヲ取ルトヨ。

十九番

「岩舟ニ如何ナル不思議ガマシ(テ)、カクハシジヤウブシ玉ヘルトヨ。

廿番

「不思議ヤナ、今日之四方ノ静カサモ、是モ御地藏之利シヤウ也トヨ。

廿一番

「岩舟ニ宅度參詣スル人ハ、重應五行之罪ナリト、キエント云フ事有ルマジキトヨ。

廿二番

「十七ガ、今歲始メテ旅ニ出テ、是之諸院ニ腰ヲ掛、色々御池(馳)走申

請ハ、長崎煙草ニツキ烟、一吹吹イテハ不二之山、二吹吹キテハ筑波山、三吹吹イテハ止リテ、十五夜御月ノ乱レ星トヨ。

廿三番

「連シヤウハ孰盛殿之御骨ヲ、高野ノ山ヘト納メント、先ヅ善光寺ヲ心掛

メノ衣ニ晝ノ笠、心ノ内コソ哀レナリトヨ。

廿四番

「十七が、アカツキ小屋ニ西向バ、弥陀之三尊御立有リ。オガムトスレバ

霧掛ル。アマリジャケンノ雲シヤヤラ、雲ニジャケンハ無ケレトモ、心

ガジャケンデ拝マレヌトヨ。

廿五番

「極樂ノ弥陀ノ淨土へ行キタクバ、南無ノ六字ヲ口輪ニトヨ。

廿六番

「十七ガ、今年始メテ田ヲ植テ、シカモ其ノ田ノ出キノヨサ。丈ガ七尺、穗ガ五尺、ナントル小馬ニモ八穗一駄、八穗デハ石取ナラバ、是ノオヤ

トニ藏セツ、藏ノ番師ハ誰々ト、一二小雀ニニ燕、三ニハ鶯鷗トヨ。

廿七番

「榛名山、三国ノ御山也。一夜ニ出来タル富士山ハ、野々水カサヘテキ

ヨクシテ、磨白カ峰ヘ差掛リ、転掛岩ヤ萬葉岩、筆ニモ及バヌ観岩、其

外名所ハ多ケレト、峯ニハ御地藏ノ御立有ルトヨ。

廿八番

「花竺ノコカゼガ娘(ママ)ハ、染モ染タヨ其美事、肩ニ唐松下リ藤、上前ガガ

リヲ見テ有レバ、諸國大名集リテ、五ノ諸院ニ腰ヲ掛、論ヲ召レテ立所、

下前カミリヲ見テ有レバ、田舎女郎ガ集リテ、長崎煙草ニセン刻、ヤツ

ギノ管煙デ呑マイル。一吹アケハ富ノ山、二吹吹ハ筑波山、三吹ワイテ

ハ止マリテ、今一吹ト好マレテ、十五夜御月ノ乱レ星トヨ。

廿九番

「東ニハ梅若丸ノ印トテ、母カ尋テ遙々ト、柳ノ本ヘト立寄リテ、涙ナガ

ラニ念仏テ、声ノ下ヨリアラ不思議、夢カウツ、カマボロシヤ、梅若丸

カ現レテ、見エサセ玉フゾ拂レ成ルトヨ。

三十番

「岩舟ノ地藏菩薩ノ御建立、御堂カ八間四面也。三寸株ニ屋根瓦、中ニハ

小金ノ柱立、ケマンジヨウラ五ノ箱、玉ノ宮殿穂ニ、地藏菩薩ノ御立有

ルトヨ。

卅二番

「花紅葉花モ紅葉モ一盛、思ヘハ人モ一盛、人ノジミヤウモ花二似チ、咲

カ(シ)トスレハ散リヤス。落タル花モ根ニ帰ル。二度ト運ラヌ死出

ノ旅、シユエンエンキヤエンモロ共ニ、道引玉ヘヤ地藏尊トヨ、帰命頂礼

遍照尊。

卅三番

「コチノ光明カヤイテ、六代無ゲンノマンタラハ、十萬淨土ノ有様ゾ、

四方諸物ノキヤウカハイハ、地獄モガキモ畜モ、皆我等ガホンシンノ、只

其儘ニ照ス也。仏有ラザル者ゾナシトヨ。

卅三番

「岩舟ノ地藏菩薩ノ習ニハ、諸國村^(サ)ヲシナヘテ、念佛修行ゾ有難キトヨ。」

卅四番

「七ツ子ガ父ニ離レテ今日七日、母ニ離レテ今日六日、明日ノ七日ヲ待チカ子テ、半丈タ、ミニ倒レ伏トヨ。」

卅五番

「武藏野ニ、捨シ殿子ガ世ニ出テ、親ノ菩提ヲ問玉フ。身ハ墨染ニ金カケ

テ、心ノ内コソ哀レナリトヨ。」

卅六番

「地藏尊、提燈花笠差掛け、鐘ヤ大鼓ニ笛ヲハミニハ念佛申シケルトヨ。」

卅七番

「帰命頂札地藏尊、巡リテテ今是テ、二尊ノ姿ヲオガマスル、是モ御地

卅八番

「帰命頂札天竺ノ、祇迦ノ御庭ノ桜木ニ、下ノ小枝ニ鷦、花ヲ落スナ枝折

卅九番

「若キ時、末ヲ遙ニ也瀬ノ、無情ノ風オバ地藏尊トヨ。」

四十番

「若キ時、石世ヲ願ヒシ幼子ノ、死出ノ山道上リヨサトヨ。」

四十一番

「有難ヤ龍女ハ仏ニ成玉フ。ナドカニ我等ハナラザラントヨ。」

四十二番

「若キ時、俄カニ後世ヲ願フ人、日暮道ヲ遠グ可シトヨ。」

四十三番

「極樂ノ御地ノ舟ニ乗タクバ、胸ノ間ノ珠數ヲクレトヨ。」

四十四番

「吉野ニハ、單弁帽ガ有ルト聞キ、岩舟地藏ニ進セタイトヨ。」

四十五番

「念仏ハ、野ニモ山ニモ甲置、集ル時ハ地藏尊トヨ。」

四十六番

「死出ノ山、ナンタラ仏ガワミ染テ、二度トクマヒソ死出ノ旅トヨ。」

四十七番

「広々ト、極樂淨土へ入ヌレバ、心供クテ此ニ居ルトヨ。」

四十八番ナシ

四十九番

「此シヤバハ、シヤウリヤウビヤウシノ此宿ヲ、地藏菩薩ノチカイニテ、オノガシナサレテ玉フ可シトヨ。」

五十番

「地藏尊、祇迦ノフソクヲオクネンジ、惡所ニシツゲンシタマイテ、世常ノクケンゾ道引ケルトヨ。」

五十一番

「業師如來詠歌
帰命頂來南無薬師、諸病シツヨノ願コソ、參ル我援ケ可シトヨ。^(サ)」

五十二番

「天ニアカツノ御門カニツゴザル、ツケ供^(ホ)、引供アカバコソ、南無ノ六

字テ更トアクトヨ。」

五十三番

「帰命頂札有難ヤ、吉三カ建立致シタル、湘伊地藏ノ御縁起、此テ細ニ尋

ヌレバ、八百屋ノ娘ニ於七トテ、歲ハ一八テ美シキ、^(ホ)紅葉ノ桜花、

見ル人々モ浮ミ立、籠戸ノイダス鶯ノ、梅ニ初音ノ心池シテ、殊ニ真ヤ

本邦ハ、大焼ナレバ是非モ無シトヨ。」

五十四番

「憐レサヨ、於七ガ家モ類火シテ、普請成就其内ハ、遠キ親類使ルヨリ、近キ菩提ヲ心掛、縁ハイナモノ吉三サン、チラト見初シ其ノ日ヨリ、師

持ノ恩モ打忘レ、日々ニ乱ル、青柳ノ、風ニフ風情ナリトヨ。

五十五番

「帰命頂札初桜、八百屋ノ娘ニ於七トテ、年ハ十六白梅ノ、匂ヒ小梅ノ木ノ本ハ、ヨレテカラマル糸桜、糸ツイ桜ニ身ヲヤツストヨ。」

五十六番

「帰命頂札地藏尊、メイタイフコノ仏ニテ、是総令レバ異議力無シ、トテモサイトイ更ニ無シトヨ。」

五十七番

「帰命頂札地藏尊、慈悲圓滿ノ御願ニ、総令ハ旅ノツキ達ニ、クニ、シ玉

ヲ者ゾナシトヨ。」

五十八番

「サイノ河原ノ物語

是ハ此世事ナレト、死出ノ山地ノ裾ナレバ、オノ河原ノ物語リ、父慈シ

ヤ母慈シ、慈シノト泣声ハ、此世ノ事トハ事變リ、悲シサバカリニ通ス

也。彼ノ御幼子ガシヨサシヤトシテ、河原ノ石ヲ取集メ、一ジユン組デ

ハ父ノ為、二ジユン組デハ母ノ為、三ジユン組テハ故向ノ、兄弟我等ノ

曲向スル。豈ハ獨子遊ベドモ、日ノノアイン其頃ハ、地獄ノオニト現ハ

レテ、ヤレ汝ハ何ヲスル、シヤバニノコリシ父母ノ、スイゼンサンノ

勤ナキ、只明暮ハナキゴトハ、親ノナケキヲ汝等ガ、クケンヲオクルタ

木ノナル、シヤバトメイドハ事チガイ、組タル塔ヲ押崩シ、メイドノ旅

ヘ来ル迄、ユルキヲ出セ王ツツ、トヨ。」

五十九番

「地藏尊、シヤバノ不足ノオクネンジ、憑所ニシツゲンシタマイテ、世常

ノ苦ゲンヲ道引ケルトヨ。」

六十番

「帰命頂札有難ヤ、石動丸ト申セシハ、父ノ踪跡ヲ尋ネント、高野ノ山ニ

タドラレテ、ゴザノ脚半ニ苔ノ笠、竹ノ小杖ニ身ヲ持タセ、高野山ヲ尋

ヌレド、父ノ行ヘヲ知ザレバ、心ノ内コソ憐ナリトヨ。」

六十一番

「帰命頂札カルカヤハ、無命ノ機ノ袂ニテ、年ハモ行ヌ幼子ガ、通りスガ

リシ其時ニ、親子ノ縁ハオソロシヤ、袖トカト合ヘテ、互ニ面ヲ

見合セテ、涙ナカラニ石動ハ、是々申シユツケ様、若シ此ノ山ニカルカ

ヤト、申スル僧ガ居ルルナラバ、是非ニ教ヘテクダサンセ、涙ナカラニ石

動ハ、胸ニセキクル血ノノ涙トヨ。」

六十二番

「寅レサヨ、カルカヤホウト申セシハ、年ハモ行ヌ幼子ガ、遙ルヽ尋木キタモノヲ、此デ還スモ不ビン也、涙ナカラニカルカヤハ、宿ヘ帰リテ物語トヨ。」

六十三番

「帰レナルカルカヤハ、是々申幼子ヨ、國ハハイツクデ誰伴、國ハ京都ノ大内ノ、加藤佐衛門重氏ガ、石地藏様ノ申シ子テ、石動丸ト申シマス。」

年ハ七デ有マスト、聞テカルカヤビックリシ、サテハ我子ニシガヒナシ、

國ヲ出タル年月モ、チャウド今年ガ七年目、揚ハ我子カナツカシヤ、既

ニ語ルト思ヘドモ、ヤレマテシハシ我心、此デ名乗ハ異レ有リ、内ヘ連

リテ父母ニ、安堵サセルガ孝行ト、涙ナカラニ石動ハ、西モ東モ知ヌ道、

アト身ヲクリテカルカヤハ、胸ニセキクル血ノ涙、瞳ト其土ニ倒レ伏ス

トヨ。」

六十四番

「寅レサヨ熊谷殿ノ物語、教盛公ノ若武者ト、組打勝負敗ス時、我公様ト

驚キテ、スクニノガスト思時、山ノ陰ヨリ平山ニ、声カケラレテ熊谷ハ、

ハットク此時ニ、是非モナクヽ日ノ丸ノ扇ヲ以テ教盛ヲ、招キ堪ス

寅レ也トヨ。」

六十五番

「帰命頂札教盛ハ、熊谷殿ニ招カレテ、是非モナクヽ立モドリ、公ノ命ハ直実ニ、下シ鷹ハレ是非モナク、スクニ其暁教盛ハ、合掌組テ坐上ナシ、

早打玉ヘト云フ声ニ、是非ニ及ベヌ御首ヲ、此直実ニ鷹ハレト、涙ナカ

ラニ熊谷ハ、南無ト云フ声モ口供ニ、首打ハナシ悲シサハ、瞳ト其堂ニ倒レ伏ストヨ。」

六十六番

「帰命頂札有難ヤ、此御君ト直実ト、一ツノ蓮ノ実ト成ルモ、是モ前世ノ約束ト、カミヲ、ロシテ此時ニ、名ハ^{蓮生}連照ト改名シ、熊谷寺ヲ心掛、墨

ノ衣ニ草ノ笠、心ノ内コソ真レナリトヨ。」

六十七番

「帰命頂札有難ヤ、西上野ノ片岡ニ、大同始ル其時ニ、安蓮王^法觀世音、

ツ、ゲン有レヤ有難ヤ、昇ル階五十段、右ノ方ニハ清水寺、馬頭觀音伏

抨ミ、目洗ヒ薬師ヤ相京ノ、地藏尊ニハ番ヲ燒キ、遙ニ見ユル神樂殿、
許多ノ人ノ声ス也トヨ。

六十八番
「ハヤ仏前ヘ向ヒシガ、クセンクンシユノヲアイデ、金ノオサヘモ取カヌ
ル、此觀音御願ニハ、七月十日ト月ノ、十日ニアヨビラ運ブナラ、擬
令如何ナル病デモ、忽チ快氣得サスベシ、五穀十分蚕迄、十分ニシテ取
スナリトヨ。」

六十九番
「実ニ有難ヤ觀世音、是山ノ風景ハ、何ニ擬令ルカタモノク、春ハ躑躅ヤ
桜花、夏ハ卯ノ花杜鵑、冬ハ茶梅水仙花、ウン手ノカタラ詠ムレバ、確
水ノ川ヤハ體森、雨降リ松ノ一株ニ、今ヤミドリノサウトカイ、霞ノ内
ニモ妙義山、赤城、椿名モ見工渡ルトヨ。」

七十番

「雨モ降ラスニ宮ヶ崎、メイデノ方ニハ鳥川、佐野ノ渡ヤ舟橋ヤ、テイカ
ノ森モカミサケテ、並木ノ松モ秋風ノ事ノシラベトヲナリトヨ。」

七十一番

「天竺ノ小カゼカ娘ノ衫ハ、染モ染タガ此見様、肩ニ唐松下り藤、上前ガ、
リヲ見玉ヘバ、春三月梅ノ木ニ、驚留リテ初音フク、下前ガカリヲ見玉
ヘバ、秋八月ノ奥山、鹿カ紅葉ヲミ散シ、褐ノカリヲ見玉ヘバ、
南海ニ蟹ヲリテ、波ニユラレテ立如ク、ソレ程如シシゲテ、一度モ着
セズ著モセス、父ハ地ニ伏シ泣玉フ、母ハ天地ニコガレテ、アマリ泣
マイナゲクマイ、花土ノ寺ヘ寺参リ、開キシ花ハ散ヲ見ル、即チ我子モ
此如クトヨ。」

七十二番

「帰命頂礼十七ガ、小野ノ薬師ヘ夜コモル。何カ諸願テハコモル、トノ、
夜遊ビヤメタサニ、鉄テス垣ヲ構上テ、金子彌ヲ編サゲテ、ソレデモ諸
願ガ叶ズバ、小野ノ薬師モ有ルカ無シトヨ。」

七十三番

「哀レサヨ、國定忠治ノ身ノ科テ、大土ノ宿デ身ヲヤツストヨ。
七十四番

「帰命頂礼善光寺、三陀ノ本寺ヲ尋ヌレバ、弥陀ノ本（地）ハ天竺ノ、ガ
クカイ長者ノ御建立、インフダゴンノ三陀如来、遂ニ日本へ面難シ、
守屋ノ大臣惡心テ、難波ガ池イト捨ラレテ、其時本多吉満ハ、仏ノ御真
ヲ救ハント、川中島二ト安達シテ、守奉ル善光寺、甲斐宇甲府ノ善光寺、
武藏テ川口善光寺、三ヶ所合セテ三陀如來、弥陀ノ寺有リト、抨ム
御縁ノ有難キトヨ。」

七十五番

「帰命頂礼不動様、一度ニ落ル魂ノ水、諸命定メテ生レシカ、結ビ止メル
神モ有リ、諸命変レバオソロシヤ、一夜ノ宿モ貸サズシテ、野辺ヨトゲ
ヨト遠グナリ、野辺迄贈ル友モアリ、野辺ヨリアナタガ一人旅、血脈一
ツニ珠數一連トヨ。」

七十六番

「帰命頂礼身此ニ、心ハ信濃ノ善光寺、道引玉ヒヤ地藏尊トヨ。」

七十七番

「帰名頂礼貞レサヨ、中丈受申セシハ、五歳デ母ニ死分レ、ジャケンナ
繼母ノ手ニ罹リ、科モ無キ身ヲ様々ニ、父上様エ申上、共々ジヤケンナ
父上テ、鳥モ遷ハヌ山奥ヘ、捨ラレ玉ヒヤ憐レサヨ。行クル鳥ヲツレ
シテ、草木水葉ヲ歎ミ玉フ。何ノ御仏巡リ来テ、山ノ奥ヨリツレ出し、
大間ノ寺ヘトリシガ、御前ノ前ニ中丈姫、両手ヲツイテヤサンシゲニ、
右ノ次第を細々ニ、涙ト共ニ語リケリ。慈レム仏ノ御是非ニハ、手習学
問怠タラズ、胸ノ体ヤ手休ニ、花ノ山ヲ引集メ、前ノ川水汲ミ揚ゲテ、
水ニ御光ガカヽヤイテ、燈ハ岩壁ヘコモリツツ、蓮ノ糸ヲシメシヨコミ、
其余五色ト成リ玉フ。（全）年コメテ織ヌレバ、十五菩薩現ハレテ、又モム
コウヲ織ヌレバ、仏ノ御水數知レズ、箇空藏様ニ教ハレテ、大間ノ寺ヘ
納メシガ、中丈姫ト名ヲノコストヨ。」

七十八番

「ムシヨリ我寺ハルテンシテ、イツカシヨウリヲハナルベシ。ロク取リソ
ゲノ有様ハ、車ノメグリノ如クナリトヨ。（マ）
七十九番

「一年迷ヒ始メヨリ、無命ノクラキニヤミニ入、長夜ノ寝リ深ケレド、
一一年迷ヒ始メヨリ、無命ノクラキニヤミニ入、長夜ノ寝リ深ケレド、

夢ト驚ク事ゾナシトヨ。

八十番

「（命） 墓命頂札此御座ニ、ナゴリノ種ハマカネドモ、ナゴリオシサハ不士ノ山、ヲモテニ菊ニキリ」ス、ヲモヒキレトヨ。

八十一番

「御寺様、七里ガ大門七曲、杉ヲ七重ニ植置テ、是ヘ参ラヌ旅ノ人、極栗淨土へ道引ケルトヨ。」

八十二番

「此寺ヘ参リテ見レバ有難ヤ、キ、シニマサレル札ノ寺、御庭ノ池ノ水清シ、蓮ノ花モ四季ニ咲ク、諸仏菩提モ来迎シ、極栗淨土ニウタガワントヨ。」

八十三番

「此宮ハ伊勢カ熊野カ御二島カ、社々カ九十九社トヨ。」

八十四番

「（命） 墓命頂札此寺ノ、御庭ノ池ノ蓮ノ花、咲トハ美事ニ咲ニケルトヨ。」

八十五番

「（命） 墓命頂札此寺ノ、千代ノ社ヲ見ヘ玉フ。小松モ茂リテアイオイノ、氏子繁昌ト守ル可シトヨ。」

八十六番

「（命） 墓命頂札有難ヤ、地藏菩薩ノホウベント、御茶ノ池走ニアツカリテ、是モ不思議ノ縁ゾカシ。ミライハ必ニ達ニ、救ハセ玉フヤ地藏尊トヨ。」

八十七番

「（命） 墓命頂札此寺ノ、是イタト招カレテ、是ノ御庭ヲ詠ムレバ、遙ニ見ユル富士ノ山、帳ヲ三里ト蓬萊山、金ノ茶釜ニ銀柄杓、小金ノ茶碗テ御茶一ツ、新茶カ粉茶カ字治ノ茶カ、旅ノ疲テ呑知タ、宿ヘ帰リテ物語、是モ御地藏ノ縁ノ御茶トヨ。」

八十八番

「（命） 墓命頂札此寺ノ、是イタト招カレテ、是ノ御庭ヲ詠ムレバ、カスカ二見ユル不士ノ山、帳ヲ三里ト蓬萊山、金ノ茶釜ニ銀柄杓、小金ノ茶碗水一ツ、是モ不思議ノ縁ノ水トヨ。」

八十九番

「（命） 墓命頂札有難ヤ、不思議ノ御縁テ水一ツ、井水カシ水カ川水カ、旅ノ疲テ呑知ス、宿ヘ還リテ物語、是モ御地藏ノ縁ノ水トヨ。」

九十番

「（命） 墓命頂札地藏尊、ナニトテ辻ニ立玉フ。彼ノ御仏ノ請願ニ、無仏世界ノシコウオウモ、授ケ王ハノゴイグワントヨ。」

九十一番

「（命） 墓命頂札地藏尊、何カ諸願ナ辻ニ立、何モ諸ハナケレドモ、アマリ世間カジヤケンサニ、念仏進メニ辻ニ立トヨ。」

九十二番

「（命） 此酒屋、藏ガ七ツニ名酒有リ、室白正宗男山、江川小桜オウグン酒、其外名酒ハ多ケレト、是モ御地藏ノ縁ノ酒トヨ。」

九十三番

「（命） 此酒屋、中ハ白銀隅黄金、念仏唱ヘテ渡ル可トヨ。」

九十四番

「（命） 墓命頂札地藏尊、御庭ヲ御通シ下サラバ、其家ノ惡事ト成難ヲ、此真言ノ法カテ、御カセ玉フヤ地藏尊トヨ。」

九十五番

「（命） 地藏尊、コチノ御庭ヘ止マリテ、坪ノ用第見テ有レバ、勢田ノ唐松石山ノ、栗津片田勝所ノ城、先ノ用スヲ詠ムレバ、富士見西行葉キ有リ、此用第詠ムルモ、地藏菩薩ノ利勝也トヨ。」

九十六番

「（命） 墓命頂札秋葉様、火防ニツ霧柱、氷ノ渠ニ雪ノ柵、雨ノタレキニ露デフクトヨ。」

九十七番

「（命） 地藏尊、一夜ノ御宿ヲ申セシハ、其ノ家ノ惡事ト成難ヲ、救ハセ玉ヒノ有難キトヨ。」

九十八番

「（命） 墓命頂札地藏尊、是イタト招カレテ、是ノ御庭ヲ詠ムレバ、カスカ二見ユル不士ノ山、帳ヲ三里ト蓬萊山、金ノ茶釜ニ銀柄杓、小金ノ茶碗テ御茶一ツ、是モ不思議ノ縁ノ水トヨ。」

九十九番

「（命） 墓命頂札地藏尊、一二色能ク一二浅黄、三二藤色四二茶染、五ツ色能ク桔梗染、其外染色多ケレドトヨ。」

百番（九十九番ナン）

（帰命頂札薬師様、薬師ノ本寺ハ此ニ有リ。一階昇リツメ、二ノ階カラ詠ムレバ、十三計リノ幼子ガ、菩薩ノ珠數ヲ襟ニ掛、紫硯ヘ墨ヲトキ、右ノ御手ニ筆ヲ持チ、左ノ御手ニ紙ヲ持チ、月ノ八日ト十二日、二十二日ト同事、一人ノコラス書記ストヨ。）

百一番

（莊屋様、御門瓦テ御居宅ハ、八棟作りニヒハダブキ、奥ノ一間ヲ詠ムレバ、三社ノタクガ掛テ有ル、末ハ繁昌ト守ル可シトヨ。）

百二番

（帰命頂札戸長様、御門瓦テ御居宅、八棟作りテヒハダブキ、御台所ヲ見テ有レバ、許多ノ手代ノ声ス也。御庭所ヲ見テ有レバ、黒ノ小馬ヲバ繁ギ置、トコノ用第詠ムレバ、コウライベリヤ拂ベリ、奥之一間ヲ詠ムレバ、三社ノタクガ掛置テ、子孫繁昌ト守ル可シトヨ。）

百三番

（帰命頂来我々ハ、何クノ者トマシヽテ、念仏六字テ通ル可シトヨ。）

百四番

（帰命頂札修業者ニ、巡り達タルウレシサニ、粗酒ノ一ツモ上タヒガ、是モ出崎ノ事ナレバ、鍾トシヨモクテ分レ可シトヨ。）

百五番

（先ノ御方ノ念仏ハ、春ノ初音ノ聲ノ、我等カ申ス念仏ハ、秋ノソガレノ蟬ノ聲トヨ。各ハ何クモ同ジ後世ノ道、只念仏ニ如クハ無シトヨ。）

百六番

（各ハ何クノ者カ知ネドモ、匂ヒモ深キシキビ香、詠札ヲ^(ア)路テ立玉フ。我等カ香ノ備ヘカタ、雜ト無札テ立ツルトヨ。）

百七番

（帰命頂札有難ヤ、地藏菩薩ニ香ヲ立、香ノ烟ハ五色雲、五色雲ニハ誰カ乘ル、地藏菩薩カ乘計リトヨ。）

八坂神社	156	夜爪	101	留守神	167
星数縄荷(ウジ神)	92, 102, 151, 171, 174	夜の足袋	101	れ 行	
星數ガコイ	37	宵まつり	81	恋愛結婚	119
星數神	7, 32, 112, 171, 173	ヨロク	80, 81	連中	70
星數木	101	養子	80	連絡員	65
星數どり	38	よしひこ	80	ろ 行	
星數祭り	138, 167, 172, 173	寄り合い	68	浪曲師	82
星數養子	78, 79	養蚕	168	六角塔婆	130
やすみ餅	53, 72	ヨイマチ	165, 166	六三除け	89, 102
星台	81, 86, 87	嫁のみやげ	158	六字づめ	241
星台田	201	八日節供	152, 153, 155	六道銭	130
ヤッカガシ	137	養蚕祈願用	152	六部	7, 62
ヤド	74, 146	ヨツラ	148	六歩	68
星根裏	221	嫁の年始	140	六間取	225, 229, 230
星根ふき	36	呼び名	133	わ 行	
柳の箸	138, 147	ヨメゴ呼び	126	若い衆	7, 70, 122, 125, 146, 166
蔽入り	47, 101	嫁が里へ帰れる日	125	若衆組	70
ヤブコウジの根	104	嫁入道具	124	若い衆座敷	123, 124
ヤマ	47	嫁の土産	124	若水	138
山初め	141	嫁のお茶	124	若宮八幡	92
山ユリの根	104	ヨリツキ	123	わかめ売り	61
疫病神	94, 157	嫁迎え	121	若者組	117
厄病除け	158	嫁の条件	119	若者組織	64
ヤリニボウ(やりんぼう)	47, 60	ヨバイ	118	別れ霜	155
センメ	62, 102	夜遊び	118	四つ身	10
ゆ 行		四つ坊主	116	よぐり	114
ユイ	48	呼び石	6, 111	和讃	65, 76, 93, 94, 95, 197
結納	120	四つ身	10	わたいれ	10
ユウサンコオ(遊山講)	69	よめご着物	13	綿くり	215
ゆうずう念仏	133, 241	嫁と姑の仲なおり	26	綿帽子	124
湯灌	130	養蚕	38	綿薄き祝	46
ユキノシタ	103	ヨツゴエ	4, 18, 42	わたし	36
湯コガ(桶)	34	養蚕	51	和名抄	3
ユズ	174	夜ナベ仕事	54	ワルサバン	7, 136, 146
ユズリ	134	よかよかあやめ	61	わら仕事始め	148
ゆでまんじゅう	165	ら 行		フラン正月	137, 148
湯はいり	82	雷電様	86	フラジ	128
弓	132	雷電神社	155	わらすぐり	210
夢見	104	落雷	44, 105	わらぞうり	15
よ 行		ラントーバ	132	フライエク	54
ヨモギとショウブ	180	リヤカ	60	フランニュウ	168, 170
よつご	206	流產	113	わら餅	23
吉野	243	寮	98, 165	る 行	
四間取	219, 229, 230	臨時の休日	71	ルスイボウズ	161
夜泣き	105				
ヨモギ	103				

まぶしおり	213	耳だれ	97	メズラ畠	159
マブシカケ	136, 143	耳だれ神様	91	メドコ	219, 221, 225, 231
豆いり	150	ミノ	16	めっぱ	102, 105
豆かす	44	耳っぷさげ	135	メッバジキ	111, 132, 133
豆ガラ	151	耳の神様	154	メツブシ	203
豆木	136	みやこ	14	目の神様	96
豆木の箸	144	ミヤコ柱	229	メメズ	103
豆まき	150	宮念仏	198	目薬師	101
まゆ買い	52			メンバ	30
マユカキ	147				
マユザル	203				
まゆ玉	40, 136, 143, 147, 151				
まゆ玉かき	143				
マユメリ	147				
魔除け	128, 132, 136 150, 155, 157				
マルマゲ	16				
マルメドン	136, 141, 144, 147				
マワセンボウ	54				
回りぶち	55				
マンガ	40, 43, 206				
マンガ洗い	45				
万石	210				
万歳	62, 139				
まんじゅう	21, 156				
マント	10				
み 行					
笑	62				
見合い	119				
三日月	89, 104				
三河万才	62				
ミヅ	89				
短いはなし	183				
三島様	5				
三島神社	4				
水掲げ	39, 48				
水きり	48				
水念仏	198				
水番	39				
ミズヒキ	147				
味噌	27				
晦日そば	176				
道しるべ	58				
道普請	69				
三つ坊主	116				
三つ身	10				
三峯講	72, 73, 74				
三ツメ	114				
ミトドケ	124				
め 行					
命名	114				
メケエ	6, 44, 142, 151, 203				
めしが仕事をすること	183				
飯奉公	69				
メシメエ仕事	54				
めしやきもち	22				
も 行					
六日ダメ	136, 141				
六日爪	141				
六日年	136, 141				
無縁仏	99, 135, 161				
迎え一見	121				
迎え火	158				
迎え盆	158				
むかしばなしの結語	184				
ムカデ	104				
麦うち	49				
麦打ち唄	195				
麦肥	49				
麦荷	47				
むこさんぎもん	11				
婿逃がし	111, 123				
婿のみやげ	158				
虫切り	116				
虫切り鎌	105, 116				
虫歎地藏	96, 102				
虫封じ	115				
虫除け	137, 155				
虫よけ八幡	105				
村柄	71				
村仕事	64				
村交際	65				
村念仏	198				
村の共有地	68				
むらの役員	66				
村の休み日	64				
村ハチブ	180				
村回り	125				
村役	5, 64, 67				
や 行					
ヤアハノ系統	194				
八百屋	244				
ヤカガシ	149, 150				
やきもち	18, 21, 159				
やきいもや	62				
厄落し	140				
厄年	6, 96, 117				
厄年の子供	136				
厄のがれ	97				
厄除け	150				
厄除け観音	96				
厄除相撲	97				
ヤクザ馬	54				
薬師様	96, 102, 137, 167, 240				
薬草	104				
屋号	80				

彦狹島王	3,179	普段着	9,11	坊主グロ	48
ヒザナオシ	125	二つ身	10	ホカイ	126
ヒシ餅	152	ブッカケギモン	114	ホケエ	36,178
昆沙門様	98	仏壇	33,161,221,223,226	ほぐい	19
ビショまゆ	52	不動様	179,240	ホシイ	52
備前堀	179	不動尊	98	星祭り	174
一つ身	10	ふとりじま	11	ばた餅	18,25,169
ひとえもん	10	フナガイ	58	ホッカブリ	14
ひとかたけ	19	舟つき場	60	ホック	49
人魂	127	船橋	58	仏の足洗い	162
ヒトリマンガ	206	ふなもち	52	仏の供養	134
ヒドロッタ	48	フリマンガ	206	仏の野回り	7,162
難市	152,153	風呂	34	ホマチ	4,41,80,81
ヒナ節供	153	分家	34,79	堀込源太郎	196
ヒナタミソ	22,27	フンドシ	13	堀さらい	69
ヒナ祭	152	振り米	9	堀はらい	48
丙午	105	フロバ	228	盆送り	163
火の玉	127,182	ヘ 行		盆おどり	164,201
火の番	69	幣紙	7,91,145	盆踊唄	196
日ばた	53	米寿の祝	117	盆カラ	164
火伏せの神	75,83	ヘイバン	117	本家	79
ひめこ	187	へいたいじま	12	盆ごさ	160,161
百かん日	132	ヘエトリババア	187	本陣	58
百姓エビス	149	ひやしげ	80,81	本裁	10
百姓の神様	74,172	ヘソクリ	112,113	盆櫛	137,158,160,162,163
百万遍	157	ヘソノオ	112,113	盆中の死人	135
ひやしげ	22	へっこきよめご	181	盆中の食事	164
ひやめしそうり	15	べつめし	19	盆の挨拶	163
評議員	64,67,86	蛇除けの呪い	105	盆の野回り	7,162
肥料	44	ヘヤ	223	盆ぶち	162
ひるうどん	25	弁天様	88	本まつり	81
ヒルバテ	25	弁当ざる	29	盆迎え	137,162
拾い親	116	ま 行		本百姓	221,223
披露宴	5	ふ 行		埋葬	132
夫婦餅	24,170	ぼうぐみ	118	前橋藩	1
ふかしまんじゅう	159	蓬萊山	123	巻きアゲル	149
ふかりご	80	坊さんの年始	140	撒き銭	131
吹き竹	117	奉公人	64,69,101,152	枕だんご	128
フキの葉	104	豊産祈願	83	枕なおし	128
ブク	174	奉納遣祖神大笑	91	枕観	128
福茶	150	疱瘡櫻	102	マクリ	115
武具屋敷	228	豊作	104	マコモ	137,160,161,163
フクロトダナ	221,231	ホウキ星	104	マチ	47
富士講	74	ホウズキ	115	待ち女房	111
フシッコ	52	ほうかぶり	14	松市	174
フジヤマ	48	ほうろく	21	マツゴク	30
普請帳	226	そうき	62	マナ箸	138
				マネヒキ	210

ニワトリ	35	墓掃除	160	馬頭観音	5, 75, 92, 97, 147
ニンニク	105	ハカナオシ	111, 132, 133, 134	ハナ	143
ぬ 行		バカばやし	86	鼻緒切れ	101
貫	219	傍	11	ハナ返し	82
ぬっぺ	25	馬鹿むこ	182	花籠	129
ヌリグロ	48	萩原憲法	68	花ゴシラエ	165
ね 行		墓参り	133	鼻血	103
ネライ	54, 75	ハギムシ	187	鼻取り	49, 54, 87
猫	105	はきもの	15	鼻ねじり	38, 54
ねこじた	19	ばくち	82	花火	201
ネコの食い扶持	30	馬喰	54	馬肉	22
ねじりすっぽう	11, 12, 13	箱膳	19	はまかご	52
ねじりっけ	19	箱枕	17	ハヨ	48
ネズミップサゲ	25, 46	はさみ箱	126	ハヨ繩	49, 148
ネズミ除け	105, 169	始精進	94, 95	腹帯	111
ネブタ	159	馬車往還	61	ハラミ箸	136, 143
ネムの葉	160	はしわたし	29	バリカン	16
ネリオケ	49	はずれよめご	51	針供養	152
ねり肥	49	はた織り	17, 53, 119	ハリヅナ	49
年中吉凶	244	機神	5, 23, 64, 71, 152	ハリナワ	41
年忌	134	ハダシタビ	12	針もたず	101
年始	139	八十八夜	45, 155	春駒	62, 150
年始受け	98	八丁じめ	46, 64, 70, 71, 105 118, 156, 157	春七月	49
ねんねこ	13	蜂の巣	105	榛名湖	177, 178
年番	67	八間取	228	榛名講	72, 73
念佛鍾	93	八幡様	86	榛名山	154, 243
念佛	76	八幡社領	1	榛名神社	46, 88, 114, 177
の 行		初市	140	榛名夕立	107
納棺	130	初午	26, 32, 89	春祭	153
農業儀礼	38	初絵売り	139	晴れ着	9, 10
農の神	75	はっかけ	10	ハンギリ	49
ノウマ	38, 54	二十日ガユ	137, 148	はんぎりじゅばん	12
農休み	45, 126, 156 157, 158, 164	二十日正月	137, 148	半夏	41, 44, 156
ノボリハチマキ	14	初雷	105, 150, 151	半夏田植	101
のし餅	139	ハツグンチ	166	番太	5, 6, 64, 69, 70 111, 121, 130, 131
ノゾッコミ	124	初子	112	半てん	11
のっぴよくりん	184	初護摩	97	番頭	55, 69
野辺の送り	132, 241	八朔	126, 159, 164	坂東太郎	7, 178
上り松	174	初節供	115, 152	パンツ	13
野回り	137	バツターン	9	ハンドリ(鼻取り)	49
のめし者	156	初誕生	115	磐若心絆	240
野良着	12	ハツタンドリ	42, 43	半めし	19
ノロ田	49	初不動	98	ひ 行	
は 行		初穗	46, 167	ヒイラギ	33, 150
羽織	11	初参り	139	日がくし	131
		初婿	155	彼岸	26, 126
		初婿の年始	140	ヒキワリ飯	19, 20
		初嫁	7, 157	びく	215
		初嫁の里帰り	140		

と 行	
ド	50, 51
ドウ	206
トオカン棒	168
十日夜	26, 96, 167
胴着	11
咲様	72
冬至トウナス	105
冬至	29, 34, 138, 173
ドウス	28
とうせんば	158
道祖神	83, 89, 103, 117 137, 143, 179
道祖神大笑	144
道祖神子	145, 146
道祖神小屋	90, 145
道祖神祭り	5, 6
道祖神焼き	144
道祖神宿	145
トウナス湯	174
盜難よけ	148
塔婆のタテジマイ	134
豆腐	28
塔宝の念仏	242
通り念仏	198
棟梁	36
戸隠講	72
とき和讃	244
毒消し星	61
毒だみ	103
とげぬきの草	103
トコ	221, 223, 231
トコノマ	33, 228
杜司	55
年祝	117
年男	138, 150, 174
年神	175
年神棚	136, 175
年越し	176
年越しソバ	176
土藏	223
歳徳神	174, 175
年取り	150
土砂ばらい	48
土藏	30
トダナ	223
隣組長	67
泊り念仏	198
泊り和讃	93
富山薬売り	61
土用カメ	27
土用念仏	157
トラの日	46
トリアゲバアサン	112
鳥居	122
取結び	6, 67, 123, 124
とり目	103
トリ屋	62
トロロ	136, 139
春電様	116, 117
春電坊主	116
どんどん焼き	91, 145, 173
苗代	39
苗代祝い	39
苗とり台	206
苗運びかご	215
長いはなし	183
中親方	93
中シロ	40
ナカノクンチ	166
ナカノマ	225, 228
中柱	219, 221, 229
長屋門	226, 228
流れ灌頂	135
仲人	119
仲人親	119
仲人の挨拶	121
仲人札	119
ナス	160
七つ井戸	178
七ツ子念仏	198
七ツ鉢	150
七つ坊主	116
ナナデンボウ	119
七所参り	137, 144
七パンゲ	137, 158
七晩焼き	137, 158
七本塔婆	132
浪花節	62
名主	221
名主役	223
七日がえり	58, 101
ナベカリ	140
葉蔵き祝	46
なまのミミズ	103
なまり飯	95
なめみそ	22
ならい芝居	156
ナラブサ	23
成木責め	137, 147
成田山	117
ナレアイ	119
縄とうし	210
繩始め	148
ナワハリ	41
ナワバリ	38
難産除け	6
ナンド	130, 219, 223 225, 229, 231
ナンド境	221
に 行	
ニウバッ子	127
ニガス	28
ニカンニチ	78
ニクタテカシ	113
肉めし	22
荷輪台	215
荷車	60
煮込み	20
煮こみうどん	18
煮ゴワメシ	147
ニシエン	223
西群馬郡役所	2
二十三夜	166
二十三夜様	83, 111, 200, 241
二十三夜塔	77
二十三夜待	65
二十二夜様	76, 83, 111, 241
二十二夜様和讃	199
二十二夜待	65
二百三高地	16
二百十日	164
ニホト	18
荷物はこび	60
二夜様	167, 199
二夜待ち	75
入家式	111, 122
ニュウバ	170
女人講	83
ニワトコ	40

田植着物	13, 126	俵口	210	ツトッコ	134, 151
田植の食事	18	タワラッパシ	102	つなきり	145
田植繩	49	だんご	18	つなみ風	107
田植にしん	41	誕生餅	115	つば庭	30
田植休み	156	タンスヒキ	124	ツボヤマ	10
田起し	40	タンボ	47	ツマジリオケ	49
代参	73, 154	田園まわり	162	爪切り	142
代参講	72	ち 行		ツメコメ	149
高崎藩	1	チイチ草	103	ツモリ肴	121
たかまど	34	チガヤ	160, 161	つゆはらい	131
滝川村	1	力石	108, 109	つるごし	29
竹皮ぞうり	15	地下足袋	12, 15	つんば神様	91
タコアゲ	7, 201	力くらべ	108, 164	て 行	
駄肥え	44	乳づけ	115	ディ	34
山車と囃子	196	チバレモン	104	手かぎ	212
出し梁造り	226	チャノマ	221, 223, 225 226, 228, 229	出カワリ日	152
田島	47	チャボッ鳥	118	デズタリ	64
立ち臼	112	中頭	143	デズタリニンソク	69
立ち念仏	198	チュウガタ	11	丁稚奉公	79
立和讐	93, 95, 243	中気	105	鉄マンガ	44
脱穀	43	中日	153	テテナシゴ	127
辰の日	101	十万里土	244	デハノゴハン	131
たてござ	16	中宿	121	出不足	49, 69
たて仲人	119	ちょいちょい着	9, 11	出不足金	39
立て場	61	調合裏	104	出穂寅	46, 137, 156
たてばし	29	長寿会	66	デムコ	126
たてまえ	35, 36	朝鮮あやめ	61	テメエミソ	27
田の草取り	210	帳台構え	221	デヨメ	126
田の水口	147	帳つけ	146	テラコ	69
七夕	158, 159	チョウナ	229	寺念仏	198
七夕の節供	126	チョッパシ	128	寺の田植日	44
タニシ	23	チリタテ	44	でら潤	179
たね俵	149	チンゲ	116	デラボッチ	179
田の草とり	42	鎮守様	153	寺和讐	244
田字の間取	219	つ 行		恩手姫	244
足袋	11, 15	ツキソイ	6	テンガ	206
たびきらし	119	ツクネル	81	天気台	107
タビハソン	15	筑波晴れ	107	天狗岩	2
旅芸人	202	ツゲ	128, 129	天狗岩用水	39
食べてすぐ寝ると	182	つけ木	34	天狗の面	89
牛になるいわれ	18	漬物	28	天神講	65, 77
食べ物の格	62	辻念仏	198	天神様	152, 165, 200
タマゴ貰い	127	ツジュウダンゴ	26, 170, 171	天台聖	83
魂呼び	127	辻和讐	93, 95, 244	天道念仏	153
たらしこみ	21	ツチグモ	187	天王様	88, 117, 156
樽入れ	120	簡第	73	天王祭	166
タルキ	221	ツツコクリ	42	天秤棒	60
太郎の一日	137			テンボシ	114
太郎もち	39				
俵編み	210				

十六センサマ	144	しんきり	21	節供カラ	137
十六念佛	167	身上まわし	80	節供仕事	49
ジュウロウタ	16	身上ゆずり	80	セッタ	215
ショロナワ	109	新宅	79	セッチン	71
ショイ籠	44	シンドリ	49	セッチン語り	110, 114
ショイコ	215	ジンバラ	54	節分	137
ショイムコ	6, 111, 121, 123	シンベエ	12	セリタタキの歌	141
(ソエムコ)		人力車	59	世話頭	67
ショイヨメ	6, 111, 121, 123	す 行		世話人	64, 67
(ソエヨメ)		水神様	88	善光寺和讃	242
ショインノマ	228	水天宮	112	ゼンの綱	93, 131
ショウガ	119, 149	水田耕作	39	千羽ガラス	40
ショウガの節供	164	すいとん	21	千丗こき	210
正月	5, 71	スウトメ	41	千本縞	6, 128
正月飾り	174	ソウヤ	221	千枚バネ	49
ショウズケ	68	ソウヤグラ	226, 231	そ 行	
正月帽	136	杉の葉	104	葬儀の準備	129
将軍塚	3, 179	杉塔婆	134	葬具	129
小黒柱	148, 225, 229	菅笠	16, 122	そくい	104
常食	19	スケグミ	65, 81, 86	ソクシン	151
上賀祝	53	スケムラ	5, 65, 81, 86	底ぬけびしやく	91, 97
上糸餅	24	スゴモリ	82	騒動鳥	104
定便い	5, 67, 68, 71	すはさき	173	外便所	30
ショウデンサマ	179	鈴宮様	179	外濠	228
上棟式	36	鈴宮社領	1	総二階造	221, 223
常任	67	スズメとツバメ	181	ソバ	21
商売エビス	149	すずめばち	187	そば家例	139, 176
ショウブ	155	雀よけ	40	ぞうり	62
ショウブ酒	155	ヌタ袋	130	草履きらし	119
菖蒲の節供	155	捨て子	116	葬列の順序	131
消防団	118	砂間	47	反町薬師	117, 140
ジョウヤサマ	48	スノコ	28	た 行	
醤油	27	相接甚句	97	せ 工	
ショウリヨウサマ	161	摺鉢	159	太鼓	35
暑気あたり	103	ズリマンガ	210	太鼓	201
食事の呼称	18	諒訪神社	86	大黒	39, 75, 231
しょくしん	155	せ 行		大黒柱	229
食制語	19	勢至菩薩	77	大根のととり	168, 169
職人の仕事はじめ	140	青年団	117	大師様	140, 240
食物関係俗信	29	せいもん	62	ダイドコ	221, 223, 225
ジョリン	206	施餓鬼	154	大日様	240
ションベン会議	67	壇ざらい	39	大八車	60
じりやき	18, 21, 159	石塚	135	推肥	44
死靈	111	赤糞	23	タイマツ	122, 163
寺領の田植	41	石仏信仰	83	ダイミョウ	14
白綿	61	セチショウ	13	代理婚	123
白綿の市	53	セチマ	153	田植	9, 12, 38, 40, 44 95, 156, 243
代輪	213			田植唄	41, 194
次郎の一日	137, 149				
新客	121				

子守っ児	49	懺悔文	240	地蔵行事	83
小屋	144	サンザシ	129	地蔵様	90, 92, 93, 157, 198, 241
小屋まわり	7	三三九度	123	地蔵様洗い	157
コヤナ	147	サンジツ	5, 69, 70	地蔵様子供	157
こわめし	18	サンジャク	13	地蔵信仰	5
コワリッケ	21	三十五日	134	地蔵尊	95, 242
こもりばたもち	25	三十三軒着物	116	地蔵和讃	5, 199
婚姻團	119	サンジョ(産所)	4, 228	シタケ	107
さ 行		三束雨	107	七五三	115
西行ぶち	56	産泰講	83	出棺	131
佐位の河原	244	産泰様	112, 200	しつけ	100
財布じり	80	サン儀	102	出産	112
西方十万億土	244	三段落シ	196	地主	48, 69
歳暮	117, 126, 175	三反さかり	97	七福神	243
祭文	201	三年味噌	27	地仏大神	92
逆さっ子	41	産婆	112	シナカサ	61
逆さ水	130	産婦の食事	113	死の予知	127
酒寺	59	産ベや	112	死の予兆	183
酒屋様	95, 243	三本辻	150	芝居見物	82
下り松	174	三本講	221, 223	芝起し	65, 78
作男	55	三夜様	76	芝グロ	48
作神様	73	サンヤ餅	24	師走女	175
座縫り	215, 226	三隣亡	83, 106, 137	四方固め	36
サクナワ	210	三隣亡除け	91	ジボン	43
作番頭	71, 101	し 行		しまい正月	148
作物禁忌	79	ジオヤ	45	シマダ	16
笹引き	128	敷居目地	219	島台	122, 123
差鴨居	221, 226, 230	式台	228	しまなえ	44, 104
ザシキ	223, 225, 228, 229	シケッタ	48	シマヘビ	104
座敷仲人	6, 119	慈眼寺	-3	シメエクンチ	166
雜穀	20	慈眼寺領	-1	シメエ正月	149
雜草	47	地獄の釜	159	しめ繩	174
サトガエリ	125	地獄蒔き	48	下大黒	148
里米	113	地獄餅	4, 7, 38, 53, 154, 170	下屋造り	229
サナ	49	仕事着	9, 12	下夕立	107
サマ	219, 221, 226	仕事始め	136, 141	シモワカレ餅	71
ザマ	203	私財	65	シャギリ	88
ザマカゴ	203	獅子唄	192	シャクジ様	102, 124
ざる	47, 203	獅子頭	202	シャクチャマ	97
京市	96	獅子舞	87, 188	十王様	240
猿田彦	106	死者の魂	134	十月なか十日	169
猿田彦大神	83, 91, 92	死者への供物	128	十五夜	165
猿回し	202	時宗	83, 84	十三仏	134, 240
ざるめし	19	四十九日	134	十三夜	166
三角布	130	四十九日の餅	111, 133	ジュウジョウ	223
三角布団	93, 94	七十七の祝	117	十七が柳の下	243
三角ムスピ	61	地震	105	十七念仏	198
三月節供	125	地神様	6, 142	十八がゆ	23, 148
蚕具の市	155	自然暦	45	襦袢	15
				ジュウロク	143

禁忌	113	ゲロ坂	178	こき	210
禁忌作物	65	ケシのたま	103	こきあげ	25
ギンザシ	16	下木まわり	118	こきあげ祝	44, 46
きんづばや	61	ケズリバナ	143	極楽餅	4, 7, 47, 170
く 行		気脳	231	ごくろう餅	25
食い初め	115	結婚式	67, 122	五穀	4
空気枕	183	月食	105	コゴミナワ	38, 54
草刈り	44	ケデー	16	コサ	49
草競馬	97, 149	毛羽とり	213	コザ	16, 34, 219, 221 223, 226, 229
草角力	96	ゲンカン	228	ゴザ	122, 123
草葺	221	検査ぎもん	118	小作	44
草屋根	36	源氏ほたる	187	小作人	38, 39, 69
くされ彼岸	154	ゲンノショウコ	103	小作慣行	38
グシ	34, 36, 134	玄米パン	62	小作権	45
グシイワイ	36, 172	こ 行		小作料	49
ぐし餅	4, 29, 36, 172, 173	こいのはり	155	こしあげ	10
クズカキ	34	コウデ	103, 105	腰巻	14
クチバタキ	41	クウミヨウタン	104	小正月	143
区長	64, 66, 67, 68	コロゴ	187	ご祝儀ごめ	124
クツツキメー	119	肥惣	215	コジョハン	18, 20, 41, 42
公田の渡	58	コエン	225	ゴゼ	7, 62
熊谷県	1	おおしゅう	61	五節供	153
熊野信仰	4	小親方	92	コセツクリ	81
熊野神社講	74	甲かげ	15	子育て	110
苦餅	175	香偶	240	子育て地蔵	93
藏開き	6, 142	高貴職	11	こだし	80
クルリ(棒)	44, 49, 210	郷倉	72	コタツ	226, 228
暮市	174	後見人	111, 122	小使い	5, 67
クロ	48	郷士	228, 230	コデ	81
苦労餅	5, 38, 46, 47, 53	甲子講	75	コデナワ	44
くろまたぎ	41	庚申講	74, 75	ゴトギブルマイ	125
桑切りがま	212	講集團	64	コトコトとキュウ	183
クワゼ	34	荒神	175	子供会	66
クワゼ小屋	30	荒神様	155, 174	子供組	7
クワダテ	6, 142	上野国誌	3	子どもの神様	96
桑つみざる	203	こうせん	22	子供の仕事	55
クワトウサン	52	皇太神宮	174	コト八日	6
桑の品種	52	コウチ(耕地)	47, 65, 66	諺	184
桑場	52		71, 81, 86	コナ	66
桑ブルイ	203	耕地整理	39	粉食	20
桑もぎ	55	弘法大師	178	五人組	66
桑もぎ歌	196	弘法伝説	7	子墓	6, 116
桑ユツラ	49	コウモリナオシ	62	こぶ	105
群南村	1	高野聖	83	御幣馬	87
け 行		蚕影様	89	ゴボウ抜き	44
桂庵	51	小頭	145	小舞竹穴	219
競馬	54	子方	93	護魔札	96
ケエカキ棒	147	五月節供	126	ゴモク飯	75
		五カソ日	82, 141	子守り	116, 152

おやけしい	187	家族の私財	80	川崎大師	117, 140
オヤダ	4	家族の呼び名	80	川棚	175
オヤデン	40	がた	118	瓦葺	223
オヤブン	36	かたあけ	10	棺	129
お山洗いの雨	116	形見わけ	134	環濠屋敷	230
オヤマツキ	72	ガッタン	70, 146, 169	勘定奨励米	38, 45
おわかれの盆	158	カッテ	225	観世音	243
オンカハレテ	79	家伝薬	62	神田ばやし	5, 86
オンガ	206	カッパヌキ	40	がんづめ	210
御嶽講	74	かどあかり	162	カンナ仕上げ	229
オンタケサン	157	門うたい	70, 122	神無月	137
御嶽の行者	91	門付	140	カンの虫	115
女一見	4	カド火	163	観音講	65, 75
女仲人	111	カド松	174	観音様	96, 148, 240
女の神様	89	カナグツ屋	75	観音信仰	5
か 行					
カアビタリ	170	かなくまで	206	願果し	102, 111
蚕	166	火難よけ	146	かんびょう壳り	61
蚕の神	38, 83, 89, 142	カニババ	115	貢目づめ	52
蚕の伝説	179	カネアテ	75	寒餅	149
蚕ヒヨウ	51, 55	錆打衆	84	カンヤキ	49
かいこ休み	51	金子福荷講	72	慣用句	186
カイドウ	30	カネツケ	16, 125	き 行	
蚊いぶし	35	カネツケ祝	121	キクガラ	176
カイ棒	27	カブタタキ	206	義太夫がたり	62
かかし	40, 105, 168	かぶと虫	187	北枕	128
かがやく	187	カブリモノ	132	北向觀音	97
かかりと	80	カボチャ	174	キマ神	4, 34, 40, 41, 44, 45 46, 83, 89, 167, 175
かがり火	122	カマキッチョ	187	キツネ穴	106
鐵鬼板	178	カマキリ	103, 187	キヌカケ	136, 143
カクシゼニ	130	かまど	34, 46	網笠様	53, 72, 89, 139, 151, 153 155, 202, 241, 244
かくし田地	80	蓋の掛け屋	62	気抜き	226
神樂	192	蓋の口あけ	159, 162	杵	122
蔭膳	106	紙位牌	135	木鉢	213
かご	61, 62, 203	神送り	167	キビ餅	22
カゴギ	143	神棚	33, 41, 221, 223, 226	木部姫	177
カゴ木伐り	141	雷よけ	29	鬼門除け	91
かご台と蚕かご	203	雷除けの呪い	105	給金	69
笠壳り	61	神のおとしご	116	京ヶ島村	1
笠ヌギ	81, 167	神の鉢	138	行商人	61
飾りかえ	143	神迎え	167	共同作業	69
飾り葉子	143	粥かき棒	39, 40, 143	共同水車	175
徑ぐね	37	鳥鳴き	104, 127	共同田植	41
鹿島信仰	9	かりあげ	26	清水觀音	169
カシラ	191	かりあげ祝	44, 46, 170	キヨメ	133
かずぞうり	15	仮宮	73	キリウブ	48
カセキ	32	家例	25, 65, 78, 79, 136, 139	ぎりぎりあめや	61
カゼの神	105	川魚	22	きりぎりす	187
風除け	37	川神様	175	切妻造	223, 225
				切り干し	28

うどん	20, 25	オオザル	203	オショウロ切り	163
卯の刻	175	大掃除	173	おしらさま	53, 89
卯の日	175	オオヅツ	168	おしんこ	21
うばすて山	180, 187	大祓い	174	オスイデンサマ	147
産着	113, 119	大本家	79	オタイヤ念佛	133
ウブスナ様	86	大晦日	176	お高盛り	75, 123, 128, 149
馬	60, 61	お蚕の神様	151	お棚さがし	138, 140, 148
馬小屋	45	お顔かくし	128, 175	おちつき	121
馬のくせ	54	おかたび	15	お茶念佛	198
馬の俗信	54	オカッテ	223, 226, 228	お茶和譲	94, 200
馬の手入れ	54	オカナワシロ	39	オツツアレ	69
馬の病氣	54	おかまさま	46	おつもり	64
馬待ち	65	おかげみあげ	241	お通夜	129
馬屋	33, 35, 54, 221, 223 225, 226, 228	オガミマキ	49	おてのこば	19
生れ変り	135	オカラ	131	オテマル	77, 111, 165
ウミッコ	52	オカリヤ	32, 74, 171, 172, 173	お寺様	244
梅干	125	於菊福荷	155	オテラノサラバ	187
梅若丸	244	お菊福荷の講	77	お天道様奉公	18
ウラ取り	55	お客様	9, 11	お伝馬	61
上着	11	オキヨメ	131	オテンマ仕事	49
え 行		オキリコミ	20	オドコ	219, 221, 225
エエ	45, 49, 54	オクマンサマ	88, 166	男仲人	110
エーガエシ	41	オクリ	223, 225, 226	男の節供	155
ええこうし(家こわし)	35	送り一見	121	オトコバシリ	54
エエ仕事	36, 41, 48	送りだんご	163	オトモ	121
越中さん	4, 19, 42, 55	贈り物	82	オナメ	19
エエ田植	54	オクンチ	23, 68, 86, 126, 166	鬼の豆	150
エビス講	4, 26, 39, 137, 148 149, 167, 169	おこあげ	53, 126	御庭和譲	244
エビス様	33, 149	オコト始メ	151	おばあさんかぶり	14
エビス大黒	167	おこもち	7, 24, 46, 53 154, 170, 173	オッパレイ	49
エビスマつり	167	オゴモリ	168	帯	13
エボ神様	89	オコヤスミ餅	71	おいねり	150
絵馬	97	オサキ	29, 106	お日待	77
エンガ	206	オサキヤ	106, 180	お百度ぶみ	128
エンガワ	221, 223, 226	オサゴ	95, 114, 139, 142, 151	オヘヤアキ	115
エンギ	139	オサンナブリ	25, 26, 38, 40, 41 45, 83, 89, 156	おぼしめし	145
縁起物	175	お産の神様	156	オボタテのゴゼン	113
縁台	225	御師	73	オボヤキ	114
お 行		おしい	22	おぼ湯	113
オイナリサン	32	押切り	212	オボロシサマ	111
追いハズナ	87	お七夜	114	お盆	126
オイロナオシ	124	おしむぎ	20	オマイダマ	89
オウサン	120, 127	おしめ	116	お待ち女房	122, 123, 124
おうめ(八丁じめ)	158	お釈迦様	154	お松市	61, 174, 175
オオカミ	132	オショイ飯	93	お松ひき	142
狼除け	133	お正月	64	オミゴク	145
		お正月様	144, 175	オミタマサマ	136, 144
		和尚さんと小僧さん	180	おもちゃ	56
		お相伴	121, 123, 124	親方	92, 93, 95, 145, 146, 157

索引

あ 行					
アオキ	104	始売り	62	一食の基準	18
赤蛙	103	あめっぽり正月	71	一町百姓	61
赤城夕立	107	あめや	61	五間取	225
アカギレ	104	アライコ	16	井戸	30, 32, 33
赤米	104	アラクレ	40	糸車	215
アカザ	23	嵐除け	105	糸引き	53, 119
アガタ	7, 63	ありじごく	187	イトヒキバ	221, 223, 226
アカダキ	114	新盆	161	イナゴ	23
赤月(暁)小屋	243	新盆見舞	161	稻荷神社	89
アガリハナ	223	栗島様	201, 202	稻まるき	70
秋あげ	46, 126, 170	あわせ	10	稻荷様	171
秋の彼岸	165	あわせ餅	24	いなりとう節	8, 196
秋葉講	75	栗餅	22	稻荷祭	92, 173
アキヤ様	88	安産	103	稻荷流	188
悪疫除け	83	安産祈願	75, 83, 111	稻刈り	43
アグガヒアガル	187	い 行		位牌	162
アグワセ	169	飯綱大権現	106	いば	97, 103
あげあげ	46	イカダ	226	イモ	23
揚げ返し台	215	息抜き竹	10	いもほり	206
朝茶	105	生きぼん	7, 13, 126, 158	いもめし	20
麻の葉着物	13	(イキミタマ)		一夜宿	243
浅間砂	30	イキボンフルマイ	126	一楽	11
アサマツ	37, 107	育成会	66	入母屋造	223
朝湯	82, 138	いざり機	9, 215	イロリ	34
足洗い田植	42	イサン	52	祝い着	10
足入れ(デヨメ)	111, 126	石臼	112, 131, 212	岩鼻県	1
足半	15	イジメ	116	岩鼻支配所	1
小豆がゆ	23, 147, 170	石舟	48	岩舟	243
小豆めし	23	和泉神社	85	岩船地蔵	93
あせものより	103	伊勢講	72	隠居	79
愛宕精進	83, 164	伊勢友だち	72	隠居新宅	79
あだな	184	伊勢参り	4, 36, 72, 73	インキヨメン	79
後産	112	イタカジ	20	う 行	
あとしゃりする	187	板葺	221, 223, 225		
あと念仏	83, 133				
穴っぽさげ	170	イチゲン	61		
穴掘り	130	イチゲンザシキ	121		
あねさんかぶり	14	イチマケ	124		
油餅(極楽餅)	7, 24, 46, 47 154, 170	一見葬札火事見舞	11		
油虫	46	一見目録	121		
雨具	16	一人前	55, 108, 157		
雨乞い	46, 177	の谷	243		
甘酒	28	イチマク	65, 77		
天照大神	175	一夜飾り	78		

群馬県民俗調査報告書第二十集

高崎市東部地区の民俗

昭和五十三年三月二十八日印刷
昭和五十三年三月三十日発行（非売品）

編集発行 群馬県教育委員会

前橋市大手町一丁目一番号
電話〇三四一一一一

印刷所 朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町六七番地
電話〇三四〇一二一二